

第3章 II地点（BG・BH19～21区）の調査

1. 調査区の位置

本調査区は岡山大学鹿田地区の北東側、旧混合病棟と中央診療棟とに挟まれたNMR—CT室新営予定地であり、I地点の東南約30mに位置する（図2）。調査区は東西約15m、南北約10mの長方形を呈し、鹿田地区構内の地区割ではBG・BH19～21区に位置している（図312）。調査対象面積は176m²である。

2. 層 序

本調査区においては、調査区北壁および南壁には近現代の攪乱が著しく及んでおり、良好な層序の観察・記録が不可能であった。ここでは比較的残りが良好であった東壁南側（図313 A—A'）、西壁南側（同B—B'）および調査区西北部のコンクリート基礎下の南壁（同C—C'）の土層断面をとりあげて、本調査区の層序について説明を加える（図313）。なお、本調査区の発掘前の地表面はほぼ平坦で、標高2.6m前後を測るが、各断面土層図のうちB—B'断面では地表面からの層序を記録しているが、A—A'・C—C'断面では後述するIV層相当層以下の層序を記録している。

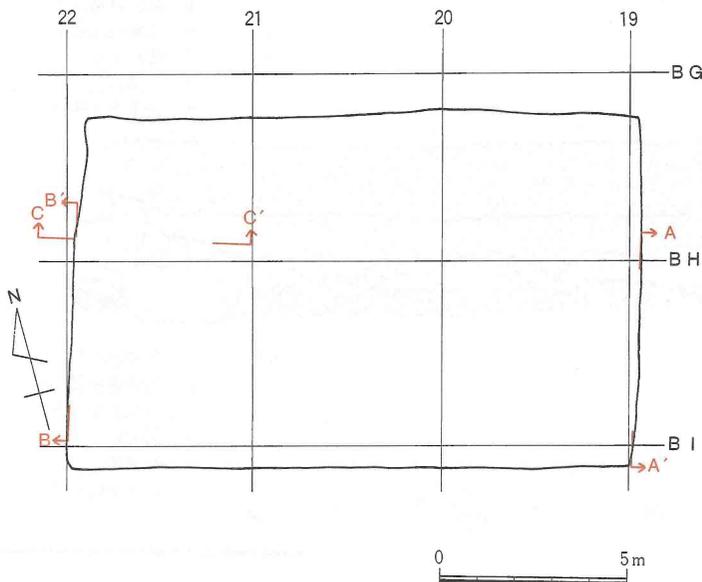
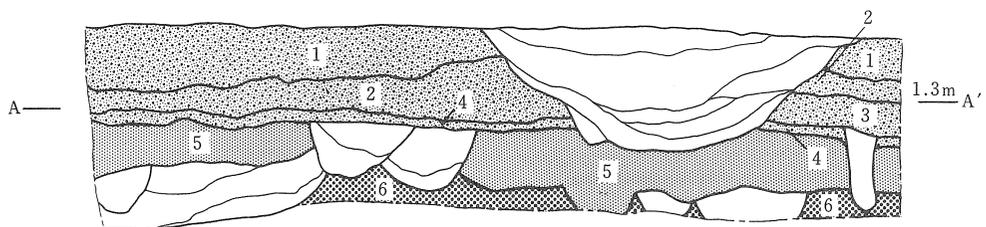
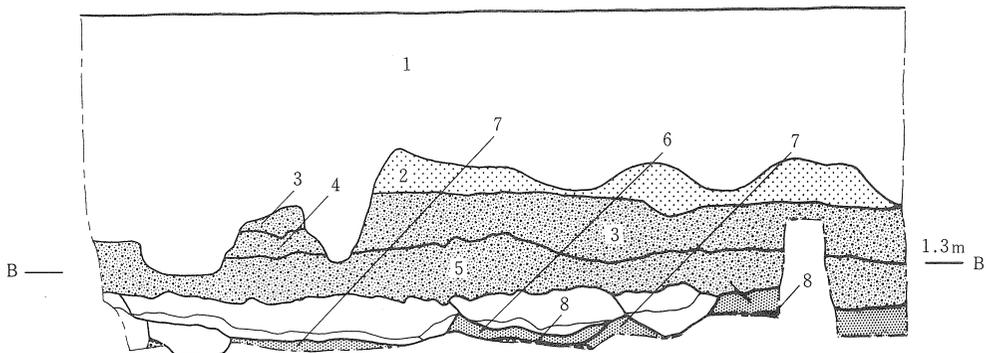


図312 調査区の区割 縮尺 1/200

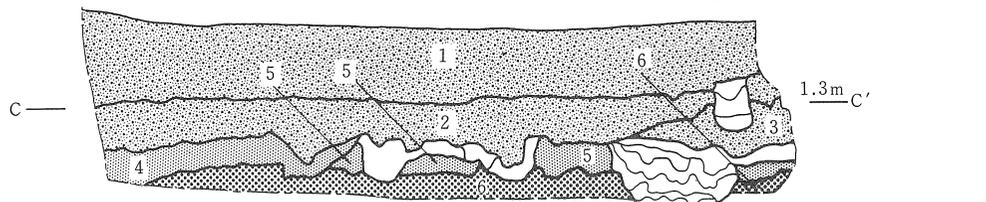
II 地点の調査



- A-A'断面
- 1 灰綠色
 - 2 茶灰色土
 - 3 暗茶灰色土
 - 4 淡茶灰色土
 - 5 茶灰色土
 - 6 淡黄褐色砂質土



- B-B'断面
- 1 造成土
 - 2 灰色砂質土
 - 3 灰黄色粘質土
 - 4 緑灰色粘質土
 - 5 灰褐色粘質土
 - 6 茶褐色土
 - 7 灰褐色土
 - 8 淡黄褐色砂質土



- C-C'断面
- 1 灰黄色粘質土
 - 2 灰褐色粘質土
 - 3 茶褐色粘質土
 - 4 灰褐色土
 - 5 暗褐色土
 - 6 淡黄褐色砂質土



図313 調査区断面土層図 縮尺 1/40

まずA—A'断面の層序について説明するA—A'断面1層（以下A—1層と略記し、他の層位も同様に略称する）は灰緑色土、A—2～4層は茶灰～淡灰茶色土である。いずれも遺物をほとんど包含せず、その堆積時期は明確ではないが、A—1層の上面から中世の溝が掘り込まれており、また、A—4層の直下には後述するように弥生時代の遺物包含層が堆積していることから、これらの層は古墳時代を中心とした時期に堆積した層（IV層）と推定される。A—5層は弥生時代を中心とする遺物を包含する茶灰色土でV層に相当する。本層上面の標高は北端で標高120cm前後、南端で110cm前後を測り、全体として南に向って若干傾斜している。このV層の上面および下面からは弥生後期前半を中心とした遺構が掘り込まれている。A—6層は無遺物の淡黄褐色砂質土で基盤層（VI層）である。

次にB—B'断面をみると、まず現代の攪乱坑とそれに伴う造成土の堆積（B—1層）が南半部では深い部分で標高130cm前後まで及んでいることが認められる。北半部に残存しているB—2層（灰色砂質土）は旧水田土壌（II層）に対応すると推定されるが、その上面は畝状に波打っており、造成直前は畑の耕作土であった可能性が認められる。B—3～5層は灰黄色～灰褐色粘質土層である。いずれもほとんど遺物を含まず、A—A'断面と直接対比することはできないが、各層とも古墳時代を中心とした時期の堆積とみられるIV層に対比できる。B—6・7層は茶褐色～灰褐色土で、いずれも基盤層（B—8層）の淡黄褐色砂質土のブロックを多量に含んでおり、弥生時代を中心とした堆積（V層）とみられる。本断面では両層の上面から弥生時代の遺構が掘り込まれた状況が観察され、その上面の標高は110～120cm前後を測り、A—A'断面とほとんど比高差が認められない。B—8層は淡黄褐色砂質土の基盤層（VI層）である。

最後にC—C'断面をみると、C—1・2層はそれぞれB—3・5層と対応し、茶褐色粘質土のC—3層とともにIV層に相当する。C—4層はB—7層と対応し、C—4層とは漸移的に変化する暗褐色土のC—5層とともにV層に対比できる。本断面のV層相当層の上面は凹凸が著しいが、東西方向での大きな傾斜は認められない。C—6層はB—8層に対比される基盤層（VI層）である。

以上の各層序の観察からは、本地点も先のI地点同様に弥生～古墳初頭においては微高地部に相当するとみられるが、I地点と比べてV層上面の標高は10～50cm前後低く、本地点は該期の微高地のより縁辺部に位置するものと推定される。弥生～古墳初頭の遺物包含層（V層）の直上には遺物の乏しいIV層が堆積するが、I地点に比べより厚い堆積である。IV層の上面からは古代～中世の遺構が掘り込まれていることから、IV層上には古代～中世の遺物包含層（III層）が本来存在していたと推定されるが、I地点同様近代の水田造成によって削平されたものとみられ、IV層直上に近代の水田土壌の累層（II層）が堆積している。II層上には病院等の造成に際し大量の造成土が盛られており、本地点では厚さ0.7～1.2m前後に達している。（栄）

3. 遺構・遺物

(1) 弥生時代～古墳時代初頭の遺構・遺物

本調査区においては鹿田・後・2期～鹿田・古・1期にかけての遺構が多数検出されているが、鹿田・後・1期以前の遺構は未検出である。該期の遺物もほとんど認められず、本調査区周辺には鹿田・後・2期以降に定着したものと推定される。弥生時代後期～古墳時代初頭の遺構を一括すると、その内訳は竪穴住居1棟・井戸3基・溝5条・土壙118基・柱穴多数となる。

次に該期の遺構を弥生時代後期前半・同後半・古墳時代初頭に分けて概観する。弥生時代後期前半の遺構は基本的に鹿田・後・2期に納まるものである。その内訳は竪穴住居1棟・井戸1基・溝5条・土壙84基・柱穴多数である。遺構は調査区全面に分布しているが、ほとんどの遺構が相互に切合い関係を有しており、同時併存の遺構はみかけよりはかなり少ないものとみられる。弥生時代後期後半の遺構の内訳は井戸2基・土壙34基・柱穴23基である。後期前半と比較すると土壙数が約 $\frac{1}{2}$ に減少していることが注意される。古墳時代初頭になると遺構数は激減し、その内訳は土壙5基・柱穴3基となっている。その分布は調査区西側に相対的に集中している。

調査範囲が狭小なため明確ではないが、本地点はI地点と比べて竪穴住居や井戸が乏しい割に弥生時代後期には土壙が多数存在することが認められ、該期の集落における周辺地域としての性格を有している可能性があろう。(栄)

a. 竪穴住居

竪穴住居一 1 (図314, 図版41-2)

本竪穴住居はB H 19区の南西部で壁体溝の一部を確認した。南側部分は調査範囲外で未検出であり、全体の $\frac{1}{4}$ ～ $\frac{1}{2}$ 前後を検出したものと推定される。現状からは、直径3～4m前後のかなり小規模の円形プランをとるものと考えられる。現状では壁体溝以外に本竪穴住居に伴うとみられる柱穴等の遺構は確認されていない。壁体溝は幅12～18cm前後を測り、検出面からの深さは10cm前後である。

本竪穴住居からは遺物の出土がなく、その明確な時期は不明であるが、土壙との切合い関係から鹿田・後・2期に属すると推定される。(栄)

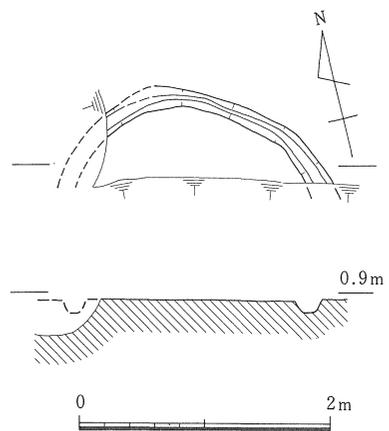


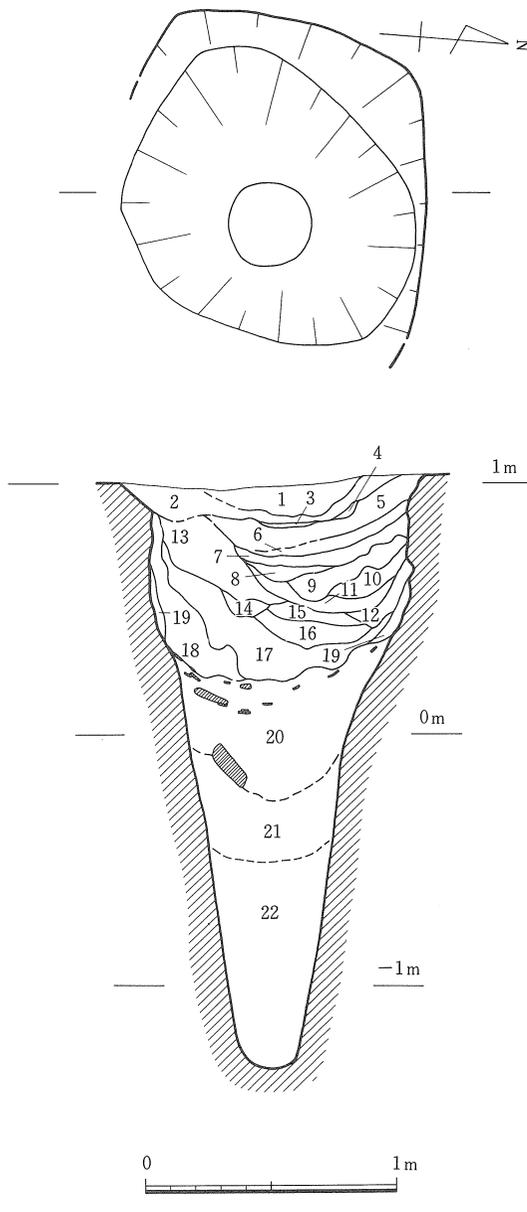
図314 竪穴住居一 1 縮尺 1/60

b. 井 戸

井戸-1 (図315~319, 図版51・84)

本遺構はB H 21区東側中央部から一部B H 20区にかけて位置する素掘り井戸である。掘り方

平面形は東側端部が中世の溝によって削平されているが、現状からは方形に近い形状をとるものと判断される。残存形からは南北長が130cm前後を測り、東西長は150cm前後に達するものと推定される。掘り方断面形をみると、最上端部は若干開き気味になるものとみられる。その下50cm前後は外側にふくらんでいるが、これは井戸壁の崩壊によるものとみられ、本来は底まで直線的に達するものと推定される。以下の掘り方は直線的で底に近づくと狭くなっており、底径は30cm前後を測るに過ぎない。検出面の標高は



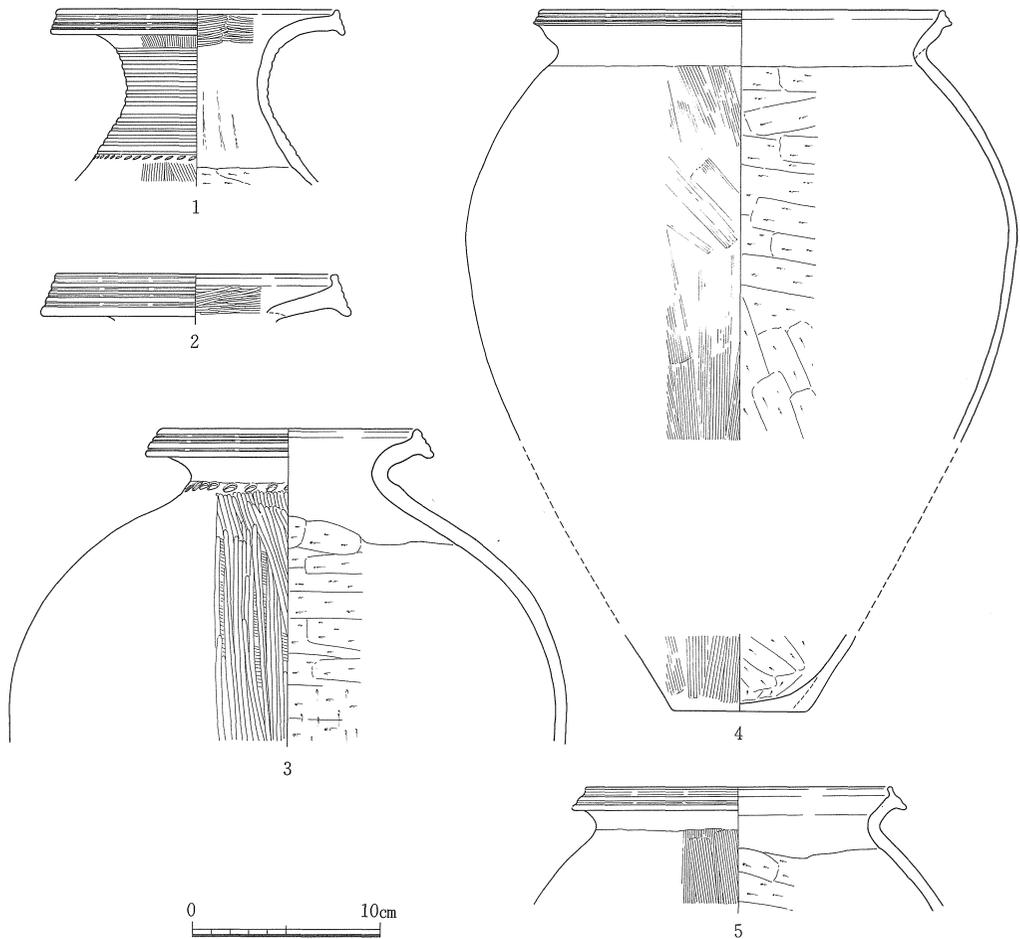
- 1 暗茶褐色土
- 2 暗茶色土 (焼土多含)
- 3 暗灰色砂質土
- 4 黄褐色土
- 5 暗褐色粘土 (炭・焼土少含)
- 6 暗茶褐色砂質土
- 7 暗灰褐色粘土
- 8 暗灰褐色粘質土
- 9 暗茶褐色粘土
- 10 暗茶褐色粘土 (炭・焼土多含)
- 11 茶褐色粘土 (炭含)
- 12 淡灰色粘土
- 13 暗茶褐色粘土 (炭・焼土含)
- 14 暗灰色粘土 (炭・焼土少含)
- 15 黄褐色粘土 (炭少含)
- 16 暗黄褐色粘質土
- 17 暗灰色粘土 (炭・焼土少含)
- 18 黒灰色粘土 (炭・焼土少含)
- 19 暗灰~黒灰色粘土 (炭・有機物含)
- 20 黒色有機質土 (炭・焼土多含)
- 21 黒色有機質土 (未分解有機物多含)
- 22 暗灰色粘土

図315 井戸-1 縮尺 1/30

II 地点の調査

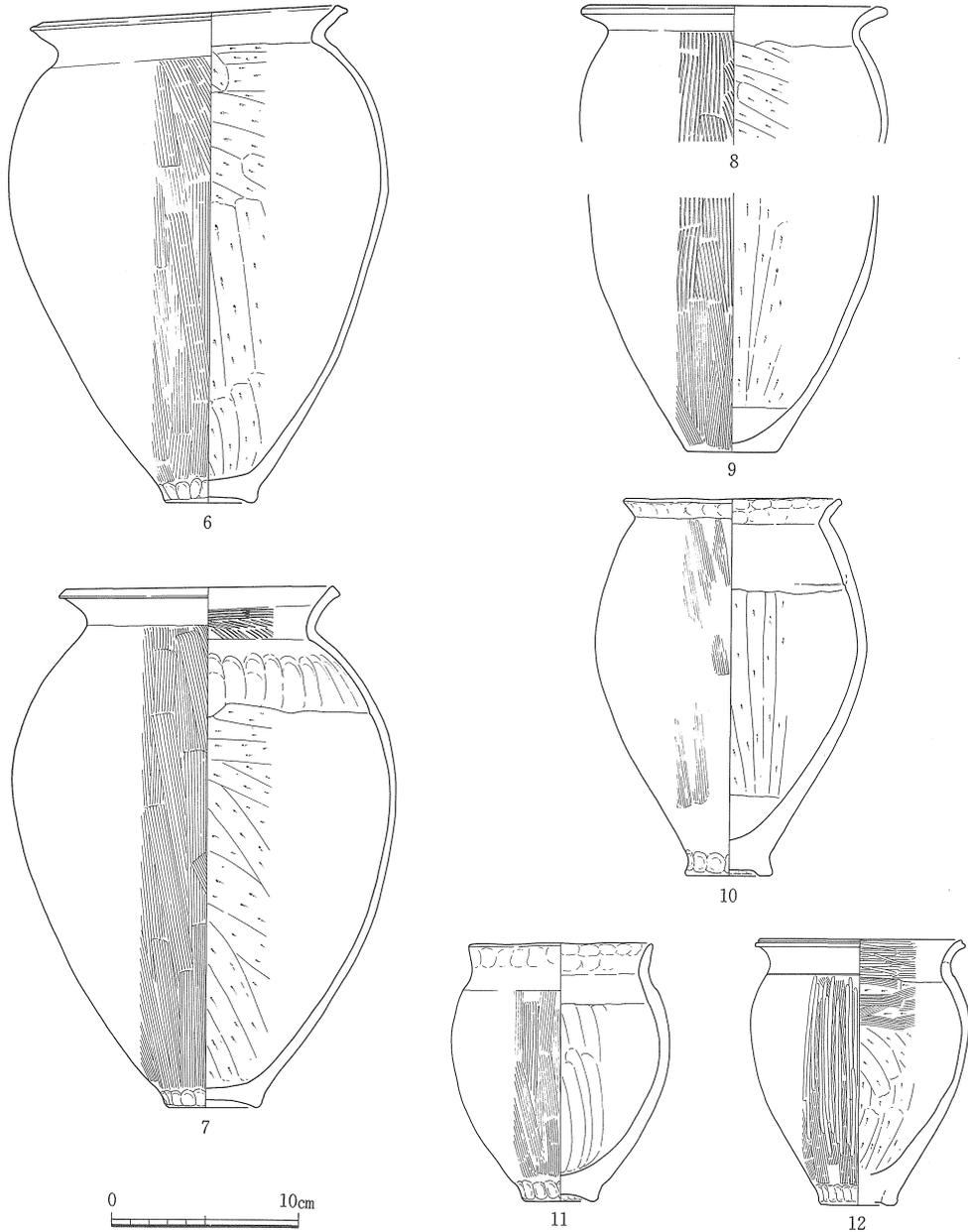
100～104cm前後であり、検出面から底面までの深さは約230cm前後、その標高は-133cm前後であり、シルト層まで達している。

井戸内の埋土は大きくは上層群（1～11層）、中層群（12～19層）、下層群（20～22層）にまとめられる。上層群のうち上位は粘性が弱く、砂質に富んでいるが、下位は粘性が強く、粘質土もしくは粘土が堆積している。これらの層は本井戸が廃絶され一定の時間が経過した後堆積したものと考えられ、特に1～11層は井戸が完全に埋没した後、改めて掘り込まれた掘り方



遺物番号	器種	法量 (cm)			形態・手法の特徴ほか	色調	胎土
		口径	底径	器高			
1	壺形土器	15.1	-	-	凹線3条, 頸部沈線14条直下に列点文, 頸部外面ハケ(磨減で不鮮明)	淡黄灰	微-細砂◎
2	〃	15.2	-	-	〃 4条, 外面横ナデ	淡灰褐	微砂
3	〃	13.8	-	-	〃 3条, 頸部に連続刺突文, 外面斑点状に炭化	淡褐-茶褐	微-細砂
4	甕形土器	21.6	7.2	-	〃 2条, 底部外面鈍ケズリ後ナデ, 黒斑, 煤付着	淡褐-淡赤褐	〃-〃◎
5	〃	16.4	-	-	〃	淡赤褐-黄褐	〃-〃

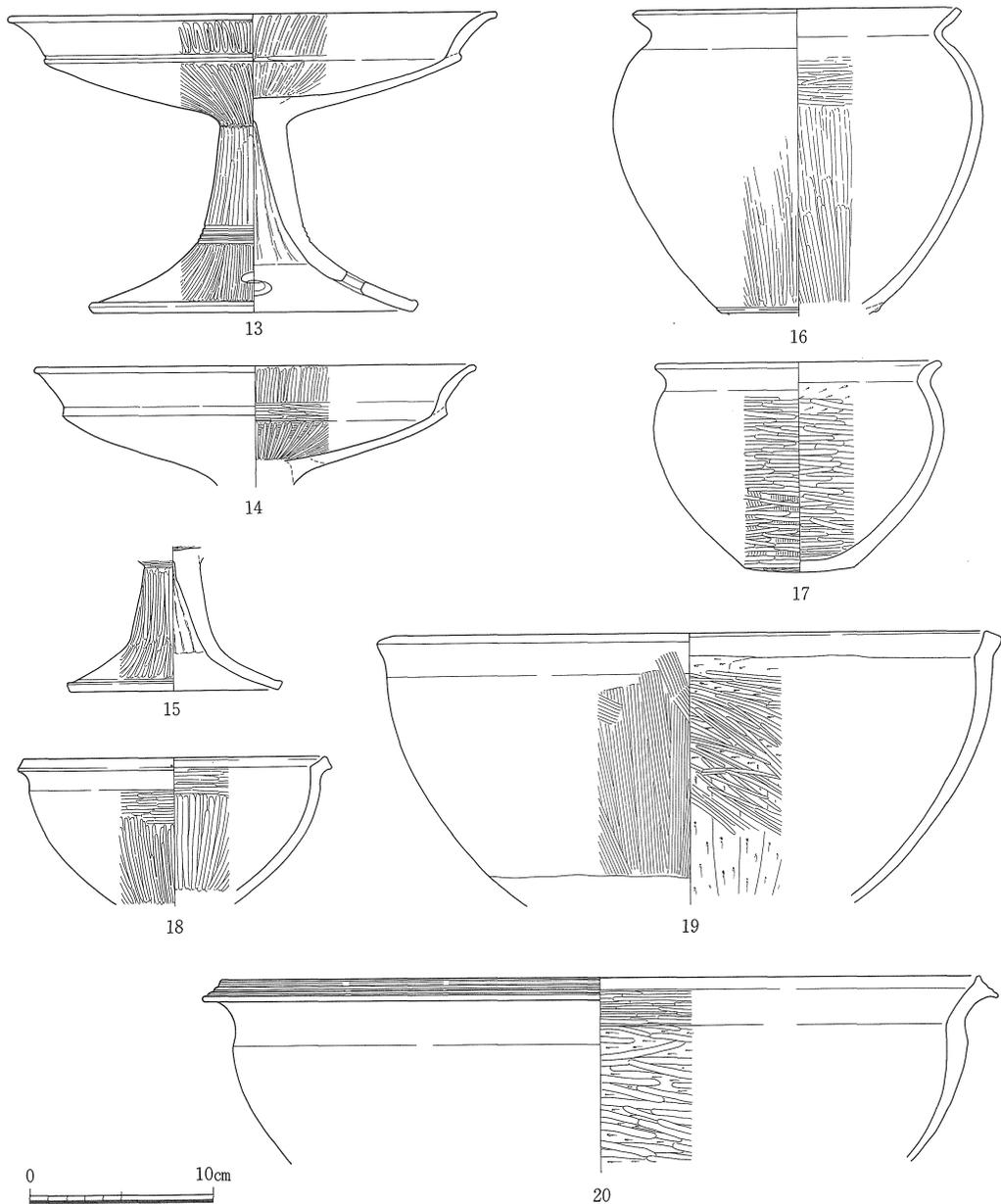
図316 井戸-1 出土遺物(1) 縮尺 1/4



遺物番号	器種	法量 (cm)			形態・手法の特徴ほか	色調	胎土
		口径	底径	器高			
6	寛形土器	16.1	4.7	26.4	体部外面浅いハケ、底部押圧。外面煤多量に付着	淡褐	微～細砂
7	〃	14.4	4.9	27.7	口縁部下半～頸部内面ハケ、外面煤多量に付着、剥落、底部外面押圧。	淡黄褐～淡灰褐	〃～〃
8	〃	15.6	—	—	体部外面幅広のハケ、No 9と同一個体の可能性高い	淡灰褐	〃～〃 ⊕
9	〃	—	4.9	—	底部外面中央部ハケ・周囲ナデ、外面煤付着	〃	〃～〃〃
10	〃	11.5	4.7	20.1	口縁部押圧、体部外面ハケ（磨滅で不鮮明）、外面煤付着	内淡乳白 ⊕ 淡灰白	微砂・赤色粒子
11	〃	9.9	4.0	13.7	〃、〃（下半は磨滅）、外面煤付着、内面ナデ上げ	淡乳褐	〃 ⊕
12	〃	10.8	4.0	14.1	口縁端面門線1条、頸部に細い沈線1条、底部外面押圧、外面煤付着	淡灰褐～淡黄灰	〃 ⊕

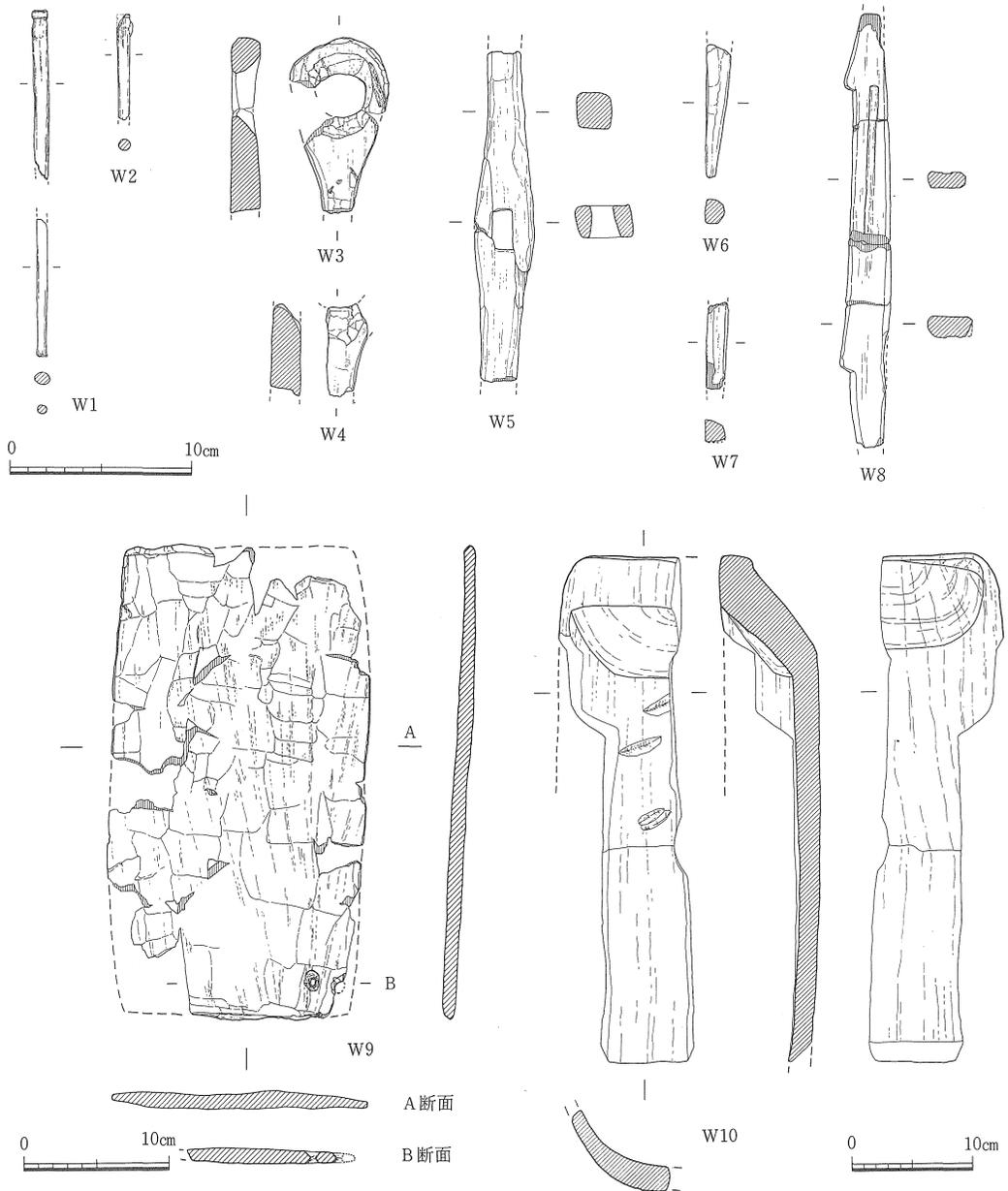
図317 井戸-1 出土遺物(2) 縮尺 1/4

II 地点の調査



遺物 番号	器 種	法 量 (cm)			形態・手法の特徴ほか	色 調	胎 土
		口径	底径	器高			
13	高杯形土器	26.5	17.4	16.1	脚部内面ナデ以外篋ミガキ, 脚屈曲部に沈線4条, 外面煤付着	淡乳白	細砂◎
14	〃	23.9	—	—	外面磨減で不明, 杯受部内面のハケ後篋ミガキ	㊦淡灰褐 ㊧明褐	微砂
15	〃	—	11.4	—	脚柱部内面しぼり目・脚裾部内面横ナデ, 他は篋ミガキ	淡乳黄褐	微~細砂
16	鉢形土器	17.5	—	—	体部内外面篋ミガキ (外面上半剥落で不鮮明), 下端に凸帯状貼付け	淡灰褐~淡黄灰	〃~〃
17	〃	15.3	5.9	11.3	底部外面篋ミガキ, 体部外面ハケ後篋ミガキ	淡灰褐	微砂
18	〃	16.5	—	—	内外面に丹が僅かに残存, 黒斑2ヶ所	淡黄褐~淡茶褐	微~細砂◎, 赤粒
19	〃	32.6	—	—	体部外面下方ナデ, 外面斑点状に炭化	㊦淡灰褐 ㊧褐	微砂
20	〃	41.3	—	—	口縁端面凹線3条, 外面磨減で不明, 斑点状に炭化	㊦淡乳灰褐 ㊧褐	〃

図318 井戸-1 出土遺物(3) 縮尺 1/4



遺物番号	器種	現存長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	樹種	特徴
W1	管状木製品	9.2・7.6	0.8	0.6	ヤブゲカ?	上端に抉りを入れ頭部を作り全体に黒漆を塗る、中部欠損
W2	〃	5.8	0.6	0.6	—	W1と同様の製品、頭部付近に付着物、全体に漆を塗るか茶褐色を呈す
W3	組合部材	9.6	5.4	1.6	アラカン	W3～W7は同一個体である可能性が大きい、W3とW4は把手状の形態を呈する、中央の孔は一方方向から削り込んでいる、W5は中央に方形の孔を有し、柄穴と考えられる、W3には植物繊維付着、いずれの部材も組合せ状態は不明
W4	〃	4.9	—	1.6		
W5	〃	18.2	3.3	1.9		
W6	〃	7.3	1.3	1.3		
W7	〃	4.8	1.1	1.2		
W8	有溝木製品	23.7	2.4	1.1	—	一側縁を鋸歯状に整形し中央に浅い溝、裏面下半部にも長さ約3cmの同様の溝、一部炭化
W9	有孔板状木製品	32.4	17.6	1.1	クスノキ	長方形の板材の表面をノミ状工具で平滑に削り工具痕は明瞭、一部炭化、2孔を穿つ、板目材
W10	田舟	40.8	—	1.8	ノグルミ	深さ13.8cm、丸太材を半割した後削り貫く、約4分の1の残存

図319 井戸-1 出土遺物(4) 縮尺 1/4・1/5(W9)・1/6(W10)

II 地点の調査

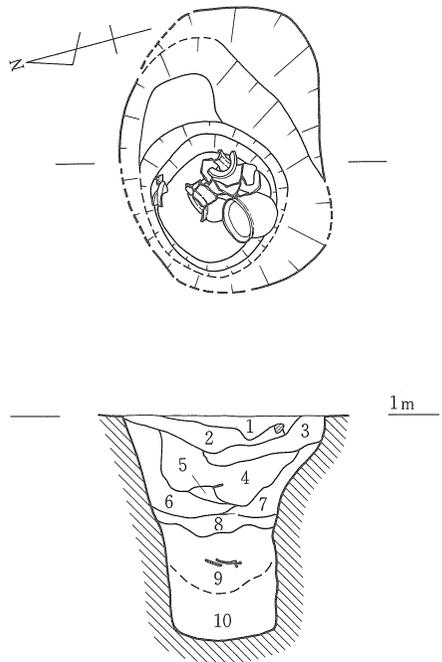
に堆積したものと考えられる。中層群は井戸の廃絶後の比較的早い時期に形成されたとみられ、炭、焼土が比較的顕著な粘土層もしくは粘質土層である。下層群は本井戸廃絶の初期に堆積したとみられる層群であり、20・21層は軟質の有機質土であり、22層は若干の木片を含むが、均質な粘土である。下層のうち20層上部では、一括投棄された土器群が層を成して出土しており、20層下部を中心に21層にかけては木製品がまとまって出土している。本井戸からの出土遺物には、土器および木製品がある。上述したように土器は大半が20層上部からの出土であり、壺（1～3）、甕（4～12）、高杯（13～15）、鉢（16～20）などがある。木製品（W 1～10）は20層下部から21層にかけて出土した。本井戸は出土土器から鹿田・後・2 b 期に属する。

井戸-2（図320・321，図版42-1）

本遺構はB H 19区の中央やや北西寄りに位置する素掘り井戸である。掘り方平面形は、東西方向に長軸をもつ楕円形を呈し、長径は110cm前後、短径は80cm前後を測る。掘り方断面形は、上半部が若干開き気味であり、特に東側の壁が著しい。下半部は壁がほぼ垂直であり、円筒状の掘り方である。検出面の標高は100cm前後、底面までの深さは約90cmに過ぎず、今回の調査で検出された井戸の中では極めて小規模なものである。

井戸内の埋土は10層に分かれる。1～5・7層は粘土と砂質土が互層状に堆積しており、一部には地山（VI層）起源とみられる淡黄褐色土のブロックが顕著である。6層は淡白灰～黄白色の粘土が径10cm以下の小ブロックとなって堆積しており、ブロック間には4層と同質の粘土が含まれている。8・9層は有機物を多く含む有機質土層であり、9層下底には未分解の有機物が集積している。また9層からは完形の甕を始めとして、比較的多量の土器群が一括で出土している。10層は灰色の粘土で、有機物は少なく遺物は含まない。

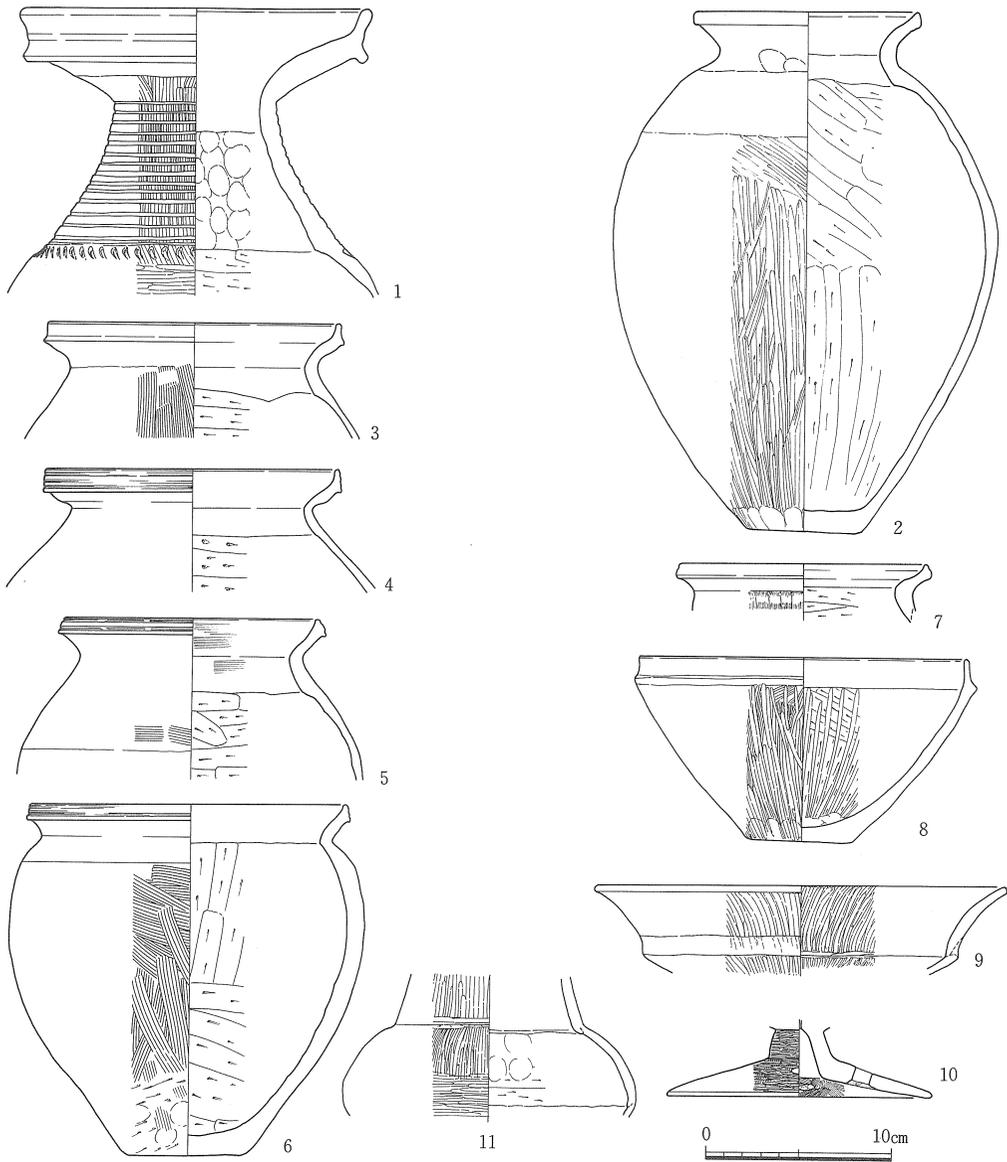
本井戸は出土土器から鹿田・後・3期に属すると考えられる。



0 1m

- 1 暗茶褐色粘土（炭・焼土少含）
- 2 暗黄褐色粘土
- 3 黄褐色砂質土
- 4 暗黄褐色粘土（炭・焼土少含）
- 5 黄褐色砂質土
- 6 淡白灰～黄白色粘土
- 7 茶褐色粘土
- 8 黒色有機質土
- 9 黒～黒褐色有機質土（未分解有機物含）
- 10 灰色粘土

図320 井戸-2 縮尺 1/30



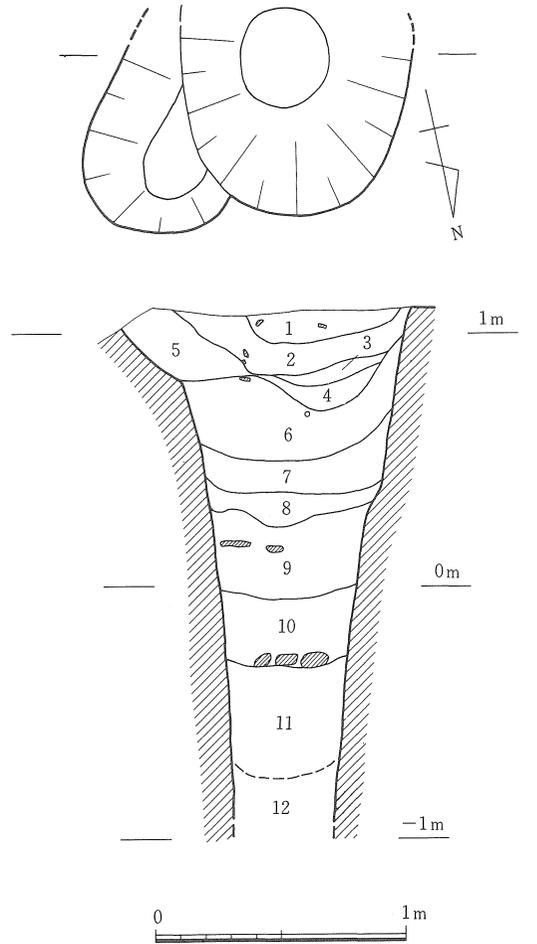
遺物 番号	器 種	法 量 (cm)			形態・手法の特徴ほか	色 調	胎 土
		口径	底径	器高			
1	壺形土器	18.7	—	—	頸部外面ハケ後沈線15条, 胴部外面磨ミガキ, 頸部端部に列点文巡る	内灰黒褐色/黄灰褐色	微砂, 雲母
2	甕形土器	12.0	5.7	27.5	胴部外面磨ミガキ後ハケ後磨ミガキ・肩部以上ナデ, 外面煤多量	淡灰褐色	〃, 〃
3	〃	15.6	—	—	外面煤付着	暗灰褐色	微～細砂
4	〃	15.7	—	—	外面磨滅で不明, 黒斑	淡灰白	粗砂
5	〃	13.6	—	—	口縁部内面横位の工具使用ナデ痕, 外面ナデ・一部にハケ残る	暗茶褐色	微砂
6	鉢形土器	16.9	6.0	18.5	口縁端面横ナデ時の工具使用による浅い沈線, 黒斑, 煤付着	淡黄褐色	微～細砂, 雲母
7	〃	13.3	—	—	体部外面縦位工具使用ナデ	〃	〃～〃
8	〃	17.6	5.5	9.8	外面ハケ後磨ミガキ, 底部内外面磨ミガキ後押圧	明赤褐色	〃～〃
9	高杯形土器	21.8	—	—	内外面磨ミガキ	〃～明褐色	細砂, 粗砂◎
10	〃	—	14.1	—	脚柱部外面ハケ後磨ミガキ・内面ハケ, 脚柱部外面磨ミガキ・内面ナデ	〃	微砂◎
11	台付直口壺形土器	—	—	—	外面磨ミガキ, 胴部上半押圧・ナデ・下半磨ミガキ後ナデ	明褐色～茶褐色	〃◎, 水漉粘土

図321 井戸-2 出土遺物 縮尺 1/4

II 地点の調査

井戸-3 (図322, 図版42-2)

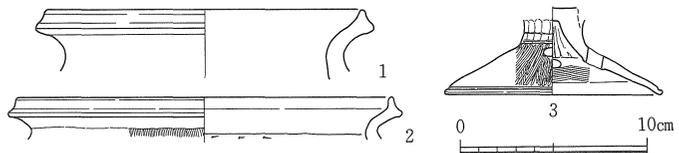
本遺構はBH21区の東南端部に位置する素掘り井戸である。掘り方平面形は南側が排水用の溝にかかっているため、全形は不明であるが、残存部は二つの楕円形掘り方が複合したような不整形を呈している。現状では東西径115cmを測る。掘り方をみると、最上位部は部分的に大きく外側へ開いているが、それ以下は下位になるほど狭くなる円筒状を呈している。本井戸の最下位は調査が困難であり、底面を確認できていないが、検出面から底までの深さは2mを越え、その標高も-100cm以下と推定される。井戸内の埋土は現状で12層を確認した。このうち1~4層は本井戸埋没後の二次掘り方に堆積したものと推定され、1~3層は灰褐色~茶褐色の粘質土、4層は灰白色の粘土である。5層も井戸埋没後の掘り方に堆積した可能性が考えられる。6層以下は井戸廃絶当初の堆積とみられ、6~9層は粘土層、10層はヤマトシジミを中心にハイガイも含む有機質土層、11層も少量の貝を含む粘土層、12層は均質な粘土層である。なお10層下面から具体的な性格は不明であるが、径20cm前後の円礫が3個並んで出土している。本井戸からの出土遺物は僅かであるが、出土



- 1 茶褐色粘質土 (炭・焼土含)
- 2 灰褐色粘質土 (焼土含)
- 3 灰褐色粘質土 (炭含)
- 4 灰白色粘土
- 5 茶褐色粘質土 (焼土少量) 塊
- 6 黄褐色粘土 (炭・焼土少含)
- 7 灰黒色粘土 (焼土少含)
- 8 暗黒灰色粘土
- 9 灰黒色粘土
- 10 黒褐色混貝有機質土
- 11 黒灰色混貝粘土
- 12 暗灰色粘土

土器から本井戸は鹿田・後・3期に属するとみられる。

(栄)



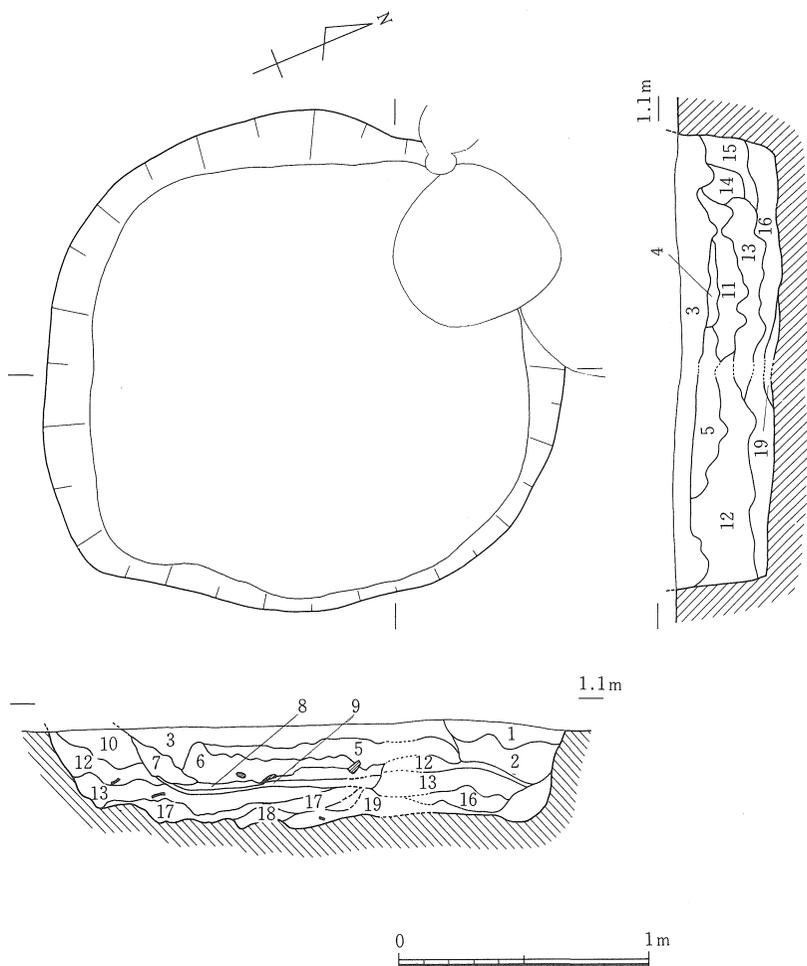
遺物番号	器種	法量 (cm)		形態・手法の特徴ほか	色調	胎土
		口径	底径 器高			
1	甕形土器	16.9	-	横ナデ, 小破片	暗茶褐	微~細砂
2	鉢形土器	20.1	-	体部外面ハケ, 内面艶ケズリ, 小破片	茶褐	〃~〃
3	高杯形土器	-	11.7	杯部内面艶ミガキ, 脚裾外面ハケ後艶ミガキ, 端部に沈線1条	明黄褐	微砂◎, 水澆粘土

図322 井戸-3, 出土遺物 縮尺 1/30, 1/4

C. 土 壙

土壙-3 (図323・324, 図版81-3)

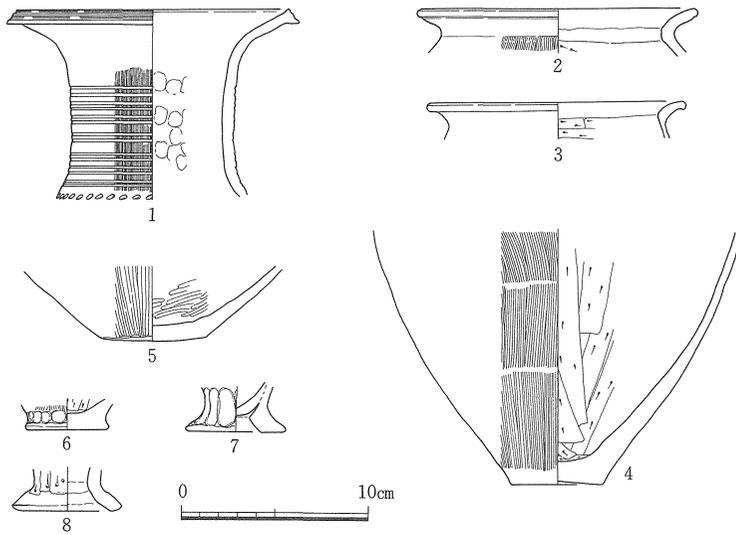
本土壙はB H 21区中央北寄りに位置する。掘り方平面形は正円形に近く、直径は200cm前後である。底は若干の凹凸はあるが、ほぼ平坦であり、壁の立ち上がりは急である。検出面の標



- | | |
|--------------------------|-----------------------|
| 1 暗褐色土 (炭・焼土多含) | 11 暗黄褐色土 (炭・焼土少含) |
| 2 暗黄褐色土 (炭・焼土含) | 12 黄褐色土 (炭・焼土少含) |
| 3 黄褐色土 (炭・焼土多含) | 13 暗褐色粘土 (炭・焼土・有機物多含) |
| 4 暗黄褐色土 (炭・焼土含) | 14 暗茶褐色粘土 (焼土少含) |
| 5 暗茶褐色土粘土 (炭・焼土多含, 有機物含) | 15 暗褐色粘土 (炭多含) |
| 6 黒褐色有機質土 (灰・炭・焼土多含) | 16 暗茶褐色粘土 |
| 7 暗茶褐色粘土 | 17 暗黄褐色粘土 |
| 8 淡灰~白色粘土 | 18 暗茶褐色粘土 |
| 9 茶褐色粘土 (灰・炭多含) | 19 暗灰~黄褐色土 |
| 10 暗茶褐色土 (炭・焼土多含) | |

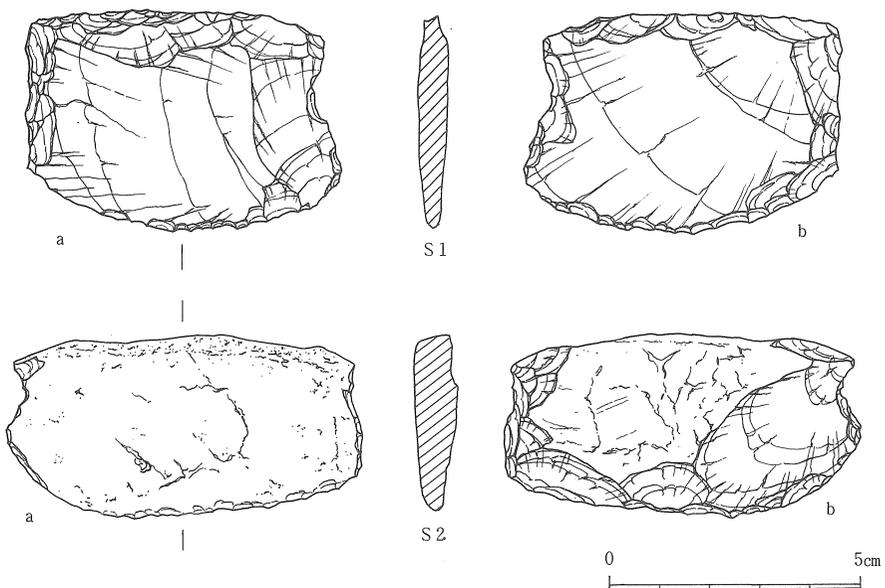
図323 土壙-3 縮尺 1/30

II 地点の調査



高は100cm前後，検出面から底面までの深さは約40cmを測る

土壌内の埋土は1～19層に分かれる。これらは1・2層，3～9層，10～19層の大きく3群にまとめられる。1・2層および3～9層は本土壌が一担埋没



遺物番号	器種	法量 (cm)			形態・手法の特徴ほか	色調	胎土
		口径	底径	器高			
1	壺形土器	14.7	—	—	凹線2条，頸部沈線2条1対14条，頸部外面ハケ，頸部下端列点文	灰褐	微～細砂
2	甕形土器	14.8	—	—	外面ハケ	淡黄褐	細砂
3	〃	13.7	—	—	内面篋ケズリ	明赤褐	〃
4	〃	—	5.0	—	底部外面ナデ，外面ハケ	内灰白の外明灰褐	〃
5	鉢形土器	—	5.8	—	〃，内外面篋ミガキ，黒斑	淡灰褐	細～粗砂
6	〃	—	4.4	—	底部外面ハケ，黒斑	灰黄褐	細砂
7	製塩土器	—	5.3	—	押圧・ナデ	赤褐～白～淡黄褐	粗砂～細礫
8	〃	—	5.6	—	体部外面篋ケズリ	内灰褐の外淡黄白	〃～〃

遺物番号	器種	現存長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	材質	特徴	
							横長刻片素材，刃部 a 面磨耗著しい	a 面自然面，b 面節理面残す，刃部磨耗し鈍い
S 1	打製石庖丁	4.3	6.3	0.7	28.0	サヌカイト	横長刻片素材，刃部 a 面磨耗著しい	
S 2	〃	3.5	7.1	0.8	32.0	粘板岩	a 面自然面，b 面節理面残す，刃部磨耗し鈍い	

図324 土壌-3 出土遺物 縮尺 1/4・2/3(S1・2)

した後の二次的な掘り方の埋土である。1・2層は最も新しい堆積で、焼土・炭を含む人為的な埋土である。3～9層も土壙埋没後の二次掘り方の埋土である。二次掘り方底面である9層下面はほぼ平坦であり、9層は灰・炭化物の薄層を多量に含んでいる。8層は均質な淡灰～白色の粘土であり、混入物は少ない。7層は二次掘り方壁の崩壊土と考えられる。5・6層はともに有機質に富んでおり、植物が集積したものと推定される。3・4層は炭・焼土を含み、これらの各層は7層を除きいずれも人為的な堆積層とみられる。

10～19層は本土壙の当初の埋土と考えられるものである。19層は掘削時の残土もしくは壁の崩壊土と推定されるが、他の層はいずれも人為的な埋土と考えられる。中でも13層は5・6層と同様有機質に富んでいる。本土壙の埋土は以上のように複雑な堆積を示すが、基本的には廃棄物と埋め戻し土との互層と推定される。

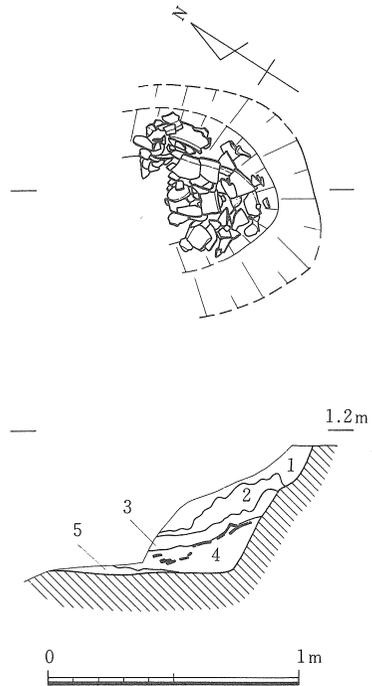
本土壙は出土遺物から鹿田・後・2期に属する。

土壙一5 (図325・326, 図版43-1)

本土壙はB H 20区中央北寄りに位置する。北西側は中世の溝によって破壊されており、南西側も土壙63およびピットによって一部を破壊されている。現状からはその平面形は長軸が北西—南東方向をとる楕円形を呈するかと推定される。現状の短軸の長さは約90cmである。掘り方底面はほぼ平坦であり、壁はやや急な傾斜で立ち上がっている。検出面の標高は約115cm、検出面から底までの深さは約50cmを測る。

土壙内の埋土は後代の溝によって大きく削平されているが、現状で5層に分かれる。1～3層は周辺からの流入土とみられ、いずれも土壙中央中部に向って傾斜している。4層も上面は中央部に向って傾斜しており、炭・焼土の他、土器を多量に含んでいる。土器片も周辺部から中央部に向って傾斜して堆積している。5層は炭・焼土を含まない、地山に類似した層であり、土壙掘削時の残土かと推定される。

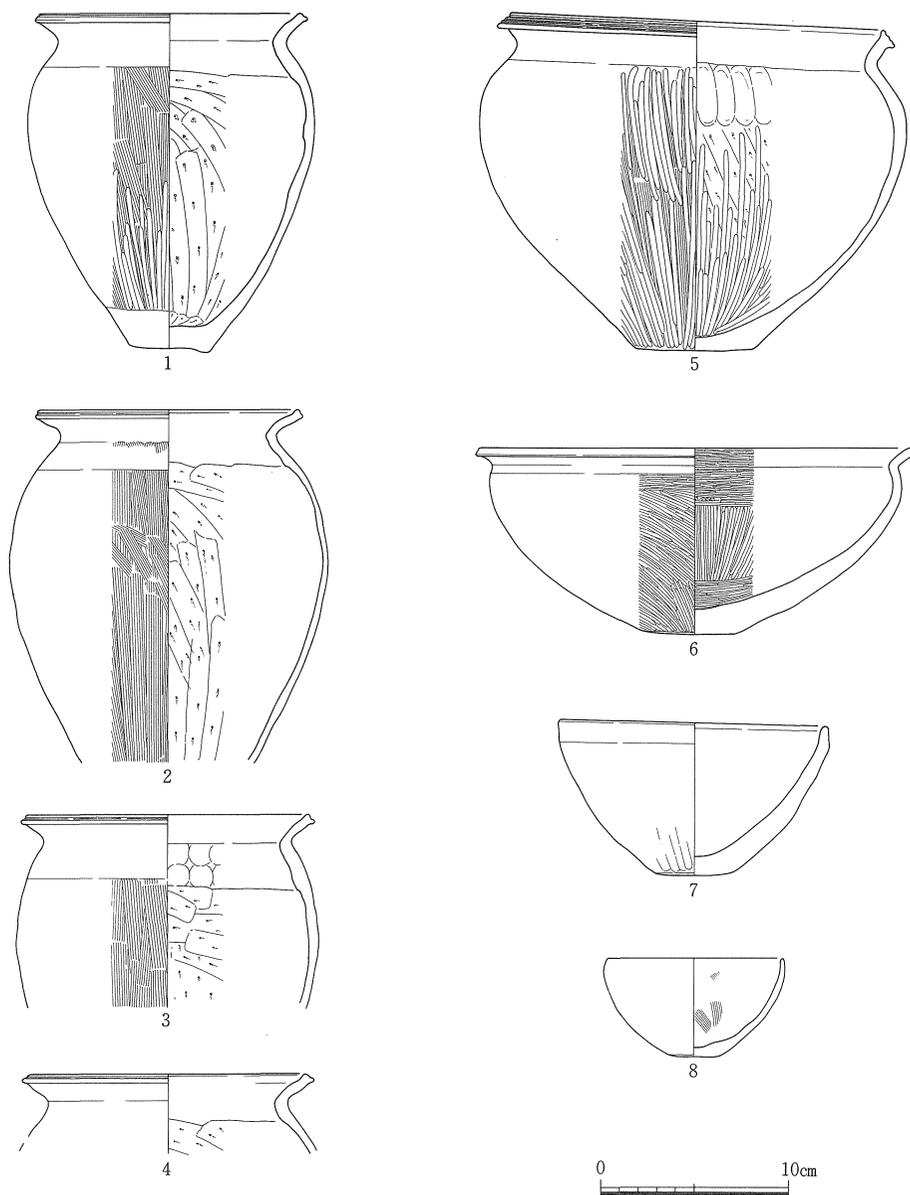
本土壙は4層中から比較的豊富に土器が出土した。出土土器には甕(1～4)、鉢(5～8)などがある。本土壙は鹿田・後・2期に属す。



- 1 淡茶灰色砂質土 (炭含)
- 2 淡灰褐色砂質土 (炭含)
- 3 茶灰色砂質土 (炭含)
- 4 暗茶灰色砂質土 (炭・焼土多含)
- 5 淡茶灰色粘質土

図325 土壙一5 縮尺 1/30

II 地点の調査

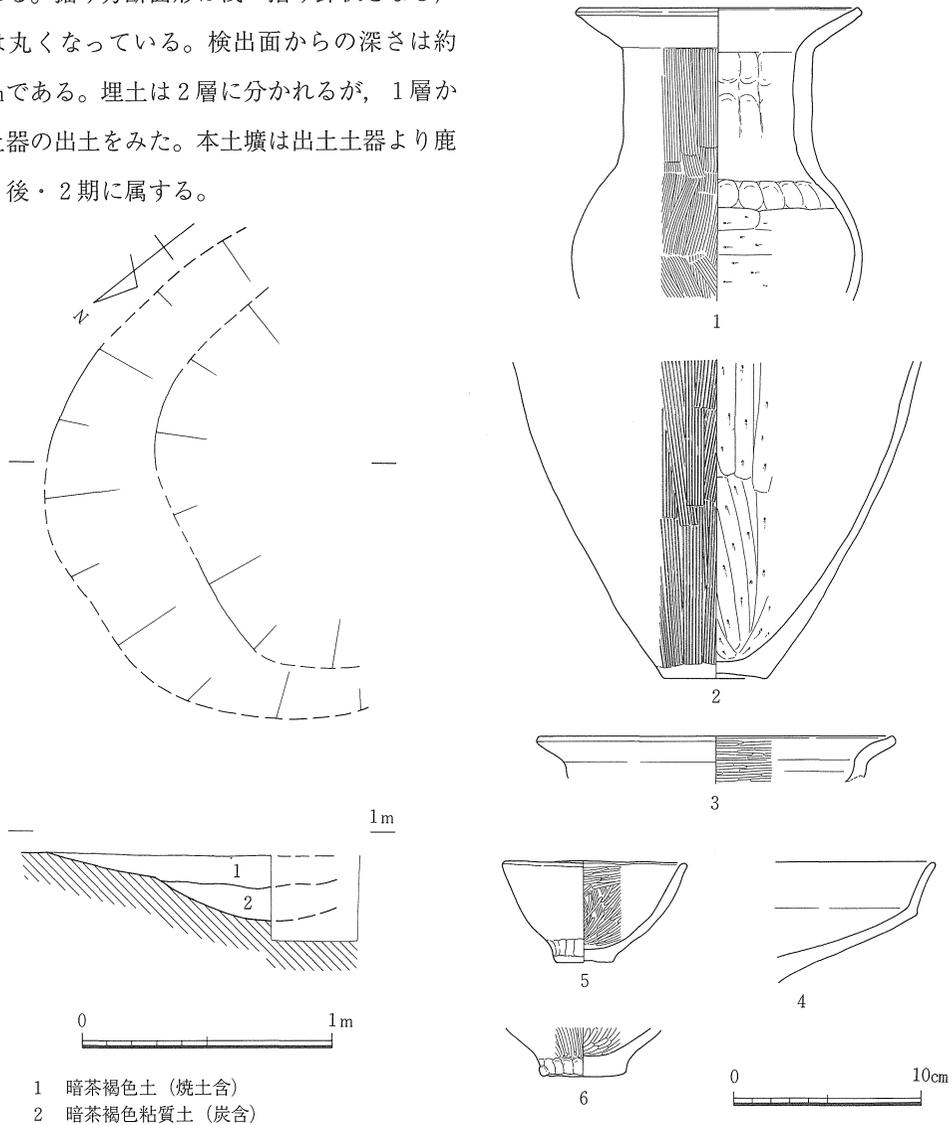


遺物 番号	器 種	法 量 (cm)			形 態・手 法 の 特 徴 ほ か	色 調	胎 土
		口径	底径	器高			
1	甕形土器	14.0	4.3	17.7	底部外面甕ケズリ後ナデ、外面ハケ後半甕ミガキ、煤付着	淡黄白～黄褐	粗砂
2	〃	14.0	—	—	口縁部に凹線1条、外面ハケ、内面甕ケズリ、黒斑	淡黄白	細砂
3	〃	15.2	—	—	〃、〃、〃、〃	内黄褐外明乳黄白	粗砂、細礫②
4	〃	15.0	—	—	〃、外面横ナデ、黒斑	黄褐	細砂、〃②
5	鉢形土器	19.8	6.2	17.6	端面凹線3条、底部外面甕ケズリ、外面ハケ後甕ミガキ、黒斑2ヶ所	内黄褐外淡黄灰	細～粗砂
6	〃	23.0	5.5	9.4	内面甕ミガキは放射状後横位、外面煤付着	内明黄褐外暗褐	細砂
7	〃	14.4	4.1	8.2	全体的に磨減で不明	淡赤白～淡黄灰	〃②
8	〃	9.5	2.9	5.2	外面丁寧なナデ、内面ハケ後ナデ	灰褐	微～細砂

図326 土壙-5 出土遺物 縮尺 1/4

土壌-8 (図327)

本土壌はB H20区に位置する。西側および東側は後出の遺構によって、南半は攪乱によって、それぞれ破壊されている。掘り方平面形は現状からは円形もしくは楕円形を呈するものと推定される。掘り方断面形は浅い摺り鉢状をなし、底は丸くなっている。検出面からの深さは約25cmである。埋土は2層に分かれるが、1層から土器の出土をみた。本土壌は出土土器より鹿田・後・2期に属する。



- 1 暗茶褐色土 (焼土含)
- 2 暗茶褐色粘質土 (炭含)

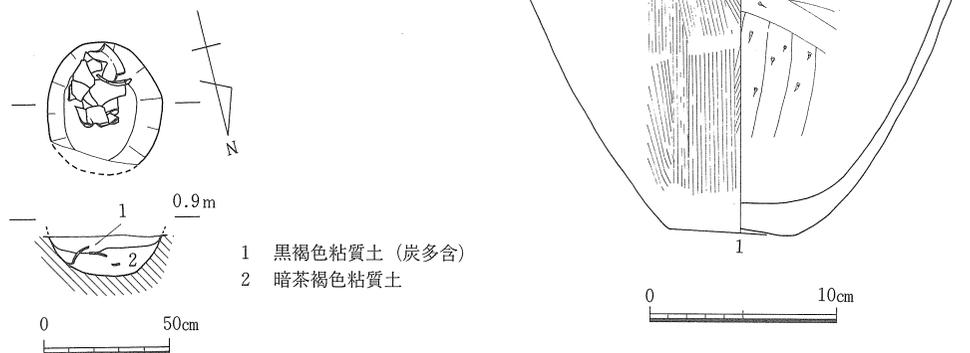
遺物番号	器種	法量 (cm)			形態・手法の特徴ほか	色調	胎土
		口径	底径	器高			
1	壺形土器	15.0	-	-	体部外面浅いハケ	明黄褐	微-細砂
2	壺形土器	-	5.7	-	底部外面鈍ケズリ後ナデ	暗灰褐	細砂
3	高杯形土器	19.0	-	-	外面横ナデ, 内面鈍ミガキ	明赤褐	微砂◎
4	〃	-	-	-	外面波状鈍ミガキ, 受部内外面放射状鈍ミガキ	内明褐/外灰褐	〃
5	鉢形土器	9.8	3.2	5.4	外面ナデ, 内面ハケ後鈍ミガキ, 黒斑	黄褐~明黄褐	細砂◎
6	〃	-	4.5	-	底部外面ナデ, 他は鈍ミガキ	黄褐	微砂◎, 水澁粘土

図327 土壌-8 出土遺物 縮尺 1/30, 1/4

II 地点の調査

土壙－9 (図328)

本土壙はB H 19区西南寄りに位置する。北端部は土壙30によって破壊されているが、現状からその平面形は長径52cm前後、短径46cm前後の比較的小形の楕円形を呈するものと推定でき、その長軸はほぼ南北方向を向いている。底面は丸くなっており、壁もゆるやかに内彎して立ち上がっている。検出面から最下底までの深さは約15cmを測る。埋土は2層に分かれ、2層からは一個体分の甕の破片がまとまって出土しており、土器棺の可能性も考えられる。本土壙は鹿田・後・2期に属する。

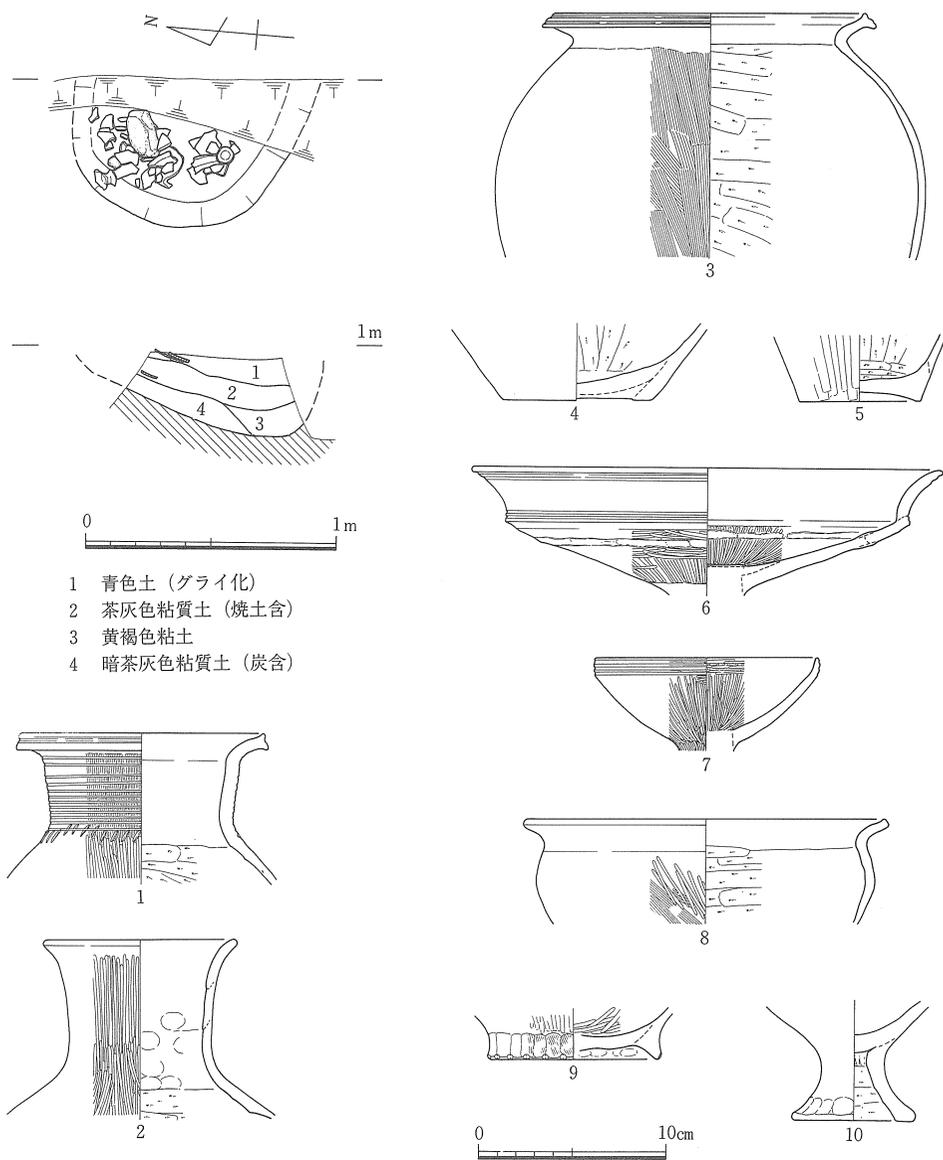


遺物番号	器種	法量 (cm)			形態・手法の特徴ほか	色調	胎土
		口径	底径	器高			
1	甕形土器	17.2	6.8	29.6	体部外面下半ハケ・上半磨減で不明、底部外面ナデ、黒斑	明褐	細砂、赤色粒子

図328 土壙－9 出土遺物 縮尺 1/30, 1/4

土壙－12 (図329)

本土壙はB G 19区東南部で検出した。東側の大半は排水用の側溝および後の土壙によって破壊されており、西側の一部分が残存するのみであった。その平面形は現状では不明確であるが、円形もしくは楕円形を呈するものと推定され、南北径は最大で約95cmを測る。掘り方底面は浅く凹み、壁の立ち上がりは比較急なものと推定される。検出面の標高は約1mであるが、本来の掘り込み面はより上位にあるものと考えられる。現状では検出面からは底面までの深さは最大で約30cmである。遺構内の埋土は4層に分かれる。1層はグライ化が著しく、詳しい性状は不明であるが、下部には層の傾斜に沿って土器が含まれている。2・4層も焼土・炭などととも土器を含んでいる。3層は均質な黄褐色粘土であり、土壙下底中央部にブロック状に堆積している。本土壙からは壺(1・2)、甕(3～5)、高杯(6・7)、鉢(8～10)などが比較的にまとまって出土している。本土壙は出土土器から鹿田・後・2期に属する。



- 1 青色土 (グライ化)
- 2 茶灰色粘質土 (焼土含)
- 3 黄褐色粘土
- 4 暗茶灰色粘質土 (炭含)

遺物番号	器種	法量 (cm)			形態・手法の特徴ほか	色調	胎土
		口径	底径	器高			
1	壺形土器	13.0	—	—	頸部ハケ後沈線12条 (2条1対)、胴部外面ハケ後施ミガキ	内黄褐/外黄灰褐	微砂◎
2	〃	10.1	—	—	外面施ミガキ、黒斑	淡黄白	細砂
3	甕形土器	16.5	—	—	口縁端面凹線2条、外面ハケは細い	〃	微砂◎
4	〃	—	8.0	—	外面ナデ	内淡黄白/外淡灰白	〃
5	〃	—	6.5	—	底部外面施ケズリ後ナデ、外面施ミガキ (板状工具)、煤付着	内淡黄褐/外灰褐	粗砂
6	高杯形土器	25.0	—	—	口縁部横ナデ、受部施ミガキ後補修用粘土帯が廻る	淡黄褐	微砂◎
7	〃	12.0	—	—	内外面施ミガキ	明黄褐	〃◎、精良
8	鉢形土器	19.2	—	—	外面ハケ後施ミガキ	淡黄灰	〃
9	〃	—	9.2	—	底部外面押圧、下端部に刻み目が廻る	淡黄褐	微-細砂
10	台付鉢形土器	—	6.5	—	脚台部外面ナデ・押圧、杯部磨減で不明	明黄褐	細砂

図329 土壌-12 出土遺物 縮尺 1/30, 1/4

II 地点の調査

土壙-23 (図330~335, 図版52・53・56)

本土壙はB G 19区東南部に位置し、東北端を土壙 8 によって破壊されている。掘り方平面形は長径約225cm, 短径約120cmのやや不整の長楕円形を呈しており、その長軸はほぼ東北-西南方向である。掘り方底面は若干の凹凸はあるがほぼ平坦であり、壁はかなりゆるやかに立ち上っている。検出面の標高は1 m内外であり、検出面から底までは最大で約36cmである。

本土壙の埋土は12層に分かれる。断面観察からは、大きくは1・2層, 3~5層, 6~9層, 10~12層の4群にまとめられる。10~12層は土壙掘削後最初の堆積層群である。いずれもよくしまった粘土もしくは粘土質シルトであり、遺物の量は少ない。この10~12層堆積後、大量の土器群が本土壙内に投棄されており、これと前後して6~9層がほぼ連続して堆積したものと考えられる。この後に、3~5層が主に西南部に堆積し、その後の浅い凹みに周囲から1・2層が流入したものと推定される。

本土壙からは大量の土器が出土しており、そのほとんどは既述のように10~12層上面と6~9層下部からの出土である。出土土器には壺 (1~7), 甕 (8~31), 高杯 (32~37), 鉢 (38~46), 器台 (47・48), 蓋 (49), 製塩土器 (50) などがあり、これらの土器から本土壙は鹿田・後・2期に属すると考えられる。

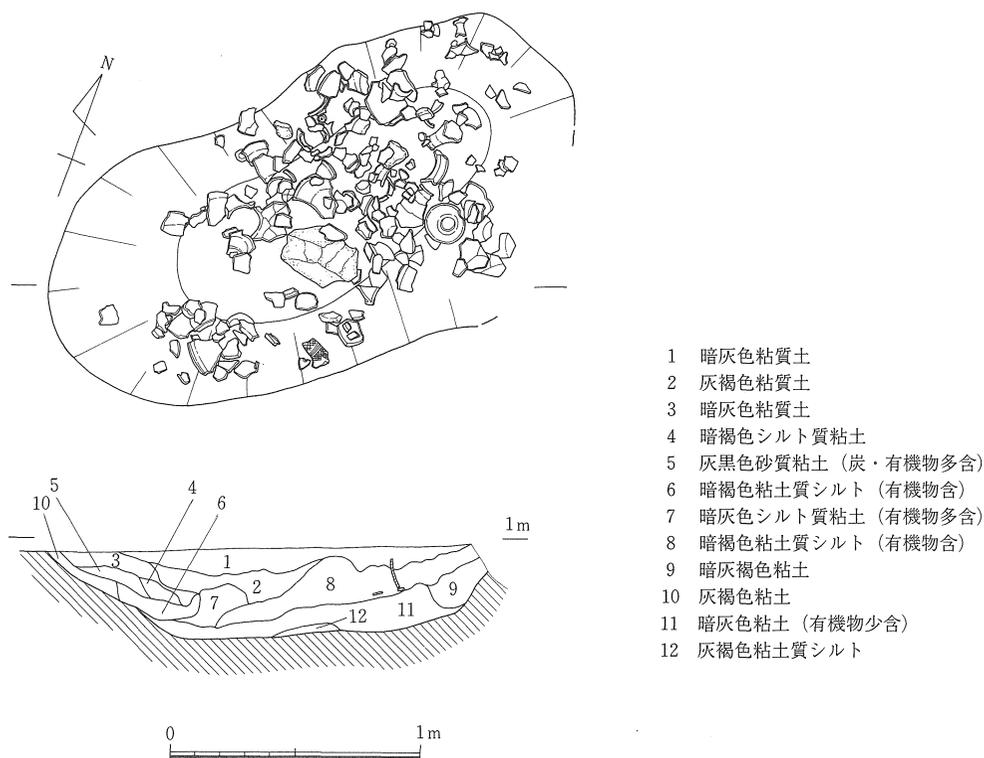
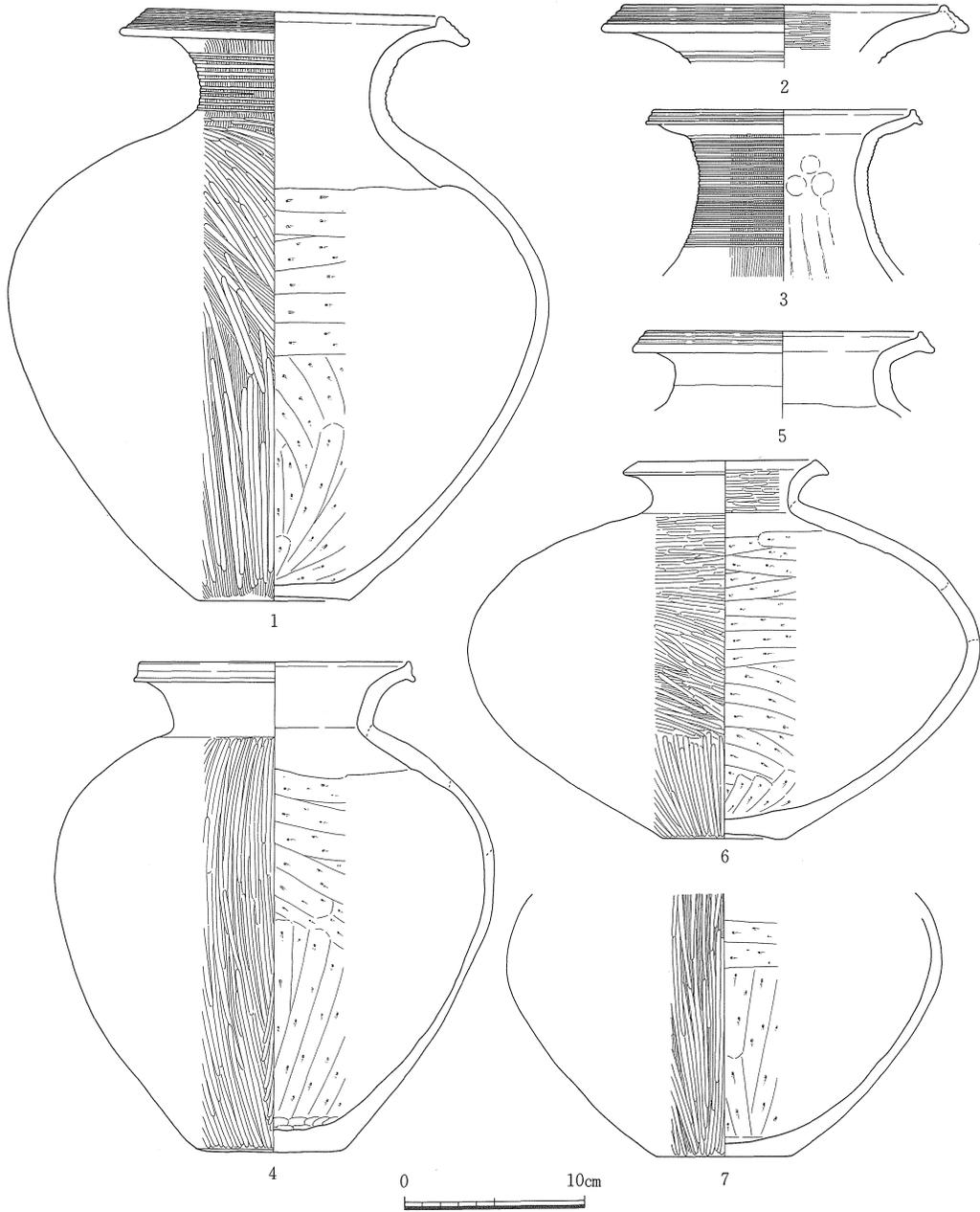


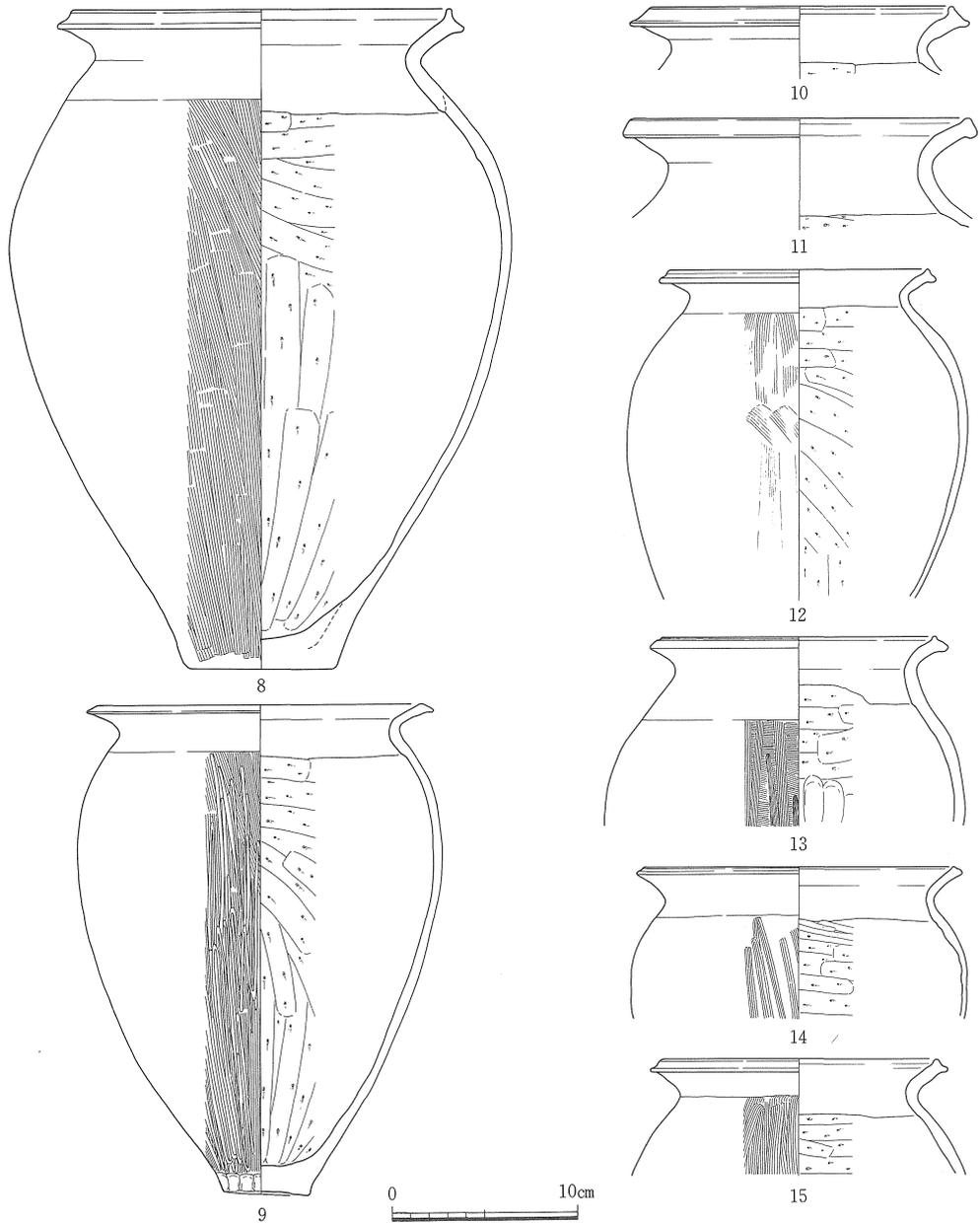
図330 土壙-23 縮尺 1/30



遺物番号	器種	法量 (cm)			形態・手法の特徴ほか	色調	胎土
		口径	底径	器高			
1	壺形土器	16.6	8.5	32.4	外面ハケ後甍ミガキ, 底部外面寛ケズリ後ナデ, 黒斑, 沈線10~12条	淡黄褐~淡黄白	微砂, 粗砂②
2	〃	18.0	—	—	口縁端面凹線4条	内明黄褐/外暗灰褐	細砂
3	〃	14.7	—	—	〃 2条, 頸部外面ハケ・沈線28条, 黒斑	淡黄白	微砂
4	〃	15.2	8.4	27.1	底部内面押圧・外面ナデ, 黒斑	明褐~淡黄灰	〃
5	〃	15.4	—	—	体部外面ハケ後横ナデ・内面寛ケズリ後ナデ	灰褐	〃
6	〃	10.2	7.2	20.8	底部外面平行甍ミガキ, 体部外面ハケ僅かに残る, 黒斑2ヶ所	淡黄褐	〃
7	〃	—	7.8	—	底部外面ナデ, 外面ハケ後甍ミガキ, 黒斑	内淡黄白/外明黄白	細砂

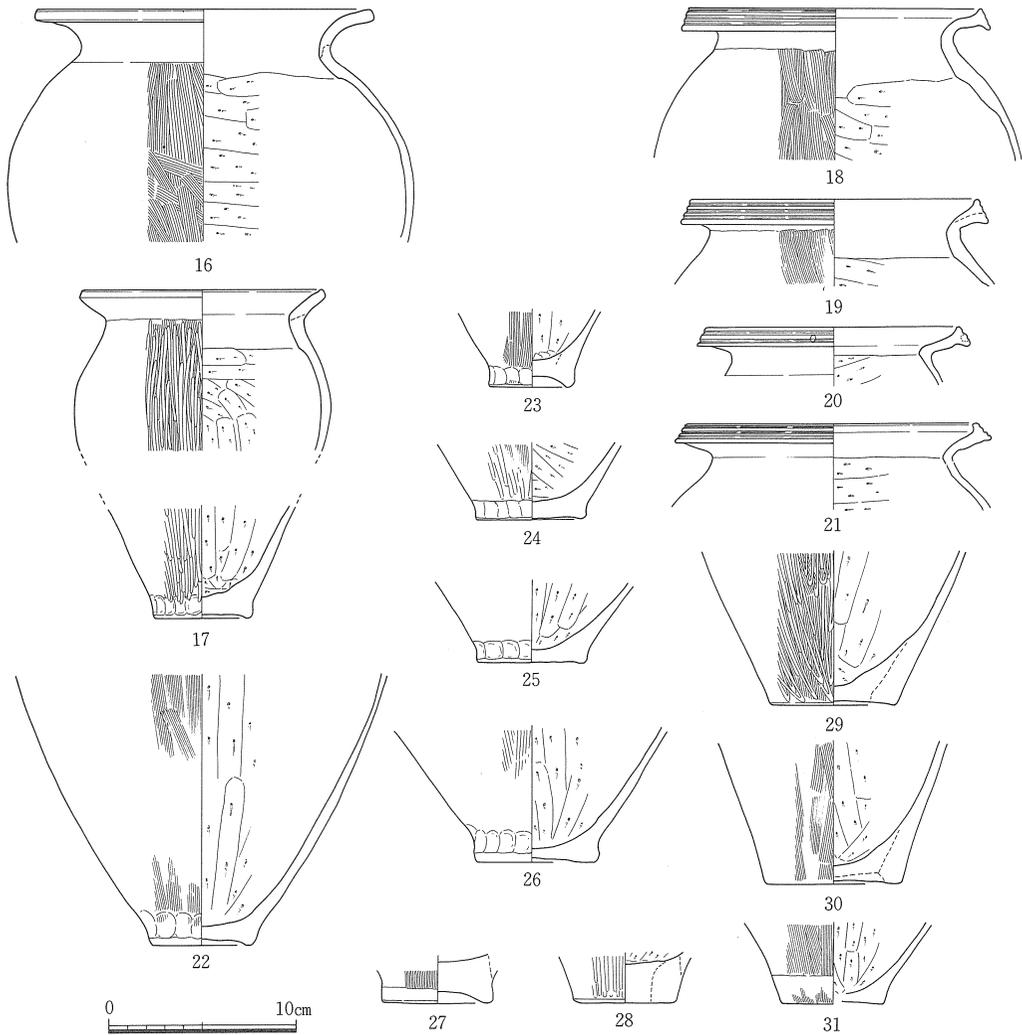
図331 土境-23 出土遺物(1) 縮尺 1/4

II 地点の調査



遺物番号	器種	法 量 (cm)			形態・手法の特徴ほか	色 調	胎 土
		口径	底径	器高			
8	甕形土器	20.5	8.1	35.3	口縁部横ナデ, 外面ハケ, 内面施ケズリ, 底部外面ナデ, 黒斑	淡黄灰	細砂
9	〃	17.9	4.7	26.3	底部外面施ミガキ, 体部外面ハケ後施ミガキ, 煤付着	暗茶褐	微砂, 粗砂②
10	〃	16.4	—	—	外面横ナデ	淡黄白~淡乳白	細砂
11	〃	18.4	—	—	〃	内灰白外黄灰	粗砂②, 赤色粒
12	〃	14.2	—	—	外面剥落で不鮮明だが浅いハケ残存・煤付着	淡灰白~灰褐	細砂
13	〃	14.9	—	—	内面施ケズリ後一部ナデ, 外面細いハケ・煤付着, 口縁部楕円形	淡黄白	微砂
14	〃	17.0	—	—	外面ナデ後細いハケ・煤付着少量	明褐	細砂②
15	〃	15.0	—	—	外面煤付着	淡黄灰	〃

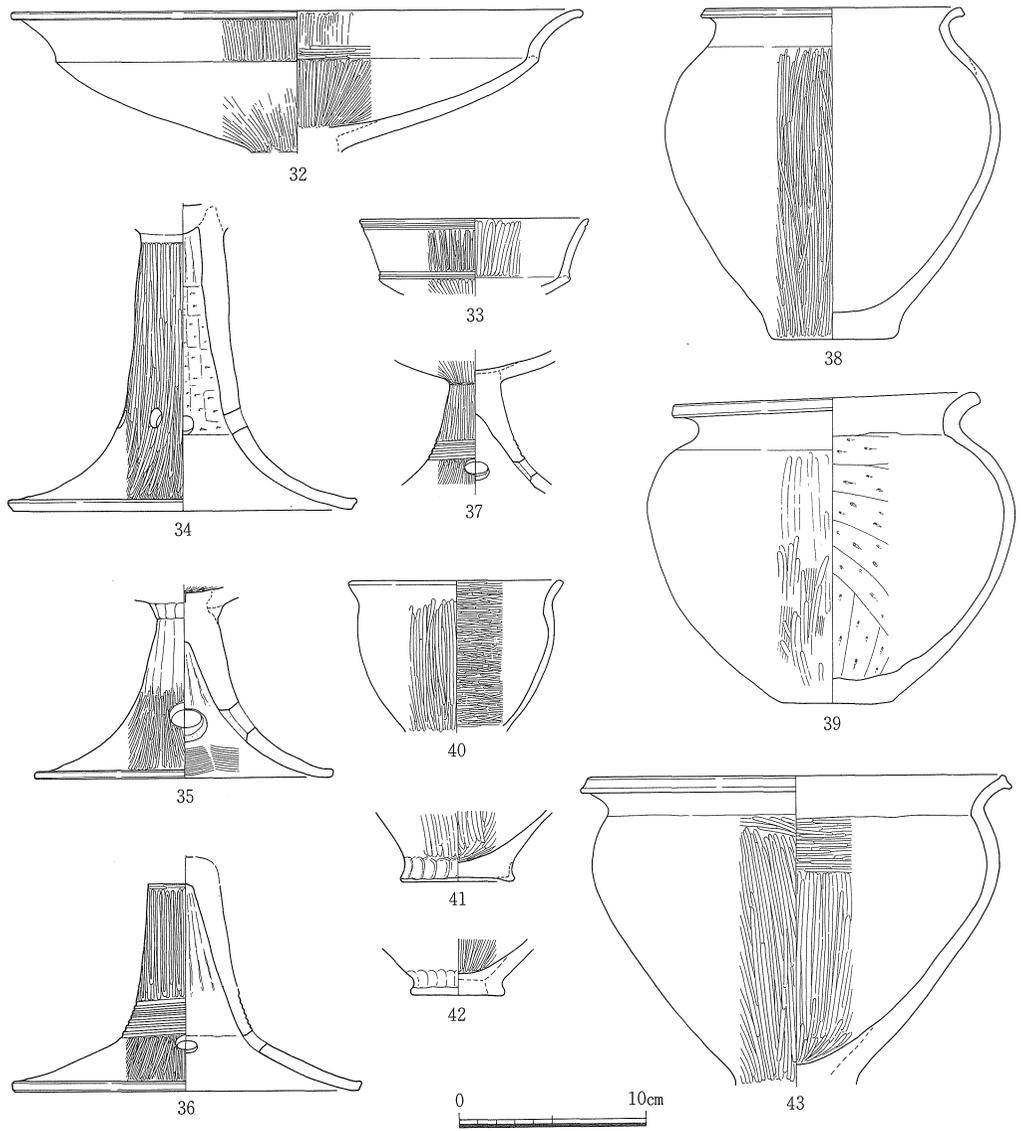
図332 土壌-23 出土遺物(2) 縮尺 1/4



遺物 番号	器 種	法 量 (cm)			形 態・手 法 の 特 徴 ほ か	色 調	胎 土
		口径	底径	器高			
16	甕形土器	17.9	—	—	外面ハケ・煤附着	明黄白	微砂
17	〃	13.0	5.2	—	外面ハケ後甕ミガキ, 底部外面ナデ, 黒斑2ヶ所	赤褐	細~粗砂⑤
18	〃	15.7	—	—	口縁端面凹線3条, 外面ハケ・煤附着	淡黄灰白	微~細砂
19	〃	15.3	—	—	〃 3条, 〃 〃	淡灰褐	細砂
20	〃	13.7	—	—	〃 2条	淡黄灰	〃
21	〃	15.6	—	—	〃 3条, 外面横ナデ・煤附着	④赤褐 ④黄褐	〃
22	〃	—	5.4	—	外面浅いハケ(磨減で不鮮明), 底部外面ナデ・押圧	淡灰褐	〃
23	〃	—	4.5	—	底部外面ナデ	淡黄白	微砂
24	〃	—	5.8	—	底部外面甕ケズリ, 外面煤附着	④淡灰白④暗灰褐	〃 ②
25	〃	—	5.8	—	底部外面押圧, 外面丁寧なナデ, 黒斑	(内)灰(外)灰褐	微~細砂
26	〃	—	6.5	—	〃 〃, 外面ハケ後ナデ・煤附着多量, 黒斑	④黄白 ④淡灰褐	微砂
27	〃	—	5.9	—	底部外面ナデ・内面甕ケズリ後押圧	④黒灰 ④淡黄灰	微~細砂
28	〃	—	5.5	—	〃 〃, 外面甕ミガキ	④黒灰 ④淡黄灰	細砂
29	〃	—	6.8	—	〃 〃, 外面ハケ後甕ミガキ・煤附着	④茶褐 ④黒褐	〃
30	〃	—	7.2	—	〃 〃, 内面に炭化物附着	淡灰褐	〃
31	〃	—	5.5	—	底部外面ハケ後ナデ, 外面煤附着	④黒灰 ④灰褐	〃

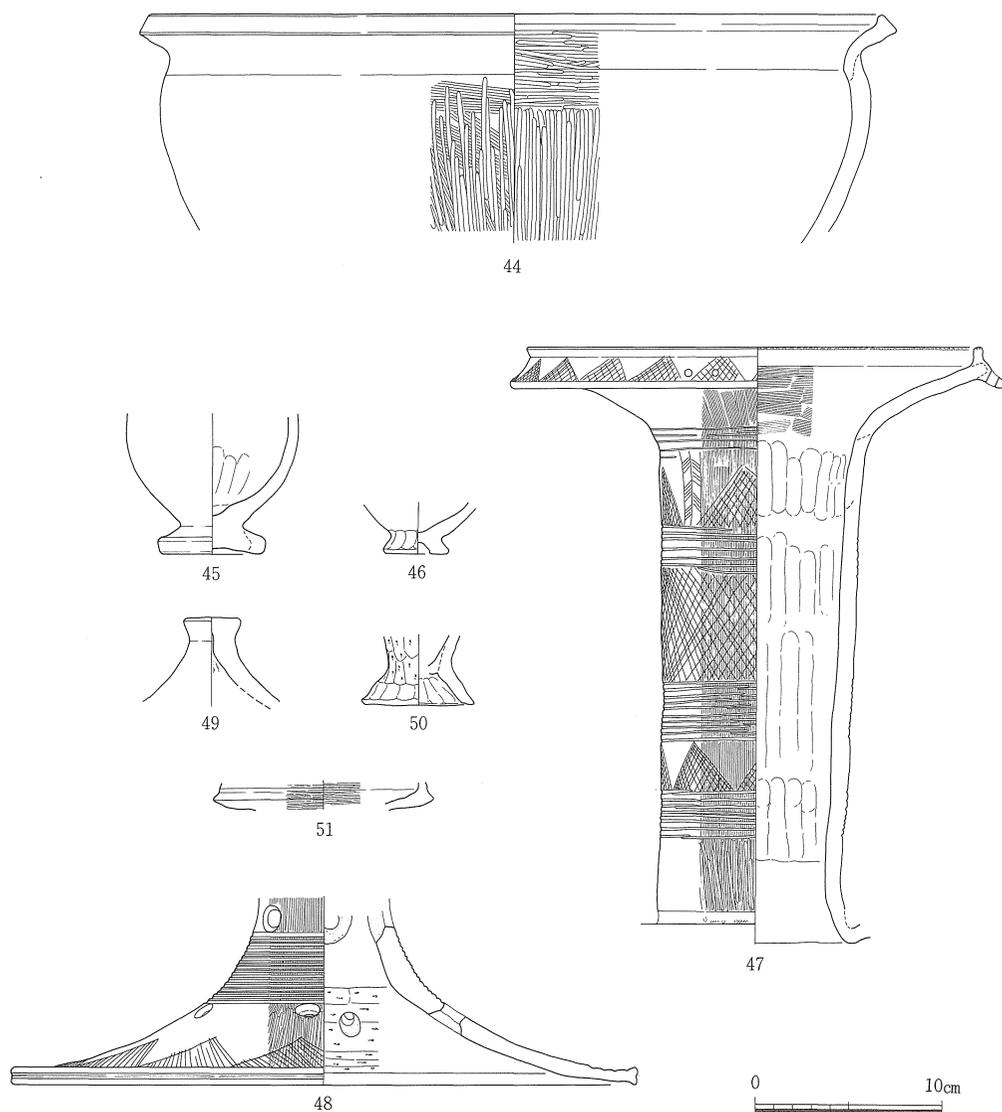
図333 土壌-23 出土遺物(3) 縮尺 1/4

II 地点の調査



遺物番号	器種	法量 (cm)			形態・手法の特徴ほか	色調	胎土
		口径	底径	器高			
32	高杯形土器	30.5	—	—	内外面篋ミガキ	内黄褐外赤褐	細～粗砂
33	〃	12.2	—	—	口縁部沈線2条, 杯受部内面不明, 口縁部外面の篋ミガキは波状	淡黄白	微砂㊟
34	〃	—	18.2	—	脚裾部外面ハケ後篋ミガキ, 凹孔は2個単位3ヶ所, 黒斑	内淡乳白外淡黄褐	微～細砂
35	〃	—	15.9	—	外面上半磨減で不鮮明・面取り確認のみ・下半は篋ミガキ	内暗灰褐外暗黄褐	微砂
36	〃	—	18.4	—	脚裾部外面ハケ後篋ミガキ㊟, 沈線7条	淡黄灰白	細砂
37	〃	—	—	—	杯部内面磨減で不明, 脚内面ナデ, 脚裾部外面ハケ後篋ミガキ	内淡灰褐外明黄白	〃
38	鉢形土器	13.6	6.6	17.4	内面磨減で不明, 底部外面平行篋ミガキ, 黒斑	明赤褐	微砂㊟, 精良
39	〃	16.1	6.2	16.4	底部外面篋ケズリ後ナデ, 外面ハケ後篋ミガキ (磨減で不鮮明)	〃	粗砂
40	〃	11.3	—	—	内外面篋ミガキ	内淡灰褐外灰褐	微砂
41	〃	—	6.0	—	底部外面ナデ・押圧, 内外面篋ミガキ, 黒斑	内明黄褐外淡黄灰	微～細砂
42	〃	—	5.0	—	外面ナデ・押圧, 内面篋ミガキ	内明赤褐外淡赤白	微砂
43	台付鉢形土器	22.3	—	—	口縁部横ナデ, 体部篋ミガキ, 黒斑2ヶ所	明黄褐	微～細砂

図334 土壌-23 出土遺物(4) 縮尺 1/4



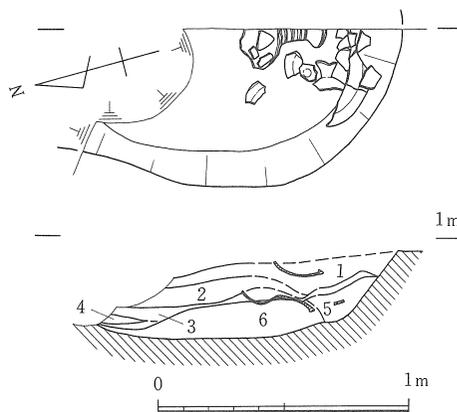
遺物 番号	器 種	法 量 (cm)			形態・手法の特徴ほか	色 調	胎 土
		口径	底径	器高			
44	鉢形土器	39.2	—	—	外面ハケ後甍ミガキ	淡黄灰～赤褐色	細砂◎
45	台付鉢形土器	—	5.5	—	内面ナデ・外面磨減で不明	明赤褐	微砂◎, 精良
46	〃	—	3.4	—	内外面ナデ	淡黄白	〃〃
47	器台形土器	24.3	—	—	外面に浅い沈線文帯4段・最上段に鋸歯文7個と綾杉文1個・2段目は斜格子文・3段目は鋸歯文が巡る。口唇部に竹管文・口縁端面に鋸歯文が巡り、対角線上に2個1対の円孔。下端は凸帯剥落の可能性あり	㉞淡灰白 ㉞淡黄灰	微～細砂
48	〃	—	33.2	—	裾部外面ハケ後甍ミガキ、内面寛ケズリ、円孔は上下2段に5ヶ所、裾部外面下半沈線4条と鋸歯文、筒部外面沈線16条	㉞淡黄褐 ㉞明赤褐	細砂
49	蓋形土器	—	—	—	内外面ナデ	淡乳黄褐	微砂◎
50	裂塩土器	—	5.9	—	体部外面寛ケズリ、他はナデ・押圧	淡赤褐～黄褐	細砂◎
51	小形蓋形土器	—	—	—	甍ミガキ、内外面丹塗り、胎土に角閃石、金雲母を含む	茶褐	微砂、角閃石他

図335 土壌-23 出土遺物(5) 縮尺 1/4

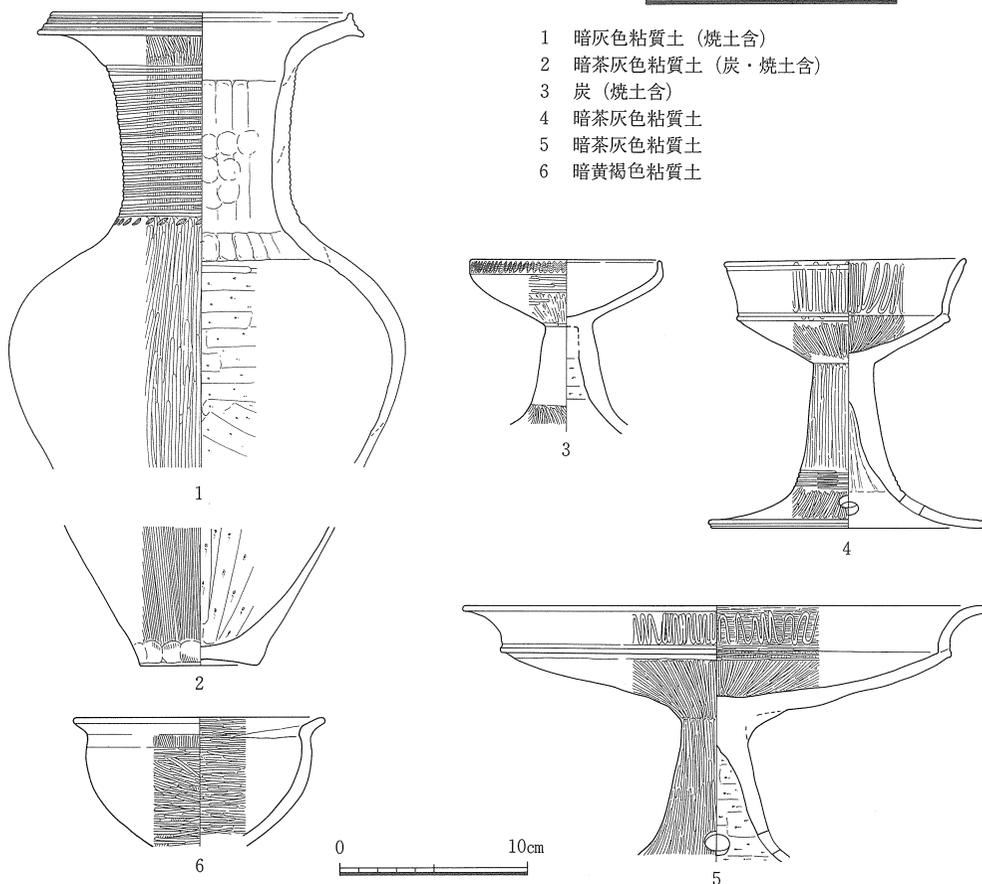
II 地点の調査

土壌-35 (図336)

本土壌はBG19区東端で検出した。東側は排水用側溝および調査区外のため未確認であり、北側は土壌4および66によって破壊されている。そのため本土壌の平面形の詳細は不明であるが、中規模の円形もしくは楕円形をなすものと推測される。掘り方底面形はわずかに凹むがほぼ平坦であり、壁は比較的ゆる



- 1 暗灰色粘質土 (焼土含)
- 2 暗茶灰色粘質土 (炭・焼土含)
- 3 炭 (焼土含)
- 4 暗茶灰色粘質土
- 5 暗茶灰色粘質土
- 6 暗黄褐色粘質土



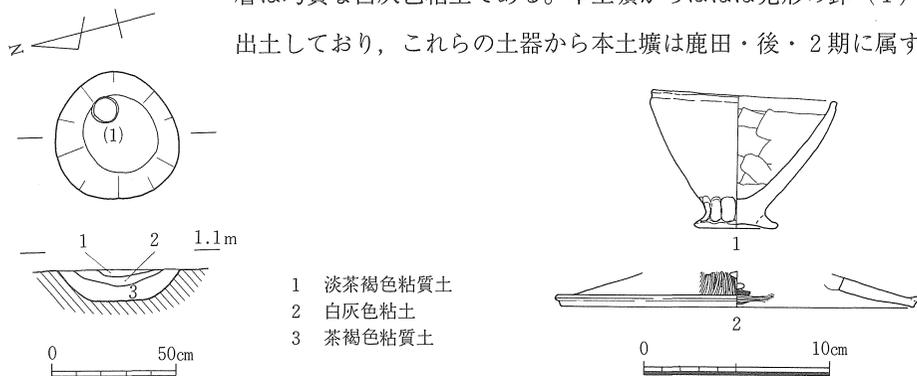
遺物番号	器種	法量 (cm)			形態・手法的特徴ほか	色調	胎土
		口径	底径	器高			
1	壺形土器	16.2	—	—	沈線25~27条, 列点文がめぐる, 口縁部外面ハケ後施ミガキ	淡灰白~黒灰	細砂
2	甕形土器	—	6.5	—	底部外面施ケズリ後ナデ	(内)淡灰白の淡灰褐	微~細砂
3	高杯形土器	10.2	—	—	杯部内面磨減で不明, 口縁部5~6条の波状文	淡乳黄褐	細砂
4	〃	12.9	14.7	14.2	円孔は5個の可能性あり, 口縁部の施ミガキは波状, 黒斑	明褐~淡黄灰	微砂
5	〃	27.8	—	—	口縁部の施ミガキは波状 (内面は下に横位のミガキ)	淡黄灰褐	微~細砂
6	鉢形土器	13.5	—	—	口縁部外面横ナデ, 頸部外面ハケ後横ナデ, 他は施ミガキ	淡灰褐~淡赤褐	〃〃〃, 雲母

図336 土壌-35 出土遺物 縮尺 1/30, 1/4

やかに立ち上っている。土壌内の埋土は6層に分かれる。5・6層堆積後土壌全面に厚さ1～8cm前後の炭層（3層）が堆積している。さらに炭層上面～2層にかけては大量の土器片が出土している。本土壌は出土土器から鹿田・後・2期に属する。

土壌-43 (図337)

本土壌はB H 19区の中央部に位置する。平面形は径約50cmの円形である。底は平らで、壁はゆるやかに立ち上がる。検出面からの深さは約12cmである。埋土は3層に分かれ、このうち2層は均質な白灰色粘土である。本土壌からはほぼ完形の鉢（1）などが出土しており、これらの土器から本土壌は鹿田・後・2期に属する。



遺物番号	器種	法量 (cm)			形態・手法の特徴ほか	色調	胎土
		口径	底径	器高			
1	鉢形土器	9.9	4.4	7.2	外面丁寧なナデ, 内面工具使用ナデ, 黒斑	黄褐	細砂
2	高杯形土器	-	18.9	-	外面ハケ後麓ミガキ, 内面ハケ	淡黄褐	微砂

図337 土壌-43 出土遺物 縮尺 1/30, 1/4

土壌-66 (図338・339)

本土壌はB G 19区東端で検出した。東側は排水用の側溝にかかり、未調査である。本土壌は主として断面観察によって確認し、土壌4および42を切っているとみられる。その平面形は不明確であるが、径50～56cm前後の正円形をなすものと推定できる。掘り方底面は丸く、壁もゆるやかに立ち上がっている。検出面の標高は約93cmであるが、本来の掘り込み面はさらに上位に存在するものと考えられる。検出面から最下底までの深さは約20cmを測る。

土壌内の埋土は上下2層に分かれる。ともに類似した茶灰色粘質土であるが、2層には多量の炭・焼土が含まれている。大きな堆積時期の差はないと推定される。また両層からは一個体分の鹿田・後・2a期に属する大形壺（1）の破片が出土している。本来は完形のまま土壌内に据えられていたものと推定され、本遺構は壺棺であった可能性が強い。

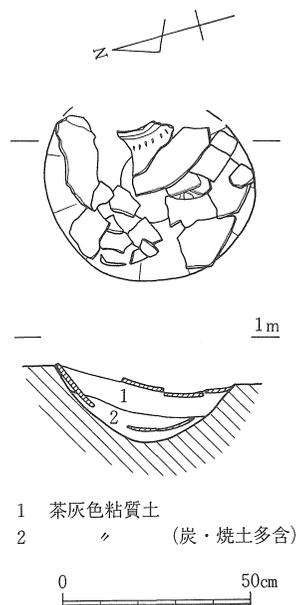
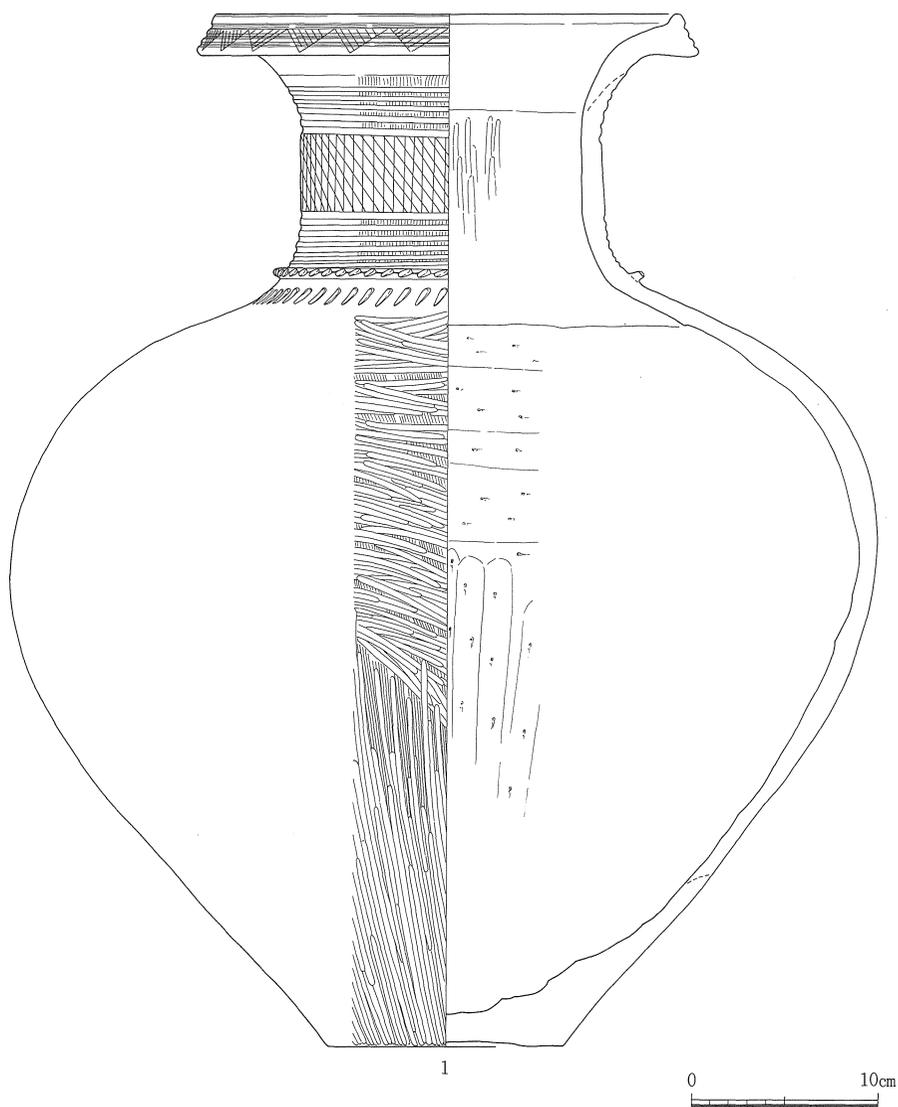


図338 土壌-66 縮尺 1/20

II 地点の調査



遺物 番号	器 種	法 量 (cm)			形態・手法の特徴ほか	色 調	胎 土
		口径	底径	器高			
1	壺形土器	24.9	12.4	54.5	体部外面ハケ後寛ミガキ, 体部内面下半剥落で不明, 底部外面寛ミガキ, 頭部沈線は上に5条・下に6条, 刻み目貼付け凸帯, 列点文めぐる, 黒斑	淡黄褐	微砂

図339 土壌-66 出土遺物 縮尺 1/4

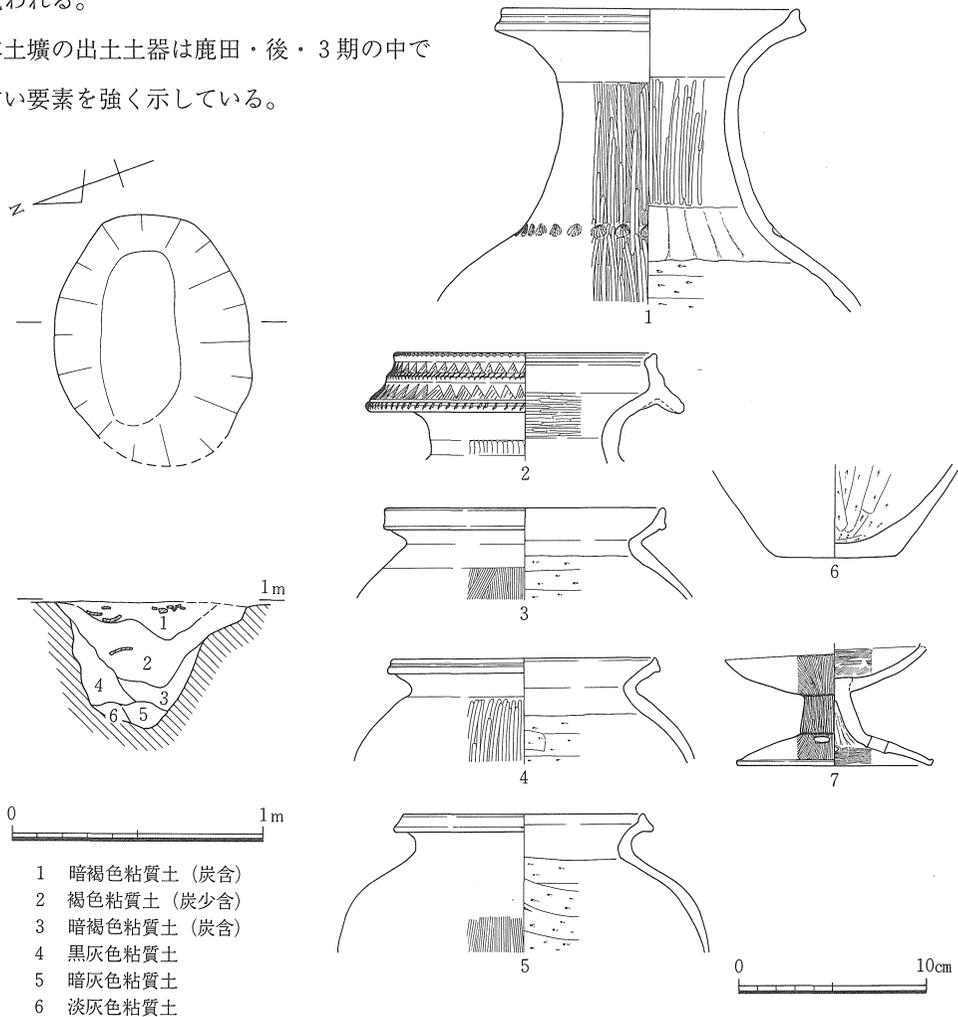
土壌-80 (図340)

本土壌はB H 20区のほぼ中央部に位置する。西端部が一部破壊されているが、その平面形は東西方向に長軸をもつ、楕円形を呈するものと推定される。その長径は推定で約100cm, 短径は78cm前後を測る。掘り方底面は凹凸があり、水平でなく、壁は下半部は垂直に近い傾斜で立

ち上がり、上半部でやや開き気味となる。検出面の標高は1 m前後であり、検出面から最下底までの深さは50cm前後である。

土壌内の埋土は6層に分かれる。6層は地山土をブロック状に含んでおり、土壌掘削当初の埋土であろう。4・5層は土器・炭をほとんど含まない。1～3層は土器および炭を含み、特に1層から多量の土器片が出土しており、土壌埋没の最終段階で大量の土器が投棄されたことが窺われる。

本土壌の出土土器は鹿田・後・3期の中でも古い要素を強く示している。



- 1 暗褐色粘質土 (炭含)
- 2 褐色粘質土 (炭少含)
- 3 暗褐色粘質土 (炭含)
- 4 黒灰色粘質土
- 5 暗灰色粘質土
- 6 淡灰色粘質土

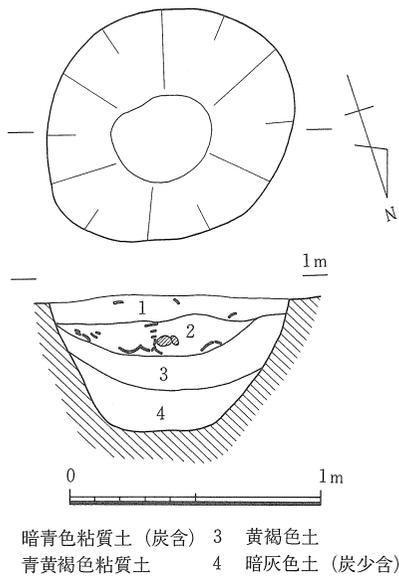
遺物 番号	器 種	法 量 (cm)			形態・手法の特徴ほか	色 調	胎 土
		口径	底径	器高			
1	壺形土器	15.9	—	—	体部外面ハケ後篋ミガキ、頸部と体部の境に貝殻任痕文	淡黄褐	細砂
2	〃	13.9	—	—	口縁部内外面丹塗りの可能性あり、口縁部に鋸齒文と刻み目	明赤褐～明黄褐	〃
3	甕形土器	15.0	—	—	口縁部横ナデ	内明黄褐/外淡黄褐	微砂
4	〃	14.1	—	—	口縁部凹線1条、外面篋ミガキ	淡黄白	細砂
5	〃	13.0	—	—	肩部外面磨減で不明、外面下半ハケ	黄褐	微～細砂◎
6	〃	—	6.6	—	体部外面磨減で不明、底部外面篋ケズリ後ナデ	内黒灰/外灰褐	細砂
7	高杯形土器	—	10.4	—	円孔は4個、外面篋ミガキ	淡黄灰～黄褐	微砂◎、水漉粘土

図340 土壌-80, 出土遺物 縮尺 1/30, 1/4

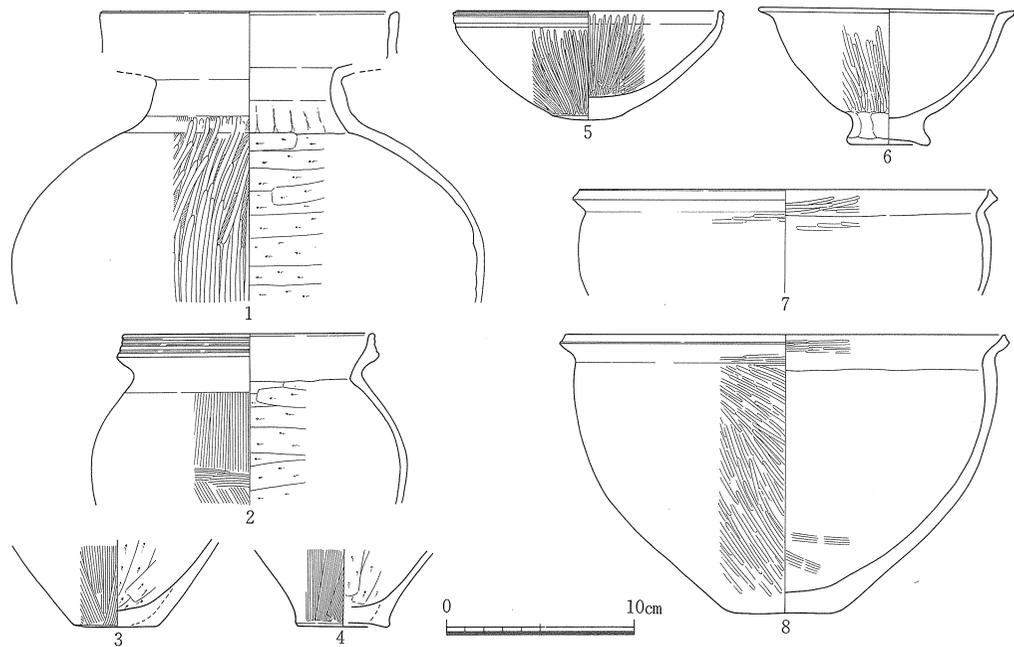
II 地点の調査

土壙—84 (図341・342)

本土壙はBG19区のほぼ中央に位置する。平面形は東西径約100cm、南北径約90cmのほぼ円形を呈している。掘り方底面はほぼ平坦であり、壁は比較的急な傾斜で立ち上がっている。検出面の標高は94cm前後であり、検出面から底までの深さは54cmを測る。遺構内の埋土は4層に分かれる。このうち3・4層中には遺物は乏しい。一方1・2層中からは比較的多量の土器が出土しており、特に2層中からは大量の礫とともにまとまって検出されており、土壙の下半が埋没した段階で多量の土器が投棄されたことが窺われる。本土壙は出土土器から鹿田・後・3期に属する。

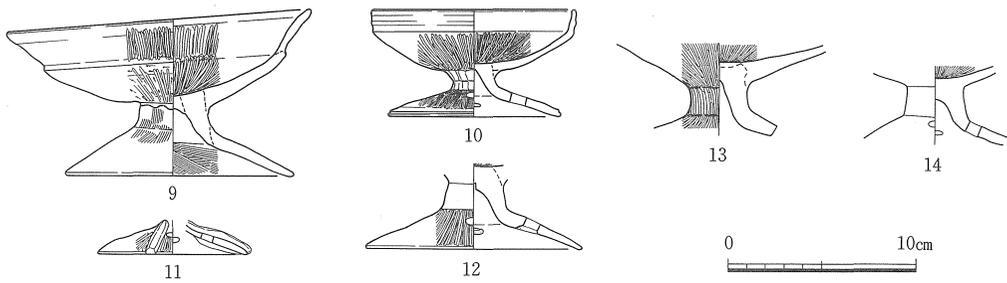


1 暗青色粘質土 (炭含) 3 黄褐色土
2 青黄褐色粘質土 4 暗灰色土 (炭少含)



遺物番号	器種	法量 (cm)			形態・手法の特徴ほか	色調	胎土
		口径	底径	器高			
1	壺形土器	16.0	—	—	外面～頸部内面丹塗り、胎土に角閃石・金雲母多含、搬入品	茶褐	微～細砂◎
2	甕形土器	13.5	—	—	外面煤付着	明茶褐	微砂
3	〃	—	4.6	—	外面ハケ・煤付着	内黄褐外黒褐	〃
4	〃	—	5.0	—	底部外面ハケ後ナデ、外面煤付着・剥落あり	淡灰褐	〃
5	鉢形土器	14.2	3.7	5.8	〃 ナデ、口縁部沈線3条、内面ハケ後艶ミガキ、外面艶ミガキ	明赤褐	〃
6	台付鉢形土器	13.7	4.5	7.3	内面磨減で不明、脚台部押圧・ナデ	明黄褐	〃◎、水澆粘土
7	鉢形土器	22.0	—	—	艶ミガキ痕若干残る	淡黄褐	〃〃、〃
8	〃	23.5	6.0	14.7	底部外面丁寧なナデ、内面ハケ後丁寧なナデ、外面艶ミガキ	淡乳灰～淡乳黄白	〃◎、〃

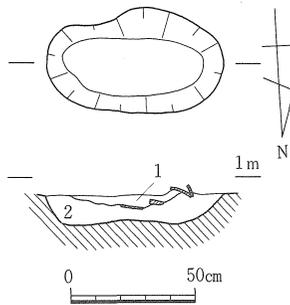
図341 土壙—84 出土遺物(1) 縮尺 1/30, 1/4



遺物 番号	器 種	法 量 (cm)			形態・手法の特徴ほか	色 調	胎 土
		口径	底径	器高			
9	高杯形土器	16.2	12.2	8.8	杯受部匏ケズリ後匏ミガキ, 脚裾部外面磨減で不明, 黒斑, 透し孔は無し	淡黄褐~淡黄白	微砂④, 精良
10	〃	10.9	9.2	5.6	口縁部・脚部内面ナデ, 脚裾部外面・杯受部内面ハケ後匏ミガキ	赤褐	〃〃, 〃
11	〃	-	8.0	-	補修の粘土帯あり, 内面ナデ, 外面匏ミガキ	内赤褐/外黄褐	〃〃
12	〃	-	11.5	-	脚部内面・脚柱部外面磨減で不明, 脚裾部外面ハケ後匏ミガキ	明赤褐	微~細砂④
13	〃	-	-	-	脚部内面ナデ, 他は匏ミガキ	赤褐	微砂④, 水漉粘土
14	〃	-	-	-	杯部内面匏ミガキ, 他は磨減で不明	明黄褐	〃〃, 〃

図342 土壙-84 出土遺物(2) 縮尺 1/4

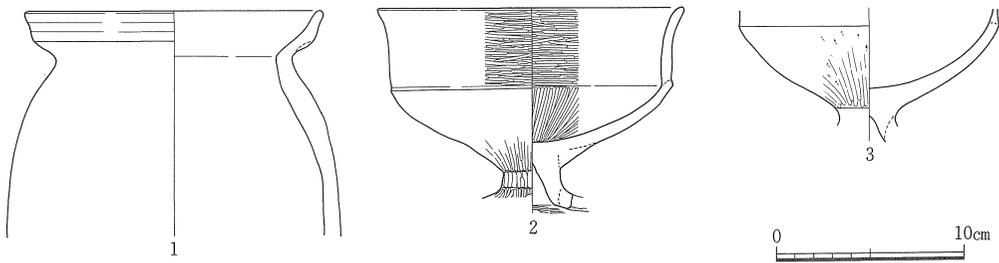
土壙-101 (図343)



- 1 暗茶褐色粘質土 (炭含)
- 2 茶褐色粘質土

本土壙はB H19区中央やや東南寄りに位置する。平面形は長径約70cm, 短径約42cmの不整の楕円形を呈する。その長軸はほぼ東西方向を向いている。底面は凹凸があり, 壁は若干開き気味に立ち上がっている。検出面の標高は95cm前後であるが, 本来の掘り込み面はより上位に存在するものと推定される。検出面から最下底までの標高は11cmを測る。

遺構内の埋土は上・下2層に分かれる。本土壙では, 2層上面から, 甕および高杯の大形の破片が出土している。本土壙は出土土器から鹿田・後・4期に属する。



遺物 番号	器 種	法 量 (cm)			形態・手法の特徴ほか	色 調	胎 土
		口径	底径	器高			
1	甕形土器	15.9	-	-	磨減で不明, 黒斑	内黄灰/外黄褐	微砂
2	高杯形土器	16.3	-	-	杯受部外面磨減で不明, 他は匏ミガキ	赤褐	微砂④, 水漉粘土
3	〃	-	-	-	杯受部外面匏ケズリ後匏ミガキ, 他は磨減で不鮮明	〃	〃〃, 〃

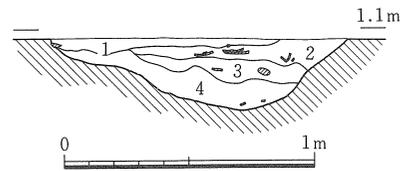
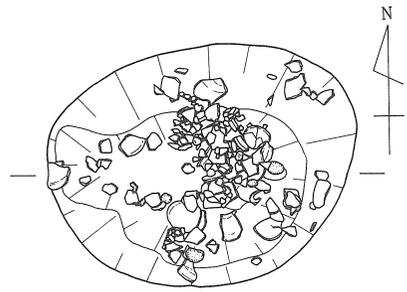
図343 土壙-101, 出土遺物 縮尺 1/30, 1/4

II 地点の調査

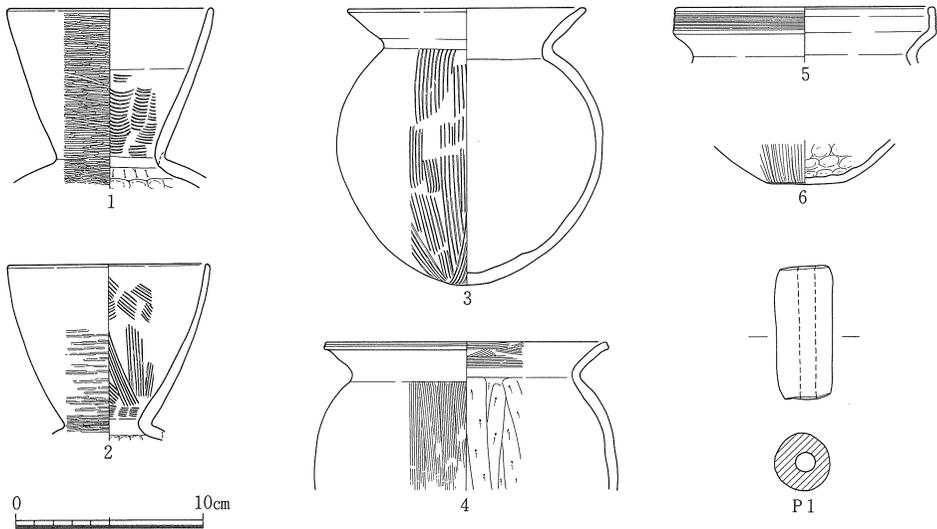
土壌-102 (図344・345)

本土壌はB H21区の北西部に位置する。平面形は長径約125cm, 短径約95cmの楕円形を呈する。その長軸はほぼ東西方向を向いている。掘り方底面は浅く凹み, 壁は途中でより開きながら, ゆるやかに立ち上がっている。検出面の標高は約106cm, 検出面から最下底面までの深さは, 約28cmを測る。

土壌内の埋土は4層に分かれる。最大の4層はマンガンの沈着が著しいが, 遺物は少ない。これに対し, 1~3層は土器片を大量に含み, 特に1層は, 大量の焼土・灰・炭を含んでいる。本土壌は掘削後一部埋没してから, 大量の土器が投棄されたものと推定される。本土壌は出土土器から, 鹿田・古・1期に属する。



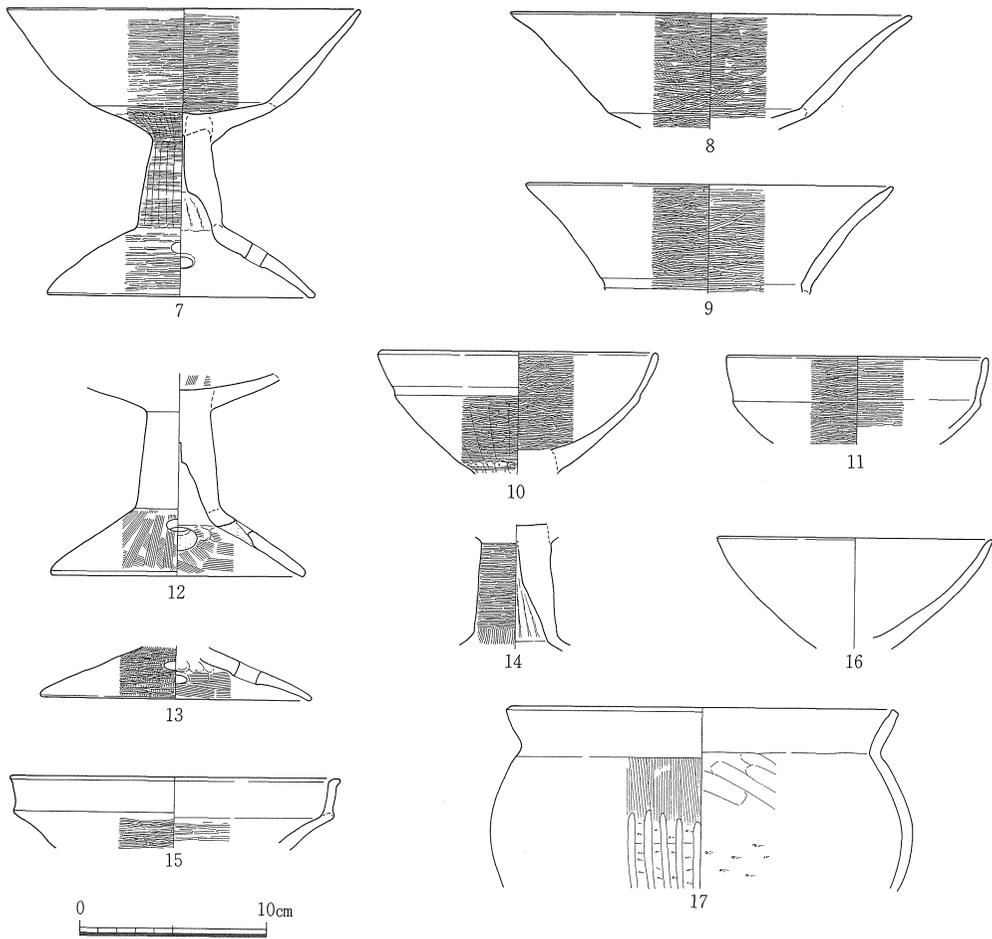
- 1 暗褐色粘質土 (焼土多含, 炭・灰含)
- 2 黄褐色粘質土 (炭・焼土含)
- 3 暗灰色粘質土
- 4 暗茶褐色粘質土



遺物番号	器種	法量 (cm)			形態・手法の特徴ほか	色調	胎土
		口径	底径	器高			
1	直口壺形土器	11.0	-	-	体部内面押圧, 口縁部内面上半横ナデ・下半ハケ, 外面鈍ミガキ	明黄褐	微砂②, 水澆粘土
2	〃	10.8	-	-	〃, 〃ハケ, 外面鈍ミガキ	明赤褐	〃, 〃
3	甕形土器	12.6	-	14.7	内面・口縁部ナデ, 体部外面幅広いハケ, 黒斑	④淡灰褐⑤明黄褐	細~粗砂
4	〃	14.9	-	-	外面細いハケ, 内面縦位の寛ケズリ, 外面煤付着	④明茶褐⑤淡黄灰	細砂
5	〃	13.9	-	-	口縁端面飾描沈線7条	暗黄褐	〃
6	〃	-	4.0	-	底部外面平行鈍ミガキ	④暗褐 ⑤黒	〃

遺物番号	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	形態・手法の特徴ほか	色調	胎土
P 1	土 錘	7.0	3.0	3.0	74	全体ナデ	暗灰褐	微砂②, 精良

図344 土壌-102 出土遺物(1) 縮尺 1/30, 1/4



遺物 番号	器 種	法 量 (cm)			形 態・手 法 の 特 徴 ほ か	色 調	胎 土
		口径	底径	器高			
7	高 杯 形 土 器	18.9	14.3	15.2	脚柱部外面匏ミガキは不鮮明，杯受部外面匏ケズリ後匏ミガキ	淡乳黄灰白	微砂④，水澆粘土
8	〃	21.3	—	—	口縁部内外面ハケ後匏ミガキ	赤褐	〃 〃 〃
9	〃	19.6	—	—	内外面匏ミガキ	黄褐—赤褐	〃 〃 〃
10	〃	15.0	—	—	口縁部外面強い横ナデ	淡赤褐	〃 ④，精良
11	〃	14.0	—	—	匏ミガキ	黄褐	〃 ④，水澆粘土
12	〃	—	13.5	—	脚柱部外面・杯部外面磨減で不明，脚柱部ハケ	淡乳黄白—黄灰	〃 〃 〃
13	〃	—	14.5	—	外面ハケ後匏ミガキ	淡乳黄褐	〃 〃 〃
14	〃	—	—	—	内面ナデ・しほり目残る	明赤褐	〃 〃 〃
15	〃	17.6	—	—	口縁部強い横ナデ	〃	〃 〃 〃
16	鉢 形 土 器	14.6	—	—	内外面磨減で不明	内明赤褐④暗赤褐	〃 〃 〃
17	〃	20.4	—	—	体部下半匏ケズリ後ナデ上げ・内面匏ケズリ後ナデ	淡黄褐	微—細砂

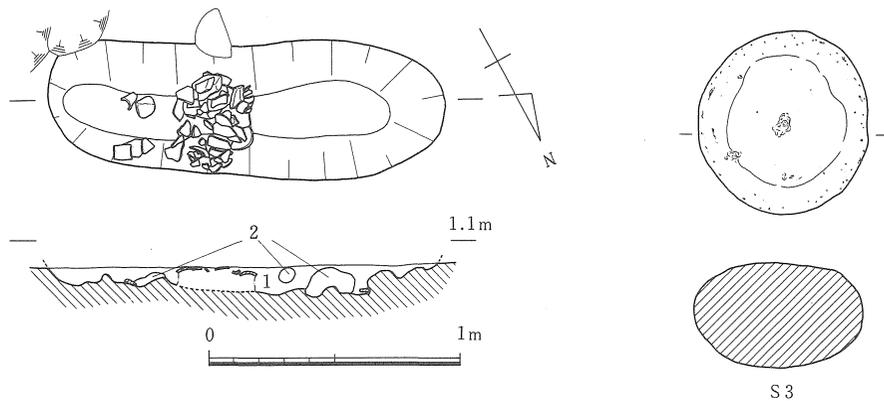
図345 土壌-102 出土遺物(2) 縮尺 1/4

土壌-108 (図346, 図版43-2)

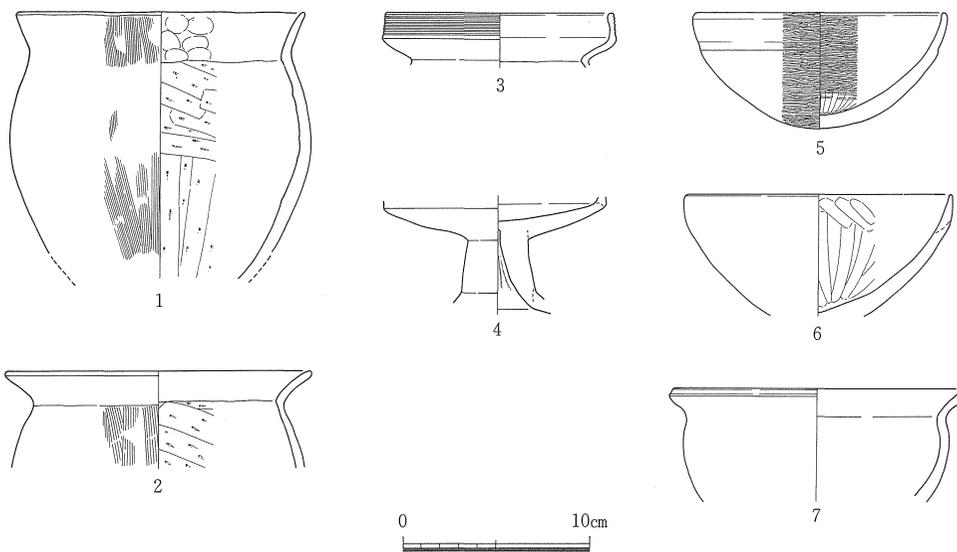
本土壌はBH21区中央に位置する。掘り方平面形は長径が約160cm，短径が約58cmの長楕円形を呈し，長軸は北西—南東方向を向いている。掘り方底面は小さな凹凸があり，壁の傾斜はゆるやかである。検出面の標高は1m前後であるが，本来の掘り込み面はより上位に存在する

II 地点の調査

とみられる。検出面から最下底までの深さは約11cmを測る。本土壙の中央やや東南寄り付近から土器がまとめて出土している。本土壙は出土土器から鹿田・古・1期に属する。(栄)



- 1 暗褐色微砂粘土 (炭・焼土多含)
- 2 黄褐色微砂土 (炭多含)



遺物番号	器種	法量 (cm)			形態・手法の特徴ほか	色調	胎土
		口径	底径	器高			
1	甕形土器	15.4	-	-	口縁部内面押圧・外面押圧後ハケ、外面煤附着・剥落	内黒褐外淡黄褐	細砂◎, 細礫◎
2	〃	16.4	-	-	体部外面ハケ後ナデ	淡黄褐	微砂
3	〃	12.3	-	-	口縁端面櫛描沈線7条、外面煤附着	内灰褐外暗褐	微-細砂
4	高杯形土器	-	-	-	磨減で内外面不明	内淡黄褐外淡乳黄	微砂◎, 精良
5	鉢形土器	13.4	4.2	6.1	内外面窠ミガキ、底部内面幅広の放射状籠ミガキ	赤褐~明黄褐	◎, 水漉粘土
6	〃	14.3	-	-	外面丁寧なナデ、内外面工具使用ナデ、黒斑	黄灰	〃, 〃
7	〃	15.4	-	-	内外面磨減で不明	明黄褐	〃◎, 精良

遺物番号	器種	現存長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	材質	特徴
S3	磨石	7.4	6.7	4.1	280.0	花崗斑岩	側面部磨面

図346 土壙-108, 出土遺物 縮尺 1/30, 1/4・1/3(S3)

(2) 古墳時代後期の遺構・遺物

古墳時代後期に属する遺構は本地点においては極めて乏しい。該期の検出遺構は竪穴住居1棟、土壙1基が検出されたのみであり、いずれも調査区の東北部にあたるBG19区に位置している(附図9-6)。これらの遺構の検出面の標高は約1.4m前後を測り、弥生～古墳時代初頭の遺構の検出面とは数10cm前後の差があるのに対し、古代・中世の遺構検出面とは大きな差がなく、本時期の遺構は後代の遺構によって破壊された可能性も考えられる。

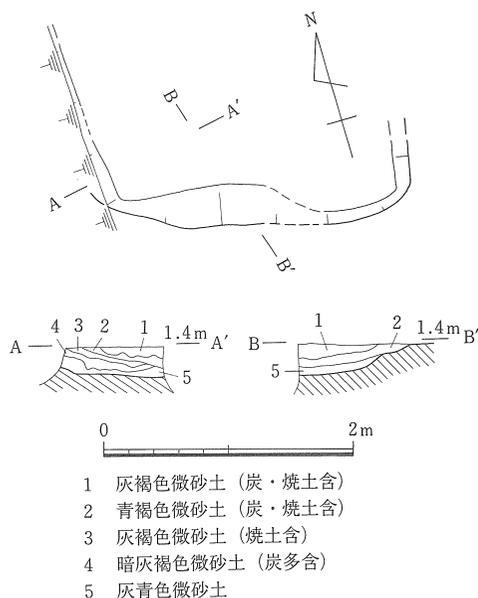
1棟確認された竪穴住居は後代の遺構に破壊されており、南端部を確認したのみである。壁体溝・柱穴・炉などは検出されていないが、その平面形は該期に一般的な方形プランをとるものと推定される。本竪穴住居からの出土遺物には通常の須恵器・土師器のほかに製塩土器も含まれている。

竪穴住居の東北に隣接して位置すると推定される土壙119は側溝によって大部分が既に破壊されており、西南部を検出したのみであった。残存部からはその平面形は円形をなすものと推定され、検出面からの深さは約14cmを測る。本土壙からの出土遺物は乏しく、その詳細な性格も不明瞭である。

a. 竪穴住居

竪穴住居-2 (図347・348・, 図版44-1)

本竪穴住居はBG19区南側で検出した。本住居は西端および中央部がそれぞれ南北に走る後代の溝によって破壊されており、さらに北側部分は中世の井戸および近・現代の攪乱によって



削平されている。そのため確認し得たのは住居の南側の一部のみであった。現状からは、本竪穴住居は、南北長は不明だが東西長が約2.5mの隅丸方形プランをとるものと推定される。掘り方断面形をみると、壁の立ち上がりは明瞭ではなく、その傾斜はかなり緩やかである。また、底面は比較的平坦であり、本住居の床面に相当すると考えられる。検出面の標高は140cm前後で、検出面から底面までの深さは約24cmを測る。本住居には壁体溝の存在は認められず、また柱穴・炉址等も検出範囲では確認されなかった。

住居内の埋土は5層に分かれる。このうち上位の1～4層は、炭化物・焼土あるいは土器片など

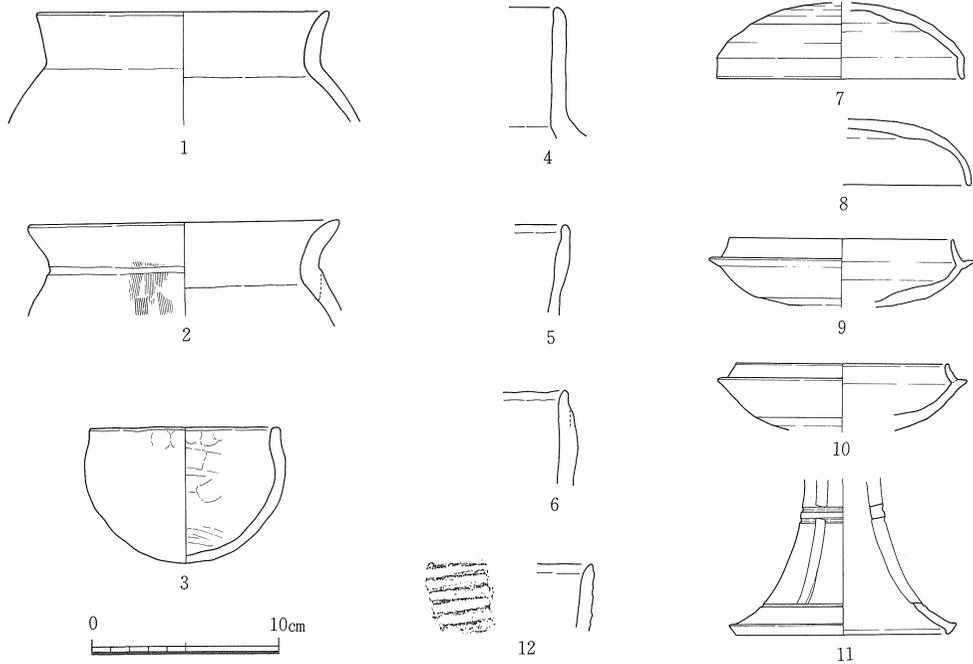
図347 竪穴住居-2 縮尺 1/60

II 地点の調査

を比較的含んだ灰褐色～青褐色微砂土であり、これらはいずれも住居廃絶後の周囲からの流入土と考えられる。これに対して、最下の5層は炭化物・焼土を含まない灰青色微砂土であり、その上面には若干の凹凸があるが、本層は貼り床である可能性も考えられる。

本竪穴住居では、1～4層の埋土中から小破片ではあるが比較的まとまって遺物が検出されている。出土遺物には、土師器甕（1・2・4～6）、同鉢（3）、須恵器杯（7～10）、同高杯（11）、製塩土器（12）などがある。

本住居は、その埋土出土遺物から古墳時代後期には廃絶されたものとみられ、その使用時期も該期を大きくは遡らないであろう。 (栄)



遺物番号	器種	法量 (cm)			形態・手法の特徴ほか	色調	胎土
		口径	底径	器高			
1	土師器甕	15.6	—	—	内面横ナデ	㊦暗褐㊧淡赤白	粗砂
2	〃	16.6	—	—	内面ナデ, 外面ハケ	㊦暗褐㊧淡黄褐	細砂
3	〃鉢	10.2	—	7.2	内外面押圧・ナデ	淡赤白	〃㊳
4	〃甕	—	—	—	ナデ	(内)暗褐(外)褐	微砂
5	〃	—	—	—	〃	㊦黄褐㊧淡乳褐	粗砂
6	〃	—	—	—	〃	赤褐	細砂
7	須恵器杯蓋	13.3	—	4.0	天井部外面蹴ケズリ, ロクロ回転㊴	灰	〃㊵
8	〃	—	—	—	〃〃〃・内面仕上げナデ	㊦黒紫灰㊧黒灰	〃〃
9	〃杯身	12.0	—	—	底部外面蹴ケズリ, ロクロ回転㊴	淡灰	微～細砂
10	〃	11.4	—	—	〃〃〃, 〃〃	暗灰	細砂
11	〃高杯	—	11.3	—	2段の長方形透し孔が3ヶ所	黒灰	〃㊵
12	製塩土器	—	—	—	内面ナデ, 外面タタキ, 2次焼成痕あり	暗灰	〃

図348 竪穴住居-2 出土遺物 縮尺 1/4

(3) 古代の遺構・遺物

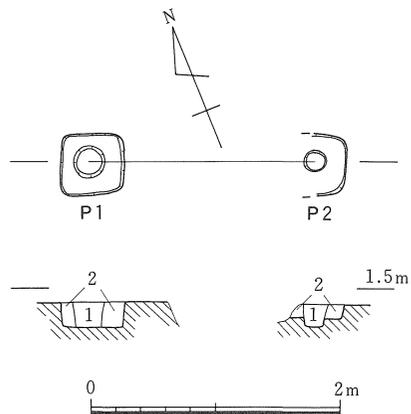
本時期の遺構には、柱穴列1列、井戸1基、溝4条、土壇1基のほか、少数の柱穴がある(附図9-6)。これらの遺構間には切合い関係が存在する例もあるが、全体に出土遺物が乏しく、遺構群の詳細な時期は不明である。

柱穴列は本来、掘立柱建物の一部を構成するものとみられるが、1間分のみを検出であり、詳細は不明である。井戸はBH20区でその北半部を検出した井筒をもつ大形の井戸である。この井戸からは、木簡や須恵器杯蓋転用硯、墨書土器が出土しており、該期においては、隔絶した規模、構造、および出土遺物を有する井戸であり注目される。溝は5条検出したが、いずれも小範囲の検出であり、その流走方向は不明瞭であるが、溝7・9・10・14はグリッドの横軸にほぼ平行し、溝12は縦軸にほぼ平行するとみられる。これらの溝は、現在の本地区周辺の地割に対応する可能性が認められ、古代において、本地区周辺にも条里地割が施行された可能性を示すものとして注目される。土壇は1基検出したが、遺物は乏しい。また柱穴は先の柱穴列を除いて2基検出したが、詳細が不明である。本時期の遺構の検出面は、中世とほぼ同一であり。該期の包含層も後世に削平されたものと推定される。

a. 柱 穴 列

柱穴列-1 (図349)

本柱穴列はBH21区北側に位置する。柱穴を2基確認したのみであるが、両者ともプランおよび埋土が類似するため、柱穴列と判断した。これらの柱穴は、P2は西側部分が削平されているが、いずれも1辺50cm前後の正方形プランをなすものと推定され、直径18~24cmの柱痕跡が確認された。検出面から掘り方底面までの深さは、P1で約20cm、P2で約10cmを測り、柱穴底面の標高には差があるが、柱痕跡の底面の高さはほぼ一致している。柱痕跡は、ともに暗灰黄色微砂粘質土であり、柱穴掘り方の埋土は灰黄色微砂粘質土である。柱間距離はほぼ180cmを測り、その方位は、W-21°-Eである。なお、先に公表した概報においては、さらに東側にもう1基の柱穴の存在を指摘していたが、検出レベルが大きく異なることから、その柱穴の存在については保留しておきたい。本柱穴列は、本来掘立柱を構成していたものと推定され、その掘り方平面形から古代に属するものと推定される。



- 1 暗灰黄色微砂粘質土 (炭・焼土含)
- 2 灰黄色微砂粘質土 (炭・焼土少含)

図349 柱穴列-1 縮尺 1/60

II 地点の調査

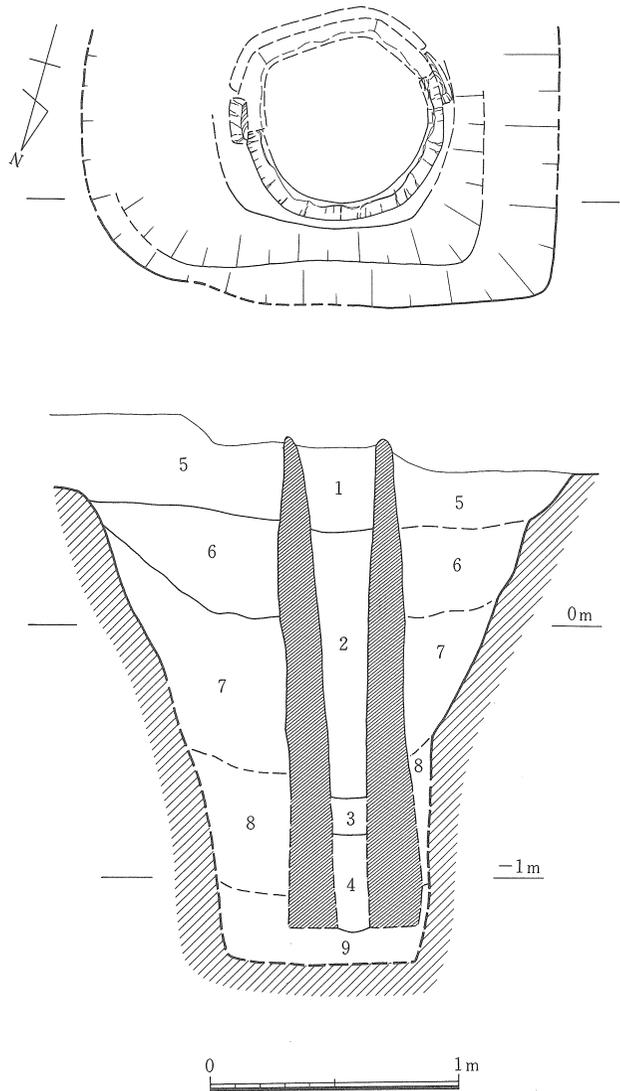
b. 井戸

井戸-4 (図350~353, 図版44-2・45-1・68・84)

本井戸はB H 20区南端部において、その北半部を検出した。南半部は調査範囲外のため未確認である。現状から推定すると、井戸掘り方平面形は東西径が約190cmの方形を呈するものとみられる。掘り方断面をみると、上半部はやや開き気味で、下半部はほぼ垂直で本地区の主要な湧水層である暗灰色砂層中まで、掘り込まれている。検出面の標高は60cm前後であり、検出面から底までの深さは約195cmを測り、底の標高は-135cm前後である。

本井戸の掘り方内には、井筒が据えられていた。井筒はコウヤマキの巨木を半截し、刳り貫いたものを二つに合わせたもので下端付近には方形の穿孔が一对穿たれている。井筒の上面観は不整の多角形状を呈し、径が約80cm、長さは現存部分で約170cm前後である。この井筒の組合せ部にはそれぞれ外側に幅20~30cm内外の板材がそえられており、さらに南側の井筒の外側には幅約82cm、長さ約164cm、厚さ5cm前後の内湾した板材が密接して据えられていた。

井戸内の埋土は、大きくは井筒内の埋土(1~4層)と井筒の裏



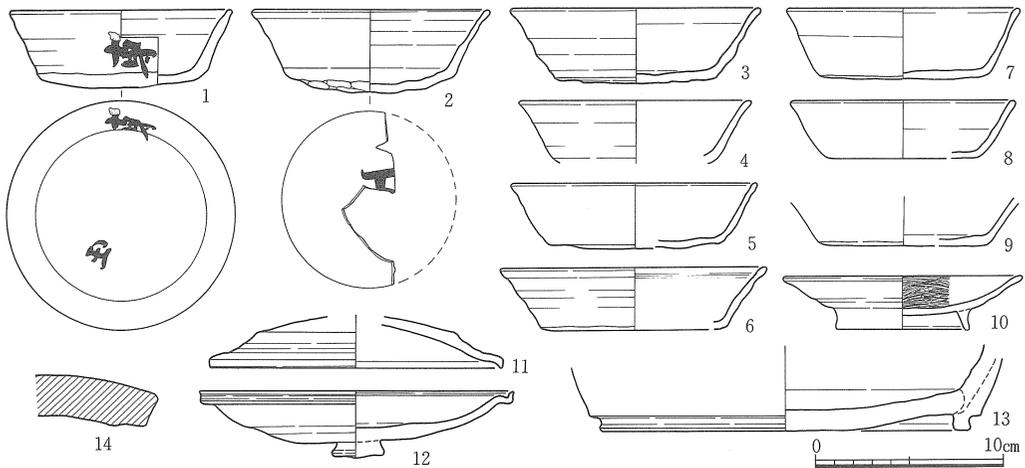
- 1 青灰色粘土
- 2 暗灰色粘土
- 3 暗灰色砂
- 4 暗青灰色シルト
- 5 暗茶褐色微砂土 (炭多含)
- 6 暗褐色粘土 (炭多含)
- 7 暗茶褐色粘土
- 8 暗褐色粘土
- 9 暗灰色砂

図350 井戸-4 縮尺 1/30

ごめ土（5～9層）に分かれる。井筒内埋土のうち、1層は遺物をほとんど含まない粘土層である。2層も同じく粘土層であるが、若干の土器片のほか、斎串や横櫛等の木製品を始めとする有機物が顕著である。3層は砂層であり、本層中より多量の土器類のほか若干のモモの種子やヒョウタンの果皮が出土している。4層は砂と粘土の薄層状のブロックを含むシルト層で、遺物をほとんど含まない。井筒裏ごめ土は5層に分かれる。5・6層はともに炭および弥生土器片を大量に含んでおり、本井戸掘削時に弥生時代の遺構を破壊したことが窺われる。7・8層は遺物をほとんど含まない粘土層である。9層も遺物をほとんど含まず、本地区の中心的な湧水層である暗灰色砂層が一部掘削された後、そのまま埋め戻されたものと推定される。

本井戸においては、主に井筒内の埋土中から豊富な古代の遺物が出土している。土器は主に3層中から一括して出土しており、中には「専」、「玉」と読める墨書土器や須恵器杯蓋転用硯などがある。また木製品も比較的豊富で、木簡が2片出土している。両者は同一個体とみられ、片面のみに墨書されているが、小片のため判読不能である。

本井戸は出土土器から8世紀後半から9世紀にかけて使用されたとみられる。 (栄)



遺物番号	器種	法量 (cm)			形態・手法の特徴ほか	色調	胎土
		口径	底径	器高			
1	土師器杯	11.8	9.0	4.1	横ナデ、底部押圧、「専」「玉」の墨書あり、炭素吸着	黒褐	微砂・粗砂④
2	〃	12.7	9.0	4.4	〃、底部外面寛キリ後押圧・墨書あり、重ね焼き痕	淡灰～黄灰褐	〃・〃・〃
3	〃	13.4	8.6	4.0	〃、底部外面寛キリ、ロク回転⑤、炭素吸着	内暗黄褐外暗褐	〃・〃・〃
4	〃	12.4	—	—	〃、炭素吸着	暗～黒褐	細砂
5	〃	13.1	9.1	3.4	〃、底部外面寛キリ後ナデ、全面丹塗り	内赤褐外灰褐	〃、雲母⑥
6	〃	14.2	9.9	3.3	〃、底部外面ナデ	赤茶褐	微砂④
7	〃	12.4	9.0	3.7	〃、底部外面寛キリ後ナデ	赤褐	〃
8	〃	12.0	8.0	3.1	〃、底部外面寛キリ、丹少量	淡灰褐	細砂④
9	〃	—	9.0	—	〃、底部外面押圧後ナデ、外面丹塗り	内淡赤褐外黄褐	微砂
10	皿	12.7	7.1	2.9	内面寛ミガキ⑦、外面横ナデ、内面炭素吸着、「黒色土器A類」	内銀黒外淡乳褐	〃⑧
11	須恵器杯蓋	15.7	—	—	横ナデ、天井部外面寛ケズリ後ナデ	暗青灰	〃
12	〃	16.7	—	3.5	〃、内面不定方向のナデ・墨が全面に付着、「転用硯」	内黒青灰外青灰	細砂④、黒色粒子
13	〃	—	19.8	—	〃、高台部に歪み	青灰	〃⑨、白色粒子
14	瓦	—	—	—	内面布目、外面ナデ、端面寛ケズリ、2次焼成痕あり	黒灰	細砂

図351 井戸-4 出土遺物(1) 縮尺 1/4

II 地点の調査

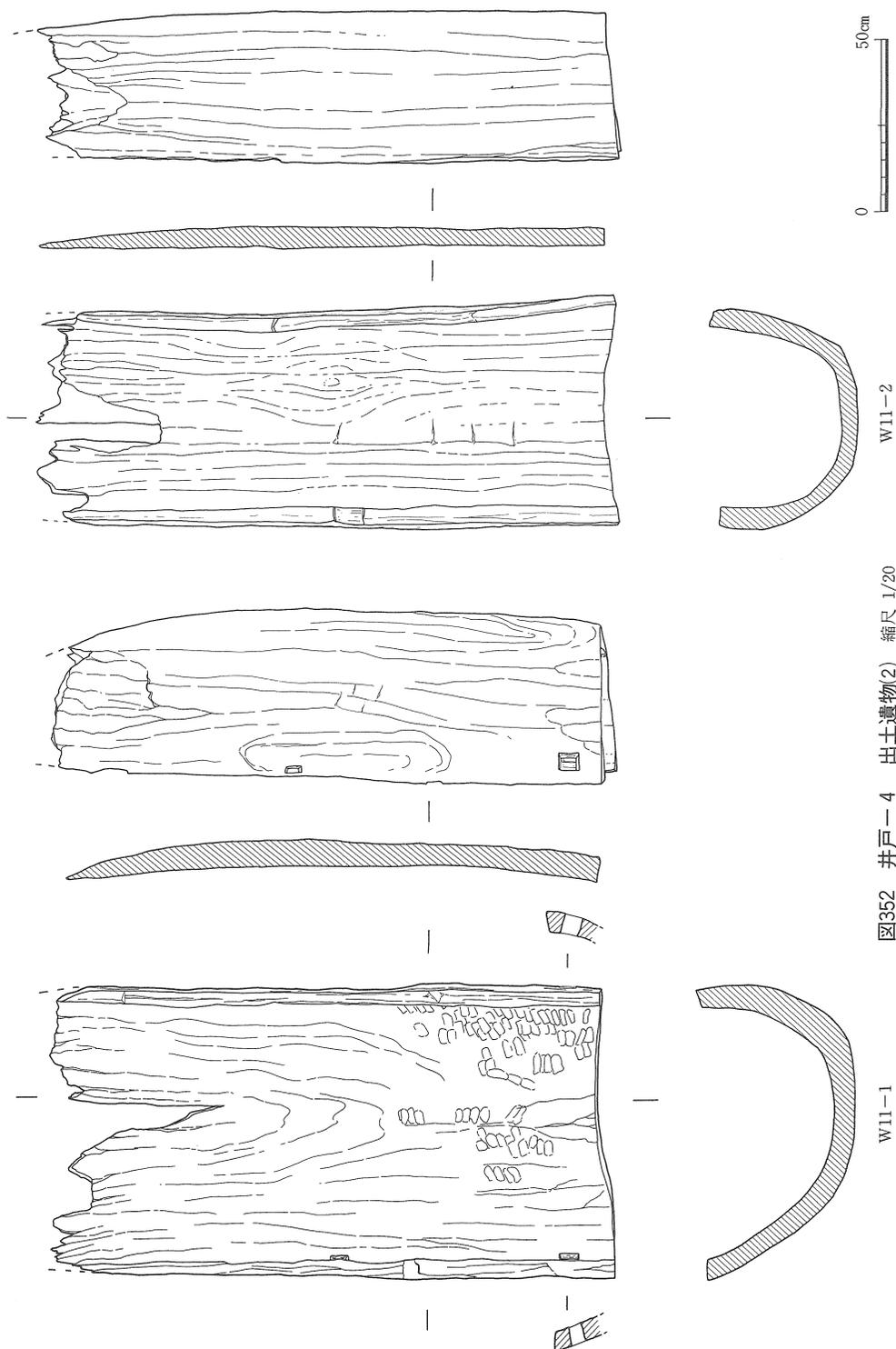
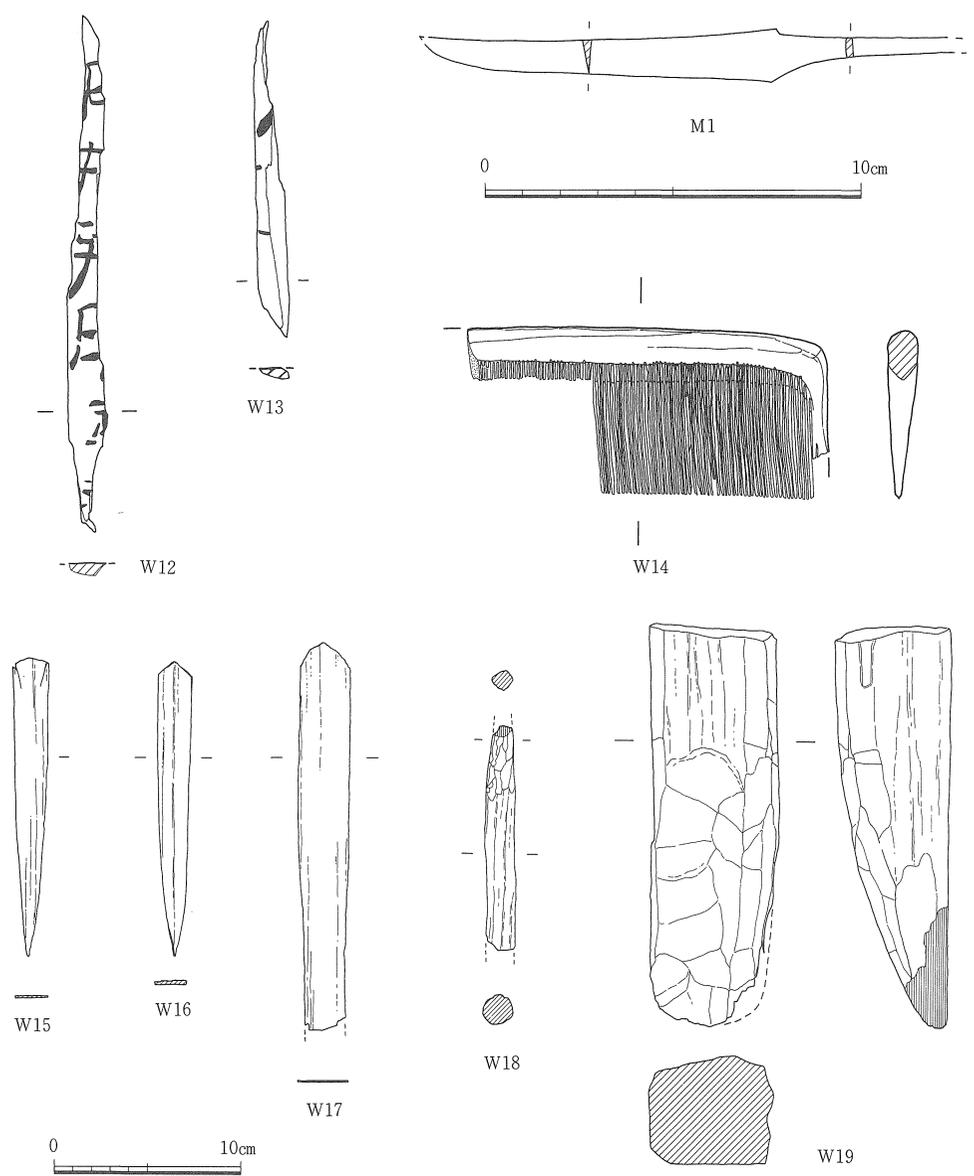


図352 井戸—4 出土遺物(2) 縮尺 1/20

遺物番号	器種	現存長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	樹種	特徴
W11-1	井戸枠	164.0	85.6	9.0	コウヤマキ	削り貫きの井戸枠，外面は木目方向に平行に削り内面は手斧状工具で細かく削る，下端および中位に方形の孔がある，上端は損傷が激しい
ク-2	ク	165.0	64.0	7.0		



遺物番号	器種	現存長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	材質	特徴
M 1	刀子	14.1	1.4	刃部0.3 基部0.3	12	鉄	刃先欠損、基部は一部折損

遺物番号	器種	現存長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	樹種	特徴
W12	木簡	13.6	—	—	ヒノキ	W12とW13は同一個体と考えられる。断片のため判読不能
W13	〃	8.3	—	—	—	—
W14	横櫛	9.5	4.4	0.8	ツゲ	櫛歯長3.5cm幅0.8cm厚さ0.07cm両側から挽き出す、櫛部は磨いて仕上げる
W15	斎串	15.7	1.9	0.1	ヒノキ または ミサシ ノス	薄板の先端を圭頭状に削り出す、頭部両側縁に切込み、柁目材
W16	〃	15.4	1.8	0.2	ヒノキ	薄板の先端を尖がらせ頭部を圭頭状に削り出す、柁目材
W17	〃	20.4	2.6	0.1	ヒノキ	薄板の一部を圭頭状に削り出す、柁目材
W18	尖棒状木製品	12.0	1.6	1.5	—	棒状の先端を削り尖がらせる
W19	杭	21.2	6.7	5.7	—	先端を一面から削り扁平に尖がらせる、井戸枠に付着

図353 井戸一 出土遺物(3) 縮尺 1/2・1/4(M1・W12~14)

(4) 中世・近世の遺構・遺物

本調査区においてはⅣ層掘り下げ段階に中世の遺構として、井戸2、溝6、土壌7、ピット多数を検出した(附図9-7)。既述のように中世の遺構面および包含層はいずれもすでに削平されたものとみられ、その細かい時期差を面的に確認することはできなかった。中世の遺構を一括して、その分布を概観すると、2基の井戸は、調査区の東北部と西側に位置する。出土遺物から井戸5は13世紀前半、井戸6は13世紀後半に属するとみられる。溝は6条検出した。小範囲の調査のため、断定は難しいが、溝の流走方向は、ほぼグリット軸に沿うものと推定される。すなわち溝6・7・11・14はほぼN—15°—E方向に、溝8・19はほぼそれに直交して走っている。中でも溝14は14世紀以降、近代に至るまで利用されたものとみられ、現在、鹿田地区周辺に認められる条里地割に対応する可能性が高い。また溝7は、古代以降中世まで営まれたものとみられ、これらのことから、現在の鹿田地区周辺の条里地割は中世以前まで遡る可能性も想定される。土壌は比較的乏しいが、BH19区の西南部からBH20区の東南部に比較的集中しており、偏在する可能性が認められる。柱穴は、径30cm前後の小形のもが多く、本来、掘立柱建物や柵列を構成していたものとみられる。調査区の北側中央部分に比較的集中し、先の土壌とは、その集中域が異なる可能性が認められる。先の井戸も柱穴の集中範囲の外側に位置しており、中世には遺構によって、その分布の中心域が異なる可能性も認められるが、小範囲の調査であるため確実ではない。

近世の遺構は近代水田土壌の下面(Ⅱ層)において井戸1基・溝5条・土壌1基・柱穴1基を検出した(附図9-7)。いずれも基本的に近世の水田耕作に関連するものと考えられる。井戸7は掘り方が浅く野壺の可能性が高いものである。溝13は中世以来の溝が改修されて継続的に使用されたものである。他の溝はより小規模のものであり、水田への引水溝の可能性がある。土壌は平面形が長方形の特徴的な形態をとるものであるが、その性格は不明である。柱穴は1基のみの検出であり、その詳細は明らかではない。

a. 井 戸

井戸—5 (図354・355, 図版70・84)

本井戸はBG19区中央やや南寄りに位置する。北端の一部分が近代の攪乱によって破壊されているが、その平面形は直径160cm前後の円形を呈している。本井戸は素掘り井戸で、掘り方断面形は、上部がやや開き気味で、以下はほぼ垂直である。底面はほぼ平らであり、本地区の主要な湧水層である砂層まで掘り込まれている。検出面の標高は170cm前後、底面の標高は—80cm前後で、検出面から底までの深さは約250cmを測る。

井戸内埋土は上部堆積層(1～5層)と下部堆積層(6～9層)に大きくは二分される。上

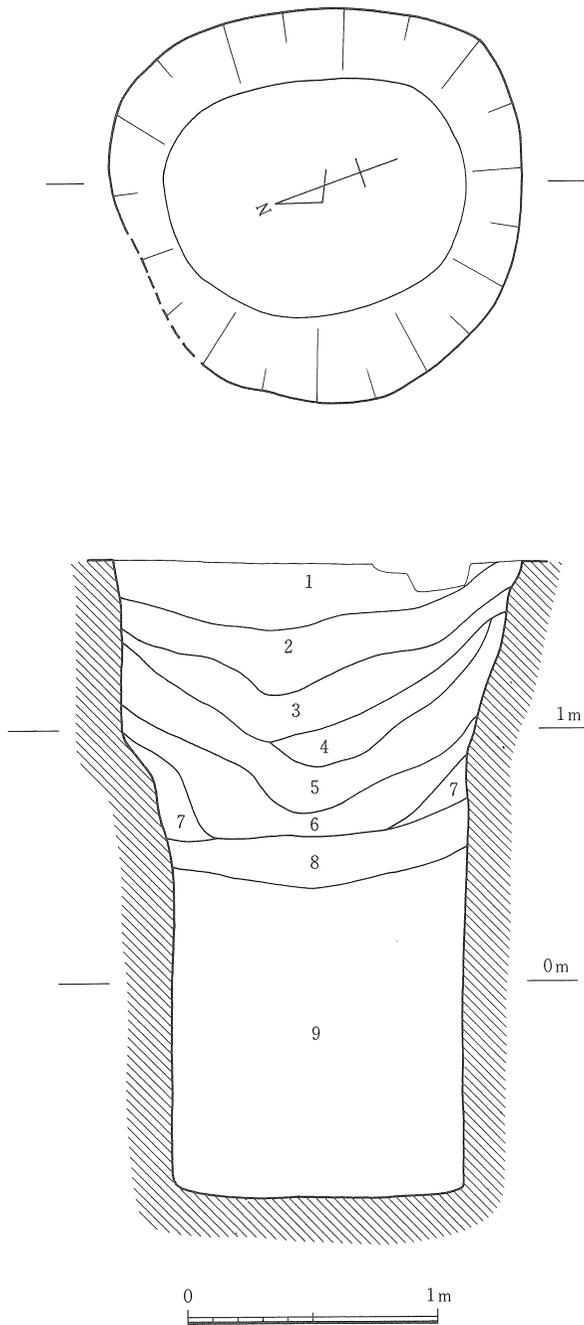
部堆積層と下部堆積層とは不整合に接しており、下部堆積層は井戸埋没当初の堆積層で、これに対し、上部堆積層は二次的掘り方に堆積したものと推定される。このうち1～3層は微砂土、

4～5層は粘質土であるが、下位になるほど、微砂の混入が減少し、粘性が強くなっている。

これらは、いずれも灰白色～灰黄色の粘土ブロックを多く含んだ不均質な層で、人為的な埋土と考えられる。一方、下部堆積層のうち、6層も同様の粘土ブロックを多量に含み、人為的堆積層と考えられる。これに対し、7層は粘土ブロックを含まず、井戸壁の崩壊土とみられる。

8・9層はともに類似した性状の粘土層であり、8層には酸化鉄の沈着が部分的に存在している。両層とも上位の層とは異なり、ほぼ水平な堆積状況を呈している。

遺物は主に1層および2層中

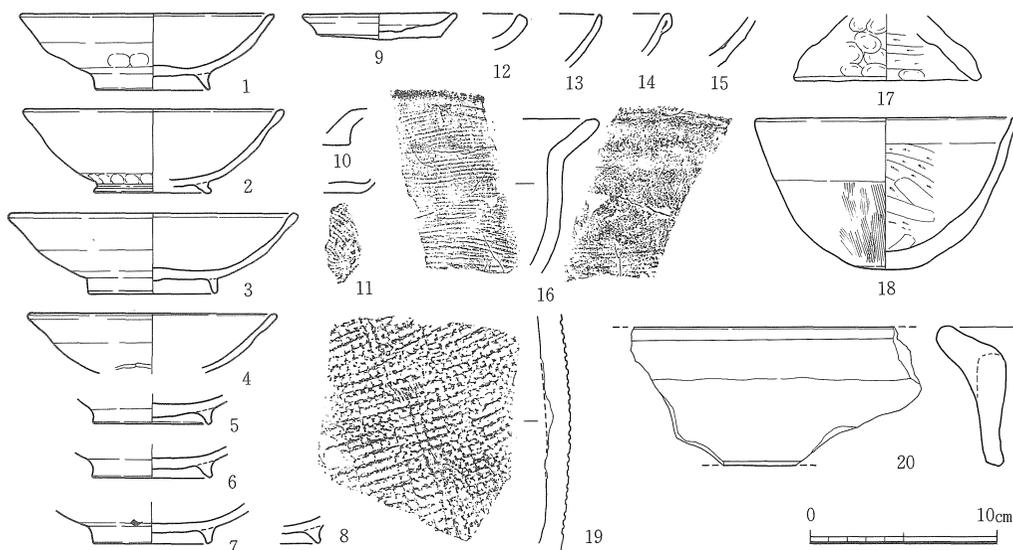
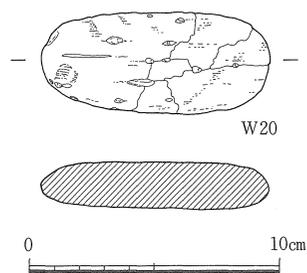


- 1 淡茶灰色微砂土
- 2 灰青色微砂土 (炭少含)
- 3 灰褐色微砂土
- 4 暗灰褐色粘質土
- 5 暗灰色粘質土
- 6 淡灰茶色粘質土
- 7 茶褐色粘質土
- 8 暗黄灰色粘土
- 9 暗灰色粘土

図354 井戸-5 縮尺 1/30

II 地点の調査

からと、8・9層中から出土している。1・2層出土土器
 (18・20) はいずれも小破片のものがほとんどであるが、
 8・9層からは小破片のもの(5~7, 11)のほか、ほぼ
 完形の土師質椀(1・3)と土師器皿(9)が出土している。
 本井戸は出土土器から、13世紀前半に属するものとみら
 れる。



遺物番号	器種	法量 (cm)			形態・手法の特徴ほか	色調	胎土
		口径	底径	器高			
1	土師質椀	13.5	6.1	4.0	内面丁寧なナデ、外面横ナデ・押圧、重ね焼き痕	淡黄白	微砂、粗砂②
2	〃	13.9	6.2	4.4	〃、〃、〃、高台張付け部に焼痕、2次焼成痕	淡黄褐	〃
3	〃	15.4	7.0	4.3	〃、〃、〃、〃	白~淡黄白	〃
4	〃	13.3	-	-	〃、〃、〃、〃	内白褐 外白	粗砂
5	〃	-	6.3	-	〃	内淡灰白 外黄白	微砂
6	〃	-	6.4	-	〃	灰白	〃
7	〃	-	6.4	-	ナデ、側面に文字の一部、高台内に墨付着	淡黄白	〃
8	〃	-	-	-	内面ナデ後施ミガキ、外面ナデ、「黒色土器A類」	内黒 外茶褐	微~細砂
9	〃 小皿	8.2	6.6	1.4	横ナデ、底部施キリ後板目痕	黄褐	微砂③
10	〃	-	-	-	〃、底部施キリ後ナデ	淡黄灰	〃④
11	〃	-	-	-	〃、底部糸キリ	暗褐	〃、赤色粒子
12	瓦質鍋	-	-	-	ナデ、煤付着、「作州系」	黒青灰	〃⑤
13	白磁碗	-	-	-	ナデ、施軸・貫入発達	内淡灰 外淡褐	〃、緻密
14	〃	-	-	-	〃、〃、〃、口縁部折り返し	内白 外淡黄緑白	〃⑥、緻密
15	〃	-	-	-	内面ナデ・沈線1条・施軸、外面上半ナデ・施軸・下半施ケズリ	白	〃、〃
16	土師質鍋	-	-	-	内面ハケ、外面上半縦のハケ後押圧、下半横位のハケ	暗褐	細~粗砂
17	〃 台部	-	10.0	-	内面施ケズリ、外面押圧	淡赤~黄褐	〃、〃⑦、雲母
18	〃 鉢	14.0	-	8.0	口縁部横ナデ、内面施ケズリ、外面ハケ	明赤褐	〃、〃、〃
19	須恵質甕	-	-	-	内面ナデ、外面格子目タタキ	暗青灰	微~細砂
20	甕 (焚口)	-	-	-	横ナデ・押圧、煤付着	暗赤褐	粗砂⑧、金雲母⑨

遺物番号	器種	現存長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	樹種	特徴
W20	浮子	9.1	4.0	1.7	-	扁平な楕円形の木製品、浮子か、虫喰いの多数の小孔が貫通する

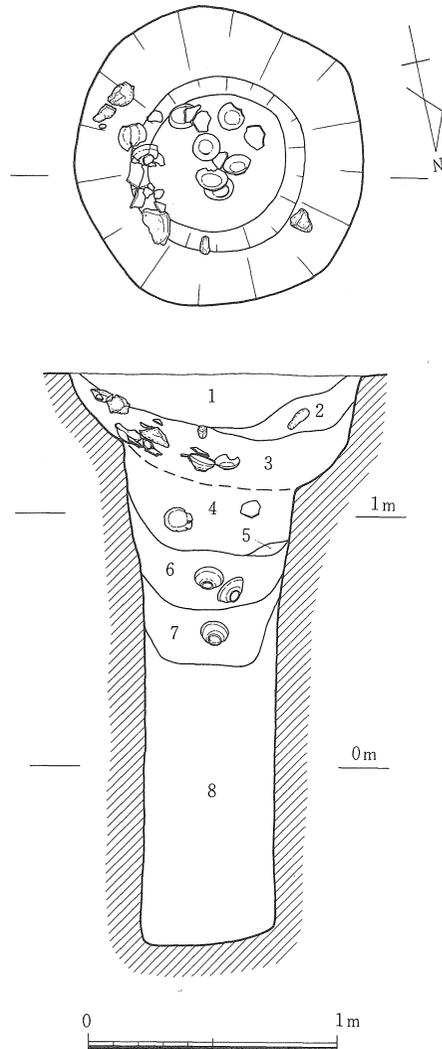
図355 井戸-5 出土遺物 縮尺 1/4 1/3(W20)

井戸-6 (図356・357, 図版46・70・73)

本遺構はBH21区中央北寄りに位置する素掘り井戸である。その平面形は直径110~120cmのほぼ正円を呈する。掘り方断面形をみると検出面から25~45cmの深さから上の壁は外側に大きく開きながら、内湾して立ち上がっている。この最上部より以下は、直径55~65cmのほぼまっすぐな円筒状に掘り込まれている。検出面の標高は160cm前後を測り、検出面から底面までの深さは230cm前後、底面の標高は-70cm前後である。井戸底は本地区の中心的な湧水層の砂層まで達しているが、水溜の施設は認められない。

井戸内の埋土は8層に分かれるが、その性状から大きくは上層(1~3層)、中層(4~7層)、下層(8層)の3群にまとめることができる。上層は、井戸掘り方上端の大きく外側に開いた部分に堆積する。いずれも微砂を含む砂質土層であり、1層および2層の上位には、木の根の痕跡が多量に含まれる。1・2層からは遺物は少ないが、3層からは径10cm前後の角礫および完形に近い土器類が南東側から流れ込んだ状態で比較的豊富に出土している。

中層は砂質土層から粘質土層に変化する。粘性は下位になる程強まり、特に6・7層の粘性は極めて強いものとなっている。この中層のうち、5層は



- 1 淡灰褐色砂質土
- 2 灰褐色粘質土
- 3 茶灰色砂質土
- 4 灰茶色粘質土
- 5 茶褐色粘質土
- 6 灰褐色粘質土
- 7 暗灰褐色粘質土
- 8 暗青灰色粘土

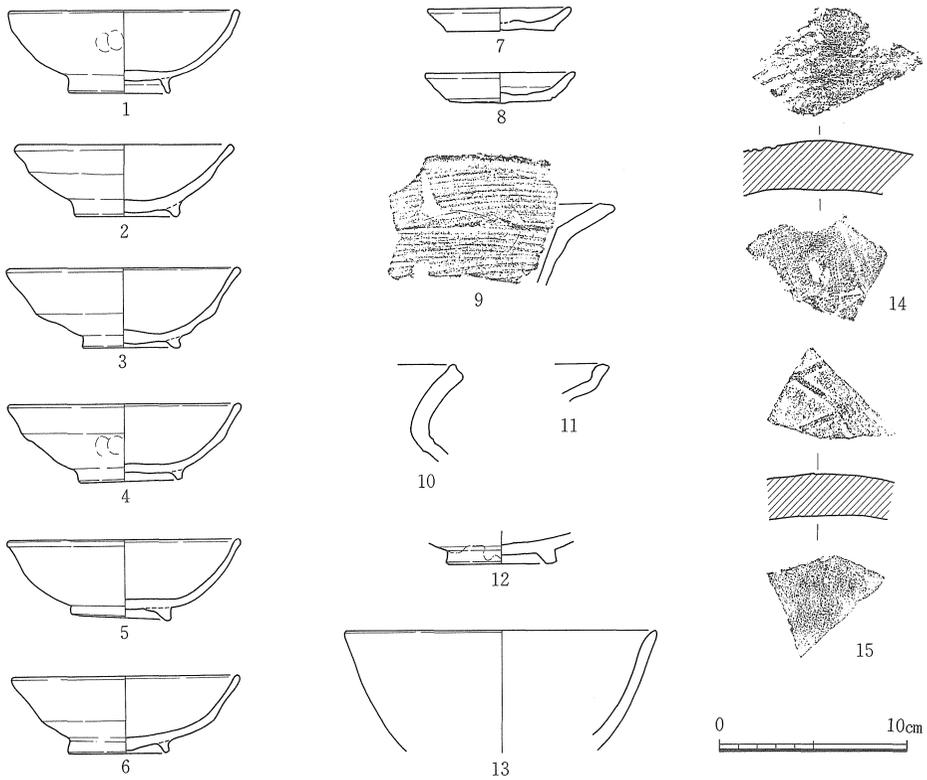
図356 井戸-6 縮尺 1/30

II 地点の調査

部分的な堆積層であり、顕著な遺物を含まないが、他の4・6・7層からは、いずれも完形もしくは大形の土器類が出土している。

下層（8層）は4層よりもさらに粘性が強まった暗青灰色粘土である。本層は混成物が少ない均質な層であり、まとまった遺物の出土は認められない。

本井戸からは、主に上層および中層から遺物が出土しているが、両者の間には顕著な時期差は認められず、本井戸は出土土器から、13世紀後半に属するものとみられる。

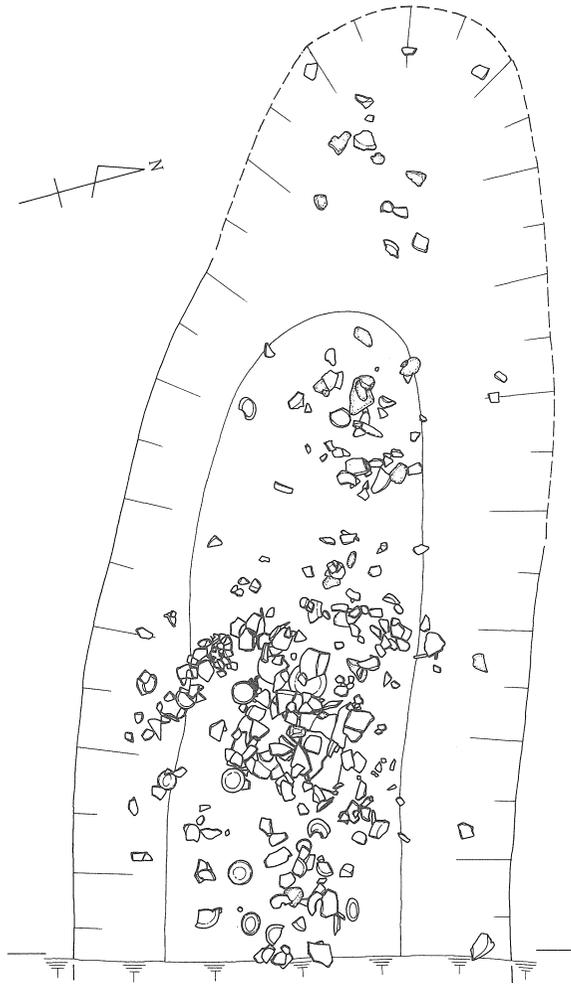


遺物番号	器種	法量 (cm)			形態・手の特徴ほか	色調	胎土
		口径	底径	器高			
1	土師質 椀	12.3	5.5	4.4	外面押圧・ナデ、口唇部範状工具痕あり、内面口縁部に煤付着	淡黄白	微砂
2	〃	11.6	5.3	4.5	内面丁寧なナデ、外面横ナデ・下半は雑なナデ・口唇部範状工具痕	〃	粗砂～細礫
3	〃	12.5	5.3	4.2	〃、〃・押圧	淡黄灰白	〃～〃②
4	〃	12.5	5.6	4.2	〃、〃・〃	淡黄～淡乳灰	細～粗砂
5	〃	12.5	5.4	4.3	〃、〃・下半はほとんど未調整	淡赤灰白	微砂、細砂②
6	〃	12.2	5.4	4.1	〃、〃・下半は雑なナデ、口唇部範状工具痕あり	淡黄白	細砂、細礫②
7	〃 小皿	7.6	5.8	1.2	横ナデ、底部範キリ、ロクロ回転④	〃	〃
8	〃	8.0	5.8	1.6	〃、内面押圧、底部範キリ、ロクロ回転④	淡黄灰白	微砂、粗砂②
9	〃 鍋	—	—	—	内面ハケ、外面ハケ後押圧、外面煤多量	内黄褐色④/黒褐	細砂④、雲母
10	須恵質 壺	—	—	—	口縁部横ナデ、内面横位の範ケズリ、外面格子タタキ、「亀山焼」	灰	〃④
11	瓦 質 鍋	—	—	—	横ナデ、外面煤	暗青灰	微砂④、雲母
12	白 磁 碗	—	5.9	—	削り出し高台、施釉は高台部以外、貫入あり	白④ 釉淡黄緑	〃④、緻密
13	青 磁 〃	16.6	—	—	釉は若干白濁、「龍泉窯系Ⅰ-1類」	陶灰白 釉淡緑灰	〃〃、〃
14	瓦	—	—	—	内面布目痕、外面タタキ後ナデ	灰褐	粗砂
15	〃	—	—	—	〃、〃	淡灰白	細砂④

図357 井戸-6 出土遺物 縮尺 1/4

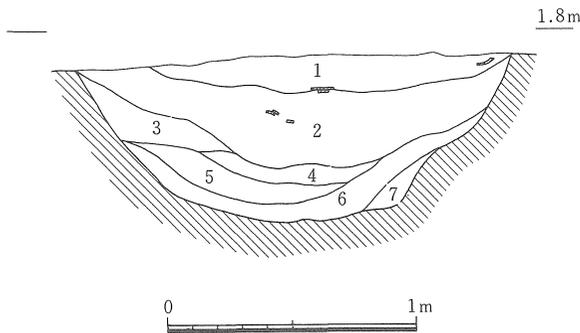
b. 溝

溝一8 (図358~362, 図版69・71~73・76)



本溝はBH19区で検出した。東側は調査範囲外に伸びており、明確に確認できなかったが西側もさらに伸びるものと推定される。溝の流走方向は不明であるが、現在の鹿田地区周辺の地割と基本的に対応している。検出部分の長さは3m前後であり、その最大幅は約200cmである。溝の横断面形をみると、浅く凹んだ底面から壁がゆるやかに立ち上がっている。検出面の標高は170cm前後であり、検出面から底面までの深さは65cm前後を測り、その標高は105cm前後である。

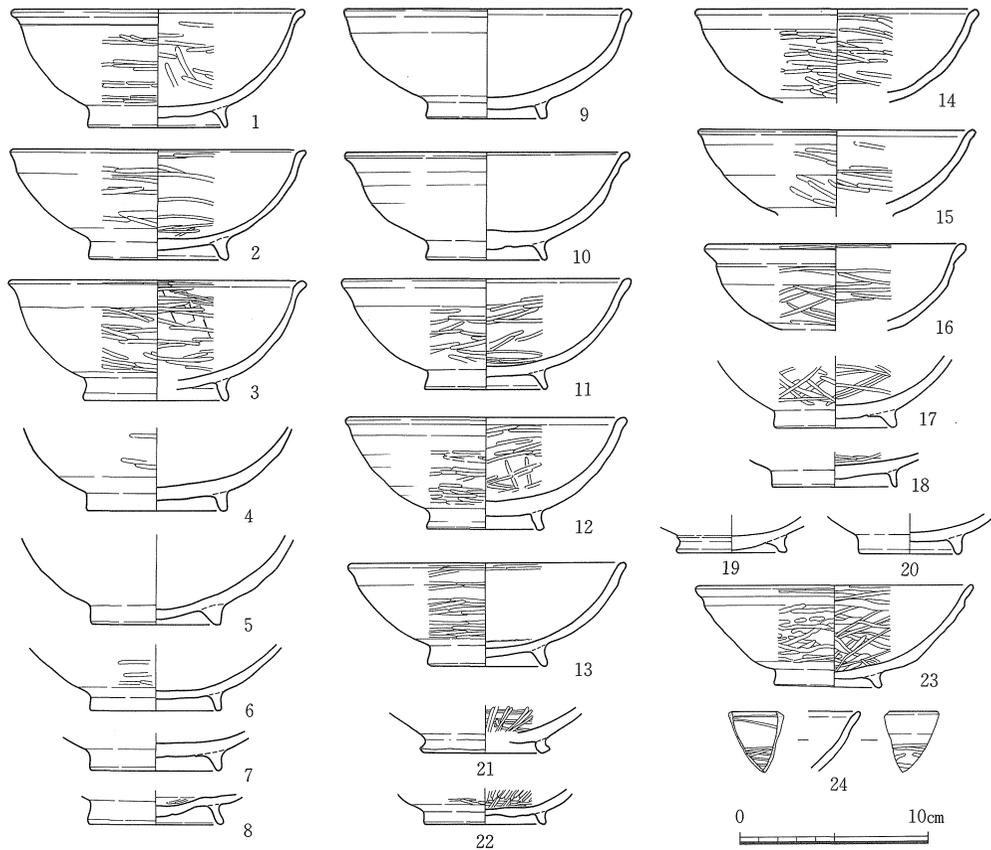
溝内埋土は7層に分かれ、その中の炭・灰・焼土を多量に含む2層および5層中から土師質椀・皿・小皿を始めとする大量の土器類が出土している。本溝は、その出土土器から12世紀前半に埋没したものと考えられる。



- 1 淡灰緑色微砂土 (炭含)
- 2 灰黄色微砂土 (炭・灰・焼土多含)
- 3 淡黄褐色微砂土
- 4 淡黄灰色微砂土 (炭・灰・焼土少含)
- 5 淡黄褐色微砂土 (炭・灰 焼土多含)
- 6 黄灰色微砂土
- 7 淡黄灰色微砂土

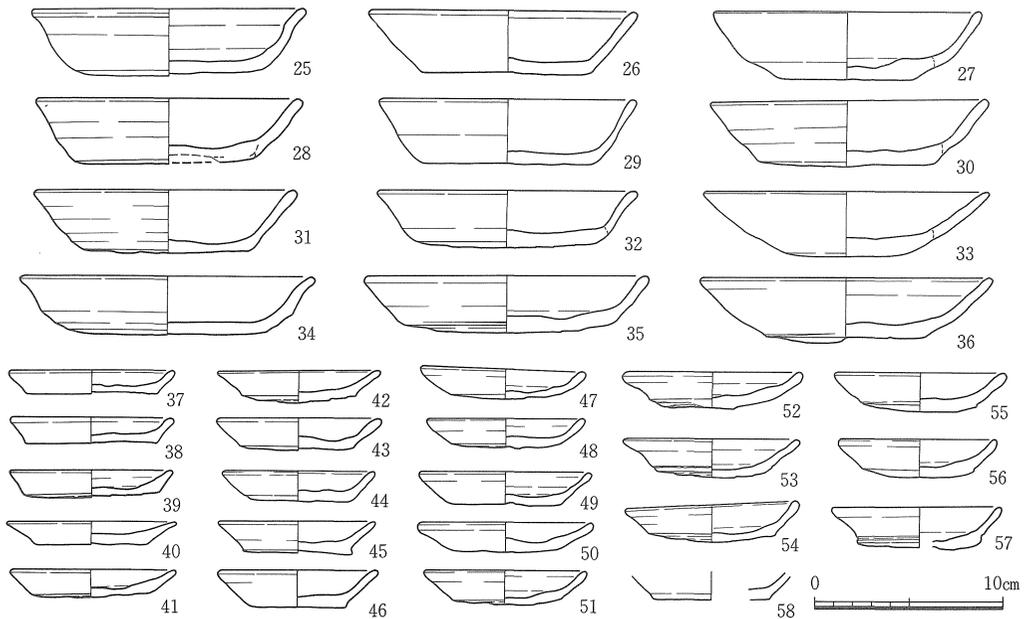
図358 溝一8 縮尺 1/30

II 地点の調査



遺物番号	器種	法量 (cm)			形態・手法の特徴ほか	色調	胎土
		口径	底径	器高			
1	土師質 碗	15.6	7.4	6.2	内外面ナデ後施ミガキ, 底部外面施キリ後ナデ, 2次焼成痕	灰褐	細砂◎
2	〃	15.7	7.4	5.8	〃, 外面指頭圧痕, 2次焼成痕	内黒褐 外茶褐	〃
3	〃	15.8	7.7	6.4	内面工具使用ナデ後施ミガキ, 外面横ナデ後施ミガキ, 重ね焼き痕	内淡灰白 外白黄	微-細砂
4	〃	-	7.5	-	外面ナデ後施ミガキ (不鮮明), 底部外面黒色化・ナデ	淡灰白	微砂
5	〃	-	6.9	-	内外面ナデ (磨減で不鮮明)	白-淡黄白	〃, 細礫◎
6	〃	-	7.0	-	外面ナデ後施ミガキ, 底部外面施キリ, 2次焼成痕, 重ね焼き痕	内灰褐 外灰白	細砂◎, 粗砂◎
7	〃	-	7.0	-	内外面ナデ, 2次焼成痕	暗茶褐	微砂
8	〃	-	7.2	-	内面ナデ後施ミガキ, 外面横ナデ, 2次焼成痕	淡黄白	細-粗砂
9	〃	15.4	6.4	5.8	内外面磨減で不明, 底部外面指頭圧痕	淡灰白~淡赤白	微砂◎, 精良
10	〃	15.2	6.4	5.7	内面丁寧ナデ, 外面横ナデ後施ミガキ◎, 底部外面ナデ	淡黄白	〃
11	〃	15.4	6.4	5.8	内外面ナデ後施ミガキ, 底部外面ナデ, 2次焼成痕	内黒褐 外灰褐	粗砂◎
12	〃	15.0	6.2	5.9	〃, 〃, 〃	淡黄白	微砂, 粗砂◎
13	〃	14.8	6.4	5.5	内面ナデ, 外面ナデ後施ミガキ, 高台部・底部ナデ, 重ね焼き痕	〃	粗砂◎
14	〃	15.0	-	-	内外面ナデ後施ミガキ, 2次焼成痕	灰白	微-細砂
15	〃	14.6	-	-	〃	灰白-淡黄白	微砂
16	〃	13.9	-	-	〃, 外面指頭圧痕少し◎	黄白	微-細砂
17	〃	-	6.5	-	〃, 高台部横ナデ, 底部外面ナデ, 2次焼成痕	白-灰白	〃-〃
18	〃	-	6.6	-	内面施ミガキ, 外面ナデ, 重ね焼き痕	淡黄白	微砂◎
19	〃	-	5.9	-	内外面ナデ, 2次焼成痕	内暗灰褐 外灰白	〃, 精良
20	〃	-	5.5	-	〃	内暗褐 外淡赤灰褐	微-細砂
21	〃	-	6.9	-	内面ナデ後施ミガキ, 外面横ナデ, 「黒色土器A類」	内黒 外淡灰白	〃-〃
22	〃	-	6.5	-	内面施ミガキ◎, 外面施ミガキ◎, 「黒色土器B類」	黒褐 面明赤褐	微砂◎
23	瓦器	14.7	5.7	5.4	内外面施ミガキ, 底部外面ナデ, 高台部横ナデ, 「和泉型」	灰	〃, 精良
24	〃	-	-	-	口縁部横ナデ, 内外面施ミガキ, 「和泉型」	〃	〃, 〃

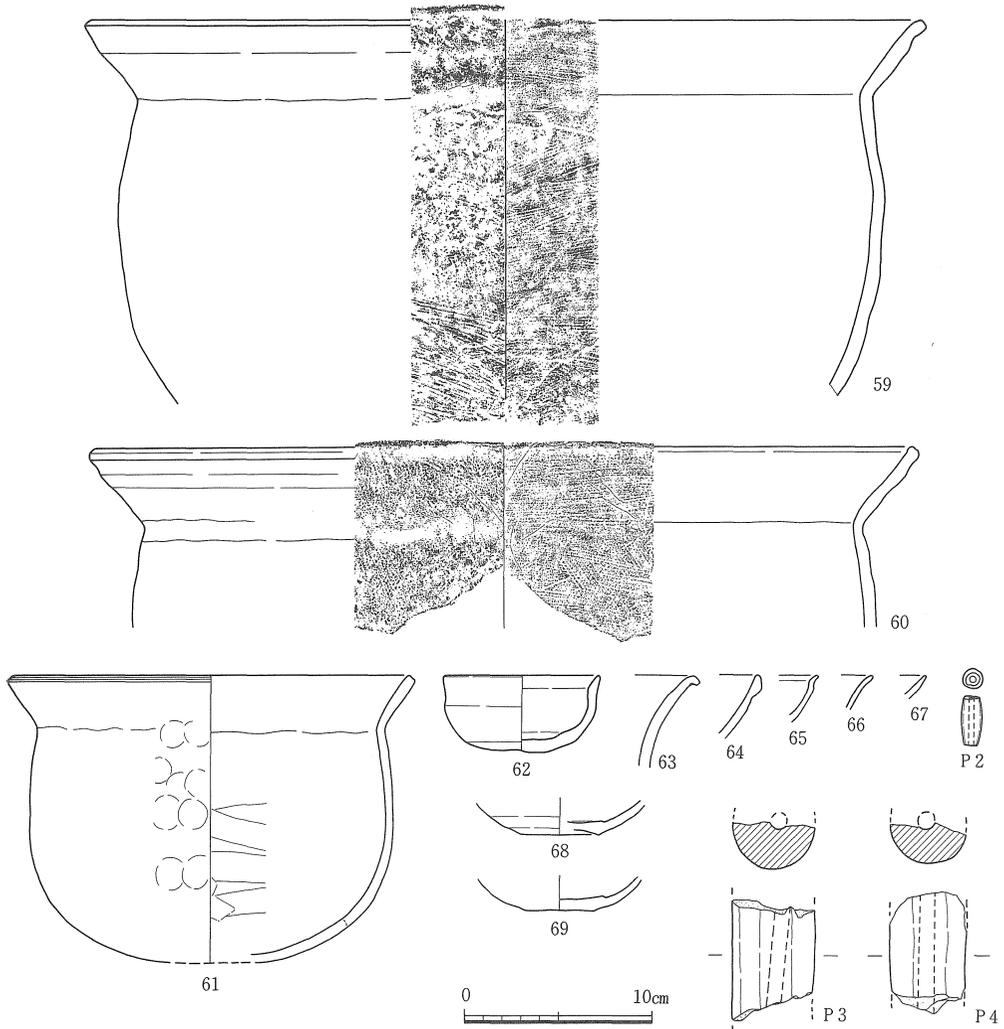
図359 溝-8 出土遺物(1) 縮尺 1/4



遺物 番号	器 種	法 量 (cm)			形 態・手 法 の 特 徴 ほ か	色 調	胎 土
		口径	底径	器高			
25	土師質 皿	14.5	10.0	3.6	内外面横ナデ, 底部内面仕上げナデ・外面寛キリ後ナデ後板目痕	淡黄褐～淡黄白	粗砂
26	〃	14.3	9.0	3.5	〃, 底部外面寛キリ後板目痕	淡灰褐	〃, 雲母
27	〃	14.1	7.0	3.5	〃, 底部外面寛キリ後軽いナデ, ロクロ回転㊟	暗褐～暗赤褐	粗砂㊟
28	〃	14.2	9.6	3.5	〃, 底部外面寛キリ後板目痕	淡赤褐	粗砂
29	〃	13.6	8.9	3.4	〃, 底部外面寛キリ後ナデ, 内面煤付着	灰褐	微～細砂, 雲母
30	〃	14.7	9.2	3.6	〃, 底部外面寛キリ後板目痕, 底部内面仕上げナデ	淡灰褐	粗砂㊟
31	〃	14.0	8.8	3.3	〃, 〃, 〃, 〃	淡黄褐	微～細砂, 雲母
32	〃	13.8	9.6	3.0	底部外面寛キリ後軽いナデ後板目痕・内面仕上げナデ, ロクロ回転㊟	淡黄灰～白	粗砂
33	〃	15.1	6.4	3.4	内外面横ナデ, 底部外面寛キリ, ロクロ回転㊟	灰褐	細砂㊟
34	〃	15.7	10.7	3.1	〃, 底部外面寛キリ後板目痕	淡黄灰褐	〃, 雲母
35	〃	15.0	11.6	3.0	底部外面寛キリ後板目痕・内面仕上げナデ, ロクロ回転㊟	淡赤褐～黄白	粗砂㊟
36	〃	15.5	8.4	3.1	〃, ロクロ回転㊟	淡赤褐～淡黄褐	微砂, 雲母
37	〃 小皿	8.8	7.0	1.3	内外面横ナデ, 底部外面寛キリ	明褐～暗灰褐	〃
38	〃	8.7	7.0	1.4	〃, 底部外面寛キリ後板目痕・内面仕上げナデ, ロクロ回転㊟	淡黄褐	〃, 雲母㊟
39	〃	8.7	7.2	1.5	〃, 底部外面寛キリ, ロクロ回転㊟	淡灰褐	細砂㊟
40	〃	9.0	6.0	1.2	〃, 〃	黄褐～暗褐	〃
41	〃	8.8	6.2	1.6	〃, 〃, ロクロ回転㊟	淡黄褐～淡黄白	微砂, 赤色粒子㊟
42	〃	8.7	6.1	1.7	内面ナデ, 外面横ナデ, 底部外面寛キリ後板目痕, ロクロ回転㊟	〃	〃
43	〃	8.7	6.1	1.7	内外面横ナデ, 底部外面寛キリ	淡赤褐	細砂, 雲母
44	〃	8.1	5.3	1.6	〃, 〃, ロクロ回転㊟	淡黄褐	微砂
45	〃	8.4	5.8	1.7	〃, 〃, 内面仕上げナデ, ロクロ回転㊟	〃	〃
46	〃	8.5	5.1	2.0	〃, 〃, 〃	淡赤褐外淡黄白	細砂
47	〃	8.8	5.8	1.7	〃, 〃, ロクロ回転㊟	淡赤褐～淡黄褐	細～粗砂㊟
48	〃	8.4	5.6	1.6	〃, 〃, 〃	淡黄褐～灰褐	〃
49	〃	9.2	6.0	1.7	〃, 〃, 〃	暗褐	〃
50	〃	9.3	5.5	1.6	〃, 〃, 〃	淡褐	微～細砂
51	〃	8.7	5.7	1.8	〃, 〃, 〃, 煤付着	茶褐	細砂㊟
52	〃	9.6	6.7	1.9	底部外面寛キリ後板目痕・内面仕上げナデ, ロクロ回転㊟	淡黄白～赤褐	〃
53	〃	9.5	5.9	2.0	内外面横ナデ, 底部外面寛キリ後板目痕, ロクロ回転㊟	暗灰褐	細～粗砂㊟
54	〃	9.3	6.8	2.2	〃, 底部外面寛キリ・内面押圧, ロクロ回転㊟	暗褐	〃
55	〃	9.1	5.9	2.1	〃, 〃, 内面仕上げナデ, ロクロ回転㊟	灰白～淡黄灰白	細砂㊟
56	〃	8.4	5.9	2.1	〃, 底部外面寛キリ後ナデ	淡黄褐	〃
57	〃	9.1	6.6	2.2	〃, 底部外面寛キリ, ロクロ回転㊟	灰褐	微～細砂
58	瓦 質	—	6.2	—	〃	暗灰～黒灰	微砂㊟, 精良

図360 溝一8 出土遺物(2) 縮尺 1/4

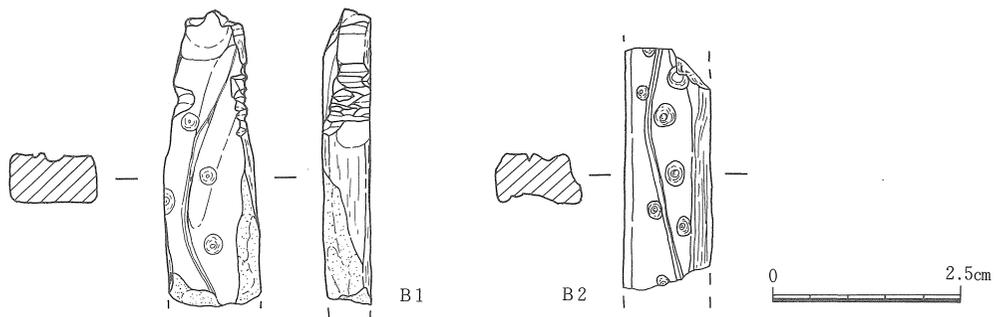
II 地点の調査



遺物番号	器種	法量 (cm)			形態・手法の特徴ほか	色調	胎土
		口径	底径	器高			
59	土師質 鍋	44.2	-	-	内面ハケ、外面押任後ハケ・煤付着、下端は打欠きの可能性あり	内暗茶褐色/外黄褐色	微～粗砂②
60	〃	43.4	-	-	〃、(不鮮明)	内淡赤褐色/外灰黒褐色	細砂、雲母
61	〃 甕	21.0	-	15.2	口縁部外面指頭圧痕、内面工具使用ナデ、外面煤付着、丸底に近い	内暗茶褐色/外黒褐色	〃、〃
62	〃 鉢	8.4	5.8	4.1	内外面ナデ	(内)灰(外)黄灰	〃
63	白磁 壺	-	-	-	内外面横ナデ・施軸、貫入あり	灰白 釉淡緑白	緻密
64	白磁 碗	-	-	-	〃・〃、「白磁碗Ⅳ類」	白 釉淡灰白	〃
65	〃	-	-	-	〃・〃、貫入あり	淡黄白 釉黄白	〃
66	〃	-	-	-	〃・〃	淡灰白 釉白	〃
67	〃	-	-	-	〃・〃、貫入あり	〃 釉〃	〃
68	〃	-	4.2	-	〃・〃、底部外面匏ケズリ・露胎、沈線1条、貫入あり	釉淡黄白/明赤褐色	〃
69	〃	-	3.6	-	〃・〃、〃・〃、貫入あり	〃	〃

遺物番号	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	形態・手法の特徴ほか	色調	胎土
P 2	土 鉢	2.6	1.1	1.1	3	ナデ	暗褐色	微～細砂
P 3	〃	-	4.3	-	62	磨減で不明	明褐色～淡黄褐色	細～粗砂
P 4	〃	-	4.0	-	47	全体ナデ・押任	淡黄褐色	〃～〃

図361 溝一8 出土遺物(3) 縮尺 1/4

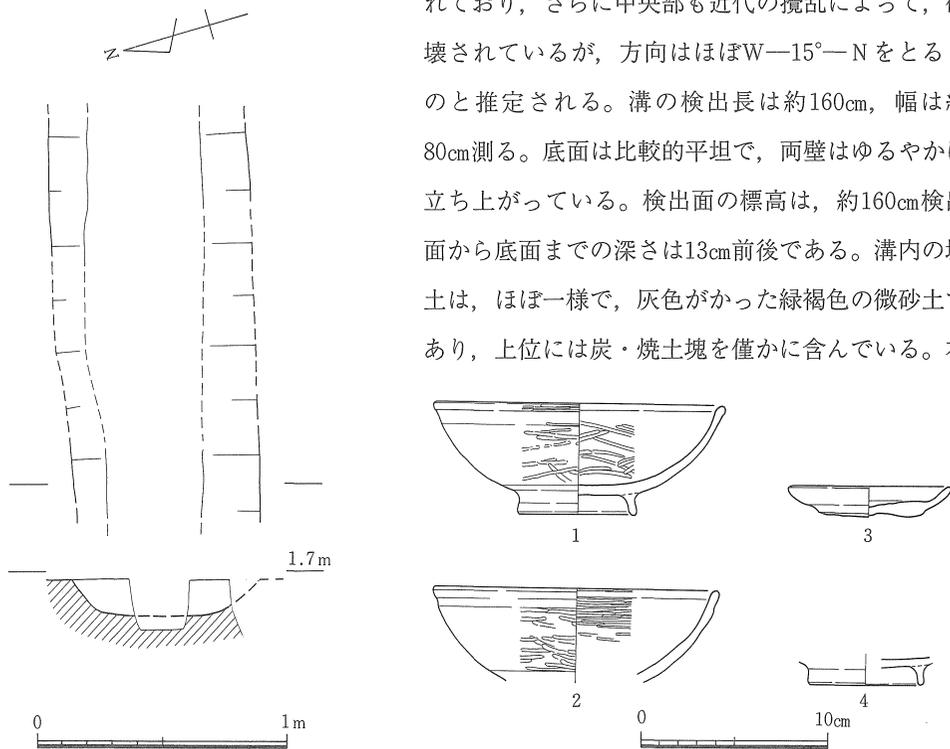


遺物番号	器種	現存長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	材質	特徴
B 1	不	3.7	1.2	0.6	2.0	骨	白色、裏面には海綿状部分を残す、他は磨かれた可能性が高い、表面に線刻・側面に刻み目
B 2	◇	3.2	1.2	0.6	2.0	◇	特徴はB 1と同じ、B 1と同一個体の可能性が高い

図362 溝一8 出土遺物(4) 縮尺 1/1

溝一19 (図363)

本溝はB H 21区で検出した。本溝西側は調査区外へ延びており、東側は溝13によって破壊されており、さらに中央部も近代の攪乱によって、破壊されているが、方向はほぼW-15°-Nをとるものと推定される。溝の検出長は約160cm、幅は約80cm測る。底面は比較的平坦で、両壁はゆるやかに立ち上がっている。検出面の標高は、約160cm検出面から底面までの深さは13cm前後である。溝内の埋土は、ほぼ一様で、灰色がかった緑褐色の微砂土であり、上位には炭・焼土塊を僅かに含んでいる。本



遺物番号	器種	法量 (cm)			形態・手法の特徴ほか	色調	胎土
		口径	底径	器高			
1	土師質 碗	15.5	6.3	5.9	内外面篋ミガキ、内面には工具使用ナデ痕残存、内面に重ね焼き痕	淡灰白	微砂◎
2	◇	15.2	-	-	◇	(内)灰褐(外)淡灰白	◇◇
3	◇	-	6.2	-	内外面横ナデ	灰白	◇◎
4	◇ 小皿	8.6	5.4	1.6	底部内面仕上げナデ・外面篋キリ後板目痕、ロクロ回転◎	淡黄白	◇、赤色粒子◎

図363 溝一19, 出土遺物 縮尺 1/30, 1/4

II 地点の調査

溝からは若干の土師質椀・同小皿が出土しており、本溝は12世紀前半に属するとみられる。

溝-11 (図364・365, 図版70・71)

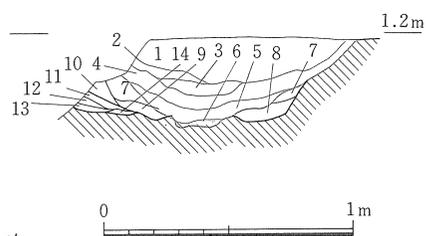
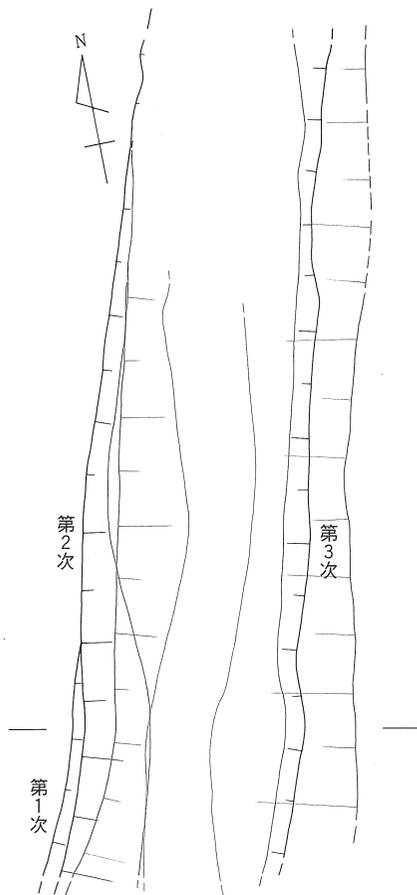
本溝は主にB G 20区からB H 20区にかけて検出し、調査区中央を縦断する大規模な溝である。本溝は西側がほぼ本溝と平行して走る溝13によって破壊されているが、ほぼN-15°-Eの方位をとり、本地区周辺の現地割と一致している。本溝の検出長は約330cmを測る。

埋土は、大きく3群に分けられ、少なくとも2回の改修がおこなわれたことが認められる。第1次溝は、以後の改修によって大きく破壊されており、規模等の詳細は不明である。第1次溝の埋土は、4層に分かれるが漸移的に変化しており、比較的大形の中世土器片を含む。

第2次溝も後の第3次溝および溝13によって大きく削平されているが、最大幅180cm以上、検出面からの深さ65cm前後を測るものとみられる。残存部の埋土は、粘土もしくは粘質土と微砂との互層状を呈しており、中世土器のほか、弥生土器片も含んでいる。

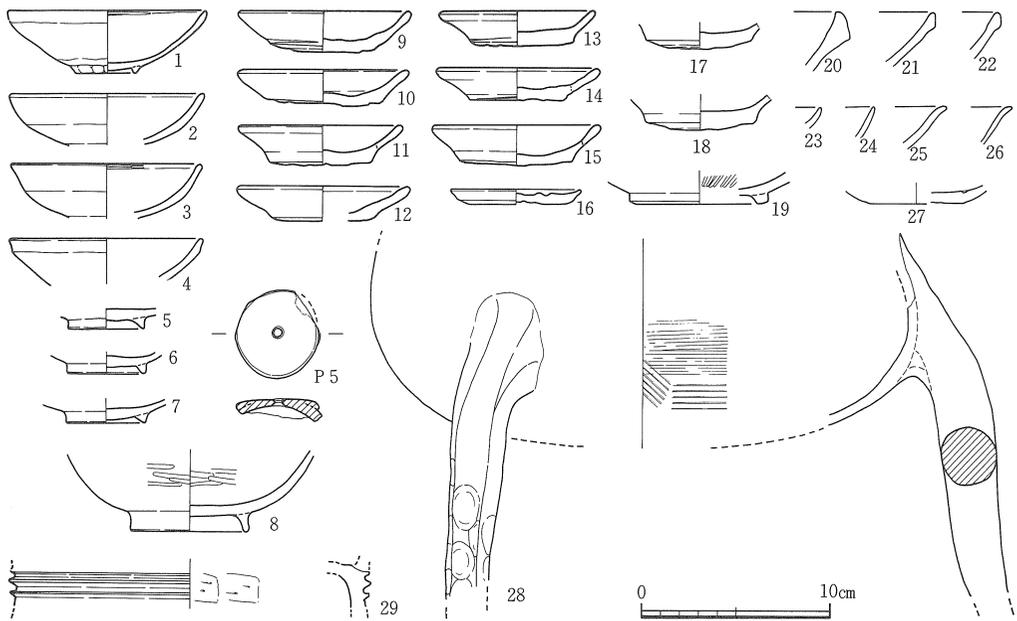
第3次溝は、最大幅220cm以上を測る。検出面からの深さは、70cm前後であり、底の標高は60~65cm前後を測るが、流走方向は不明である。埋土はいずれも基本的に砂層もしくは砂を含む粘土層である。全体的に若干の中世土器が含まれており、多量の炭・焼土を含む層もある。

本溝からの出土遺物のうち、8・9~18・23は第1次溝埋土から、他は第3次溝埋土からの出土であり、本溝は明確ではないが12世紀代に掘削され、以後改修をうけながら13世紀後半に埋没したものとみられる。



- | | | | |
|-----|---------------------|-----|-------------------|
| 第3次 | 1 黄褐色細砂 (炭少含) | 第1次 | 11 黒灰色微砂粘質土 (炭多含) |
| | 2 灰褐色微砂 | | 12 黄灰色微砂粘土 |
| | 3 茶褐色微砂質土 (炭含) | | 13 暗灰色微砂粘質土 (炭含) |
| | 4 黄灰色~茶灰色微砂粘土 (炭少含) | | 14 淡灰色微砂粘質土 |
| | 5 暗茶灰色細砂粘土 | | |
| | 6 黒褐色粗砂質土 (炭・焼土多含) | | |
| 第2次 | 7 黄灰色微砂 | | |
| | 8 暗茶灰色粗砂粘土 (炭少含) | | |
| | 9 灰色微砂粘土 (炭少含) | | |
| | 10 淡黄灰色微砂 | | |

図364 溝-11 縮尺 1/30

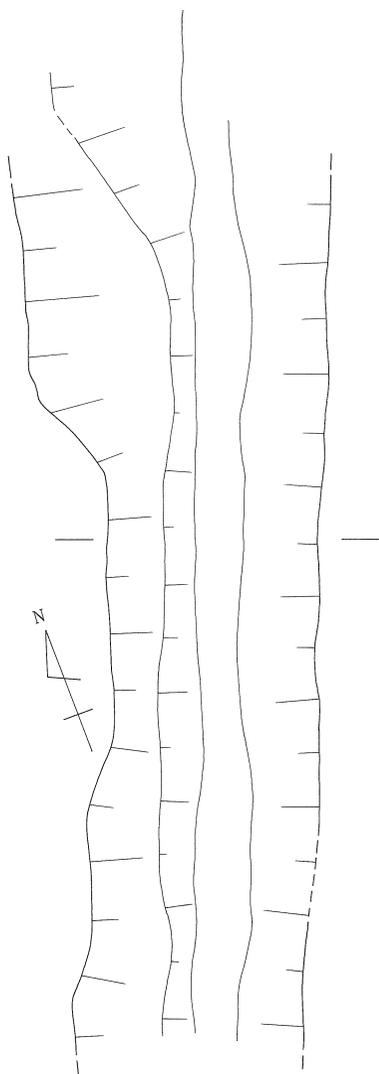


遺物番号	器種	法量 (cm)			形態・手法の特徴ほか	色調	胎土
		口径	底径	器高			
1	土師質 椀	10.7	3.4	3.3	内面ナデ, 外面・高台部押圧, 重焼き痕	黄灰	微~細砂
2	〃	10.4	-	-	〃, 外面ナデ・押圧, 2次焼成痕	内茶褐色黄白	〃~〃
3	〃	10.3	-	-	〃, 〃, 〃	灰白	〃~〃②
4	〃	10.3	-	-	〃, 〃, 〃, 2次焼成痕	黄灰	微砂⑤
5	〃	-	4.1	-	内外面横ナデ, 重ね焼き痕	淡黄灰	細~粗砂
6	〃	-	4.3	-	〃, 〃	淡黄白	細砂
7	〃	-	4.3	-	内外面ナデ, 高台のつなぎ目明瞭	〃	微砂
8	〃	-	6.8	-	内外面施ミガキ	〃	微~細砂
9	〃 小皿	9.2	5.6	2.2	内外面横ナデ, 底部外面施キリ後板目痕, ロクロ回転⑤	淡黄褐色	細砂
10	〃	9.2	6.0	1.9	〃, 〃, 〃	淡黄褐色~淡黄白	微砂
11	〃	8.8	5.4	2.0	〃, 〃, 〃, 内面仕上げナデ	淡黄灰	微~細砂
12	〃	9.2	5.5	1.8	〃, 底部外面施キリ	淡黄褐色	微砂
13	〃	8.3	5.4	1.8	〃, 底部外面施キリ後板目痕, ロクロ回転⑤	淡褐色	細砂, 雲母⑤
14	〃	8.8	5.0	1.7	〃, 底部外面施キリ, ロクロ回転⑤	淡黄褐色	微砂, 〃
15	〃	9.0	6.0	2.1	〃, 底部外面施キリ後ナデ, ロクロ回転⑤	淡黄白	微~細砂
16	〃	7.0	6.2	0.8	〃, 底部外面施キリ	淡黄褐色	微砂⑤
17	〃	-	5.6	-	〃, 底部外面施キリ後ナデ	〃	〃
18	〃	-	5.7	-	〃, 〃	〃	〃
19	瓦器 椀	-	7.4	-	内面施ミガキ, 外面横ナデ	内灰黒色黒灰	〃②
20	須恵質 鉢	-	-	-	内外面横ナデ	灰	微~細砂
21	白磁 碗	-	-	-	〃・施釉	白	緻密
22	〃	-	-	-	〃・〃	〃	〃
23	〃	-	-	-	〃・〃・貫入	淡黄白	〃
24	緑釉 〃	-	-	-	内面工具使用ナデ	白 釉淡黄緑白	微砂
25	〃	-	-	-	〃, 外面下半施ケズリ, 口縁部横ナデ	青灰 釉灰緑	〃②
26	〃	-	-	-	内外面横ナデ	灰 釉黄緑	〃
27	白磁 〃	-	4.8	-	〃, 底部外面施ケズリ, 内面施釉・貫入	白 釉黄白	緻密
28	瓦質 鍋	-	-	-	三足付き, 内面ハケ, 外面ナデ・煤附着, 三足部ナデ・押圧	暗灰	微砂⑤
29	須恵器 円面硯	径19.3	-	-	内面施ケズリ, 混入品	灰	〃

遺物番号	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	形態・手法の特徴ほか	色調	胎土
P5	紡錘車	4.6	4.5	0.4	16	ナデ	淡黄褐色	微~細砂

図365 溝一11 出土遺物 縮尺 1/4

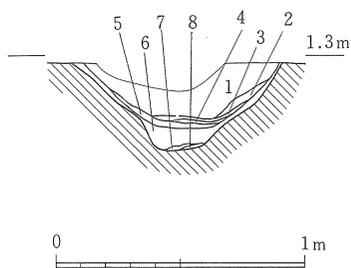
溝-14 (図366・367, 図版72)



本溝は、21ラインに平行して、調査区を縦断する。本溝は先の溝11の西側部分を破壊し、平行に走っており、溝11埋没後、やや西へずらして、つけ変えられたものと考えられる。さらに、本溝は埋没後、近世に再掘削され、改修されており、それ以後にも再掘削を受け、昭和初期の本学医学部移転まで継続して存在したことが窺われる。

現状の本溝の検出長は約8m、最大幅は約2.4mを測る。底は中央部がやや深く落ち込み、壁は一旦屈曲して、ゆるやかに開がりながら立ち上がっている。検出面からの深さは65cm前後を測り、明確な流走方向は不明である。

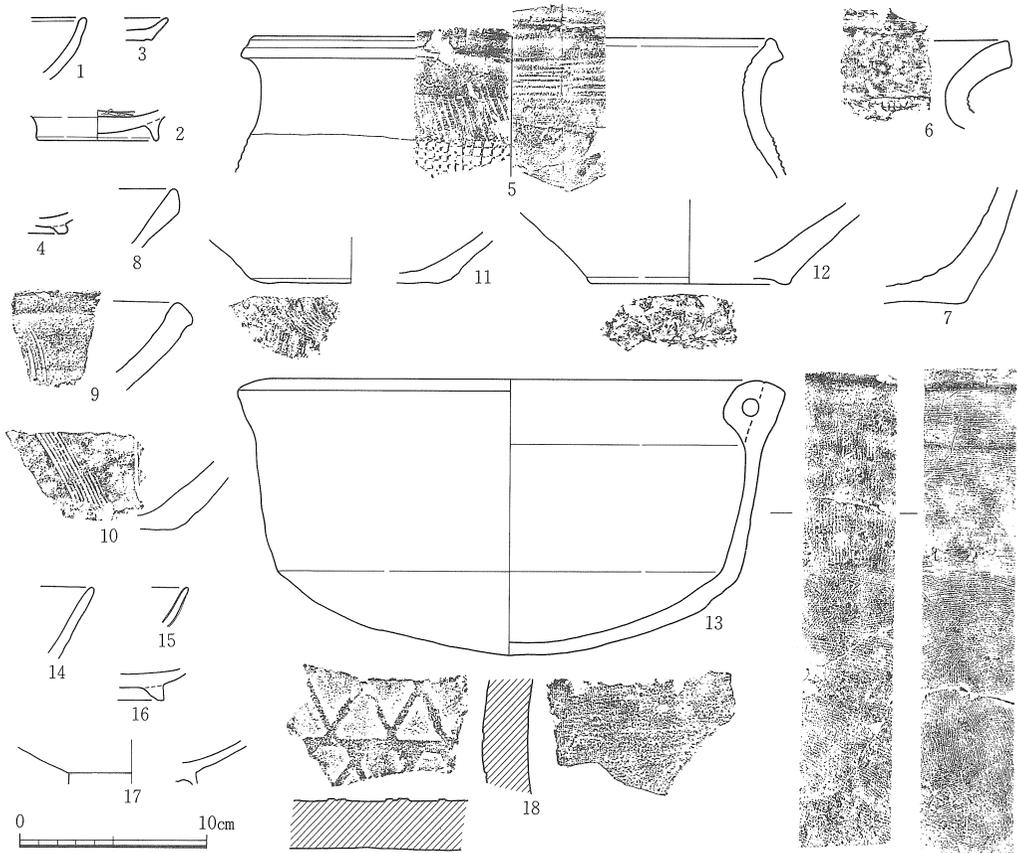
本溝の埋土は、上半部は近世時の改修によって削平されており、現状では8層に分かれる。1層は一部微砂と粘土が互層状を呈するが、土器片や炭化物片を多く含み、人為的埋土もしくは、周辺からの流入土の可能性もある。これに対し、2層以下は、基本的に微砂と粘土もしくは粘質土の互層状をなし、基本的には水成堆積層と考えられる。本溝は出土遺物および溝11との切合い関係から13世紀後半以降に掘削され、15



- 1 茶灰色微砂 (炭多含)
- 2 暗灰色微砂粘土
- 3 暗灰色粘質土
- 4 暗茶褐色微砂
- 5 灰色混砂粘質土
- 6 暗灰色混砂粘質土
- 7 淡灰色微砂
- 8 茶灰色微砂粘土

図366 溝-14 縮尺 1/30

世紀前後には、一旦埋没し、改修を受けたものとみられる。



遺物 番号	器 種	法 量 (cm)			形 態・手 法 の 特 徴 ほ か	色 調	胎 土
		口径	底径	器高			
1	土 師 質 碗	-	-	-	内外面ナデ	淡黄白	粗砂
2	〃	-	6.6	-	内面施ミガキ、外面ナデ	黄白	細砂
3	〃 小・皿	-	-	-	内外面横ナデ、底部外面施キリ	灰白	粗砂
4	瓦 器 碗	-	-	-	内面施ミガキ、外面横ナデ	暗青灰	細砂
5	須 恵 質 甕	27.6	-	-	内面幅広いハケ後細かいハケ、胴部外面格子目タタキ、「亀山焼」	暗灰～暗灰褐	微砂◎
6	〃	-	-	-	口縁部横ナデ、胴部外面格子目タタキ、「亀山焼」	肉黄灰例青灰	細砂
7	〃	-	-	-	内面・外面下半施ケズリ、底部外面施ケズリ後ナデ、「備前焼」	肉黄白例暗赤褐	粗砂
8	〃 鉢	-	-	-	内外面ナデ、「魚住系」	青灰	細～粗砂◎
9	〃	-	-	-	内外面横ナデ	暗茶褐	微砂、緻密
10	〃	-	-	-	内外面ナデ	肉灰例暗赤褐	細砂
11	〃	-	10.6	-	〃、底部外面施キリ、「魚住系」	青灰	〃◎
12	瓦 質 甕	-	10.6	-	〃、底部外面に木葉痕	肉暗灰褐例淡黄褐	〃
13	瓦 質 鍋	26.5	-	14.5	内外面ハケ、縦位の内耳が対角線上に2個、外面煤付着多量	灰褐	微砂
14	青 白 磁 碗	-	-	-	内外面ナデ・施釉・貫入	淡灰白 例淡緑白	緻密
15	白 磁 碗	-	-	-	〃	〃	〃
16	〃	-	-	-	〃、内面施釉・貫入	〃 例黄緑白	〃
17	青 磁 〃	-	-	-	〃・施釉	灰 例淡緑	〃
18	平 瓦	-	-	-	内面布目痕、外面タタキ、2次焼成痕	灰白	細～粗砂

図367 溝-14 出土遺物 縮尺 1/4

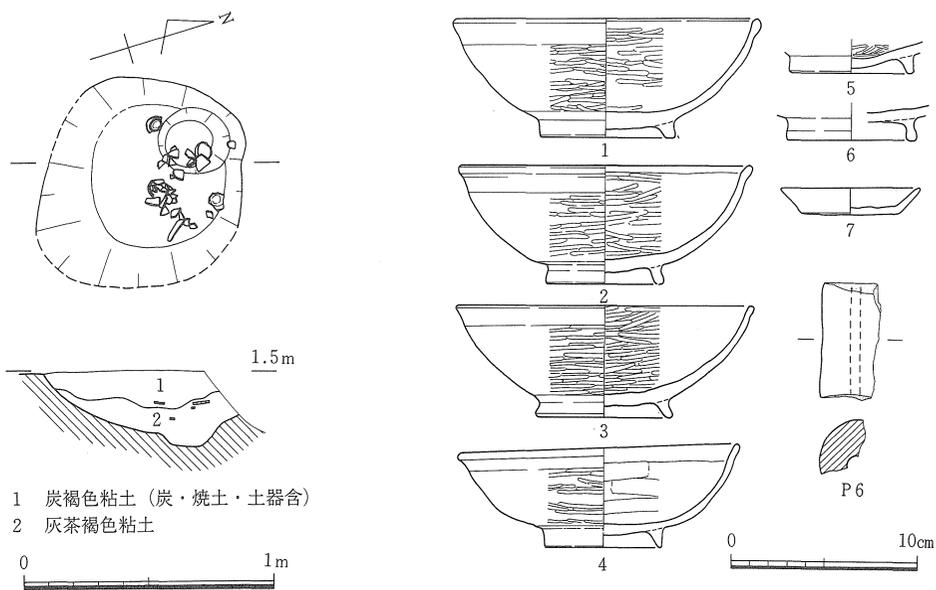
II 地点の調査

c. 土 壤

土壌-123 (図368)

本土壌はBH19区中央西寄りに位置する。平面形は径80cm前後のほぼ隅丸正方形を呈する。掘り方断面形はやや浅めの摺鉢状を呈しており、検出面の標高150cm前後、検出面から底面までの深さは約25cmを測る。さらに、底面北西部には、直径30cm弱、底面からの深さ8cm前後の円形の掘り方が存在している。柱痕部の痕跡である可能性も考えられるが、断面観察では確証は得られなかった。

土壌内の埋土は、上下2層に分かれる。1層は、灰褐色微砂粘土であり、土器のほか炭化物片や焼土塊を含んでいる。2層は灰茶褐色微砂粘土で、上層との境界は明瞭である。本層上半部からは比較的多量の土器片が出土している。本土壌からの出土遺物には、土師質碗(1~6)、同小皿(7)、土錘(P6)などがあり、本土壌は出土土器から、12世紀前半に属する。



1 炭褐色粘土 (炭・焼土・土器含)
2 灰茶褐色粘土

遺物番号	器 種	法 量 (cm)			形態・手法の特徴ほか	色 調	胎 土
		口径	底径	器高			
1	土 師 質 碗	16.0	7.1	6.4	内外面寛ミガキ, 高台部横ナデ, 口縁部煤付着	淡黄白	微砂, 精良
2	〃	15.5	6.2	6.3	〃, 〃	〃	〃, 〃
3	〃	15.7	7.3	5.9	〃, 〃, 底部内面重ね焼き痕	〃	〃
4	〃	14.9	6.2	5.5	内面工具使用ナデ, 外面寛ミガキ, 高台部横ナデ, 内外面煤付着	淡灰白	細砂
5	〃	-	6.6	-	内面寛ミガキ, 高台部横ナデ	淡黄白	微砂, 精良
6	〃	-	6.9	-	内外面ナデ	〃	〃, 〃
7	〃 小 皿	7.5	5.3	1.4	内外面横ナデ, 底部外面寛キリ, ロクロ回転◎, 内面煤付着	暗褐	〃, 赤色粒子

遺物番号	器 種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	形態・手法の特徴ほか	色 調	胎 土
P 6	土 錘	-	-	-	49	磨滅で不明	灰褐	細~粗砂◎

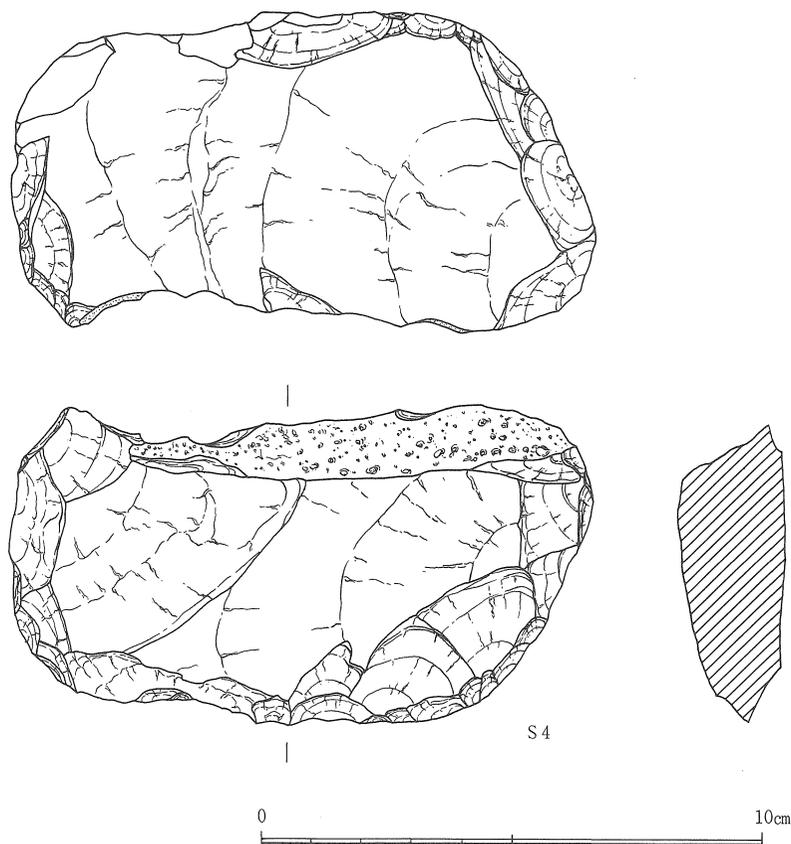
図368 土壌-123, 出土遺物 縮尺 1/30, 1/4

(5) その他の出土遺物

a. 石器

以下においては、Ⅱ地点で出土した石器類について、先に取り上げた遺構の出土資料も含めて説明を加える。(図369・370, 図版81)

打製石庖丁 (S1・2・4) S1・2 (図324) はいずれも土壌3からの出土であり、共伴土器から鹿田・後・2期に属するものと推定される。S1はa面右側縁に抉りがある長方形状を呈する。刃部を除く三辺は両面からの二次加工が施されており、刃部は素材削片の側縁側に位置し、主に主剝離面側に二次加工が施されている。刃部には光沢をもった磨耗痕が観察できるサヌカイト製である。S2は粘板岩製であるが、S1と同様a面右側縁に抉りをもつ長方形状を呈する。a面はほぼ全面が素材の自然面のままであり、両側縁に僅かに二次加工が施され



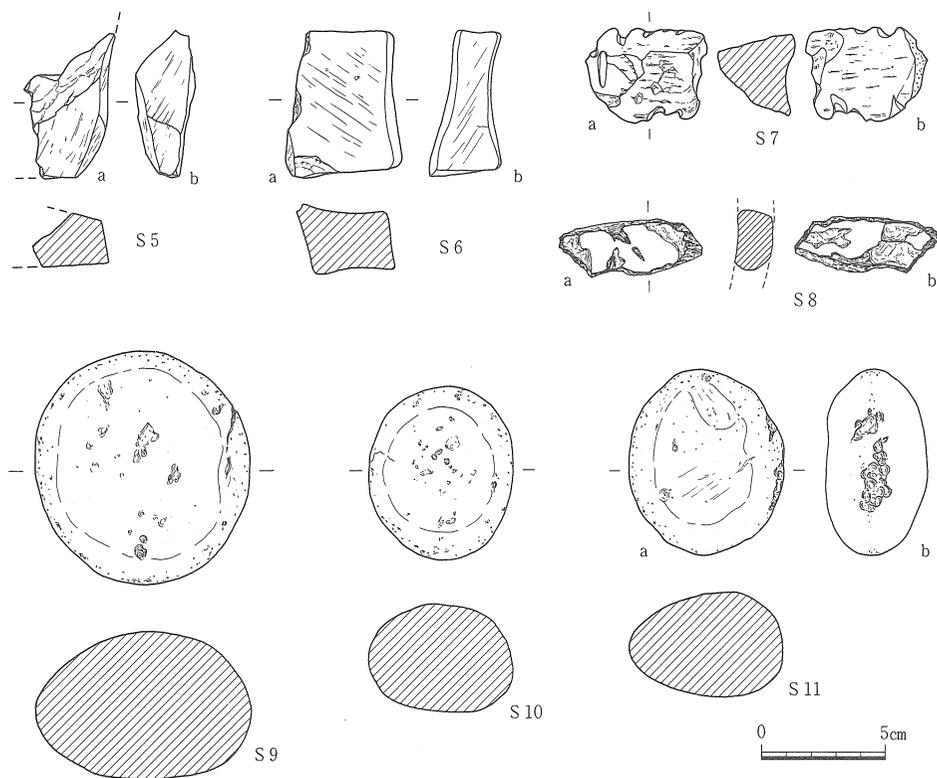
遺物番号	器種	現存長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	材質	出土地点	特徴
S4	打製石庖丁	6.4	11.6	2.2	210.0	サヌカイト	土40	大形削片素材、側面自然面残る、刃部鈍い

図369 その他の出土遺物(1) 縮尺 2/3

II 地点の調査

ており、刃部には使用痕様の微小剝離痕が認められる。b 面には大きく節理面が残存しており、両側縁および刃部に二次加工が施されている。刃部は磨耗が著しく、刃先は丸味を帯び、鈍くなっている。

S 4 は最大厚2.2cmを測る大形のサヌカイト剝片を素材とする。a 面は両側縁・上縁の一部を除いてほぼ全面に主剝離面を残している。素材剝片の左側縁にあたる a 面下縁には、平坦な自然面が残っており、その他の三縁には両面から二次加工が加えられ、刃部が作り出されている。刃部には磨耗痕が認められ、刃は比較的鈍い。本例は、大形厚手の縦長剝片を素材とするのみならず、一般に打製石庖丁が横長剝片を素材とするのとは異なった素材形態をとっている。重量も200gを越え、本遺跡群のサヌカイト遺物中では極端に重いものとなっている。鹿田・



遺物番号	器種	現存長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	材質	出土地点	特 徴
S 5	砥 石	5.6	3.4	2.1	40.0	流紋岩	包	a・b面研磨面, a面裏面は自然面
S 6	〃	4.3	5.9	2.9	84.0	〃	〃	扁平直方体状を呈す, 各面研磨面
S 7	軽石磨製石器	4.8	3.7	3.0	12.0	軽石	〃	一部を除き全面研磨, 周囲に鋸歯状の抉り
S 8	石 鍋 片	5.8	2.3	1.4	30.6	滑石	溝13	胴片部, 内外部とも削痕, 折れ面は転用研磨面
S 9	磨 石	9.2	8.5	5.9	555.5	安山岩	包	両面研磨面
S 10	〃	6.7	5.8	4.3	240.5	珧長岩	〃	全面研磨面
S 11	〃	7.3	6.2	4.1	265.0	流紋岩	〃	b面敲打痕

図370 その他の出土遺物(2) 縮尺 1/3

後・2期に含まれる。

砥石 (S5・6) S5・6は共に流紋岩を素材とする。S5は欠損品であり、詳細は不明であるが、a面下半およびb面に磨面が残存している。b面では磨面が交わって稜をなしている。S6は扁平な直方体を呈しており、b面全体が磨面となっている。a面およびその裏面は凹面状を呈している。

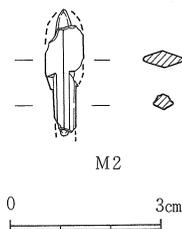
軽石製石器 (S7) S7は軽石の加工品である。平面形は不整の長方形状を呈し、断面形は三角形をなしている。a面の下半を除きほぼ全面研磨されており、b面は中央部が横方向に凹んでいる。周囲には幅2～6mm前後の溝状の挟りが計12施されている。V層からの出土である。

石鍋 (S8) S8は滑石製石鍋の破片である。胴部の破片と思われるが、その具体的な形状は不明である。a面中央およびb面の一部に平滑な研磨面を残し、他の部位は全体に磨滅し、削痕が存在している。

磨石 (S3・9～11) いずれも扁平な円球状を呈する磨石である。石質はS3(図346)が花崗斑岩、S9が安山岩、S10が珪長岩、S11が流紋岩であり、一定していない。いずれも両平面部分が磨面とみられるが、S10は側面にも磨面が存在しており、またS11には側面の一部に敲打痕を残しており、敲石としても併用されていたことが認められる。

b. その他

以上の石器以外に、包含層中(標高115cm)から銅鏃が1点出土している(図371, 図版75)。残存状態が悪く、先端部ではその芯部を残すのみであるが、茎部断面は六角形を呈すると思われる。本遺跡からは、他にI地点の土器溜り—1(鹿田・後・4期)から銅鏃1点が出土しているのみで、貴重な資料といえる。



遺物番号	器種	現存長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	材質	出土地点	特徴
M2	銅鏃	2.5	0.8	0.35	1.2	銅	包	茎部分は断面六角形、茎部両端にバリ残存

図371 その他の出土遺物(3) 縮尺 2/3

第4章 考察

1 鹿田遺跡における集落構造とその変遷

鹿田遺跡内に位置するⅠ地点・Ⅱ地点における今回の発掘調査においては弥生時代～近世の遺構が数多く検出された(表6)。それらの間にはいくつかの断続が認められ、大きく次の5時期に分けられる。

Ⅰ期(弥生時代中期後半～古墳時代初頭)：当地点における集落形成期である。比較的連続して集落が確認される。詳細は後述する。

Ⅱ期(古墳時代後期)：遺構・遺物とも全体的に内容は貧弱で、集落自体が縮小していた可能性が高い。

Ⅲ期(古代)：大形の掘立柱建物群・井戸が構築される。遺物についても墨書土器・転用硯・木簡等注目されるものが認められ、当地点に中核的集落の存在を想定させる。8世紀後半～9世紀前半と考えられる。

Ⅳ期(中世)：数多くの井戸の存在から長期間にわたる集落の営みが想定されるが、後代の削平により比較的掘削深度の浅い遺構は消失しており集落構造は不明確である。11世紀後半～14世紀前半と考えられる。

Ⅴ期(近世)：大規模な造成により水田化が進む。

表6 時期別検出遺構総数一覧表

時期	遺構名 地点	竪穴住居		掘立柱建物		柱穴列		井戸		溝		土壙		土器溜り		土器棺	
		Ⅰ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅱ
弥生	鹿田・中・3	3						1		16		86					
	鹿田・後・1																
古墳	鹿田・後・2	7	1					2	1	1	5	107	85			4	
	鹿田・後・3	3						1	2	9		21	19	1			
初頭	鹿田・後・4	4						9				35	9				
	鹿田・古・1	9						6		1		14	4	2	1		
	鹿田・中・3～古・1									31		120	1				
	計	26	1					19	3	63	5	383	118	4		4	
	古墳時代後期	1	1									11	1	1			
	古代(8～9c)			9		3	1	1	1	4	4	11	1				
	中世			6		1		13	2	3	6	6	7				
	近世							1	1	2	5	4	1				
	不明											8					
	合計	27	2	15		4	1	34	7	72	20	423	128	5		4	

ここでは、Ⅱ期以降がⅤ期における削平の影響等で集落の旧状復元が困難であることから、比較的存在状態が良好で集落の変遷を連続的に追うことが可能なⅠ期を取り上げてまとめてみたい。また、Ⅰ期段階においては、鹿田地区構内各所の土層観察から、Ⅰ地点が当集落の占地する微高地の中心部にあたるのに対して、Ⅱ地点は微高地端部に近い位置であることが推定される。そして、面積も前者は2188㎡を測りまとまった広さを持つものに対して後者は176㎡と非常に狭い。以上のことから、ここではⅠ地点を中心に検討を行い、Ⅱ地点については参考程度にとどめたい。

ただし、資料的に限定されたものであり、他遺跡の状況の検討・分析も不十分な現状でのまとめであるため問題点も多く残ると思われるが、集落の主要遺構である竪穴住居・井戸・土壙について事実関係を中心に各々検討し、最後にそれらを総括して一応のまとめとしたい。

(1) 竪穴住居（表7）

鹿田・中・3期： 当時期には3棟（住1～3）が含まれる。いずれも平面形は円形に近く、中央穴は周囲に浅い凹みを有す程度のものである。その他にB D30区の土壙67、A U34区の土壙125が竪穴住居となる可能性があるが不明瞭である。

鹿田・後・1期： 未確認である。

鹿田・後・2期： 検出された竪穴住居は7棟（住3～8・12）である。それらの同時性については出土遺物・遺構の切り合い関係等の検討から、後・2期の前半に2棟づつ（住4と5、住3と8）が、また、それらにやや先行して1棟（住7）、後・2b期に1棟（住12）、時期不明1棟（住6）が各々存在することが推定される。全体として、2～3棟が調査区内に同時併存していた可能性が高い。円形プランが主流である。中央穴は竪穴住居3（柱穴状）、同5・8（肩部に粘土・杭等を使用）において確認された。

鹿田・後・3期： 検出された竪穴住居は4棟（住9・12～14）である。その内、竪穴住居14は竪穴住居13の下層から検出されていることから、同時併存は3棟となる。竪穴住居13以外は中央穴を有す。

鹿田・後・4期： 4棟（住10～12・14）が検出されている。その他に、遺物は出土していないが検出状況から当時期の可能性が想定される1棟（住25）がある。また、南北土手（31ライン）の土層観察からA X～A Y31区で3棟の存在が確認されている。合計すると8棟を数えることとなるが、切り合い関係から同時併存は2～3棟前後と考えられ、建て替えの激しい時期と言える。いずれも円形プランを呈し、竪穴住居10～12では中央穴の存在が想定された。その内の2棟（住11・12）では貼り床面を盛り上げて形成された浅い凹部の存在が読み取れる。

鹿田・古・1期： 9棟（住16～24）が検出された。切り合い関係から同時併存は3棟までと考えられる。平面形は方形あるいは隅丸方形を呈す。中央穴は2本柱の柱間に浅い凹部を有

する程度のもの（住18）・肩部を粘土で成形するもの（住19）・柱穴状のもの（住20）がある。集落内での立地は全段階に比べ全体的に北へ移動している。

また、当時期には前述したような中央穴を有し、柱穴も明瞭に検出され、建て替えも認められる調査区東半部に位置する一群（住18～20等）と柱穴が不明瞭で、建て替えも認められず、

方形の壁体溝のみを残すよう

な調査区西半部に位置する一群（住22～23）とが存在する。

前者は比較的多量の遺物を含んでおり鹿田・古・1期に限定可能であるが、後者は出土遺物が非常に少ないため、両者が同時併存するのがあるいは存在時期に差を認めるべきであるかについては現段階では断定できない。

最後に、竪穴住居の平面形・柱穴（中央穴を含む）の数・平面積・建て替え回数について簡単な集積を表7において行った。完存する竪穴住居の数が少なく、何等かの明瞭な傾向を示すには不十分であったが、以下の点については若干読み取ることが出来た。

① 平面形については一般的に言われている円形から方形への変化が鹿田・後・4期において当調査地区内でも認められる。

② 柱穴については中央穴1本と主要柱穴4本前後が基本となるが、鹿田・古・1期以

表7 竪穴住居の変遷（I地点）

時期	番号 住一床	平面形	柱穴	中央穴	面積 (㎡)					建替
					0	10	20	30	40	
鹿田・中・3	1	円	5	1				○		1
	2	円								1
鹿田・後・2	3-1	不整隅丸円	4			■				2
	2	円	4				○			
	3	円	(5)	1				○		
	4	不整隅丸円	5-6					■		
	5-1	隅丸方	4	1					■	2
	2	長楕円	4	1						●
3	円	6	1							
6	隅丸方									
7-1	1	円								1
	2	円								
8-1	1	円	5-6	1					○	1
	2	円	5-6	1					○	
鹿田・後・3	9-1	円								1
	2	円	(2)	1						
鹿田・後・4	10-1	円	4	1				○		1
	2	円	4	1				○		
	11-1	楕円						●		3
	2	楕円						●		
	3	円						○		
	4	円		1				○		
	12-1	円	4					○		4
	2	円	4	1				○		
	3	不整円	4					○		
	4	不整円	4					○		
	5	不整円	6	1				○		
13-1	隅丸方								2	
2	隅丸方									
3	隅丸方									
14-1	?		[1]						1	
2	?									
15-1	隅丸方								1	
2	隅丸方									
16-1	方								1	
2	方									
17	隅丸方									
鹿田・古・1	18-1	方	2	1				□		1
	2	方	2	1				□		
	19-1	隅丸方	4	1				■		2
	2	隅丸方	4	1				■		
	3	隅丸方	4	1				■		
	20-1	隅丸方	[2]	1				■		2
	2	隅丸方	[2]					□		
	3	不整円	[2]					○		
21-1	隅丸方								1	
2	隅丸方						■			
22	方	(4)					□			
23	隅丸方						■			
24	隅丸方						■			
不明	25	円						○		
古墳時代後期	26-1	方	4							1
	2	方	4					□		

○円形 ⊗不整円形 ●楕円形 □方形 ■隅丸方形
 ()復原値 []残存値
 複数時期にまたがる場合は最終住居の属す時期に含めている

降には柱穴が非常に不明瞭な住居が出現する。中央穴は原則として弥生時代中期から古墳時代
 初頭を通じて存在している。中期の例は平面形が大きく浅い。

それに対して後期のものは平面形が小形化し深さを増し、肩部
 には何等かの成形が加えられている状態が遺存する例が多い。
 しかし、いずれの場合も炭化物の量は多く目だつが、壁面が火
 を受け変化したものは認められなかった。

③ 平面積は、一見、大小の竪穴住居の存在が認められるが、
 各々の1次住居段階での面積について検討するとその多くは、
 10~15㎡の間に集中しており、構築時の面積はほぼ一定してい
 ることが推定される。

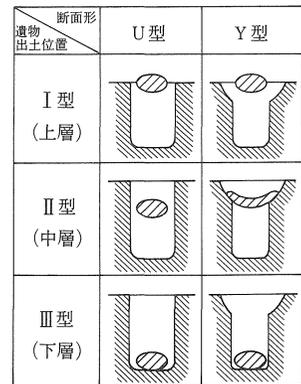
④ 建て替え回数については各時期を通じ1~2回が中心であ
 る。その中で②の項で述べた柱穴が不明瞭な竪穴住居について
 は建て替えが行われていない例が、多く、他の住
 居とやや異なる一群をなす。

(2) 井戸 (図372・表8)

井戸としての機能が想定される遺構は全部で18
 基検出されている。それらの変遷を考える上でこ
 こで問題としたい点は、集落内での位置・同時存
 在の数・掘削形態・遺物の検出状況である。また、
 その中で掘削形態・遺物検出状況については平面
 形・断面形・遺物出土位置・遺物の器種構成の4
 点に細分できる。平面形は鹿田・後・2期および
 3期にテラス状部分を有す傾向がある以外は各時
 期を通じて円形が主流であることから、①断面形
 ②遺物出土位置 ③遺物の器種構成について分類
 を行った (図372・表8)。まず、分類法について
 説明を加えたい。

①に関しては、井戸12に代表されるU字形と、
 井戸3に代表される上部が摺り鉢状を呈し、下部
 に筒状部を有すY字形に分類される。

②に関しては、井戸内において特に目立って多
 量に集中する場所、あるいは完形品にごく近い遺



○ 遺物出土位置

図372 井戸類型概念図

表8 井戸類型一覧表

時 期	遺構番号	型 式	備 考
鹿田・中・3	1	U	ベンガラ含む
鹿田・後・2a	2	U III d	井筒有す
	3	Y II a・III b・d	
鹿田・後・2b	1 (II地点)	Y II a	
	2 (II地点)	〃	
鹿田・後・3	3 (II地点)	〃	
	4	Y II a	
鹿田・後・4a	5	U	
	6	Y II a・III b	
	7	Y II a・III b	
	8	Y III c	
鹿田・後・4b	9	Y II a・III b・c	人面線刻土器
	10	U I a	
	11	U I d	
	12	U III c	
鹿田・古・1a	14	U I a・III b・c	
	15	U I a・III c	
	16	U III b・c	
	17	U III b・c	
鹿田・古・1b	18	Y III b	

物が置かれる場所を示す。上層・中層・下層に分類可能で、上層は遺構上面から深さ10～30cm付近を指し、井戸廃棄後の流入土の要素が強い。下層は井戸下半に厚く堆積する粘土層、中層は上層と下層の間層で炭・焼土等を多く含む例が下層同様に確実に人為的埋土と判断される層である。上層をⅠ・中層をⅡ・下層をⅢと略称する。2ヶ所に存在するときは、主となる方を前に記述した。

③に関しては、主要器種（壺・甕・高杯・鉢）を全て含む場合をa、壺が主の場合をb、甕が主の場合をc、高杯が主の場合をdと略す。目立った遺物を含まないものは①の略号のみとした。

①は井戸掘削時の状況を示すものであり、②・③は井戸廃棄時あるいは廃棄後の状態（井戸廃棄形態）を現すと考えられる。特に、②のなかでⅠ型については遺物は井戸廃棄後その上部の凹みに堆積した流入土内に集中していることから井戸と直接的に結びつくとは考え難いが、Ⅱ・Ⅲ型については完形品の多さ・器種的片寄りの存在・井戸14に見られるような不自然な遺物出土状態（205頁）等から故意に埋置されたと想定したい。そこには井戸廃棄時の祭祀的要素が強く反映されている可能性が高いと考える。

以上のことを前提に時期を追って具体的に検討したい。

鹿田・中・3期，鹿田・後・2期： いずれの井戸も当調査区東半部、つまり微高地の中心部寄りに検出され、複数の竪穴住居に囲まれた位置に在る。中期の井戸は1基である。また、鹿田・後・2a期に属する井戸は2基であるが出土遺物から両者間に僅かな先後関係が考えられること・竪穴住居においても切り合い関係から少なくとも相前後する二時期が存在することから一時期に1基の井戸の存在が想定される。鹿田・後・2b期には遺構数が減少し井戸も検出されていない。Ⅱ地点では1基が認められるのみである。集落内での位置・数の面では大きな変化はないと思われる。

次に、形態については鹿田・中・3期ではU型をとるが、ベンガラを多く含む通常の土層堆積状態とは異なっており内容が特異であることからここでは保留する。鹿田・後・2a期についてはU型・Y型の両タイプが認められる。U型は時期的に古い傾向が認められる井戸で井筒を有している。やや新しい傾向のある井戸はY型である。また、Ⅰ型は存在しておらず、Ⅱ型あるいはⅢ型そしてa型あるいはd型が中心である。全体として画一的ではないが新しい段階にYⅡa型が中心となる傾向は想定し得る。統一性に欠けることとd型（高杯）が附随していることに後・2b期以降との差が認められる。鹿田・後・2b期はYⅡa型となる。

鹿田・後・3期： Ⅰ地点では1基が検出されており、数の上で前段階との差は認め難い。Ⅱ地点では狭い範囲内で2基が検出された。しかし、その内1基は遺物量が非常に少ないため

両者の同時性については明言できない。

形態についてはYⅡa型が中心であるが、Y型の中でもⅡ地点の井戸3に見られるように遺物をほとんど含まないものも出現し、井戸間には遺物面で大きな格差が認められる。

鹿田・後・4期： 集落内での位置・数・形態等において変化が顕在化する。

位置の点では、従来は微高地の端部に近く遺構数も全体的に少なかった調査区西半区域への進出、そして竪穴住居の北への移動に伴い井戸が竪穴住居群の南に位置する傾向が現れ始める。数においても、詳細な時期については問題が残るが、ごく接近した時期に少なくとも3基前後の併存が考えうる。同時併存の可能性も持つ竪穴住居は各時期を通じて3棟前後であることから、各住居に1基ずつ対応するだけの数に達したことになる。

鹿田・後・4a期は鹿田・後・3期と同様の傾向を示す。つまり、YⅡa型が中心をなし、遺物をほとんど含まない井戸がU型に変化して加わる。井戸8に関してはやや例外的な掘り方を示すが、少なくともU型には成り得ない。Y型の変形と考えたい。

鹿田・後・4b期に入ると前段階までの状態とは異なり、U型およびⅠ型・Ⅲ型の増加が認められる。Y型からU型へ、Ⅱa型からⅠ型およびⅢb・c型への変化である。しかし、新傾向のU型井戸は数の上ではY型を凌駕してはいるが、遺物の出土状態は前述したように井戸の廃棄に直接的に結合するとは考え難いⅠ型であるのに対して、唯一Y型をとる井戸9では壺の割合が高く、人面線刻付き高杯・丹塗り土器を含むなど、遺物面から依然としてYⅡ型の優位が考え得る。

鹿田・後・4b期最終末になると、従来のYⅡa型は姿を消し次段階の鹿田・古・1期の中心となるUⅢc型が出現して以後定着する。前段階の後・4a期にはU型はⅠ型と結び付いており、そこに祭祀的要素を強く見いだすことは困難な状態であったが、本段階にはⅢc型との結合によりU型が従来とは変化した祭祀性を示し始めたことが窺われる。

鹿田・古・1期： 前段階に起こった変化はその傾向を強めながら安定する。つまり、北側に住居群・南側に井戸が配される状況が明瞭となる。井戸はある程度の間隔を有して東西に並び、AY～BAライン間に集中する形をとる。数も同時期の竪穴住居と同数値に近い。また、形態面ではUⅢc型あるいはUⅢb・c型が中心となり、それにⅠ型が加わる程度で非常に安定した状態となる。出土遺物からみた井戸間の格差は小さい。

以上のように概観すると、鹿田・後・3期から起こる平面的拡大と数の増加、そして、それに続いて鹿田・後・4a期から4b期に認められるYⅡ型からUⅢ型への変化が注目される。

ところで、前述したようにⅡ・Ⅲ型には祭祀的要素が認められ、また、器種的にはⅡ型はa型とⅢ型はb・c型あるいはc型と強く結びついていることから、Ⅱ型からⅢ型への変化は具体的には高杯・鉢を中心とした井戸祭祀から甕を中心とした井戸祭祀への変化とも言えよう。

つまり、鹿田・後・3期から後・4期において進行する複数住居に1基の井戸（共有の井戸）から単一住居に1基の井戸（各竪穴住居の井戸）へという集落内における井戸と竪穴住居との関係の変化（井戸管理形態の変化）が、井戸祭祀形態の変化、具体的には共有の井戸における高杯・鉢を中心とした祭祀（Ⅱ a 型）から各竪穴住居の井戸における甕を中心とした祭祀（Ⅲ b・c 型）への変化をもたらしたのではないだろうか。

(3) 土 壤（表9～15）

総数383基が検出されている。その時期別の内訳は表6のようになる。

数量的には、鹿田・中・3期から鹿田・後・2期にかけての土壌が多く、鹿田・後・3期以降は減少する傾向が認められる。また、各時期を通じて竪穴住居、井戸等との位置関係に大きな変化は認められない。

次に、機能的な面から検討してみたい。機能について考える要素としては、平面形・断面形・規模・包含物等が挙げられる。その中で、平面形・規模についてはその検出レベルの問題があり本来の姿をどこまで遺存させているかは明瞭でないため、ここでは埋土中で特に目だつ包含物（遺物を含む）に注目して土壌を、①炭・焼土を多量に含む土壌（表9）、②塊状に粘土を集中的に含む土壌（表10）、③礫（径1～6cm）を多く集中的に含む土壌（表11）、④遺物を多量に含む土壌（表12・13）、⑤遺物をほとんど含まない土壌（表13）、⑥製塩土器を多く含む土壌（表14）、⑦ガラス滓を含む土壌（表15）、⑧ベンガラを含む土壌（墓を含む）に分類した。

各表のその他の包含物の項の表記方法は、◎：夥多，○：普～多，△：少，×：僅か，

表9 主要包含物別土壌一覧表 (1)炭・焼土

土壌番号	地 区	その他の包含物		時 期
		土器	礫	
26	BA29	△		鹿田・中・3期
67	BD30	△		〃・〃・〃
104	AY33	○		〃・〃・〃
199	BA35	○		〃・後・2 a 期
236	BA36	○	○	〃・〃・〃
135	AW34	×		〃・〃・〃 2 期
151	AY34	△		〃・〃・〃
239	BA36	×		〃・〃・〃
9	BA・BB 28	△		〃・後・3期
27	BA29	△		〃・〃・〃
79	BA32	×		〃・〃・3～4期
13	AX29	×		〃・〃・1～4期
371	AY39	○		〃・古・1期
191	AZ35			〃・中・3～古・1期

表10 主要包含物別土壌一覧表 (2)粘土

土壌番号	地 区	その他の包含物			時 期
		炭化物	焼土	土器	
160	BA・BB34			△	鹿田・中・3期
357	AW39	△	△	○	〃・〃・〃
105	AY33	○	○	◎	〃・後・2 a 期
157	BA34	◎	○	△	〃・〃・〃
193	AZ35			×	〃・〃・〃 2 期
8	BA28・29			○	〃・〃・〃 3 期

表11 主要包含物別土壌一覧表 (3)礫

土壌番号	地 区	その他の包含物			時 期
		炭化物	焼土	土器	
176	AX35			×	鹿田・中・3期
82	BA32	◎		◎	鹿田・後・2 a 期
87	BB32	○	○	○	〃・〃・〃
147	AX33・34	△	○	◎	〃・〃・〃
264	AX37	○	○	◎	〃・〃・〃
268	AY37	○	○	○	〃・〃・〃
155	AZ34	○	○	○	〃・〃・〃 2 b 期
92	BC32			○	〃・〃・〃 2 期
93	BC32	◎	◎	○	〃・〃・〃
169	AW35	◎	○	○	〃・〃・〃
198	BA35	○	○	○	〃・〃・〃

て炭・焼土も同一層内かその上下層内において顕著である。意図的に礫が埋められたことは明瞭であるがその性格については不明である。

④ 遺物を多量に含む土壌である。掘り方内は多量の遺物が充満し、一括廃棄された様相を呈す。大半は炭・焼土を共伴するがその量はごく少なく、ほとんど単一土層の状態である。平面形は円形あるいは長楕円形を呈し、前者の掘り方は深く、後者は浅い皿状に近いものが多い。遺物面で器種的な片寄り認められない。遺物を埋めることを目的とした土壌と考えられる。

ここで、遺物を多く含む土壌と非常に少ない土壌の数および各時期の土壌総数内に占める割合を示した表12を検討してみたい。鹿田・後・3期の土壌は、一部に柱穴の可能性が非常に高いものを含んでいる。それらを考慮に入れると、鹿田・後・2期以外の時期における遺物を多量に含む土壌が各時期の総土壌数に占める割合は各々30%以下に納まる。それに対して、鹿田・後・2期にはそれは61.7%に昇り、他時期に対する優越は明瞭である。鹿田・後・2期における遺物量の多さ、そして、その廃棄方法として土壌が使用される場合が多かったことが窺われる。

⑤ 遺物をほとんど含まない土壌については形状も様々であり、埋土の状態にもこれという特徴は認められない。存続期間にも片寄りはない。分布状況は、Ⅰ地点では微高地の落ちに向かう調査区西半に多い。また、Ⅱ地点には総土壌数に対して当タイプの土壌の占める割合が非常に高い。Ⅱ地点はⅠ地点と比べ全体的に遺物が質・量ともに非常に貧弱な状態を示し、周囲の地形からみても微高地の落ち際、集落の端部に近い場所に位置していると考えられる地点である。以上の状況から当タイプの土壌は住居群からやや離れた集落周辺地域に弥生時代を通して利用されたことが想定される。そうした点に機能に関する何等かの意味があることも考えられるが具体的には不明である。

⑥ 製塩土器を多量に含む土壌である。いずれも炭・焼土を多量に伴い、他に径数mmの花崗岩碎石あるいは円礫を含む。その他に、粘土を含む場合もある。鹿田・中・3期に1基、後・2期に6基、古・1期に1基が各々確認されているが、鹿田・中・3期とした土壌162に^(註3)時期的に疑問点が残るため、^(註3) 確実には鹿田・後・2期から古・1期にかけて連続と存在すると考えられる。その中でも鹿田・後・2期には特に多い。機能については、埋土に多量の炭・

表14 主要包含物別土壌一覧表 (5)製塩土器

土壌番号	地 区	その他の包含物				時 期
		炭化物	焼土	細礫・ パラスト	粘土	
162	BD34	◎	◎	◎	○	鹿田・中・3期
28	BA29	○	○	○	○	々・後・2期
54	AZ・BA30・31	◎	○		○	々・々・2a期
71	AX31	◎	◎	◎		々・々・2期
109	AZ33	◎	◎	◎	◎	々・々・2a期
149	AY34	◎	◎	◎		々・々・々
235	BA36	◎	○			々・々・2期
142	AX34	◎	△	◎		々・古・1期
353	BA38	○	○	◎		々・中・3~古・1期

表15 主要包含物別土壌一覧表 (6)ガラス滓

土壌番号	地 区	その他の包含物				時 期
		炭化物	焼土	礫	土器	
318	AX・AY38・39	○	○	△	◎	鹿田・中・3期
202	AU36	○	◎		○	鹿田・後・4a期

焼土を含んでおりながら土壌の壁に焼成痕跡が認められない等の点から二次的な堆積状態を呈していると判断され、当土壌によって直接的に土器製塩が行われたと考えるよりは土器製塩終了後の廃棄物処理に使用された土壌と考えたい。しかし、少なくとも当調査地区のごく近い周辺部において弥生時代後期から古墳時代初頭にかけて土器製塩が行われていた可能性は非常に高いことが窺われる。

⑦ ガラス滓を多く含む土壌で数量的には少なく土壌318・土壌202のみである。鹿田・中・3期と後・4期に1基ずつ検出されている。他の土壌が微高地の東より、つまり、高い方に位置するのに対して、地形が下降状態に向かう西側において検出された。包含物は製塩土器を多く含む土壌とよく似ており、炭・焼土が特徴的である。埋土の状態から製塩土器の土壌と同様に集落周辺部で実施した作業終了後の廃棄物を投棄した土壌と考えられる。

⑧ ベンガラを含む土壌は3基(土192・230・234)検出された。他の包含物に特異なものは確認されなかったが、掘り方の状態などからいずれも墓の可能性を持つと見られる。その他にベンガラは含まないが掘り方から墓とみなされる土壌1基(土231)を含め、墓の可能性が認められる土壌は4基となる。時期は鹿田・中・3期に2基(ベンガラを含む)、後・2期に1基、後・4期に1基である。位置はAY・AZ36付近に集中する。また、埋葬遺構としては他に土器棺1～4があるがいずれも鹿田・後・2a期にのみ認められる。

以上のように、いくつかの土壌の機能を想定したが、その状態が弥生時代を通じて定着しているわけではないと考えられる。様々な機能が土壌という形で発揮されるのは当調査地区においては、鹿田・中・3期から鹿田・後・3期にかけてである。特に、鹿田・後・2期が最盛期であり、鹿田・後・3期に入るとそれらは既に減少傾向を示し、鹿田・後・4期まで残るのは土器製塩の関係・ガラス関係・無遺物の土壌のみである。このように、土壌は鹿田・後・3期前後で大きな変化を見せる。集落内で行われる様々な行為がいずれも土壌という形で納まっていたものが、分離独立し別形態を採っていく状況が想定される。ここで、調査区域の限界性の問題が危惧されるが、他の主要遺構(堅穴住居・井戸等)に前段階の位置からの大きな移動が認められないことから、土壌の持つ機能変化の可能性は高いと考える。

(4) ま と め

以上、堅穴住居・井戸・土壌についての検討を行った。最後に調査区内における各時期の状態の概略を述べてまとめとしたい。

鹿田・中・3期： 1基の井戸の周囲に3棟前後の堅穴住居が存在する。周辺には各種の機能を有すると考えられる数多くの土壌が調査区全域に広がる。その中には墓壇の可能性を持つものもある。

鹿田・後・1期： 調査区内において遺構はほとんど未検出の状態である。詳細は不明であ

るが、出土遺物の中に確実に当時期に含まれる高杯の小片（包含層出土）が認められること、当時期の可能性を有す遺物片を僅かではあるが出土する土壌が1基あるいは2基は認められることなどから今回の調査区周辺に確実な遺構群が存在する可能性は高い。

鹿田・後・2期： 微高地の落ちに近い西側に集落を東西に区切る溝が出現し、基本的にはその東側に中期と同様の状態が広がる。3棟前後の竪穴住居に対して1基の井戸が同時併存し、その周囲に存在する土壌は中期以上にその機能を分化させ様々な形で活用された様子が窺われる。また、遺物量も急増しており、全時期を通じて最盛期となる。それに伴い遺物内における器種の増加・同一器種内でのバリエーションの増大が認められ、小地域差（集落差）の表出が強く認められる。特に、鹿田・後・2a期にそうした傾向が強い。

鹿田・後・3期： 遺構の分布状態は前段階同様に東側に中心を持つが、調査区内に遺構数が少ないため集落内での状況はやや不明瞭である。井戸についてもその廃棄形態等にも変化は認められない。一方、土壌は数量及び機能の減少傾向が現れ始める。特に、遺物を多く含む土壌の急減は著しい。また、遺物の面で注目されるのは口縁部を上方に拡張した甕D^(註4)（井戸4—10）の出現である。内面の篋ケズリ方向の違いなどに従来の甕とは異なる要素が認められる。全体の遺物量の中で占める割合はまだ僅かであるが、次段階以降、甕の中で主流となって行く土器である。

鹿田・後・4期： この時期には様々な点で大きな変化が認められる。まず、竪穴住居では数の面では相変わらず一時期に3棟前後の同時存在が想定されるが、それらの位置は全体的には調査区内の北側へ中心を移す。切り合い関係も激しく短期間での建て替えが考えられる。前段階に居住区の西側を区切っていた溝はこの段階には消失し居住区域の拡大が予想される。それに伴い井戸は従来まで認められなかった西側へも進出を開始し数も増加する。集落の共同管理的性格の強いとみられる井戸から各竪穴住居の数に対応するくらいの数に至る。廃棄形態についても従来のYⅡa型にUⅠ型・UⅢc型等が加わり、鹿田・後・4b期の最終末段階、つまり、古墳時代にはいる間際にはほぼ後者のUⅢc型に変わる。そこに祭祀形態の変化を認めたい。土壌では前段階に始まった機能の減少とそれに伴う数の減少が継続する。特に、遺物廃棄土壌の減少は注目される。一方、大規模な土器溜りが出現し、遺物の集中廃棄が認められる。

鹿田・古・1期： 前段階の変化がほぼ終了し安定した状態となる。竪穴住居については、当時期に新たに開始されるものが多い。また、調査区内のより北側に移動し、全体として小形・方形化傾向を示す。井戸はUⅢb・c型が主流となる。竪穴住居の移動の結果として両者は南北に分離した状況を呈す。土壌は土器製塩関係のみとなる。鹿田・後・3期に初現を見る口縁部を上方に拡張する甕Dは急増し、出土遺物の中で大きな割合を占める。搬入品も増加するが、前段階とはやや様相が異なり、畿内的なものが主流となる。

以上のように、堅穴住居の数は全時期を通じて変化しないのに対して、井戸は鹿田・後・3期から後・4期にかけて急増し、管理形態の変化・祭祀上の変化が認められる。一方、土壙は、逆に、鹿田・後・3期を境に急減し機能を減少していく。その中で土器製塩に関する土壙のみは集落の存続する間、途切れることなく認められ、集落内で多く出土する土錘・石錘と共に海浜集落の様相を端的にみせてくれる。また、土壙の変化と共に遺物の状態にも変化が認められる。鹿田・後・2期には遺物量が非常に多く小地域差の表出が目立つが、その後は、そうした集落の独自性を急激に失い画一的な方向へと進む。特に、鹿田・後・3期に出現する口縁部を上方に拡張する甕Dはその傾向をより急速に進める。

鹿田・後・2期に認められる小地域性の存在、つまり、各集落の独自性が鹿田・後・3期には土壙の減少・大規模な土器溜りの出現・遺物の画一化傾向の中で失われて行き、鹿田・後・4期には遺物面のより一層の画一化および井戸の管理形態・祭祀形態の変化から考えて従来の集落構成が新段階（鹿田・古・1期）の体制へと再編成されて行くとみられる。当調査区内において見られるこうした変化は弥生時代から古墳時代に至る社会的変動の一端を示すものと考えたい。

(山本 悦世)

註

- 1 本報告 391・392頁
- 2 中野氏は古墳時代初頭の井戸を取り上げて集落の共同施設としての井戸の性格を見直し、個々の“家”との個別的关系、井戸廃絶時の“家”単位の祭祀を想定している。
中野雅美「第4節 古墳初頭の井戸について」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書』59 1985 429～431頁
- 3 土壙162出土の製塩土器は量が多いが何れも粉々の状態の細片であるためそれ独自に時期決定は出来ない。製塩土器以外の遺物としては鹿田・中・3期の土器片が少量あるのみである。しかし、中期の土器は新しい遺構に混入することは往々にして起こりうるため、確実に当土壙が中期に属するとは言いがたい面がある。
- 4 本報告387頁

2 鹿田遺跡の弥生～古墳時代初頭の土器

今回の調査では弥生～古墳時代初頭の土器が多量に出土した。ここでは鹿田遺跡の当調査地区において設定した各時期の土器の概略を簡単に説明し、若干の考察を付け加えたい。取り上げる器種は、鉢形土器にも時期差・地域差の存在が予想されるが今後の課題とし、ここでは壺形土器・甕形土器・高杯形土器に限定する。また、基本的にはⅠ地点の出土遺物を資料とし、特記しない限りはⅠ地点の資料とする。

(1) 各時期の概略（附図10・11）

鹿田・中・3期

当時期は竪穴住居1（図11・12）・土壙117（図26～28）の出土土器を指標とする。

〈壺形土器〉 最も出土量が多いのは長頸壺である。長頸壺には頸部から口縁部にかけて屈曲気味に大きく外反するもの（住1—1）と、直線的に外に開くもの（土117—1）とが認められる。いずれも頸部及び上下に拡張した口縁部にしっかりした凹線を持ち、外面には棒状浮文・二重竹管文・列点文等による装飾が施される。前者の中には、量的には少ないが、頸部に凹線を有さず装飾も乏しいタイプ（土117—7）も認められる。

短頸壺は甕形土器にごく近いもの（住1—9）で、口縁部には凹線が施されるが、頸部には凹線がなく装飾も少ない。

その他に、出土量は少ないが、無頸壺（井1—1）、台付壺等がある。

〈甕形土器〉 口縁部は上下に拡張され凹線が施される。内面の篋ケズリは胴部下半のみで、外面にはタタキ痕が残るものもある。底部成形には凹底・平底・凸底が認められる。

〈高杯形土器〉 口縁部に数条の凹線を有すものと、端面をT字形に成形して凹線を有さないものがある。透し孔は三角形で、貫通・未貫通の両者が認められる。

当時期は甕の口縁部の凹線の数・折り返した状態、また、高杯の口縁部の凹線の有無・脚部の開き具合等に新・旧の時期差が認められるものも確認されているが、良好な遺構によって分離することは出来なかった。ここでは鹿田・中・3期として大きく捉え、細分については今後の課題としたい。

鹿田・後・1期

確実に当時期に入るとみられる一括遺物は認め難く^(註1)、将来の資料の増加を待ちたい。

鹿田・後・2期

2 a期と2 b期に細分される。前者は井戸2（図58）・井戸3（図60～64）を、後者はⅡ地点の井戸1^(註2)（図316～318）の出土遺物を各々指標とする。

〈壺形土器〉 長頸壺・短頸壺・無頸壺がある。長頸壺には2 a期の主流をなす口縁部を横に強く張出すタイプ(土器棺4—1・土118—1)と上下に拡張するタイプ(土器棺2—2・3)とがある。後者の出土数は少ない。前者は筒状あるいは上方にやや開く長めの頸部から強く外反する口縁部を有す。古い段階では緩いカーブを描いてラッパ状に外反する程度であるが、新しくなるにつれて外反の度合は強まり、2 b期にはほぼ直角になるまで屈曲する。また、頸部のカーブが「ハ」の字形に変わる傾向を示し始めるのも2 b期に入ってからである。口縁部には2条程度の凹線を有するもの(土118—1)と横ナデのみで凹線を有さないもの(井3—1)とがある。また、多条の頸部沈線が一般的であるが、施されない場合(土284—1)もある。頸部下端には列点文あるいは刻み目張り付け凸帯文が巡る。一方、後者では頸部は短めでほぼ垂直に立ち上がり屈曲して口縁部に至る。口縁部の凹線は数条認められ、前者に比べ多い。

短頸壺では口頸部を上下に拡張して凹線を有すもの(井3—3)と横に張り出して横ナデのみのもの(土96—1)がある。胴部形においてもほぼ円形を呈すものと胴径が器高を凌駕して胴部の張りが大きく楕円形を呈するものが認められる。胴部最大径の位置は2 a期から2 b期にかけて下降傾向を示す。

無頸壺の出土は少量である。長頸壺の頸部以下とほぼ同じ特徴を有す。2 a期の古い段階までは確認されており、口縁部に施される凹線はやや幅広である。(土器棺4—2)。

〈甕形土器〉 口縁部は頸部から上方に緩やかに外反する。新しくなると頸部から口縁部へのカーブは大きく屈曲して外反を始め、2 b期には「く」の字形に屈曲して直線的ラインを示す。口縁端部は横に強く張り出すタイプ(甕A)と僅かに内傾するタイプ(甕B)があり、それぞれにつき凹線を有すもの(甕A I型・甕B I型)と凹線を有さないもの(甕A II型・甕B II型)が存在する(図373)。口縁端面が上方を向くタイプにはより古い傾向が認められる。底部は凹底・平底が有り、2 b期には前者が中心となる。外面のハケメは工具使用のナデ状を呈し、非常に浅く細かいものが多い。また、2 b期にはI型(口縁部凹線有り)の減少が認められ、II型(口縁部凹線無し)が中心となる。

〈高杯形土器〉 大形と小形とがある。大形のものの特徴は次のようである。

2 a期では、杯部は大形で浅い受け部に緩く外反する口縁部を有す。脚部は脚柱部から屈曲しないで大きく裾広がりとなるもの(井2—7)と脚柱部から緩く外反して裾部に至り、やや立ち上がったラインを呈するもの(井3—29)とがある(図373)。前者(高杯A)のタイプには脚柱部に2段ないし3段にわたって数条の沈線文帯および円孔が施されるものが中心であるが、他に装飾のないもの(井3—35)も僅かながら認められる。円孔の数は4個以外の不規則な例が多い。後者(高杯B)のタイプには1段の沈線文帯と4個の円孔を有すもの(井3—29)、沈線が無く円孔のみのもの(土60—29)がある。両タイプ(高杯A・高杯B)とも脚柱

部は絞られたものが中心である。また、杯部と脚部の接合は基本的には組合せ手法に近いものである。杯部側から非常に小形化した円盤状の粘土が脚頭部に詰められ、接合部外面に粘土帯が巻き付けられるもの(註5)が比較的多く認められる。

小形の高杯では杯部が椀状のものが多く、赤褐色を呈する精良な胎土を使用するもの（井3—31）も含まれる。

2 b期になると口縁部は2 a期以上に外反の度合を高め、非常に浅い杯部をなす。完全に絞りきられた脚柱部はその下端部で強く外側に屈曲して裾部に続く。大きく外彎して裾部に至る2 a期の器形とは区別される。円孔は4個になり全体的に定形化する。

鹿田・後・3期

当時期は井戸4（図135～137）・竪穴住居9（図122）の出土遺物を指標とする。

〈壺形土器〉 長頸壺の頸部はやや短小化し、胴部に向かって「ハ」の字形に大きく開く。口縁部は頸部から屈曲して強く外反し直線的ラインを呈す。端部は上下に大きく拡張されており、強い横ナデによる凹凸が巡る。また、上下の拡張の少ない口縁端面に凹線が施され、プロローシヨンの的にもやや古い傾向を持つもの（井4—1）も残る。頸部に沈線及び列点文が巡るもの（Ⅱ地点 井2—1）と装飾が施されないもの（住9—1）とがある。

以上の他には、やや長めの頸部から緩く外反して素縁で終るもの（土21—1）、ごく短い口縁部が直立し、大きく張り出した胴部を有す無頸壺（土21—2）等がある。

〈甕形土器〉 従来からの系譜上にあると考えられる口縁端部を上方につまみ上げるもの（甕C）・口縁部が緩く外反し端部が素縁で終るもの（甕E）のほかに、量的にはまだまだ少ないが、新たに口縁部を特に上方に拡張し二重口縁状を呈すもの（甕D）が出現する（図373）。各タイプの代表例としては、甕C：井戸4—9、甕D：井戸4—10、甕E：井戸4—5が挙げられる。甕Cの口縁部には横ナデによる条線が僅かに残るが前段階同様にⅡ型が主流をなす。ところが、新出の甕DにはⅡ型（井4—10）のほかにⅠ型が認められ（住9—2）、その後の主流となる。このⅠ型は鹿田・後・2期のⅠ型が沈線化しているのに対し凹線的傾向が強く、区別されるものである。また、甕Dについて認められる胴部内面上半の横位篋ケズリ方向の変化は特に注目される。つまり、従来の壺・甕及び他の型の甕では左回りの篋ケズリ(註6)がその主流をなしているのに対して、甕Dではほとんどが右回りの篋ケズリ方向を示している。

〈高杯形土器〉 口縁部が緩く外反するもの（井4—14）と直立するもの（井4—16）が認められる。脚部は短脚化し、胎土も鹿田・後・4期にごく近い赤褐色の精良な胎土となる。杯部の篋ミガキは当時期までは縦位に認められ口縁部外面には波状に施される例が多い。法量は大小の2タイプがある。

今回の調査で出土した遺物は高杯では胎土がほとんど水漉し粘土である点、脚柱部の短縮化

が進んでいる点、長頸壺についても口縁部の上下の拡張が目立つ点等から次段階の鹿田・後・4期に近い特徴があり、前段階の鹿田・後・2b期との間に格差が認められる。また、周辺地域の出土遺物との比較検討^(註7)からも、今回報告の鹿田・後・3期の資料は3期の中でも新相に位置し、鹿田・後・2b期との間に古相が存在する可能性が高いことが窺われる。しかし、現段階では古相の資料が未確認であることから時期の細分については今後の資料の増加を待つことにする。

鹿田・後・4期

4a期と4b期とに細分される。4a期の指標としては井戸7(図145~147)、4b期の指標としては井戸10(図155・156)、そして最終末期に井戸12(図160・161)の出土遺物が挙げられる。

〈壺形土器〉 全体的に壺の出土量は少なく4a期・4b期の間に大きな差は認められない。口縁部は上方に立ち上がる傾向を強くみせ、頸部は短頸化し「ハ」の字形に開くもの(井10—1)と甕に近い形をとる短頸壺(井13—1)とがある。頸部沈線は消失する。胴部は球形化し、しっかりした平底を呈す。

〈甕形土器〉 4a期には前段階の鹿田・後・3期に認められた甕C・Dのほかに甕F(図373)が出現する。甕Fは口縁部が「く」の字形に折れ曲がり、口縁端部は大なり小なり端面を有す。底部は丸みを持つ傾向があり、全体的にシャープな仕上がりが多い。外面の調整にはハケメあるいはタタキ調整がなされる。胎土が共伴する他の土器のものとは異なり特徴となる例が多い。諸状況から搬入品の可能性の高い土器である。各タイプの全体の出土量に占める割合としては甕Dが増加し、甕C・甕Fを合わせたものと同率程度となる。

甕Dは口縁端面に約3条の凹線が深く刻まれる。口縁部の下方への拡張は依然として認められる。口縁部は相対的に厚手であるが、全体的には器壁は薄くなり器表面の砂粒の動きは少なくなる。また、前段階に比べると胴部の張りが大きくなり、最大径の位置は肩部よりやや下がる。そのため頸部がしまった形状となる。胴部から底部へのラインも僅かながら丸みを持ち始めるが、底部は比較的大きめの平底でシャープさが残る。胴部内面上半の横位の篋ケズリは右回りである。

甕Cでは口縁端面はほぼ垂直に立ち上がる。甕Dに比べて胎土は粗く器壁も厚い。また、胴部内面上半の篋ケズリも従来と同じ左回りである。この様な口縁部の形状・調整方法から甕Cについては伝統的な流れの中で捉えられると考える。

甕Fは当時期に属するものはそのほとんどが井戸7—5(図145)、土器溜り2—18~22(図188)のタイプである^(註8)。つまり、口縁部は「く」の字形に強く折れ曲がり、シャープな仕上がりを見せ、肩部はナデ肩を呈し、底部はすでに小形化・丸底化の傾向を示す。胴部内面上半は押圧が顕著に認められる。胎土は金雲母を多く含み、茶褐色を呈し特徴的である。以上の点か

ら、従来の甕とは多くの点で相違しており在地のものとは考え難く、搬入品と考えたい。当時期に入って、搬入品がまとまった量で認められることは注目に値する。

次に、4 b 期では甕Dが主体となる。甕Dは口縁部に凹線を有さないもの（井10—2）も認められるが基本的にはしっかりした凹線が施される（井10—3）。口縁部は4 a 期に比べると下方への拡張は弱く、上方への立ち上がりが強まり垂直に近い状態にまで至る。口縁部を含め全体的に器壁は薄くなり、やはり、砂粒の動きは少なく器表面から硬い感じを受ける。前段階と同様にやや頸部がしまった形をとるが、胴部の最大径の位置はより下降して中央部のやや上方に至る。胴部下半のラインは丸みを有し底部は凸底化を示し始める。

甕Cでも胴部最大径の位置の下降・底部径の縮小傾向は甕Dと同様である。

4 b 期の最終末になると井戸12に見られるように甕Dの口縁端面の凹線は櫛描沈線に変化する。これは次段階（鹿田・古・1期）の大きな特徴であるが、口縁部がしっかりした作りであること・依然として下方への拡張が残ること・櫛描沈線も鹿田・古・1期に比べるとやや数が少なく、^(註9) 一条一条が深く刻まれ鮮明であること・丸みを持ち始めた胴部下半のラインにはまだシャープさが残っており底部も径が大きく安定感があること等から鹿田・後・4 b 期の範囲に属すると判断した。^(註10) 前述の鹿田・後・4 b 期の甕と鹿田・古・1期の甕の中間的特徴が認められるわけで、この段階で鹿田・古・1期の甕にごく近いものが完成したと考えたい。

〈高杯形土器〉 4 a 期および4 b 期の間に大きな差は認められない。いずれも短脚化した脚部と深めの杯部を有し、胎土としては赤褐色の水漉し粘土が使用される。外面の篋ミガキは横位の非常に細かいものに変化する。大きさもほとんどが小形品となりほぼ一率となる。杯部が椀状を呈すものもある。

鹿田・古・1期

甕のプロポーシオンから1 a 期と1 b 期に細分される。1 a 期の指標としては井戸14（図209～212）・井戸15（図216～218）、1 b 期では井戸18（図226）・竪穴住居20（図198・199）の出土遺物が各々挙げられる。

〈壺形土器〉 1 a 期には鹿田・後・4 期に出現する短頸化して「ハ」の字形に開く壺が主体となる。口縁端部は上方へ拡張されるもの（井14—10・11）と拡張されないもの（井14—9・土器溜り4—2）とがある。また、前者は櫛描沈線の有無で二分される。底部はしっかりした平底を呈す。その他に口縁部が「く」の字形に屈曲し、胴部が球形化した短頸壺（土器溜り4—5）が認められる。その底部は丸底化の傾向が強い。小形の壺では丸底に近い直口壺（住19—1）が出現する。赤褐色の水漉し粘土を有し、細かい篋ミガキが施される。

1 b 期の良好な資料は未検出である。

〈甕形土器〉 前段階の甕Dが中心である。基本的には同じ特徴を持つが、1 a 期になると、

口縁部は上方へのみの拡張となり、直立する傾向が強くなる。口縁端面の櫛描沈線は条数を増し浅くなる。胴部最大径の位置は中央部まで下降し、底部へのラインもかなり丸みを帯びてくる。底部径は縮小し丸底化傾向が進み底部と胴部の境は不明瞭となる。法量に大小の別が認められる。次の1 b期になると前述の底部の丸底化・胴部の球形化がより進行する。また、口縁部の立ち上がりはやや小さくなりシャープさを全く失い始め、櫛描沈線もより不鮮明となる。

甕D以外には甕Fが認められる。甕Fは鹿田・後・4期に出現した茶褐色の胎土を有すタイプは急激に減少し、外面にタタキ調整が施されるものが主流となる。口縁部は「く」の字形を呈し、底部は僅かに存在する程度で、胴部重心は低くなり球形化する。内面調整では篋ケズリが内面下半のみのものや胎土に微砂を多く含むもの等が目だち在地の甕Dと大きな差が認められる。鹿田・後・4期と同様に搬入品と考えられるものがほとんどである。また、前段階に比べ、甕Fの中でのバリエーションがかなり存在している点、全体に占める割合が増加している点も注目される。

〈高杯形土器〉 脚部は長脚化し、口縁部は大きく外反する傾向を持つ。その他に杯部が2段となるもの(井15-16・17)も出現する。鹿田・後・4期にみられた胎土も残るが砂粒を含むやや目の粗い胎土の使用が特徴となる。1 b期に入ると杯受け部の内面が水平になる傾向が強い。

ところで、附図10においては鹿田・古・1 a期の指標となる甕Dについて井戸14のみを例に挙げた。ここで問題となるのが該期に入れた井戸17である。井戸17出土の甕は井戸14出土の甕よりもそのプロポーシオン等において新しい傾向が認められ、井戸14と井戸18の間に位置すると考えられる。資料的に少ないことから時期の設定は避けたいが、将来的に鹿田・古・1期内の細分を修正する上で参考となると考えられる。

以上、各時期の概略を述べてきたが、次に、これらの中で注目される問題点について簡単に触れたい。

(2) 鹿田・後・2 a期の甕と高杯(図373・表16)

鹿田・後・2 a期は各器種とも非常に多様性を示す時期である。その中で甕と高杯について考えてみたい。

当時期の甕は口縁部の凹線に注目すると凹線を有すⅠ型(AⅠ型・BⅠ型)と凹線を有さないⅡ型(AⅡ型・BⅡ型)とに大別される。一方、高杯については脚柱部から屈曲しないで大きく裾広がりになる高杯Aと脚柱部から緩く外反して裾部に至る高杯Bが認められる。甕と高杯の出現時における組合せについて、一括廃棄された可能性の高い井戸・土壇について検討してみたい。

表16は甕・高杯における型別の組合せ表である。○印がその遺構中で主流となる型で、その

他に僅かに他の型が含まれる場合は△印で示した。表でみると明らかなように、甕Ⅰ型と高杯Aが、また、甕Ⅱ型と高杯Bが各々共伴する傾向が認められる。

ここで高杯について井戸2と井戸3を比較して見たい。前者の高杯は典型的なAタイプで、脚部はやや絞られた脚柱部から裾部に向かって大きく外反する。脚裾部はしっかりとした端面をもつ。脚柱部には各々2段の沈線文帯と円孔を有し、下段の円孔は6個である。口縁部の外反の度合は小さい。これに対して後者はBタイプに属す。脚柱部は井戸2の高杯とほぼ同程度の絞りであるが裾部へ

表16 鹿田・後・2期主要遺構における甕・高杯組合せ表

遺構名	器種		高 杯	
	甕Ⅰ	甕Ⅱ	A	B
井戸2	○		○	
〃 3	△	○		○
竪穴住居3	△	○	○	
〃 4	○	△		
〃 5	○		○	
土器棺1	○			
土 壙23		○		○
〃 60		○		○
〃 63	△	○		○
〃 82	○	△	○	
〃 87	△	△		
〃 105	○			
〃 109				○
〃 118	○		○	△
〃 147	○		○	
〃 158		○		○
〃 194		○		
〃 200	○		○	
〃 231		○		○
〃 264		○		○
〃 268	○	△		
〃 284	○		○	

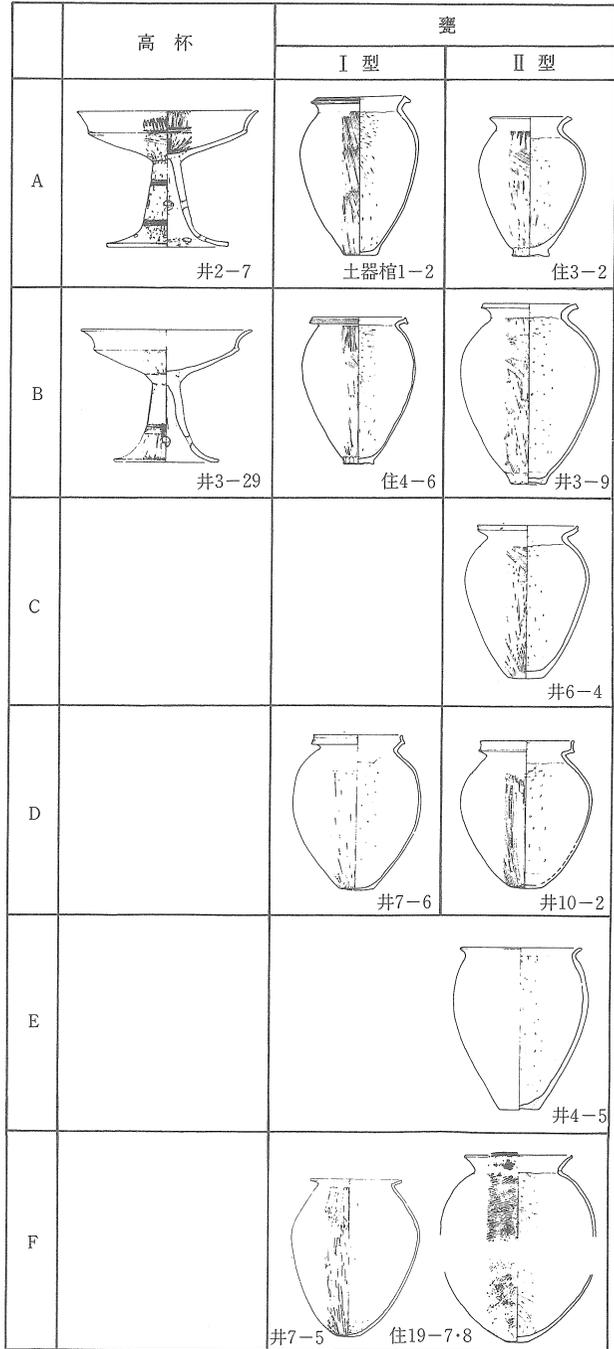


図373 高杯・甕の組合せ類型図

の開きは小さく立ち上がり気味である。脚裾端面は井戸2の高杯に比べやや丸みを有しシャープさを失う。脚柱部には沈線と4個の円孔が施文され、次段階の様相に近づく。口縁部は外反を強める。この様に両高杯の間には井戸2のAタイプにやや古い様相が認められる。しかし、すでに脚柱部が絞られている点・完全な円盤充填ではなく基本的には組合せ手法に近いものである点などから鹿田・後・1期までは遡らせることは難しいと考えられ、その時間的差は僅かなものである可能性が高い。^(註1)

次に、甕についてⅠ・Ⅱ型の存続時期をみると前者（凹線を有す）は弥生時代中期から伝統的に認められるもので当調査地区内では鹿田・後・2期以前に属する遺構を中心に出土する。後者（凹線を有さない）は弥生時代後期に入って出現し鹿田・後・4期にまで続くが中心は鹿田・後・2期である。このように存続時期にずれは存在するが、いずれも鹿田・後・2期段階には同時併存している。

また、竪穴住居4では壁体溝から一括性の高い遺物が出土しており、その中で甕はⅠ型が主流である。一方、竪穴住居4に切られる竪穴住居3では甕Ⅱ型が主流と考えられる。つまり、甕Ⅱ型が甕Ⅰ型より古い遺構から出土していることになる。

以上のように、井戸2・3から出土している高杯の検討及び甕Ⅰ・Ⅱ型の出現時期の差等から高杯Aと甕Ⅰ型の組合せのほうにやや古い要素が考えられるが、現実的には個々の先後関係は存在するであろうが、存続時期および遺構との関係などから両組合せ間に明確な時期差を認めることは難しく、古い要素を残す高杯A・甕Ⅰ型と新しい要素を含んだ高杯B・甕Ⅱ型が鹿田・後・2期に併存する状態が想定され、そこには時期差と言うよりは小地域性の可能性が窺われる。周辺地域の該期に属する出土遺物の地域性云々を論じるには現在のところ検討中であり論を展開するには非常に不十分であるが、高杯B（甕Ⅱ型）は百間川遺跡群中の原尾島遺跡等に共通する傾向が強いのに対して高杯A（甕Ⅰ型）については百間川遺跡群中に少数ながら認められる^(註11)が主流とは言えず、他に良好な例を見ない。その他では旭川西岸地域がその候補に挙がる^(註12)が報告資料に乏しく不明瞭である。

鹿田・後・2 a 期には鹿田遺跡の地域性を強く示し、古い要素を有す高杯A・甕Ⅰ型と新しい要素を有し百間川遺跡群周辺の地域性を強く示す高杯B・甕Ⅱ型が併存するが、次の鹿田・後・2 b 期には後者の流れの中に全てが包括された状況が推定される。

(3) 甕D出現に伴う諸問題

甕Dは鹿田・後・3期において出現する。その胴部内面上半の筥ケズリ方向及び表面の状態について検討してみると、壺及び他の型の甕の同位置の筥ケズリは全てが左回りを示しているのに対して甕Dのものはほとんど全てが右回りとなる。特に、鹿田・後・4期以降は従来の甕との相違が随所に認められる。筥ケズリ方向は右回りに徹底し、筥ケズリ後の器壁の状態も砂

粒の動きが極端に減少し表面は平滑となる。器壁自体も薄くなり、その傾向は鹿田・古・1期まで強まる。以上の状況から、篋ケズリ時の土器の乾燥状態が従来の甕とは異なっており、器壁がかなり堅くしまった段階で内面の篋ケズリが行われたことが推定される。内面の篋ケズリは器壁を薄くするための重要な要素である。その篋ケズリ施工時の土器の乾燥状態がより進められ篋ケズリ方向が逆転する、その技術的变化の要因としては篋ケズリ時の土器保持の変化・工具の変化などが想定されるが、前述の諸状況から後者の可能性を考えたい。器壁を薄くする目的に合致した技術的变化、具体的には軟質の壁を掻き取るような工具から堅くしまった壁を削り取ることの出来る工具への変化である。その結果、器壁は平滑となり、篋ケズリ方向の逆転がもたらされるのではなかろうか。この様に、従来とは異なる鋭利な工具の使用によって十分に乾燥させた壁面をかなりの薄さまで削り取ることを可能にしたこの技術的变化は鹿田・後・3期に出現し、鹿田・後・4期には一つの勢力としてまとまりを示し、少なくとも岡山県南部旭川流域に、そして、鹿田・古・1期には岡山県南部平野一帯へと、その普及において時期的な差はあっても^(註13)、古墳時代初頭には広範囲にわたって画一的な姿を現すと考えられる。

最後に、搬入品のあり方を当調査区において簡単に検討してみよう。前述したように、搬入品は鹿田・後・4期に入っている程度の量が認められるが、その遺物量・出土遺構数は相対的に少なく、限定的である。一方、鹿田・古・1期にはその量は増加し、集落内においても一般化する。また、搬入品自体の特徴においても、両時期間には大きな様相差が認められる。鹿田・後・4期では茶褐色を呈し金雲母を多量に含むなど器形・調整・色調・胎土など全てにわたって非常に明瞭な特徴を有す画一的な甕^(註8)が中心をなすが、鹿田・古・1期に入るとそれに変わって、タタキ調整を有す甕、白っぽい胎土を有す甕などが主流をなす。これらの搬入品は前述の甕のような画一性は乏しく、様々なタイプが確認される。産地の決定は時期尚早であるが、前者と後者の産地が異なる可能性は高い。

以上のように交流集団の変化・拡大を想定させる搬入品の変化及び増加の時期が甕Dの平面的拡大の時期と対応している点は注目される。

以上、弥生時代後期前半（鹿田・後・2期）と後期後半～古墳時代初頭（鹿田・後・3期～鹿田・古・1期）の土器の示す状況を検討した。その結果、後期前半における小地域性の存在と、後期後半における画一化への流れを概略的に把握し得た。しかし、画一化への担い手となる甕Dの出自の問題、使用工具の保有形態の問題など多くの未検討の点が残されている。今後の課題としておきたい。

（山本 悦世）

註

- 1 松井潔氏は鹿田遺跡の出土遺物を資料として「後期弥生土器の小地域性」について論じている。氏はその論文中において、鹿田外来棟地区一井戸22（本報告 井戸2）、竪穴住居50（本報告 竪穴住居5）、土壙565（本報告 土壙268）をあげて、当時期（鹿田・後・1期）に対応するⅠ・新期に比定している（43・44・48・50頁）。その根拠は明記されていないが、時期設定するにあたって注目したと考えられる高杯について検討してみよう。井戸22では口縁部の外反の度合いが小さい点、脚柱部に2～3段の沈線文帯が施される等中期的な装飾性を多く残している点、円孔が定数化していない点等に古い要素が認められる。しかし、上下の接合方法が完全な円盤充填ではなく、また技法的には組み合わせた脚部の頭部に小形の円盤を埋め込んだ形で組合せ技法に近いものであること、脚端部に上下の肥厚が認められない点、口縁端部の水平方向への拡張が全く認められない点などから、Ⅱ期の最古段階（鹿田・後・2 a期）に位置するものであり、Ⅰ・新期（鹿田・後・1期）にまで遡ることはないと考ええる。
また、竪穴住居50についても高杯については井戸22以上に口縁部の外反度は高まり、上下部分の接合方法も上部からの円盤は被せる程度となり、組合せ手法がより進んだ状況を呈す。脚端面のシャープさも弱まり、やや丸味を有すものも認められる。このことから、やはり、Ⅱ・古段階（鹿田・後・2 a期）に属すると考える。土壙565（本報告 土壙268）は、例に挙げている壺については頸部沈線が幅広い点に古い要素は認められる。しかし、共伴遺物を検討すると、やはり高杯は完全な組合せ手法をとっており、Ⅱ・古期に比定されると考える。また、論文中（50頁）の図8においてⅠ・新期の津島・鹿田の欄に壺108が記載されているが、この壺は井戸21（本報告 井戸3）出土の一括遺物に含まれるもので、Ⅱ・古期に入れるべきものである。以上のように、鹿田遺跡の今回の調査区においては鹿田・後・1期に確実に入る良好な資料は出土していないと考えたい。
- 松井潔「後期弥生土器の小地域性」『考古学研究』第38巻 第1号 1986 39～69頁
- 2 松井潔氏は論文中（註1）において、NMR地区一井戸6（本報告 Ⅱ地点井戸1）をⅡ・古期に比定している（43・45頁）。甕の口縁部が水平方向に張り出し、上方を向く傾向が認められるなどに、古い要素が認められるが、共伴する高杯（Ⅱ地点井戸1—13）は、完全に定型化したⅡ・新期の高杯であることから、その一括性を重要視するならば本遺構はⅡ・新期に比定されるべきであろう。外来棟地区一土壙98（本報告 土壙118）についても、高杯脚柱部がラップ状に開く点、甕底部が非常に厚く器形的に底部が長くとび出すタイプが比較的多い点等からⅡ・古期に入ると考えたい。また、図8（50頁）のⅡ・新期 津島・鹿田の欄に記載されている壺117は鹿田遺跡出土となっているが、これは今回の調査地区内の出土遺物ではない点を指摘しておきたい。
- 3 凹底の種類としては篋ケズリによるものと、高橋護氏が指摘する「ドーナツ状の粘土紐・又は高台」使用によるものがある。鹿田遺跡においては前者が主流をなし、鹿田・後・Ⅱ b期に入って後者が出現するが量は少ない。
高橋護「入門講座 弥生土器 山陽」『月刊考古学ジャーナル』173・175・179・181 1980
- 4 工具使用ナデとは口縁部の横ナデによくみられる状態のもので非常に細かく浅い条線を呈し、いわゆるハケメのように一本一本が明瞭には刻まれてはいないが、幅1 cm前後の工具の単位が認められるものである。いわゆるハケメとは区別して工具使用ナデと記した。
- 5 下澤公明氏はこの接合方法を百・後・Ⅱの古相の編年の要素の一つとして挙げている。
下澤公明「第3節 弥生時代後期の土器」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』59 1985 422～428頁
- 6 胴部内面上半の篋ケズリの回転方向は土器を口縁部側から底部をみて時計回りの場合を右回り、逆の場合を左回りと記した。
- 7 百間川原尾島遺跡では中須賀調査区井戸1・土壙47等の出土遺物が例として挙げられる。その特徴を高杯においてみると、脚柱部が鹿田・後・3期のものより長く、胎土は良好な粘土が使用される場合が多いが、微

～細砂を含み、水漉し粘土は使用されていない。そのため色調は赤色よりは黄色が強い。以上のように今回報告の鹿田・後・3期のものとは明瞭な差が認められる。

岡山県教育委員会『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』56 1984

- 8 形態は川島遺跡において甕B型として報告された種類に酷似している甕である。
石野博信「第5章まとめ 第1節 川島・20溝の土師器群」『川島・立岡遺跡』太子町教育委員会 1971
- 9 鹿田・後・4b期の最終末段階にあたる井戸12において甕の口縁端面の沈線は7条前後であるのに対して、鹿田・古・1期にあたる井戸15においては10条前後となる。
- 10 井戸12については出土遺物としては甕がそのほとんどを占めるため、その他の遺物からの時期決定は出来なかった。甕についてみると本文中で述べたように口縁部は下方への拡張を残しており、作り自体がしっかりしている点、口縁部に施される沈線は数少なく一条一条が深く鮮明に刻まれている点、全体のプロポーションでは底部が確実に認められ胴部下半のカーブがシャープである点等から鹿田・後・4期の範囲に納めた。しかし、その井戸の廃棄形態は鹿田・古・1期に中心となるUⅢc型をとっている点、口縁部の沈線が楕円沈線に変化している点を重要視すると鹿田・古・1期を考えるべきかも知れない。資料が少なく限定されていることから、現在のところ、依然流動的であり、今後の資料の増加をまち結論を出したい。
- 11 丸田調査区「島状高まり」遺構土器溜りでは出土例が認められる。
岡山県教育委員会『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』56 1984
- 12 南方国立病院の弥生中期末の出土遺物の中に本報告の高杯Aにごく近い形状の「高杯C型」が認められる。しかし、残念ながら岡山市教育委員会の都合により実見はかなわなかった。
岡山市教育委員会・岡山市遺跡調査団『南方（国立病院）遺跡発掘調査報告』1981
- 13 まず、鹿田遺跡とは比較的近い距離にある百間川遺跡群においては、鹿田遺跡とほぼ同時期に、つまり、遅くとも鹿田・後・4a期には変化が認められる。それに対して、備中に位置する上東遺跡では該期にはまだ変化は認められない。鹿田・後・4a期にあたる才の町調査区P一へ出土の甕は上方への口縁部の拡張は示すが、器壁は厚手で重量感があり、口縁端面に凹線を有す個体は少なく、ほとんどが条線程度を残す横ナデのみが施される。胴部内面上半の篋ケズリは左回りが主流である。本報告での甕Dとは様相を異にし、甕Cにより類似性を持つと考えられる。鹿田遺跡における甕Dと類似性の高い甕は才の町Ⅱ期（鹿田・後・4b期）とされる才の町調査区P一において認められる。内面の篋ケズリ方向は左右両方の削り方が混在する。百間川遺跡および鹿田遺跡の同時期の甕とほとんど差は認められなくなるのは下田所式の時期（鹿田・古・1期）に入ってからである。このように鹿田遺跡・百間川遺跡群周辺地域では鹿田・後・4a期には起こっていた変化が、上東遺跡では次の鹿田・後・4b期～鹿田・古・1期にかけて認められる。
伊藤晃・柳瀬昭彦他「上東遺跡の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』2 1974
柳瀬昭彦『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』16 1977

3 鹿田遺跡出土の中世土器について

鹿田遺跡出土の中世土器のうち、特に注目されるのは土師質土器の高台付椀である。これらは、従来から「早鳥式土器^(註1)」と呼ばれてきた土師質椀の範疇に含めることのできるものであるが、鹿田遺跡出土の資料の多くは、体部内面あるいは外面に棒状工具によるミガキ調整が施されている点に特徴がある。こうしたミガキ調整の施されている土師質椀は、すでに周辺のいくつかの遺跡で出土例があり、器面調整が丁寧に行われていることから、ミガキを施さないものに先行するものと考えられていた^(註2)。しかしほとんどは断面的な資料で、それらが存続した時期や変遷の実態は明確になってはいなかった。そうした状況にある中で、鹿田遺跡では、いくつかの遺構からミガキの施される土師質椀が出土しているほか、ミガキの施されない椀の出土する遺構もあり、同一遺跡内でその変遷がたどれるという点で、注目すべき資料となっている。そこで今回は、これらの土師質椀の変遷過程を検討することによって、従来あまり明確になっていなかった古い時期の土師質椀の様相を少しでも明らかにしたいと考えた。

土師質椀の変遷と時期区分

岡山県南部でこれまでに出土している土師質椀に関しては、福田正継氏による百間川遺跡の資料を中心とする研究がある^(註3)。同氏は、技術の簡略化と法量の縮小化に着目して変遷をとらえているが、筆者も土師質椀の変遷に関してはほぼ同じ考えをもっており、今回も同様の観点から、ミガキの施されるものを含めた変遷を考えてみた。

検討の対象とした資料は、Ⅰ地点井戸21・井戸22・井戸23・井戸24・井戸26・井戸27・井戸28・井戸29・井戸30・井戸31・溝70・溝71、Ⅱ地点井戸5・井戸6、溝8の各遺構から出土した遺物である。これらは、いずれも一括遺物と認められるものであるが、そこに含まれるすべての遺物が同一時点で製作・使用されたと考えられるわけではなく、古い時期の遺物の混入などもありうるため、一括遺物に含まれる大部分の遺物が、比較的短い時期幅の中で製作・使用され、それらが一括して埋没したと考えるべきものである。

これらの一括遺物は、土師質椀のミガキの施され方に注目すると、A・B・Cの3群に分けることができる。まずA群は、土師質椀のほとんどに内外両面のミガキが施されるもので、Ⅰ地点井戸21・井戸22・井戸23・井戸24・井戸26・井戸27、Ⅱ地点溝8がこれにあたる。B群はミガキの施されるものと施されないものの両者が併存するもので、Ⅰ地点井戸28・溝70・溝71がこれにあたる。C群はミガキの施されない土師質椀のみが含まれるもので、Ⅰ地点井戸29・井戸30・井戸31、Ⅱ地点井戸5・井戸6がこれにあたる。これらの3群は土師質椀の製作手法からみると、A群→B群→C群の順に調整の簡略化が進んでおり、時期的にもこの順で変遷し

ていったものと考えられる。そこでA・B・Cの各群を、A期・B期・C期という時期差を示す段階として設定し、さらにA期とC期については、古い段階のものと新しい段階のものに分けることができるため、それぞれ2つに細分した。では以下に、土師質椀を中心に遺物の変遷を述べていきたい。

A-1期

A-1期はA期の中でも最も古く位置づけられる段階で、資料としてはI地点井戸21出土の遺物がある。

土師質椀は今回の調査で出土したものの中では最も丁寧なつくりをしており、深く丸味を帯びた体部に、厚味のあるしっかりした高台が貼り付けられている。体部内面はヘラ状の工具痕を残すナデによって平滑にされたのち、ミガキが施されている。体部外面は口縁部にヨコナデ、下半部に簡単なナデを施したのち、ミガキが施されている。外面のミガキは特に丁寧で、全面にわたって密に施されているものが多い。また、口縁部が若干肥厚し、端部をわずかに外反させる点にも特徴がある。

土師質の皿・小皿は、底部に回転ヘラ切り痕を残すものがほとんどであるが、図267-57・58のように底部に切り離し痕をもたないものもあり、これらは畿内産の小皿と考えられる。

土師質の鍋は、この段階では部分的にミガキ調整の施されたものが出土しており、A-2期以降のハケ目を施すものとは異なっている。

瓦器椀はいずれも楠葉型に分類できるもので、橋本編年のI-3期頃^(註4)に比定できる。その他、白磁碗・輪花の施された白磁皿などが共伴している。

A-2期

A-1期に続く段階に位置づけられるのは、I地点井戸22、II地点溝8出土の遺物である。

大部分の土師質椀に体部内外面のミガキが施される点はA-1期と同じであるが、外面のミガキは若干雑になり、空白部分が多くなっている。内面のミガキも、その前に施されるナデと区別しにくいものも現れる。

土師質鍋は、この段階から体部内面に横方向のハケ目、外面に縦方向のハケ目を施すものが出土するようになるが、この段階のものは体部が深く、球形に近いふくらみをもっている点に古い様相を認めることができる。

瓦器椀はほとんどが和泉型に分類できるもので、I地点井戸22のものが尾上編年のI-3期、II地点溝8のものが同じくII-1~II-2期頃^(註5)に比定できる。その他、白磁として瓶の口縁部・碗・皿の破片などが出土している。

A期の資料としては、この他にI地点井戸23・井戸24・井戸26・井戸27出土の遺物がある。これらの遺物の一部はA-2期よりも若干新しい段階のものと思われ、A-3期として設定で

きる可能性がある。しかし、一つの遺構から出土している資料が少なく、その内容が十分に把握できなかつたため、今回はその位置づけを保留しておきたい。

B期

B期は、A期からC期に至る過渡期として位置づけることができる段階で、資料としてはI地点井戸28・溝70・溝71出土の遺物がある。

土師質碗には、ミガキの施されるものと全く施されないものとが併存するが、ミガキの施されるものは、内面あるいは外面のどちらか一面のみに施されるものが多くなり、ミガキ自体も簡単なものになっている。またミガキの施されないものも、体部外面下半に簡単なナデ調整を残しているものがいくつかみられる。

土師質皿・小皿は、A期同様にヘラ切り底のものが大部分を占め、大きな変化はみられない。

土師質鍋はA-2期に続き体部内外面にハケ目を施したものが出土しているが、体部のふくらみは弱くなっている。またI地点溝70からは脚の破片も出土しており、三脚の付く鍋も存在していたものと思われる。

瓦器碗・小皿はほとんどが和泉型で、この時期には外面にミガキが施されないものも現れている。I地点溝70・溝71のものが尾上編年のⅡ-3～Ⅲ-1期に、井戸28のものが同じくⅢ-1期に比定できる。その他に、白磁の碗・皿・合子などが共伴している。

C-1期

C-1期の資料としては、I地点井戸29・井戸30、II地点井戸5出土の遺物がある。

土師質碗は口縁部外面にヨコナデ、体部内面にヘラ状工具による不定方向の丁寧なナデを施すのみで、この段階以降はミガキ調整が加えられなくなる。体部は前段階のものに比べ浅く扁平なものになり、高台も低くなっている。

土師質皿・小皿についての変化は依然顕著でなく、これらの器種から時期的な変遷を追っていくことは困難である。

土師質鍋は、B期よりもさらに体部のふくらみが弱く、浅いものになっているが、調整手法に変化はみられない。

瓦器碗は、I地点井戸29から和泉型と楠葉型が出土している。和泉型は外面にミガキのないものが大部分を占め、尾上編年のⅢ-2期前後に比定できる。楠葉型は図283-25が1点出土しており、橋本編年のⅡ-2期に比定できるが、これは古い時期の混入品と考えられる。その他、I地点井戸29からは備前焼の壺、須恵質土器の鉢・壺などが出土している。

C-2期

I地点井戸31、II地点井戸6出土の遺物が、この時期に属する。

土師質碗の調整手法はC-1期のものと同様であるが、全体的に小形化し、高台は断面が三

角形を呈する低いものになる。

土師質鍋は、調整・形態ともに前段階の特徴を受け継ぐものが出土している。その他、Ⅱ地点井戸6では白磁碗とともに龍泉窯系の青磁碗が出土している。

土師質碗の変遷からみると、以上のような時期区分を設定することができる。また、C-2期より新しい段階の資料としては、Ⅰ地点井戸32、Ⅱ地点溝14・溝11などの出土遺物があるが、いずれも断片的な資料で、連続した変遷はとらえられないため、ここでは省略する。

土師質碗の法量変化

次に、土師質碗の変遷を法量の面から追ってみたい。図374~376はA・B・C各期の土師質碗の法量分布を示したもので、口縁部が4分の1以上残る個体の法量分布範囲を一括資料ごとに囲んである。

まず、A-1期(Ⅰ地点井戸21)では口径13.8~15.8cm・器高5.2~6.4cmの範囲に分布しているが、A-2期(Ⅱ地点溝8)になると口径14.7~15.8cm・器高5.4~6.3cmの範囲に集中する傾向がみられる。A-1期の計測個体数が5個体、A-2期が8個体であるため、これは単に資料数の多少からばらつきの幅が小さくなったものとも考えられず、A-2期の段階に法量の規格性が強まり、A-1期の分布範囲内の大きな部分へ集中したのと考えたい。また、先にA-3期として設定できる可能性があるとして設定

できる可能性があると記したⅠ地点井戸23・井戸24・井戸27などの資料も、口径15.2~15.7cmの範囲にあり、このことから、A期の新しい段階では口径・器高とも大きめのものに集中することが考えられる。続くB期になると、法量はA-2期よりひとまわり小さくなり、口径14.0~15.8cm・器高4.5~5.7cmの範囲に分布するようになる。さらに、C-1期(Ⅰ地点井戸29・井戸30、Ⅱ地点井戸5)では口径13.4~15.4cm・器高4.1~5.1cm、C-2期

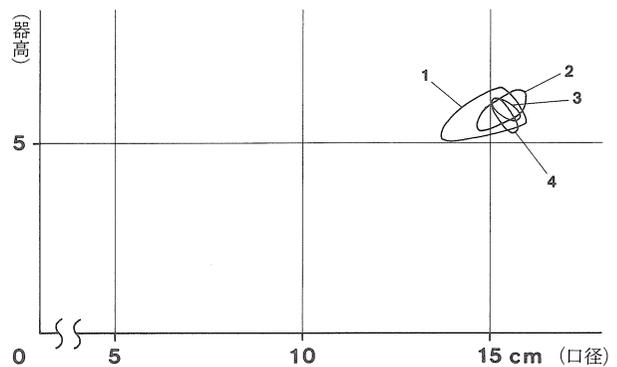


図374 A期土師質碗の法量分布

- (1. Ⅰ地点 井戸21 2. Ⅱ地点 溝8 3. Ⅰ地点 井戸27)
(4. Ⅰ地点 井戸23)

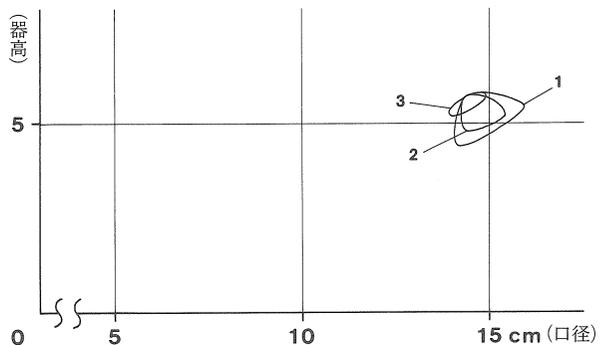


図375 B期土師質碗の法量分布

- (1. Ⅰ地点 溝70 2. Ⅰ地点 溝71 Ⅰ地点 井戸28)

(Ⅰ地点井戸31, Ⅱ地点井戸6)
では口径12.0~15.4cm・器高4.1~5.1cmというように、各時期の法量は重なる部分をもちながらも、全体としては時期が降るにつれ小形化している(図376)。

以上のことをまとめれば、A-1期の段階でややばらつきがあった法量が、A-2期に至って規格性が強まり、以後は連続的に小形化していったと言えることができる(図377)。

周辺遺跡との比較

鹿田遺跡出土の土師質碗については、以上述べてきたような変遷過程をたどることができるが、次に、これらの資料を周辺遺跡出土の資料と比較してみたい。ここで比較を行うものは、岡山市百間川

当麻遺跡井戸^(註6)3, 邑久町助三畑遺跡井戸^(註7)4の両遺構から出土した遺物である。これらの資料は、その内容の豊富さから中部瀬戸内地域の中世遺物を研究する上での基準資料となるものであり、これらの資料との比較によって、鹿田遺跡の資料の位置づけがより明確になるものと思う。

まず、百間川当麻遺跡井戸3の土師質碗は、ミガキ調整が全く施されておらず、鹿田遺跡のC期に対応するものであるが、法量は口径14.6cm・器高4.8cmあたりに集中しており、この点からはむしろB期と重なりをもつ時期のものと考えられる。また瓦器碗をみても、百間川当麻遺跡井戸3のものは、尾上編年Ⅲ-1期に比定されており、Ⅱ-3~Ⅲ-1期の瓦器碗を共伴する鹿田遺跡B期に含めて考えるべきであろう。そうすると、鹿田遺跡B期に併行する時期には、百間川当麻遺跡井戸3のように、ミガキを施す土師質碗を全く含まない土器群が成立していたということで、鹿田遺跡のB期とした一括資料には若干の時期幅のあることも考えられる。そのことは、百間川当麻遺跡井戸3からは外面にミガキの残る瓦器碗が出土していないのに対して、鹿田遺跡B期には外面にミガキの残る瓦器碗がかなり含まれていることにも示されてい

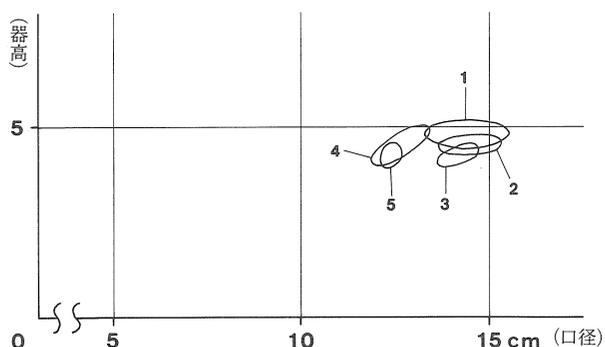


図376 C期土師質碗の法量分布

- (1. Ⅰ地点 井戸29 2. Ⅰ地点 井戸30 3. Ⅱ地点 井戸5)
(4. Ⅰ地点 井戸31 5. Ⅰ地点 井戸6)

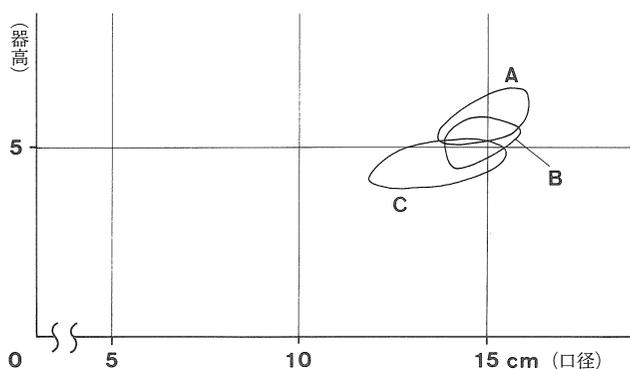


図377 土師質碗の法量変化

る。しかし、このB期の時期幅の中で、土師質碗はミガキを施すものから施さないものへの変化が完了したと考えることもできるわけで、その過渡期の段階として、この一時期を設定することも必要であろう。したがって、この点を考慮してB期の内容を補足すれば、「ミガキの施される土師質碗と施されない土師質碗が併存する時期であるが、この時期内でミガキの施されないものへの変化が完了している」と言い換えることができる。

次に、助三畑遺跡井戸4の遺物である。詳細については報告書の刊行を待って検討したいが、既に公表されている資料からみると、土師質碗にはミガキが施されておらず、口径が14.0cm程度であることから、鹿田遺跡C-1期に対応させることができる。共伴している瓦器碗は尾上編年Ⅲ-1～Ⅲ-2期に比定されており、鹿田遺跡C-2期にⅢ-2期が共伴する状況にほぼ合致している。

備前焼についても若干触れておきたい。百間川当麻遺跡井戸3、助三畑遺跡井戸4からは、底部に糸切り痕を残す須恵質の碗が出土しているが、これらは窯跡採集資料との比較から備前焼の可能性が高いとされており、百間川当麻遺跡井戸3のものが間壁編年I期B^(註8)に、助三畑遺跡井戸4のものが同じくII期^(註9)に比定されている。鹿田遺跡では、こうした碗は小片しか出土していないが、I地点井戸29から備前焼の壺が3個体ほど出土している。その中には図284-32のように、口縁端部に平坦面を設けるI期の特徴をもつものと、31・33のように、口縁端部を外方へ丸く折り曲げるII期の特徴をもつものがあり、時期差のあることも考えられるが、資料全体の時期としてはII期に比定することができよう。したがって、これらのことから鹿田遺跡B期には備前焼I期Bが、鹿田遺跡C-1期には備前焼II期が併行することが考えられる。

以上述べてきたことを表にまとめると表17のようになる。鹿田遺跡における土師質碗・瓦器・備前焼の共伴関係は、周辺遺跡での共伴関係にも対応させることができ、それらの間に大きなずれは認められない。このことから、土師質碗は周辺遺跡においても同様の変遷過程をたどっていることが予想され、今後、より多くの資料によって共伴関係の確認を重ねていけば、岡山県から広島県東部にかけての沿岸地域を覆いうる土師質碗の編年を組み立てることができるものと思う。

表17 土師質碗と共伴遺物の対応

鹿 田 遺 跡		共伴する瓦器	周辺遺跡	備前焼
A-1期	I地点 井戸-21	楠 葉 型 I - 3 期		
A-2期	I地点 井戸-22	和 泉 型 I - 3 期		
	II地点 溝 - 8	和泉型 II - 1 ~ II - 2 期		
B 期	I地点 溝 - 71	和泉型 II - 3 ~ III - 1 期		
	I地点 溝 - 70	和泉型 II - 3 ~ III - 1 期		
	I地点 井戸-28	和 泉 型 III - 1 期	百間川当麻遺跡井戸3	I期B
C-1期	I地点 井戸-29	和 泉 型 III - 2 期	助三畑遺跡井戸4	II期

各期の年代

鹿田遺跡の出土資料の中には遺物・遺構の実年代を直接示すような資料はなく、今のところ共伴遺物の相対的な関係からそれをさぐるしか方法はない。

瀬戸内地域の中世遺物の年代を考える資料として、近年特に注目されているものは畿内産の瓦器である。瓦器は畿内における共伴関係の積み重ねによって、ある程度年代がおさえられるようになっているため、近畿から瀬戸内にかけての地域では遺物編年の基準資料として利用されつつある。この年代に関しては、他の遺物の年代観との間にずれのあることも指摘されているが^(註10)、表17に示したように、土師質碗の変遷と共存する瓦器の新旧関係とは矛盾なく対応していることから、一括資料に含まれる他の遺物に比べ、瓦器はその製作・使用年代を敏感に反映していることが予想される。例えば輸入陶磁器をみた場合、A-1期以降C-1期までの間、若干の褐釉のほかは白磁碗Ⅳ・Ⅴ類^(註11)を中心とする白磁しか出土しておらず、C-2期に至って龍泉窯系の青磁碗が出土している。しかし、資料の絶対数が少ないこともあって、段階的な変化を細かく追っていくことは困難となっている。したがって、遺構の年代を考える上では、瓦器がより有効な資料になると言えよう。もちろん、瓦器の年代比定についても今後さらに検討を重ねる必要はあるが、以上のような理由から、ここでは瓦器から導き出される各期の年代を示しておきたい。それぞれの段階には時期的に重なり合う部分のあることも予想されるが、A-1期が11世紀後半、A-2期が12世紀初頭から中葉にかけて、B期が12世紀末から13世紀初頭にかけて、C-1期が13世紀前半、C-2期が13世紀後半、およそ以上のような年代を与えることができる。

土師質碗の成立に関する問題

今回の検討の結果、土師質碗については一貫した変遷過程を追うことができ、従来ははっきりしていなかった土師質碗の初現は、11世紀後半にまでさかのぼることが確認できた^(註12)。また、初現期の土師質碗には、すでにヘラ切り底をもつ土師質皿・小皿が共伴しており、土師質土器の供膳形態における三者の組み合わせも11世紀後半の段階には成立していることも明らかになった。この前段階の在地の土器に関しては不明な点が多いが、現在までのところ、11世紀代以前に位置づけられている資料には、土師質土器の碗・皿・小皿の組み合わせがはっきりと確認できるものがないことから、この三者の組み合わせが成立する11世紀代に、在地土器の画期を求めることができる。

土師質碗の成立に関しては、畿内の瓦器碗を手本にして成立したという考え方が^(註13)ある。確かに、ミガキの施される土師質碗は、形態・調整手法ともに瓦器碗に極めて類似しており、両者に何らかの関係のあることを考えさせる。また、当地域における11世紀代より古い時期の土器には、こうした土師器碗の祖型と考えられるものが存在せず、11世紀以降になって、畿内産

の瓦器碗とともに土師質碗が多量に出土するようになるという現象からも、土師質碗と瓦器碗との強い関連性が予想されるのである。さらに、次に述べるように製作技術からも両者の類似性が指摘できる。

これまで、土師質碗の成形技法に関しては、粘土紐巻き上げによるものと推定されてきているが、^(註14)筆者は内型作りの可能性が高いと考えている。内型作り成形技法は、川越俊一・井上和人の両氏によって、大和における瓦器碗に採用された技法であることが検証されているが、^(註15)ここでは、瓦器碗にみられる諸特徴が、内型作り成形技法を想定することによって合理的に解釈できることが示されている。その特徴として挙げられているのは、a) 外面の凹凸の著しさに対して内面はきわめて平滑につくられている、b) 土器表面に残る粘土継ぎ目の特異な状況、c) 器壁の薄さ、d) 底部丸底形態、e) 時期を同じくする製品にみられる法量のきわだった斉一性、などである。これらのうち、b) の粘土の継ぎ目に関しては積極的に内型作りを説明できるような資料を検出できていないが、a)・c)・d)・e) の特徴は多くの土師器碗にも認められる特徴である。こうした瓦器碗に共通する特徴ゆえに、土師質碗の形態は瓦器碗に類似していると認識できるのであり、土師質碗の成形にも内型作り技法を想定することは可能であろう。この成形技法の問題については、具体的な資料を整理したうえで改めて考えをまとめたいと思っているが、土師質碗の成形に内型作り技法が採用されていたとすれば、その成立に瓦器碗の影響のあったことも十分に考えられるのである。

しかしながら、土師質碗と瓦器碗の相違点として器面の色を挙げることができる。瓦器碗は炭素の吸着によって器面が灰黒色を呈しているのに対し、土師質碗には炭素の吸着が行われておらず、器面は淡黄白色～淡茶褐色を呈しているのである。土師質碗の成立が瓦器碗の影響によるものであるとすれば、瓦器碗の最大の特徴とも言える器面の黒色化についても当然影響を受けるはずで、土師質碗では、なぜ器面の黒色化が行われていないのかという疑問が生じてくる。したがって、瓦器碗を手本にして土師質碗が成立したとばかりは言い切れない面もあり、土師質碗成立の問題は、その前段階の在地土器の様相の解明とともに今後に残された課題となっている。

結 語

鹿田遺跡出土の中世土器のうち、土師質碗を中心に検討を行ってきたが、筆者の力量不足からまとめきれなかった問題も多い。これらの点については、今後とも周辺遺跡での成果を学びながら検討を続けていきたい。大方の御指導・御批判をお願いする次第である。なお、小稿をまとめるに当たっては、荻野繁春・尾上実・橋本久和・福田正継の各氏から有益な御教示をいただいた。記して感謝の意を表します。(1986年4月16日) (鈴木 康之)

	土 師 質 土 器				瓦 器	輸 入 陶 磁 器
	椀	皿	小 皿	鍋		
A 1 期	 井21-5 井21-7	 井21-32 井21-27	 井21-50 井21-54 井21-40	 井21-61	 井21-18・19	 井21-22 井21-24 井21-23
A 2 期	 溝8(II地点)-1 溝8(II地点)-3	 溝8(II地点)-34 溝8(II地点)-36	 溝8(II地点)-37 溝8(II地点)-43 溝8(II地点)-52	 溝8(II地点)-59	 井22-5	 溝8(II地点)63~69
B 期	 溝70-1 溝70-2 溝70-9	 溝70-16 溝70-19	 溝70-20 溝70-25 溝70-27	 溝70-75	 溝70-29 溝70-34	 溝70-59 溝70-66~72 溝70-64
C 1 期	 井29-5 井29-7	 井29-11 井29-12	 井29-15 井29-18 井29-19	 井29-53	 井29-23・24	 井29-28・29 井29-30
C 2 期	 井6(II地点)-1 井6(II地点)-3		 井6(II地点)-7 井6(II地点)-8	 井31-9		 井6(II地点)-12 井6(II地点)-13

図378 鹿田遺跡出土中世土器の変遷 縮尺 1/6

註

- 1 岡山県南部で出土する中世土器につけられた名称であるが、現在では岡山県から広島県東部にかけての沿岸地域に同種の土器が分布することが明らかになっている。この名称に対する定義は研究者によって異なり、実体が曖昧であるため、今回はこの名称を用いていない。
 - 2 以下の文献において土師質椀の編年が試みられているが、いずれも、ミガキの施されるものを古く位置づけている。
 - a 神谷正義「高台付椀に関する二・三の整理」『三手（庄内幼稚園）遺跡発掘調査報告』岡山市遺跡調査団 1981
 - b 福田正継「瀬戸内海中部北岸域の土師質椀について」『中近世土器の基礎研究』日本中世土器研究会 1985
 - 3 福田正継「中世の土器について」『旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査Ⅱ』岡山県教育委員会 1981
前掲註2 b 文献
 - 4 橋本久和「中世土器研究予察」『上牧遺跡発掘調査報告書』高槻市教育委員会 1980
以下、楠葉型瓦器椀の編年は橋本氏の編年に拠る。
 - 5 尾上実「南河内の瓦器椀」『藤澤一夫先生古稀記念古文化論叢』藤澤一夫先生古稀記念論集刊行会 1983
以下、和泉型瓦器椀の編年は尾上氏の編年に拠る。
 - 6 『旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査Ⅱ』岡山県教育委員会 1981
 - 7 馬場昌一「岡山県助三畑遺跡出土の陶磁器」『貿易陶磁研究』No 4 日本貿易陶磁研究会 1984
 - 8 間壁忠彦・間壁稔子「備前焼研究ノート・4」『倉敷考古館研究集報』第18号 倉敷考古館 1984
 - 9 前掲註7 文献
 - 10 前掲註7 文献
これに対する反論も橋本・福田両氏から出されている。
橋本久和・福田正継「岡山県助三畑遺跡出土遺物の再検討」『貿易陶磁研究』No 5 日本貿易陶磁研究会 1985
 - 11 横田賢次郎・森田勉両氏の分類に拠る。横田賢次郎・森田勉「太宰府出土の輸入陶磁器について——型式分類と編年を中心として——」『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館 1978
 - 12 初現期の土師質椀として浅口郡鴨方町沖の店遺跡1号窯の資料が挙げられる場合があるが、報告者も記しているように、この窯跡の製品は底部に糸切り痕を残す点や高台の形態などの点において、他の遺跡から出土している土師質椀とは全く異なった特徴をもっており、土師質椀の初現を考える場合には区別する必要がある。
 - 13 前掲註2 b 文献
 - 14 前掲註2 a・b 文献
 - 15 川越俊一・井上和人「瓦器碗製作技術の復原」『考古学雑誌』67-2 日本考古学会 1981
- 追記
- 脱稿後、橋本久和・伊藤晃両氏によって土師質椀の成形技法に関する論考が発表されたが、本文中ではそれらの成果をふまえた考察ができなかったことを了承されたい。
- 橋本久和「中世の土器—その成立前後を中心に—」『考古学ジャーナル』No.280ニュー・サイエンス社 1987
同「中世土器の製作技法ノート(1)」『中近世土器の基礎研究Ⅲ』日本中世土器研究会 1987
伊藤晃「窯業」『岡山県の考古学』吉川弘文館 1987

4 鹿田遺跡の製塩土器

鹿田遺跡Ⅰ地点では、総計100個体以上、重量にして10kg程度の製塩土器が出土している。これらは、調査区内の特定部分に集中する事なく、全域の57ヶ所の各種遺構（土壇、竪穴住居、井戸）及び包含層で検出されている。大部分の破片は、明瞭な製塩土器特有の剝離現象あるいは変色が認められる。

なお、これらは、形態、時期からまず三類に分ける事ができる。まず、各類の形態・時期・出土状況等について検討を加える事にする。

一類土器

今回、最も多く見られた類で、全体の8割強を占め、47ヶ所の遺構から出土している。

弱く外に開きながら直線的に立ち上がるラップ状の体部に倒壊形の脚台が付く。体部外面には主に縦方向の篋削りが施される。体部内面は剝落している場合が多かったが、わずかに残っている個体では刷毛目に似た細条線の見られるものが目立った。脚台部は体部より厚目で外面には指頭圧痕が著しい。体部と脚台部とは別々に作り上げた後に接合するのではなく、一体として作り上げた後に、境界部分に粘土を充填する。(図379—①)

本類は、鹿田・中・3期及び、後・2a～4期の遺構から出土している。ただし出土状況からみて鹿田・中・3期と同・後・4期の出土例計7例は、いずれも、少量の小破片が見られるだけで二次的混入の可能性が高い。したがって確実な共伴関係を示すのは、鹿田・後・2a期～後・3期に限られる。この事は、鹿田・中・3期に児島半島周辺地域外に確実な製塩土器の出土例がないこと、鹿田・後・4期には後述する二類土器が出現しているという現在までの知見に矛盾しない。なお、鹿田・後・2期が21例と特に多く、後・1期は皆無であるが、これは鹿田遺跡Ⅰ地点の遺構数の時期別変化とほぼ一致する。

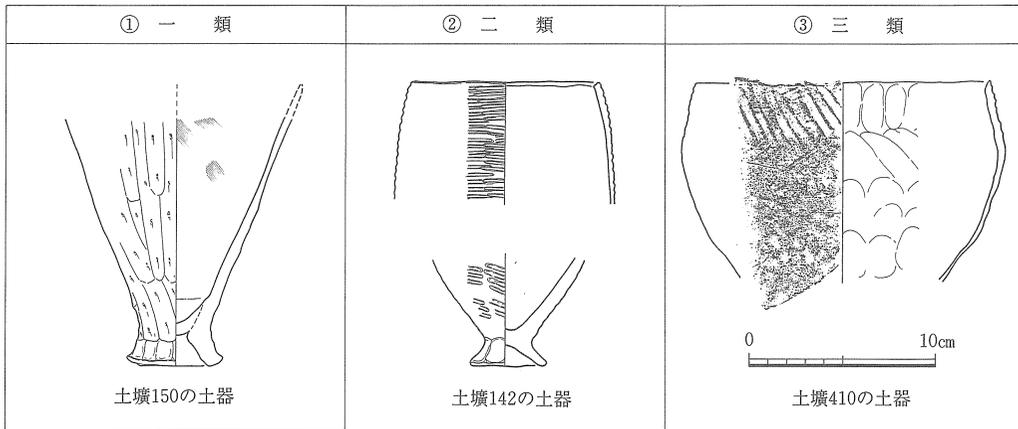


図379 鹿田遺跡の製塩土器 縮尺 1/4

表18 鹿田遺跡の製塩土器出土遺構一覧表

	遺構種別	遺構名	時 期	出 土 量	備 考
一 類	竪穴住居	2	鹿・中・3	脚部片 1	
		3	〃・〃～後2 a	〃 2	
		4	〃・〃・2	〃 1	
		5	〃・〃・2 a～3 a	〃 1	
		12	〃・〃・2 b～4 a	〃 2	
		19		〃 2	
	井 戸	2	鹿・後・2 a	脚部片少量	
		3	〃・〃・〃	〃	
		7	〃・〃・4 a	〃	
	土 壙	7	鹿・後・2	脚部片 1	
		24	〃・〃・2 a	〃 2	
		28	〃・〃・〃	〃 30余	
		31	〃・〃・〃	体部片 1 〃 1	
		32	〃・〃・〃	〃 10余	
		52	〃・〃・〃	〃 2	
		54	〃・〃・〃	〃 多量 脚部片 4 0.8kg	炭・焼土
		56	〃・〃・2	〃 1	
		60	〃・〃・2 a	脚部～体部 1	
		67	〃・〃・3	体部片少量 脚部片 2	
		71	〃・〃・2 a	〃 多量 〃 10余 1.9kg	炭, 焼土
84		〃・〃・2	〃 2		
87		〃・〃・2 a	体部片少量		
90		〃・〃・2	脚部片少量		
93	〃・〃・〃	体部片少量			
109	〃・〃・2 a	〃 多量 脚部片10余 1.2kg	炭, 焼土		
111	〃・〃・2	脚部片 1			
113	鹿・中・3	脚部片 1			
136	〃・〃・〃	〃 1			
138	鹿・後・4	体部細片			
141	〃・〃・2	脚部片少量			

	遺構種別	遺構名	時 期	出 土 量	備 考	
一 類	土 壙	147	鹿・後・2 a	脚部片少量		
		149	〃・〃・〃	体部片多量 〃 10余	2.2kg	炭, 焼土
		150	〃・〃・〃	大形破片 1		
		162	〃・〃・〃	体部片多量 脚部片 4		炭, 焼土
		171	中 期	〃 1		
		197	鹿・後・2	〃 2		
		199	〃・〃・〃	脚部片 1		
		201	〃・〃・〃	〃 1		
		205	〃・〃・4	〃 少量		
		232		〃 1		
		235	〃・〃・2 a	体部片多量		0.3kg
		236	〃・〃・〃	〃 3 脚部片 2		
		264	〃・〃・〃	〃 多量 〃 4	0.5kg	炭, 焼土
		267		〃 1		
		268	鹿・後・2 a	〃 1		
269		〃 1				
270	〃・〃・〃	〃 2				
二 類	竪穴住居	13	鹿・後・4 ~古 1	脚部片 2		
	土 壙	14	鹿・後・4	体部片少量		
		142	〃・古・1	〃 多量 脚部片10余	1.7kg	炭, 焼土
		298	〃・〃・〃	〃 少量		
三 類	土器溜り	5	TK 43式~209式	体部片 1		
	土 壙	410	TK 217式	体部片10以上		

出土状況には2つのタイプがある。数点未満の製塩土器が、他器種の土器類と共に検出される場合と製塩土器だけが、多量の炭・焼土と共にまとまった量検出される場合である。後者は、剥落した小破片を含む多量の体部片が見られる点が特徴的である。一つのまとまりの正確な個体数復元は困難であるが、脚台部で数えて10個体分程度、重量で0.3~2.2kgである。このような出土状況の認められる遺構中に他器種の土器が存在する事があっても詳細に観察すると、その大多数は出土層位を異にしている。土壙71や同149が典型例である。この状況からみて、煎熬過程に使用して、結晶塩を取り出した後に一括廃棄されたか、煎熬過程に破損した土器片

を炉内残滓と共に取り片付けたものと推定できる。いずれにしても、近接した地点で製塩作業が行なわれた事を示す出土状況である。

本類土器の形態は先述した通りであるが、より詳細にみるといくつかの差異が観察できる。しかも興味深い事に、同時に廃棄されたと考えられる一群中にそれが認められる。体部調整についてみれば、多くは縦方向のヘラ削りを施すが、土壙109ではこれと共に縦方向の刷毛目状細条線を施したものが観察できる。また脚台部は体部と連続して作った後上方から粘土塊を詰めるが、その後の脚台部内面の調整に差がある。最も多いのが、わずかに内面を平滑化される程度に横方向になでつける手法であるが、充填粘土塊の下端を押しつぶして脚台部内側に完全に密着させるまでに強くなでつけるものもまま見られる。土壙71ではこの二者に加えて更に横方向のヘラ削りを施す例も見られる（図380）。

二類土器

一類土器同様、脚台が付くタイプ。一類土器との違いは以下の点にある。第一に体部外面には横方向の併行叩きが施される。その結果、体部の器厚は一類に比べかなり薄くなる。また脚

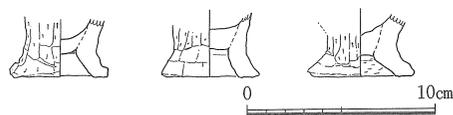


図380 土壙71の製塩土器 縮尺 1/4

台部は、脚径がいくぶん小形化している。同様に指頭圧痕を施すが、より平滑に仕上がっている。同部の器厚もやや薄手で端部は丸くおさめる傾向がある。本類も器台部と体部を連続して作り上げたのちに粘土塊を充填するが、その際に一類とは異なり上下二方向から、これを行う。その後脚台部内面を丁寧になでつけており、一見しただけでは充填法によるものとはわかりにくい。体部形状では、比較的、直線に立ち上がる一類に対して、ゆるやかにカーブを描いて立ち上がり、口縁部では直立ないしは、弱く内傾する。

鹿田・後・4期～同・古・1期の遺構から出土している。平行叩き調整で脚台部を持つ製塩土器は弥生時代後期末～古墳時代前期末まで比較的長い期間存続するが、序々に脚台が小形化し、同時に器壁も薄化が進む傾向が知られている。また後出的なものなど体部断面形状がV形から□形に近づく。この点からみても、2類は平行叩き調整、脚台付タイプの中でも古い様相を持つといえる。

量的には全体の1割強・4ヶ所の遺構から出土している。このうち土壙142は、一類の項で示した出土状況2タイプのうち後者に相当し、脚台部で数えて10個体前後、重量で1.7kgの出土量を計る。

この点からみて、一類同様に本類も近接地点で製塩作業に用いられたと推定できる。なお本類土器については、一類でみたような技法上の差異は確認できなかった。相対的に均質的な一群である。

三類土器

今回報告分の資料で器形の全容がわかるものはないが、本類には脚台はなく、丸底で口縁部が直立ないしは、ゆるく内湾する碗形を呈すると推定される。

外面口縁部付近には、格子目、矢羽根、横位あるいは斜位の平行叩きを施すものと、なでつけただけで終わるものがある。この時期中部瀬戸内海の一部地域の製塩土器には内面を二枚貝腹縁条痕で調整するものもみられるが、本類はいずれも丁寧ななでを施すのみである。

わずかに2つの土壌中から検出されたのみで個体数にして10個体程度と一～三類の中で最も少ない。また一・二類でみられた多量の製塩土器細片が炭・焼土と共に出土する状態、二次的加熱による変色、煎熬過程に使用した製塩土器特有の著しい表面剥離が認められなかった。したがって、本類段階では、鹿田遺跡において製塩作業が行なわれた確証はなく、むしろ他の生産地からの搬入品と推定できる。

本類が出土した2つの遺構、土器溜り5・土壙410では各々、田辺編年TK43式ないしTK290式及び、TK217式併行期の須恵器に伴っている。これは従来所見と矛盾しない。また土壙410出土の資料は、TK217式併行期と本類土器の中では新しい時期に属するが、いずれも口縁部付近の器厚3～4mmと薄手で、比較的凹凸の明瞭な様々の意匠の叩き目をもつ土器と、全くナデ指頭圧痕のみで終わるものがある。わずか一例の資料であるが、これに先行する土器溜り5の製塩土器^(註1)に比べ、はるかに薄手となっている。岡山県広江浜遺跡・同出崎長崎遺跡^(註2)

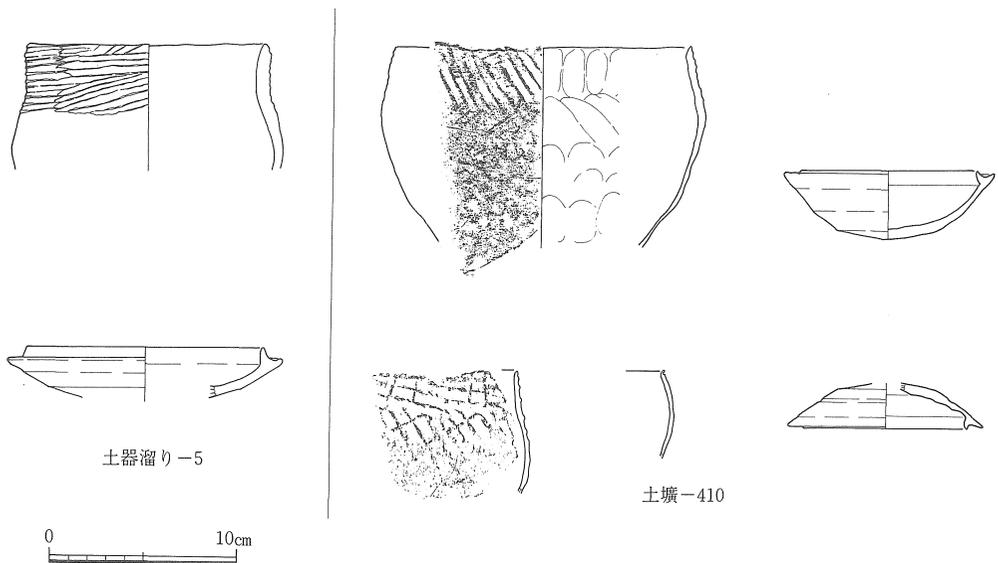


図381 Ⅲ類製塩土器 縮尺 1/4

等で、本類土器でも新しい時期のものが薄手化する事例が報告されているが、この資料も、同様の傾向を示しており、本類を細分する目安となりうるものであろう。(図381)

以上、一～三類の説明を行なった。今回報告する鹿田遺跡Ⅰ地点では、鹿田・後・2a期を中心とする時期、鹿田・後・4～同・古・1期・古墳時代末のTK43～TK217式併行期の三時期のものが知られる。このうち前二者では、出土量・出土状態から、本遺跡内の近接した地点で製塩を行なった事を示しうる事、後者は同様の点から、搬入品との推定をした。

一類土器の形態差について

最後に一類土器の項で触れてきた形態差の点について、周辺遺跡の同時資料との若干の比較検討を試みる事にする。

上東遺跡^(註3) (図382)

足守川下流域に位置し、併列する四つの微高地からなる。製塩土器は、このうち主に鬼川市微高地から出土している。そこでは製塩炉を始め、多くの製塩土器廃棄ブロックが検出され、1000個体を超える量の製塩土器をみる。この中から鹿田・後・2期併行期の資料についてみてみよう。

東鬼川市P-3(井戸)では、計110個体余の製塩土器が、多量の炭・焼土片と共に出土している。これらは脚台部の整形・調整の手法差から4グループに分類する事ができる。

- (1) 脚台部外面は指頭圧による凹凸が著しい粘土塊は上方一方向から団子状のものが詰められている。充填後内面に横方向の篋削りを施す。(図382-①)
- (2) 脚台部外面の大部分には篋削り及び指頭圧痕はそれほど目立たない。体部との境部分の内径は比較的大きく、充填される粘土塊は薄い円盤状を呈する。脚台部内面は軽くなる。(図382-②)
- (3) 脚台部外面、充填部の形状は(1)と変らないが、内面を強くなでつけて、充填粘土塊を押しつぶし脚台部と密着させている。(図382-③)
- (4) (1)～(3)が粘土塊を上方からのみ充填していたのに対し、上下二方向から施す。内面は丁寧になでており、一見したところ、充填手法を用いている事に気付かない程である。(図382-④)

量的には(1)が大多数を占め、以下(2)～(4)の順に続く。

5-P-38土壙や、P-2、P-3土壙等、同時期資料でも以上の4種類の全てあるいは二・三種類が確認できる。各々での現われ方には差違があるようだが、(1)内面に篋削りを施す類が、主流である点は変らない。

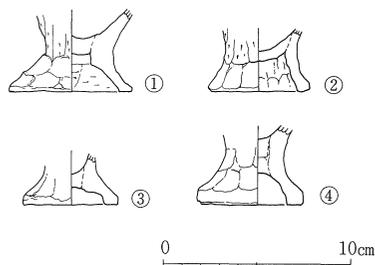


図382 上東遺跡 東鬼川市 P-3 土壙の製塩土器 縮尺 1/4

百間川原尾島遺跡^(註4) (図382)

旭川東岸平野に位置する。丸田調査区井戸一16等でこの期のまとまった資料を出土している。本遺構は、総計200個体余の一括土器廃棄が認められ祭祀行為との関連が推定されている。この中に約45個体の製塩土器もその中にある。

出土製塩土器の様相は、一方向充填で脚台部内面を横なでするものが多い。ただし少量ながら二方向充填もみられる。内面篋削りには認められない。同遺跡の他の同時期資料においても同様の傾向がある。やはり、上東・鹿田遺跡と同様に一括資料中に微妙な技法差がみられる。

この他吉井川東岸の邑久平野では、同時期の良好な一括資料は知られていないが、散発的に見られる同時期資料では脚台部内面篋削りはない。なお、児島半島、讃岐地方の同時期資料については現時点では詳細不明である。

今回実施したのは、鹿田遺跡を含め僅か三遺跡資料の検討に過ぎなかった。今後より一層検討対象を広げる必要があるが、とりあえず、製作・調整技法の特徴に関して、以下の傾向を認めることが出来る。

第一には、各々の遺跡において鹿田・後期2期並行段階では、同時に廃棄されたと見られる一群の製塩土器が、単一の技法では製作されていないという点である。既に述べたように一集落内で、同時に2～3種類の製作・調整技法が共存していることを示すであろう。

第二に、各々の遺跡間あるいは遺跡群間で保有する技法の種類、出現頻度に差異が認められる点である。最も端的に示しているのは、脚台部内面の篋削り技法である。上東遺跡ではこれを施す頻度が高いが、百間川原尾島遺跡では認められない。鹿田遺跡には存在するものの、極めて小数である。また、粘土塊充填法では、上東・百間川原尾島の両遺跡では、小数見られるものの、鹿田遺跡では認められない。他の日常用土器同様に該期の製塩土器についても、「小地域差」が、確認できる事が判った。またその現れ方が興味深い。

以上の傾向は、先に述べたように二類製塩土器段階では認められなくなる。この段階でははるかに均質的な様相を示すようである。

なお従来から、該期の製塩土

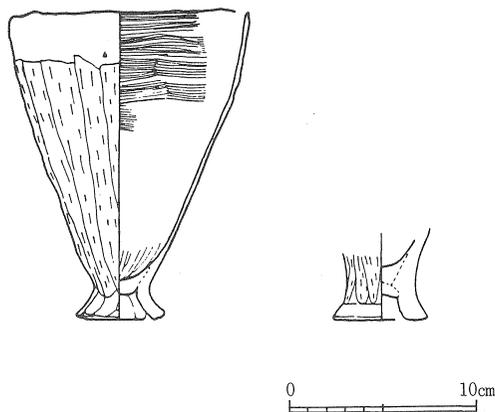


図383 百間川原尾島遺跡 丸田 井戸一16の製塩土器

考 察

器は、個体間の格差が大きいことが指摘されている。それは主に口縁径，脚台部径計測値のばらつきとして，認識されてきたし，こうしたばらつきが次第に小さくなる傾向については，專業化の進展，計量上の便宜から説明されてきた。^(註5)

今回指摘したように，法量上の差異に加えて，技法上の差異が該期の製塩土器の個体間格差の一因となっているとすれば，その解消は従来の点に加え技法の淘汰・統一といった点からも検討される必要がある。

今後，こうした形態差の出現状況の詳細な把握を通して，該期の主要な生産地域である当地方の製塩組織に関する理解を深めたい。(大久保 徹也)

註

- 1 間壁忠彦・間壁霞子・藤田憲司・小野一臣「広江・洗遺跡」『倉敷考古館研究集報』第14号 1979 倉敷考古館
- 2 近藤義郎「出崎長崎遺跡」『岡山県史 考古資料』1986 岡山県史編纂委員会
- 3 伊藤晃・柳瀬昭彦・藤田憲司・池畑耕一・村上幸雄「上東遺跡の調査」『岡山県埋蔵文化財調査報告』第2集 1974 岡山県教育委員会
柳瀬昭彦・江見正己・中野雅美「川入・上東」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』第16集 1977 岡山県教育委員会
なお本稿で利用した東鬼川市P-3土壌の資料は，柳瀬昭彦氏の御厚意により1985年実見検討の機会を得た。
- 4 光吉勝彦・葛原克人・伊藤晃・柳瀬昭彦・浅倉秀昭・江見正己・中野雅美・内藤善史「百間川原尾島遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』第39集 1980 岡山県教育委員会
正岡睦夫・光永真一・島崎東・平井泰男・高畑知功他「百間川原尾島遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』第56集 1984 岡山県教育委員会
- 5 近藤義郎「日本塩業史の考古学的研究」『土器製塩の研究』1984 註3文献
柳瀬昭彦「土器製塩」『えとす24号』1984

5 サヌカイト遺物の分析

1 はじめに

戦後における弥生石器の総合的な研究は香川県詫間町紫雲出遺跡発掘調査報告書における佐原眞の研究を嚆矢とする^(註1)。そこでは個々の石器の形態や製作技術などについて詳細な検討が加えられており、さらに弥生時代中期後半において石鏃が大形化・豊富化する現象などを石製武器の発達ととらえ、その背景に畿内を中心として進められた政治的統合の動きを想定している。これ以後、九州・近畿では磨製石器や打製石器の生産体制の検討などの新たな石器研究が展開する^(註2)が、瀬戸内においては佐原の研究以降新たな方向性をもった石器研究をみない。本稿では、鹿田遺跡の弥生石器の中からサヌカイト遺物を取り上げ、まず素材である剥片の分析、さらに石核の分析を行なった後、素材と製品との関係を検討し、本遺跡のサヌカイト石器の製作過程の復元を試みたい。

2 剥片の分析

資料体 今回の調査において出土したサヌカイト遺物の内訳は、Ⅰ地点・Ⅱ地点を合わせて、石鏃9点、スクレイパー6点、楔形石器8点、二次加工ある剥片2点、打製石庖丁6点、石核1点、微小剥離痕ある剥片9点、剥片41点である^(註3)。これらの遺物の大半は弥生時代中期後半～弥生時代後期の遺構および遺物包含層からの出土であるが、その資料総数が乏しいこともあり、ここではこれらのサヌカイト遺物は弥生時代中期後半～弥生時代後期に属するものと大きくとらえ、中でも遺構の検出数比から弥生時代後期中葉にその中心をおくものと推定しておきたい。以下の剥片の分析においては、先の微小剥離痕ある剥片9点を含めた50点を対象とする。

長幅分布 (図384) 対象剥片50点のうち完形剥片は26点を数え、全体の52%である。ここではまず完形剥片26点についてその長幅分布を検討する。完形剥片の長幅分布をみると、最小の1点を除き、残りの完形剥片は大きく3群にまとめることができる。すなわち長さ1.6～3.7cm、幅1.7～3.6cmの比較的小形の一群、長さ2.9～5.0cm、幅4.1～5.1cmの相対的に中形の一群、さらに長さ4.6～10.0cm、幅5.7～8.8cmの大形の一群である。以下最小の1点は碎片として完形剥片からは除外し、上の各群をそれぞれ小型剥片、中型剥片、大型剥片とし、この分類を中心に剥片の分析を進めることとする。今回の出土資料においては、小型剥片16点、中型剥片5点、大型剥片4点となる。

次に長幅比をみると、小型剥片の場合、長幅比2：3～3：2の間に集中しており、縦長剥片と横長剥片のどちらかが卓越するというのではなく、むしろ長さと同幅とが近似した剥片が多いという傾向を認めることができる。一方、中型剥片と大型剥片はともに点数が少なく、現状

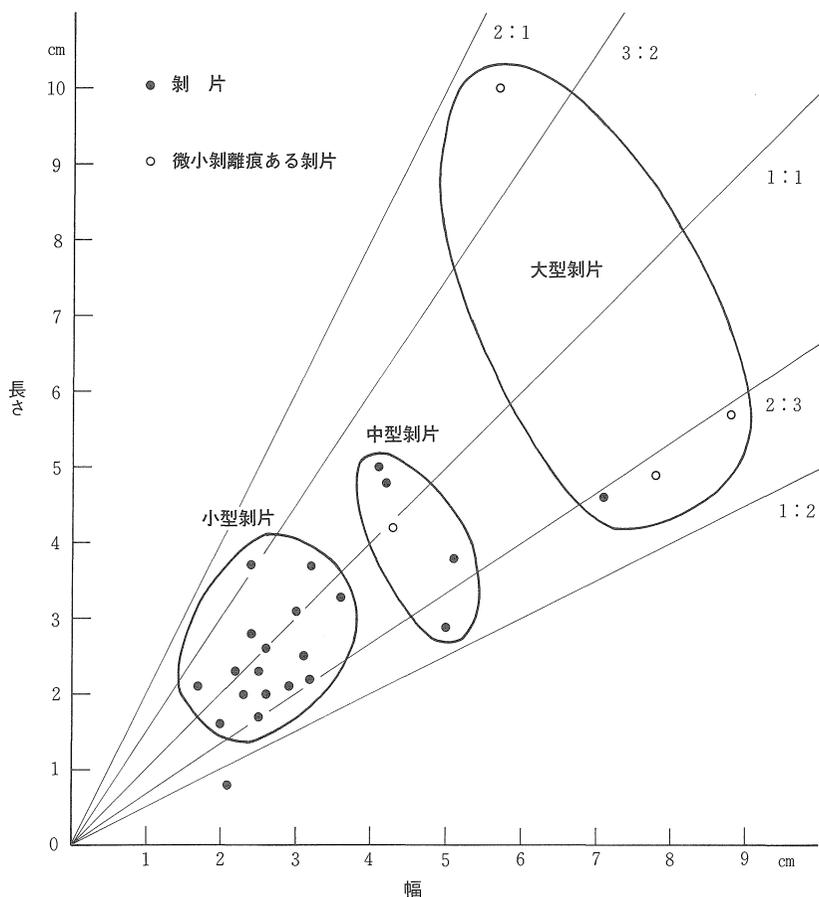


図384 サヌカイト剥片の長幅分布

では特定の長幅比に集中するかは不明であるが、大型剥片では4点中3点が長幅比2:3付近に位置することは注意される。

なお、大型剥片4点のうち3点の末端には微小剥離痕を残しており(図386—11)、残りの1点も僅かに微小剥離痕を残す可能性が認められる(図386—10)。微小剥離痕ある剥片は中型剥片中にも1点存在するが、小型剥片には認められず、本遺跡においては、比較的大形の剥片を選択して利器として未加工のまま使用したことが窺われる。

厚さ度数分布(図385) 剥片全体の厚さ度数分布をみると、厚さ0.3cmに最大のピークがあるが、厚さ0.6cmにもピークがあり、正規分布を示さない。小型剥片においては厚さ0.4cmを中心に厚さ0.2~0.6cmの間でほぼ正規分布に近い在り方を呈している。中型剥片は厚さ0.3~1.0cmの間に大きく分散している。大型剥片においては厚さ0.7~1.0cmの間に分布しており、小型剥片とは厚さの分布域を異にしている。資料数が乏しいため明確ではないが、以上の分析

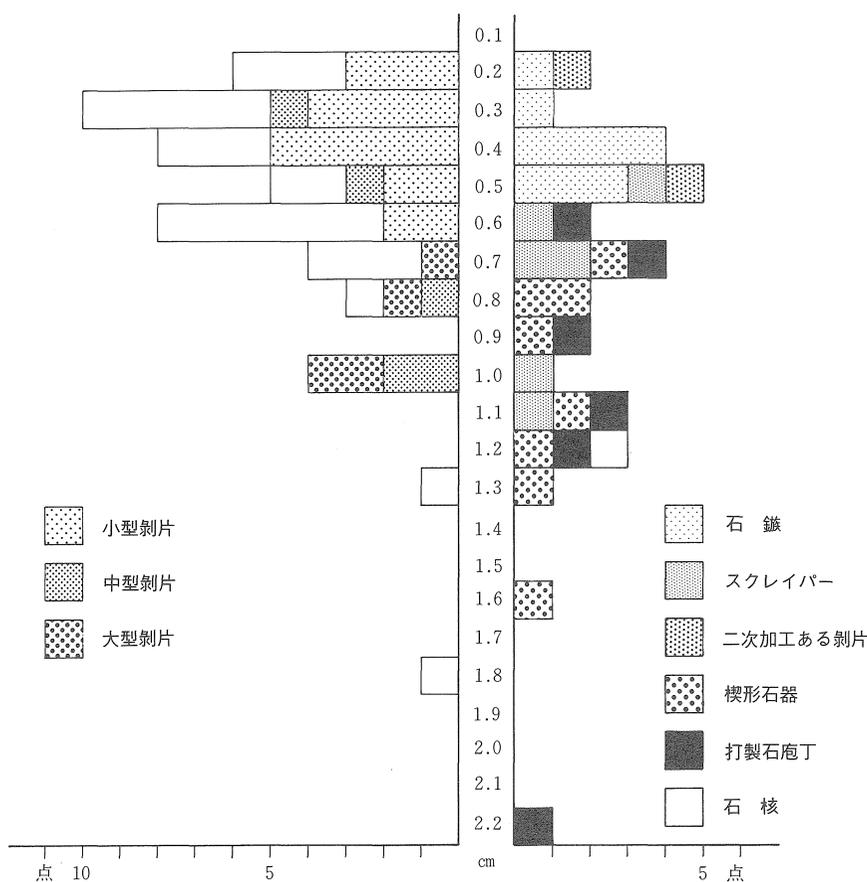


図385 サヌカイト剥片(左)・同剥片石器(右)厚さ度数分布 (小数点第2位切上げ)

から完形剥片の厚さは各群によってその集中域が異なる可能性を認めることができる。

打面形態 (表19) 小型剥片の打面形態はいずれも点状打面を呈し、極めて打面形態の斉一性が強いものとなっている。なお、打面につぶれを残すものは比較的少ない。一方、中型剥片では自然面打面が4例、点状打面が1例となっており、小型剥片とは大きく異なった傾向を示している。大型剥片においても自然面打面2例、点状打面・平坦打面各1例を数え、例数が乏しいため明確ではないが、中型剥片と同様自然面打面が主体をなす可能性を認めることができる。

ここで認められる小型剥片と中・大型剥片との主体となる打面形態の相違、言い換えれば、小型剥片と点状打面、中・大型剥片と自然面打面との相違性は剥片の規格の相違が剥片剥離技術の相違に起因する可能性を示唆している。すなわち、異なった剥片剥離技術を用いることによって、意図的に異なった規格の剥片を生産した可能性が認められるのである。この問題につ

いては後に再検討することとする。

自然面の有無 (表19) 自然面の有無について検討すると、小型剥片では16例中4例、中型剥片では5例中4例、大型剥片では4例中3例が自然面を残しており、ここでも小型剥片と中・大型剥片とではその残存度に顕著な相違が認められる。

自然面の残存する部位は完形剥片においては打面部や側面部に限られており、表面に自然面を残すものは認められない。表面に自然面を残す例は欠損した剥片の中に1例存在するのみである。このことは一般に石核は礫を直接の材料

とするのではなく、周辺部に自然面を残す大形の剥片を素材としたことを示唆している。このような素材は今回の調査においては検出されていないが、岡山県山陽町用木山遺跡や岡山市百間川今谷遺跡では僅かではあるが検出されており、本遺跡にも本来大形の剥片素材の形でサヌカイトが搬入され、石核素材となった蓋然性は高いといえよう。

なお、一般に自然面の残存度の違いは、剥片剥離の進行度の違いと結びつけられるが、先の議論を踏まえるならば、本遺跡出土のサヌカイト剥片の自然面の残存度の違いは、必ずしも剥片剥離の進行度の違いとは対応しないこととなる。

先行剥離面数 (表19) 剥片の表面に残る細かい剥離痕を除いた先行剥離面数を1枚・2枚・3枚および4枚以上に四分すると、小型剥片においては先行剥離面数が2枚のものと3枚のものが合計11例あり、小型剥片全体の約69%を占めている。中型剥片では1枚と2枚が各2例、4枚以上のものが1例となっている。大型剥片には先行剥離面数が1枚のものが3例あり、他に4枚以上のものが1例認められる。この先行剥離面数においても、小型剥片が2枚と3枚のものに集中する傾向があるのに対し、中・大型剥片にはそのような傾向が認められないという相違が存在している。

先行剥離面剥離方向 (表19) 剥片表面の細かい剥離痕を除いた先行剥離面の剥離方向の構成を以下のように分類する。

- A：剥片裏面の主要剥離方向と同一方向の剥離方向（以下「上方向」という）のみのもの
- B：剥片裏面の主要剥離方向と逆方向の剥離方向（以下「下方向」という）のみのもの
- C：上方向と下方向とが併存するもの
- D：裏面の主要剥離方向と直交方向の剥離方向（以下「横方向」という）と上方向とが併存

表19 完形剥片の属性

		小型剥片(16)	中型剥片(5)	大型剥片(4)	計
打 面	自然面	0	4	2	6
	点状	16	1	1	18
	平坦	0	0	1	1
	調整	0	0	0	0
自然面	あり	4	4	3	11
	なし	12	1	1	14
先行剥離面数	1	3	2	3	8
	2	5	2	0	7
	3	6	0	0	6
	4以上	2	1	1	4
	A (上)	2	2	1	5
先行剥離面剥離方向	B (下)	0	0	2	2
	C (上・下)	2	2	1	5
	D (上・横)	7	1	0	8
	E (横)	3	0	0	3
	F (下・横)	1	0	0	1
	G (不明)	1	0	0	1

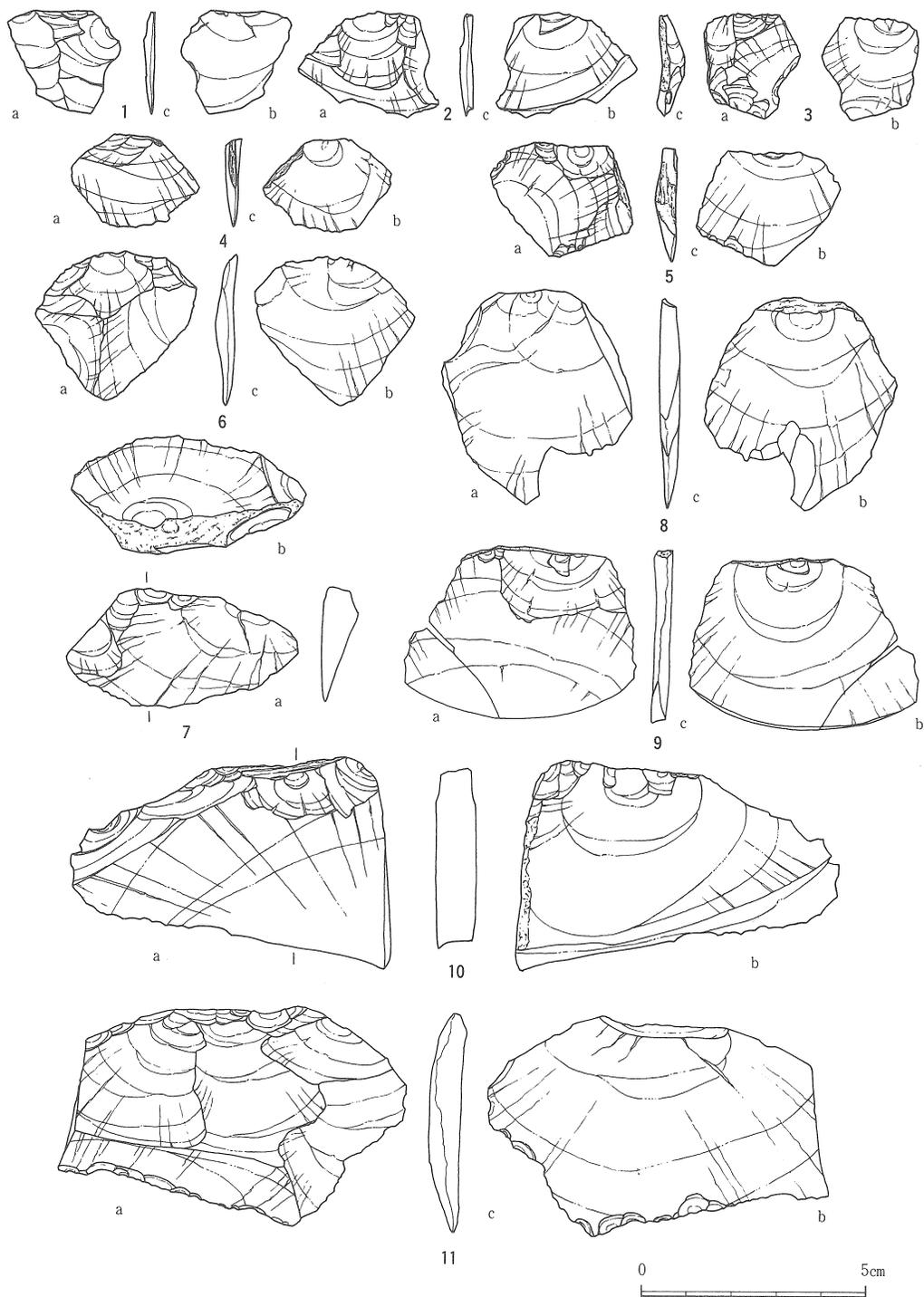


図386 剥片実測図 縮尺 2/3

(1～6：小型剥片 7～9：中型剥片 10・11：大型剥片)

するもの

E：横方向のみのもの

F：下方向と横方向とが併存するもの

G：剥離方向が不明のもの

この分類をもとに各剥片を検討すると、小型剥片ではDの構成をとるものが16例中7例と最多であり、Eが3例でこれに次いでいる。これらのDとEの構成をとるもので小型剥片全体で約63%を占めており、小型剥片では横方向および上方向の先行剥離面剥離方向をもつものが多いことが認められる。この先行剥離面剥離方向の構成からは、小型剥片の剥離においては90°前後の打面転移が一般的であった可能性を指摘できる。

一方、中・大型剥片についてみると、中型剥片ではA・Cが各2例、Dが1例、大型剥片ではBが2例、A・Cが各1例となっており、小型剥片で一般的であったD・Eの構成をとるものは1例のみである。中・大型剥片においては先行剥離面剥離方向の構成に横方向のものを含む例は少なく、上方向もしくは下方向のものによって構成される例が一般的であるという傾向を認めることができる。このことから、中・大型剥片は180°前後の打面転移を伴う剥片剥離技術によって生産された可能性が想定できよう。

小結 以下においては、上述の完形剥片を中心とした分析のまとめを行なう。

まず完形剥片においては、その規格から相対的に多量の小型剥片と少量の中型剥片・大型剥片の3群に分かれることが認められた。さらに打面形態・自然面の有無・先行剥離面数・先行剥離面剥離方向の分析において、前者と後二者の間には比較的顕著な相違を認めることができた。特に打面形態と先行剥離面剥離方向の分析からは、前者と後二者の剥離技術が異なったものであった可能性を指摘できよう。中型剥片と大型剥片の関係はともに資料数が乏しく不明瞭であるが、上述の諸属性の分析では共通した傾向を認めることもでき、両者は共通した剥片剥離技術の所産である可能性もあろう。

3 石核の分析

資料体 前述したように本遺跡における石核は剥片素材であったとみられることからその認定は困難な点もあるが、現状で石核と認定できる遺物は1点のみである(図387—1)。以下においてはこの資料の分析とともに、先に報告した岡山大学津島地区遺跡群(以下「岡大津島遺跡群」と略称する)のサヌカイト遺物の分析で、従来楔形石器とされている石器の中に石核が存在する可能性が認められた^(註5)ことから、本稿で楔形石器としたものについても取り上げて、その可能性の検討も行なうこととする。

石核の剥離面構成(図387—2)^(註6) 本例は最大厚1.2cmを測る大形厚手の剥片を素材とする石核である。面1は素材の先行剥離面であり、面2は同じく主要剥離面である。面3・4は

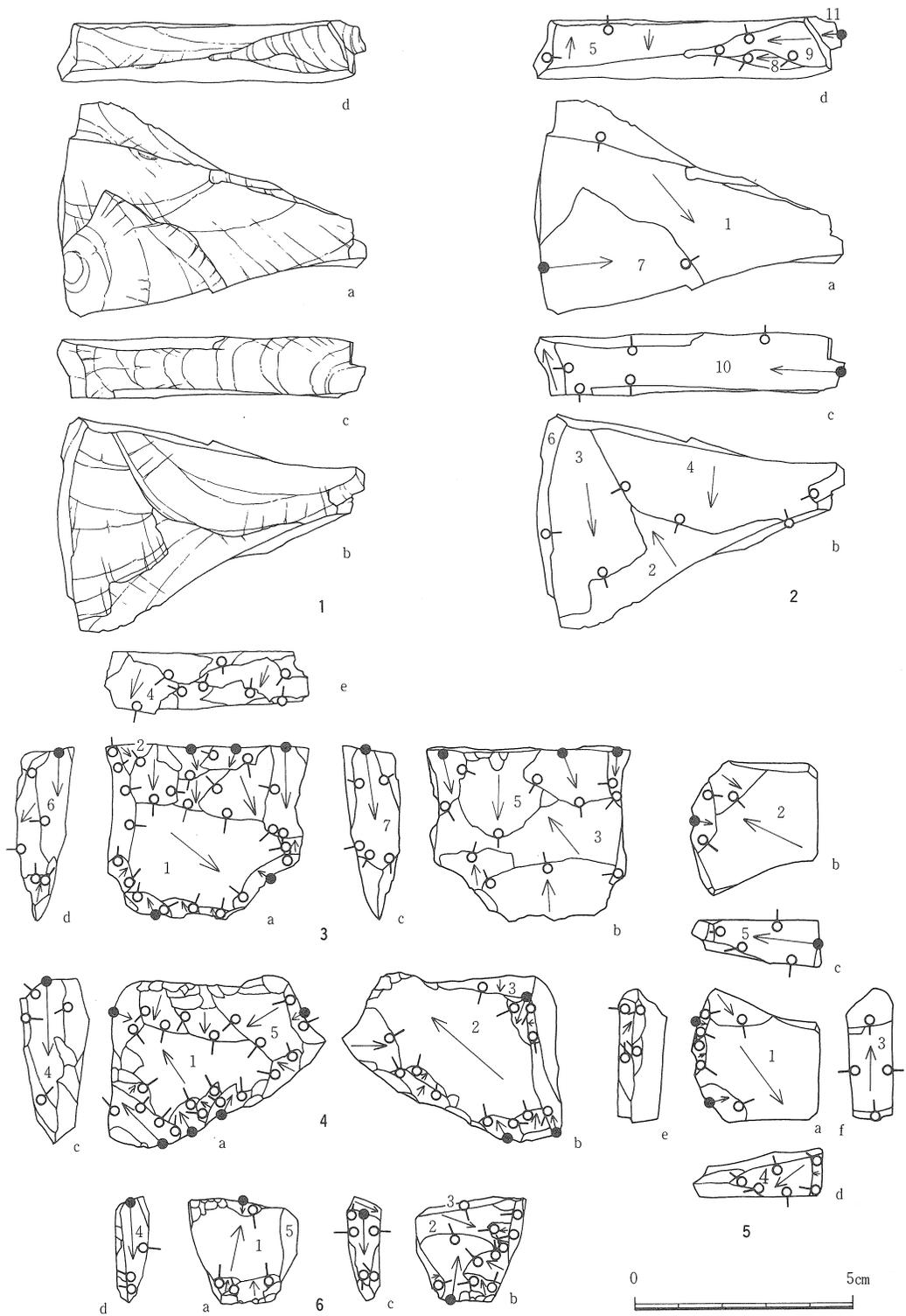


図387 石核実測図および石核・楔形石器剥離面構成模式図 縮尺 2/3

初期の段階の剥片剥離面であり、ともにほぼ同一方向から剥離されている。面4の剥離面の幅は現状で約5.6cmを測り、面3とともに大型剥片に対応する剥離面と考えられる。面3・4形成後、a面上方がねじり折られ(面5)、さらにa面左側も折断されている(面6)。この折断面である面6を打面に素材の先行剥離面(面1)を剥離作業面として剥片が1枚剥離されている(面7)。面7は現状で長さ約3.7cmを測り、小型剥片に対応する剥離面の可能性があろう。この面7を截断状の剥離面(面10)が切っており、面11も面10と同一の打撃によって形成されたものと認められる。d面に存在する面8・9の小剥離を含めて、これら一群の縦長の剥離面が意図的なものであったのか、偶発的なものであったのかは現状では明らかではない。

以下においては上述の分析をまとめて、本例における剥片剥離工程を復元する。まず石核の素材は先に触れた用木山遺跡の出土例のような大形の剥片であったと推定できる。後の折断のため詳細は不明であるが、この大形の剥片の主要剥離面を剥離作業面として大型剥片が同一方向から連続して剥離されたと推定できる。この大型剥片剥離後の残核を折断・分割し、折断面を打面として小形の剥片が剥離されている。その後打面をほぼ180°転移し、截断状の剥離を行なった後に放棄されている。

この石核における折断後の小形の剥離面(面7)は折断面(平坦面)を打面として形成されたものであり、先の小形剥片はいずれも点状打面を有していることから、この剥離面と小型剥片との対比には問題が残るが、ここでは両者の法量の近似から一応この剥離面を小型剥片に対応するものとしておきたい。このことを認めるならば、本例からは大型剥片の生産と小型剥片の生産とは同一の素材から行なわれるが、前者の後に素材の分割が施され、両者は別個の工程に属していることが推定できる。

楔形石器の剥離面構成(図387—3～6) 本遺跡出土の楔形石器の中に石核が存在する可能性を検討する前に、岡大津島遺跡群出土の楔形石器の中に石核が存在する可能性が高いとした根拠について簡単にまとめると、まず楔形石器の剥離面の大きさが石器素材となる剥片の大きさに対応し得るとみられること、楔形石器の剥離面の打面と石器素材剥片の打面がともに点状打面を主体とするとみられること、楔形石器以外に石核になり得る遺物が認められないことなどが挙げられる。^(註7)

以下においては本遺跡出土の楔形石器8点のうち碎片4点を除いた4点の剥離面の検討を行なう。

3は厚さ1.2cmを測る比較的大形の楔形石器である。面1・2は素材の先行剥離面、面3は素材の主要剥離面である。面4は折れ面である。この面4を打面として多数の剥離がなされているが、最大の面5で長さ1.9cm、幅2.0cm前後を測ると推定されるに過ぎない。これらの剥離面から復元される剥片の大きさは小型剥片の大きさよりも相対的に小さく、石鏃の素材として

も十分な大きさを有しないと思われる。面6・7は截断状の剝離面である。

4も厚さ1.6cmを測る大形の楔形石器である。面1は素材の先行剝離面、面2は主要剝離面である。面3は折れ面、面4は截断面であり、両面を打面として、多数の剝離がなされている。このうちの最大の面5においても、長さ1.5cm、幅2.5cm前後を測るに過ぎず、これらの剝離面から復元される剝片は先の3の楔形石器と同様石鏃素材としては十分な大きさを有しないと推定できる。

5は厚さ1.1cmを測る比較的小形の楔形石器である。面1は素材の先行剝離面、面2は主要剝離面である。面3～5はいずれも截断状を呈している。a・b両面に数枚の剝離面が存在するが、いずれも極小である。

6は厚さ0.7cmを測る小形の楔形石器である。面1は素材の先行剝離面、面2は主要剝離面である。面3は折れ面、面4・5は截断面である。a・b両面に剝離面が存在するが、先の5と同じくいずれも極小のものである。

小結 以下において上述の石核および楔形石器の分析についてまとめを行なう。

石核の分析からは大形の剝片素材からまず大型剝片が剝離される工程があり、その残核を分割し、その分割した残核をブランクとして小型剝片を剝離するという工程が推定できる。中型剝片の生産の工程は今回の資料からは推定不可能であるが、ここでは一応先の剝片の分析の結果から、中型剝片も大型剝片と同様の工程で生産されたものと推定しておきたい。

次に楔形石器の分析からは、楔形石器の剝離面はいずれも今回出土した完形剝片よりも相対的に小形である傾向が認められる。よって、今回の資料の中には石核に相当するものは指摘することができない。先に報告した岡大津島遺跡群の楔形石器と本遺跡の資料とを比較すると、前者では二次的な剝離面が大きく深いものが多いのに対し、後者では上述したように周辺部にとどまる浅く小さい剝離面が多いこと、前者では後者に比べて縁辺部のつぶれが顕著なこと、後者では平坦面を打面とした剝離がなされているものが存在することなどの相違を認めることができ、総体として両者の機能の相違が推測される。^(註8)

4 石器と剝片との対比

以下においては石器の長幅分布および厚さ度数分布と剝片のそれとを対比し、両者の関係を推定する(図384・385・388^(註9))。

石鏃 長さ1.8～3.9cm、幅1.5～3.1cm、厚さ0.2～0.5cmの間に分布している。長幅分布ではほぼ小型剝片と対応し、厚さ度数分布では小型剝片および中型剝片の一部と対応するとみられる。これらのことから小型剝片と中型剝片が石鏃の素材に対比可能であると考えられよう。

スクレイパー 完形のスクレイパーは1点のみで、長さ3.9cm、幅6.0cmを測り、現状では大型剝片と中型剝片の中間の大きさを有している。一方、厚さは破損品を含めると、0.5～

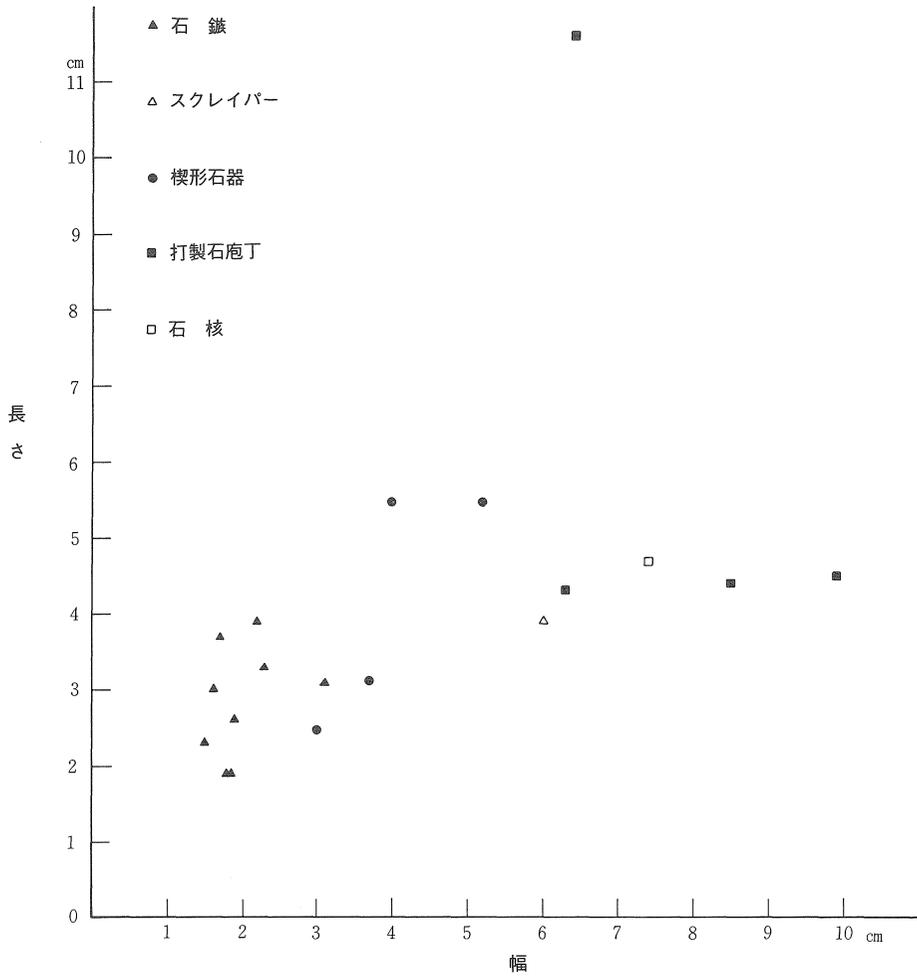


図388 サヌカイト剥片石器の長幅分布

1.1cmの間に分布している。例数が乏しく明確ではないが、以上の対比からスクレイパーは大型剥片と対応するものと想定しておきたい。

楔形石器 長さ2.5～5.5cm，幅3.0～5.2cmの間に長幅分布は位置し，現状では小型剥片および中型剥片の長幅分布に対応している。しかしながら，碎片を含めた厚さ度数分布は0.7～1.6cm間に分布しており，小型剥片・中型剥片より厚手の傾向が認められる。したがって，これらの楔形石器はいずれも主として折断・分割によって本来の素材の大きさをほとんどどめていないものと考えられ，厚さ度数分布からみて，その素材は大型剥片もしくは先に存在が推定されたより大形の剥片であったと想定できる。

打製石庖丁 長幅分布は長さ4.3～11.6cm，幅6.3～9.9cmの間に分布し，一部は大型剥片に対応するが，より大形のものも認められる。厚さ度数分布は0.6～2.2cmの間に分散している。

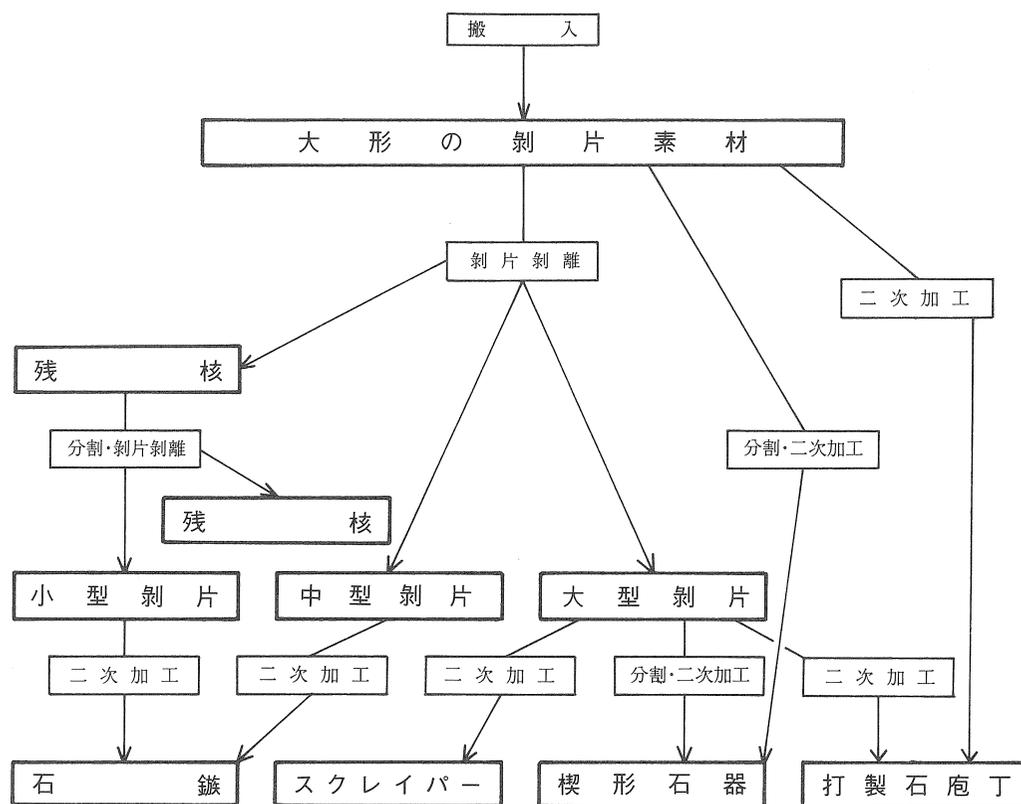


図389 サヌカイト剥片石器の製作過程

このような打製石庖丁の法量からは、その素材には楔形石器と同様、大型剥片もしくはより大形の剥片が対応するものと推定できる。

5 総括

以上剥片と石核の分析、剥片と石器との対応関係の検討を行ってきた。限られた資料に基づく検討であったため、今後の再検討の余地は極めて大きい。現段階での結論をまとめると、本遺跡におけるサヌカイト石器の製作過程は図389のように表わすことができる。この製作過程の復元からは、石器の個々の器種は特定の素材と結び付くのではなく、異なった工程に属する素材から製作されている可能性を認めることができる。このことは本集落に製品もしくは未製品の形で特定の石器器種（例えば打製石庖丁）が搬入されたのではなく、集落には大形のサヌカイト剥片が搬入され、これを素材とする一連の石器製作が集落内で完結していたことを示唆するものである。^(註10)

最後に本遺跡のサヌカイト遺物の在り方と先に報告した主として縄文時代晩期～弥生時代前期に属する岡大津島遺跡群のそれとの比較を中心として、山陽地方のサヌカイト供給体制の変遷について予察を行ない、本稿のまとめとしたい。

鹿田遺跡においては先に触れたように集落内にはサヌカイト石器の本来の素材として大形の剥片が搬入されたものと推定できるが、今回の調査では検出されていない。このような状況は先述した用木山遺跡で弥生時代中期中葉から後期初頭にかけての大量のサヌカイト石器や剥片が出土しているにもかかわらず、本来の素材とみられる大形の剥片が3点しか検出されていない状況と軌を一にするものであり、弥生時代中期～後期におけるサヌカイトの消費率の高さ、ひいてはその僅少性を意味するものと考えられる。一方、岡大津島遺跡群でも縄文時代晩期～弥生時代前期におけるサヌカイト剥片・同石器のほとんどが小形であることから該期のサヌカイト入手量の僅少性が推定できる^(註11)。

しかしながら、鹿田遺跡と岡大津島遺跡群と比較すると、前者には少量とはいえ打製石庖丁等の大形遺物が一定量存在し、さらに大形の剥片を素材とした一連の石器製作過程の存在が推定されるのに対し、後者では大形のサヌカイト遺物がほとんど認められず、小形の剥片を素材として両極打法によって石器素材を生産し、それを小形の石器に加工する過程の存在を現状では推定し得るのみである^(註12)という相違が存在する。このことは両者の石器製作過程の相違とその背景にある両者へのサヌカイトの供給量やその形態の相違を示唆するものである。さらに推論すれば、この両者の相違はサヌカイト供給体制そのものの縄文時代晩期～弥生時代前期から弥生時代中期～後期にかけての変化に起因する可能性が推定できよう。

現状では山陽地方におけるサヌカイト供給体制の実態は必ずしも明瞭ではないが、広島県福山市洗谷貝塚で縄文時代後期に属する大量の大形サヌカイト剥片が一括出土している^(註13)ことから考えて、該期にはある一定のサヌカイトの供給体制が確立していた可能性が推定できる。これに対して、縄文時代晩期には上述した岡大津島遺跡群にみられるように極端なまでにサヌカイトの供給が制限された結果生じたともみられるサヌカイト遺物の在り方を示す遺跡の存在が認められるのである^(註14)。この岡大津島遺跡群の在り方が縄文時代晩期に一般的であったかは現状では明確ではないが、該遺跡が縄文時代晩期末葉に新たに出現することから、縄文時代晩期には前時期からのサヌカイト供給体制も基本的に継続する一方で、一部で従来の供給体制に完全に組み込まれず、充分なサヌカイトの供給を受けられない岡大津島遺跡群のような小集落が出現した可能性も推定できる。

この推定は該期や前時期の実態が明瞭でないため、今後の検討を要するが、岡大津島遺跡群が弥生時代前期には農耕集落として定着すると推定できるのに対して、サヌカイト遺物の在り方には大きな変化が認められず、依然としてサヌカイト供給量の僅少性が推定されることから、縄文時代晩期から弥生時代前期にかけては従来のサヌカイト供給体制の変動期であった可能性は高いと考えることができる^(註16)。このサヌカイト供給体制の安定化・再編成が完了するのが特に岡山県南部で粘板岩製の磨製石庖丁にかわりサヌカイト製打製石庖丁が普及する弥生時

代中期のことであろう。以後弥生時代後期にも基本的なサヌカイト供給の在り方は継続すると考えるが、鉄器の普及に伴ってしだいに衰退するものであり、鹿田遺跡の資料もこのような流れの中でとらえることができよう。(栄 一郎)

註

- 1 佐原眞「第四章第一節 石器」『紫雲出』1964 70～97頁
佐原眞「後論第二節 石製武器の発達」『紫雲出』1964 131～145頁
- 2 代表的な研究としては以下のようなものがある。
酒井龍一「石庖丁の生産と消費をめぐる二つのモデル」『考古学研究』第21巻第2号 1974 23～36頁
下條信行「北九州における弥生時代の石器生産」『考古学研究』第22巻第1号 1975 7～33頁
蜂屋晴美「終末期石器の性格とその社会」『藤沢一夫先生古稀記念 古文化論叢』1983 37～82頁
- 3 本遺跡出土の剥片・剥片石器には、今回取り上げるサヌカイト素材のもの以外に、粘板岩製打製石庖丁1点、同剥片接合資料1点、頁岩製スクレイパー1点がある。
- 4 神原英朗『用木山遺跡』1977 463頁第277図1・3 なお同図2も自然面は残さないが、大形の剥片素材である。
高畑知巧ほか『百間川兼基遺跡1 百間川今谷遺跡1』（岡山県埋蔵文化財発掘調査報告51）1982 344頁第377図167
- 5 栄一郎「第7章2 石器類の分析」『岡山大学津島地区遺跡群の調査』Ⅱ（岡山大学構内遺跡発掘調査報告第2冊）1986 55～70頁
- 6 図387中の記号のうち「♀」は剥離面相互の切り合い（新旧）関係を表わしており、「○」の面が「|」の面を切っている（より新しい）ことを示している。また矢印は剥離方向を示し、「●」は打点が残存していることを表わしている。
- 7 註5文献 64～67頁
- 8 平坦な打面部を有する楔形石器の一部は平井典子が百間川兼基・今谷遺跡の報告で楔形石器Ⅱ類としたものに相当する。平井はこの石器をある程度乾燥させた木材を分割するためのクサビの用途をもつものと想定している。
平井典子「第5章第7節 石器」『百間川兼基遺跡1 百間川今谷遺跡1』（岡山県埋蔵文化財発掘調査報告51）1982 464頁
- 9 図388は石器の素材剥片の主要剥離方向が認定可能なものは素材の長幅に沿って長さと同幅を計測して、主要剥離方向が不明のものは石器の長軸に沿って長さを、それに直交して幅を計測して作成した。図には破損品は除外している。
- 10 蜂屋晴美は畿内弥生時代中期には、遺跡によってサヌカイト剥片・石核・未製石器の出土状況に差があることから、集落内でサヌカイト石器製作を行なった集落とサヌカイト石器の製品を搬入した集落とが併存することを指摘し、該期には畿内において政治的共同体のもとで集落間の分業が成立していた可能性を想定している。瀬戸内地方においても今後重視しなくてはならない視点である。
註2 蜂屋文献 48～70頁
- 11 註5文献 67頁
- 12 註5文献 67頁
- 13 小都隆『洗谷貝塚』1976 26～28・65～71頁
これらの石材は報告書ではサヌカイトの可能性がある安山岩とされていたが、その後藁科哲男らによって洗谷貝塚出土剥片4点が分析され、それらは香川県金山東産のサヌカイトと同定されており、上述の石材も金

考 察

山東産サヌカイトと考えられる。

藁科哲男ほか「蛍光X線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定(Ⅲ)」『考古学と自然科学』第10号
1977 53～81頁

- 14 既に、洗谷貝塚を中心としたサヌカイトの供給体制については、註13小都文献で触れられているほか、小野昭が考察を加えている。

註13小都文献 73～74頁

小野昭「5 石器の生産」『岩波講座 日本考古学』3 1986 158～159頁

- 15 詳細な時期は不明であるが、吉備高原に位置する岡山県川上町権現谷岩陰遺跡においては、サヌカイト石器や剥片、さらには剥片剥離技術がサヌカイトの僅少性の結果生じたと推定される特徴を有することが指摘されている。

阪本和子ほか「7. 出土遺物Ⅱ 石器・骨角器」『権現谷岩陰遺跡』1983 73頁

- 16 近年、註13でも触れたように藁科哲男・東村武信によるサヌカイトの産地同定が進められている。それによると、例えば大阪市内の二、三の縄文～弥生遺跡についてみると、縄文時代後期にはある程度の香川県金山産のサヌカイトが存在する(森の宮遺跡)が、縄文時代晩期には金山産のサヌカイトはほとんど認められず(長原遺跡)、弥生時代前期には再びある程度の金山産サヌカイトが存在する(森の宮遺跡)ことが認められる。また兵庫県姫路市丁・柳ヶ瀬遺跡出土サヌカイトの産地同定では、縄文時代中期末～後期および弥生時代前期～中期においては金山産のサヌカイトが普遍的に供給されていたとみられるが、弥生時代前期には僅かではあるが、淡路島産のサヌカイトも存在することが指摘されている。

これらの産地同定は限られた資料の分析に基づくものであり、今後分析例の集積が必要であるが、上述の同定結果は縄文時代晩期から弥生時代前期にかけては金山を中心としたサヌカイトの供給体制の変動期であったことを示している可能性があるだろう。

山中一郎「第Ⅳ章第1節第iii項 石器製作技術と原材」『長原遺跡発掘調査報告』Ⅲ 1983 206・213～214頁

藁科哲男ほか「付章第6節 丁・柳ヶ瀬遺跡出土のサヌカイト遺物の石材産地分析」『丁・柳ヶ瀬遺跡発掘調査報告書』1985 228～238頁

6 石鍋について

鹿田遺跡では中世の包含層及びその遺構内埋土中から3点の石鍋片が出土している。

石鍋とは、胴部中央以上の部分に鏝を有する形態から名付けられた滑石製の容器である。^(註1)
 製作地は北部九州の長崎県・福岡県にほぼ限られているものの^(註2)、消費地は西日本一帯に広がり、平安時代から鎌倉時代にかけての包含層中よりかなり出土している。九州においては石鍋研究も進展を見せており、特にその製作方法については何人かの研究者によりかなり詳細な復元が試みられている。

岡山県においては出土例もまだまだ充分とはいえない。11遺跡20数点を数え上げるにすぎず11点とやや多く出土している百間川原尾島遺跡^(註3)を除けば、ほとんどが1点ずつの出土である。また出土状況についても決して良好とは云えず、包含層出土としか取り扱えない様子である。

本稿では、これまでの石鍋研究の業績を紹介し、製作方法・編年案等について概説し、鹿田遺跡の石鍋片と百間川原尾島遺跡出土の石鍋片の観察から、石鍋消費地における一少なくとも2遺跡における一石鍋の特徴を抽出し、今後の研究の問題点を指摘することを目的とする。

石鍋が文献に初めて登場したのは、天承元(1113)年6月2日付の「筑前国船越莊末進勘文」(『平安遺文』2197)であるという。^(註4)それには石鍋4個で牛1頭との交換価値を持つという記載が見られるという。このことから、当時は石鍋というものが相当に高価で貴重なものであったことを窺い知ることができる。

石鍋が研究対象として取り上げられたのは藤井忠のもの^(註5)からであり、藤井は長崎県西彼杵郡の山間部や川畔に石鍋が数百と散在していたことを紹介している。

考古学的立場から研究を開始したのは喜田貞吉^(註6)である。喜田は石鍋を日常の使用に供された道具として把え、朝鮮で使用されている石鍋との比較に着目した。そこで、藤井論文のその地を「石製器具用材採掘の地」とし、「ここで器物の仕上げをするのではなく、いくらかでも重量を減じて石材の運搬するの労を省かんがために、大体の形をここで粗造りして、さらにこれをしかるべき工場に送って、そこで精製したもの」と予測している。これが、その後の製作工程研究の際の基本となっていくのである。

長崎県を中心に石鍋工房址の探究が始まったのはそれからである。1924年の長崎考古学会の創設から次第に生産址の様子が明らかにされていった。^(註7)

一方、消費地である生活址での研究の口火を切ったのは鏡山猛^(註8)である。鏡山は石鍋が土師器—須恵器—青白磁の組み合わせで発見されることが多く、「青磁器と石鍋を出土しない遺跡から採集される土師器は必ずそれを共伴する土師器よりも古い様式を示している」ことに注目

している。その結果、石鍋の使用年代は平安時代後期から鎌倉時代にわたるものである、との結論に達している。

1974年に下川達彌により発表された論文^(註9)で、石鍋製作地の研究はひとまずの決着をみる。下川は「工房址と生活址での発見資料に相違があることは明確になった」ことから、「原産地の把握及び石鍋出土地を摘出して問題点を探り出してみる」ことに論の根幹をおいており、特に製作工程復元においては卓越した展開を示している。ここでは簡単にその復元された製作工程についてのみ触れておくことにする。

まず、滑石露頭岩壁面に枡形の区画線を施すことから始まる。次に岩壁面から剥ぎ取るが、この段階で帯状突起が口唇部をめぐるタイプはその原形が作り出される。内部削り貫きと並行して口唇部の調整が行われ、「工房址での石鍋は外側は平滑で、内側は数多くの鑿痕の状態を終了」する。即ち、この後の仕上げ加工は喜田の指摘通り工房址では実施されないのである。

石鍋の編年作業は1982年木戸雅寿によって行われている^(註10)。広島県草戸千軒町遺跡出土の200個体近い石鍋片を、その形態分類及び草戸千軒での時期区分を基本にして編年を試みている。即ち、石鍋を「子細に比較検討を加えてみる」と「同型式中でも若干の差異」を認め、「さらに細かく数型式に分類できる」としている。「そこでその型式差異を年代差異ととらえ、遺構年代別による検討をもそこに加えた結果を以下に順を追って、その細分類の基準を示すとともに年代比定を行なっていく」ものである。ここで簡単に紹介しておく。

まず、石鍋と口縁部直下の鏝、把手の有無で3つに大別している。即ち、それらを全く持たない桶状のもの（Ⅰ）、瘤状・縦長状の把手が付く桶状のもの（Ⅱ）、口縁部直下に鏝が周るもの（Ⅲ）である。うち、草戸千軒町遺跡からはⅢのみが出土しており、その型式をさらに4つに（Ⅲ-a～d）細分をしている。

Ⅲ-a類は口縁部径と底部径がほぼ等しく、器壁の厚い桶状のもので、口縁端から鏝までの頸部が若干長く、鏝自身はその断面が正台形となるものと定義している。これは草戸Ⅰ期前半に比定できるものである。

Ⅲ-b類は鏝の先端が下に向き、器壁の傾斜が強くなる分、口縁部径に比べて底部径が小さくなるとし、Ⅰ期末頃に比定できるとしている。

Ⅲ-c類は鏝の上辺部の削り出しは下辺部の削り出しに比べ若干浅く短くなり、さらに底部径は口縁部径に比べて小さくなり、口縁部径の2分の1の大きさになるとしており、草戸Ⅱ期に比定している。

Ⅲ-d類では鏝の削り出しは上辺部が一層短かく、張り出さずにほとんど削り出されない状態のままになる。この型式を草戸Ⅱ期末からⅢ期に比定している。

この他に木戸はⅣ型式として、「退化しきった鏝は上辺部を削り出さなくなり、その分口縁

端部から斜めに削落された形となり、やや厚みを持った口縁部となる」ものを挙げ、これを草戸Ⅴ期に比定し、「時期的・型的にみても石鍋衰退期のものか」と結論している。

木戸論文は、今まで成されなかった編年作業の端緒となったばかりでなく、生産址においてのみ注目を集めていた石鍋を、消費地たる生活址において、その具体的様相を呈示したという点においても十分に評価されうるべきものであると思われる。

鹿田遺跡の石鍋はⅠ地点から口縁部片と底部片、Ⅱ地点から胴部片が出土している。

(1) 72mm×67mm×18mm, 152gの石鍋底部片である(図296-S49)。四周の欠損面にはいずれも内外面方向の丁寧な研磨が施され、石「鍋」以外の何らかの用途に転用されていたようである。

底内面は丁寧に仕上げられ、削痕が明瞭に観察される。また、1次整形痕とも思われる周に鉛直する稜が数十条確認できる。

底外面もまたよく研磨されている。しかし、その削痕には何ら規則性はいみ出せず、著しく丁寧であることから、転用の際のものであるかもしれない。

石鍋胴部への立ち上がりは45°～60°であり、底と胴との間に明瞭な稜は形成されない。

以上の諸特徴から、木戸編年のⅢ-b～cのタイプに近いのではないと思われる。

(2) 58mm×23mm×14mm, 31gの胴部片である(Ⅱ地点 図370-S8)。全体的に転用加工が施されており、欠損部においても長辺2辺と短辺1辺には後の研磨が認められる。

内面は1次整形の痕跡と2次整形もしくは使用時の痕跡とが認められる。前者はやや左に振った鉛直方向の稜が、後者は逆に右に振った鉛直方向の削痕がそれぞれ走っている。

外面は大部分が転用加工され、本来の整形加工はほとんど不明である。わずかに残存する部分から、1次整形時の稜は、右に振った鉛直方向に走るものようである。

(3) 65mm×27mm×17mm, 55gの石鍋口縁部片である。これは岡山市教育委員会の行なった試掘調査により発見された。折断面のいずれにも転用加工が施されている。

内面にはやはり2種の加工痕が認められる。1つは鉛直方向に延びる1次調整加工痕であり、もう1つは(2)で認められるのと同様の右にやや振った鉛直方向の削痕である。

外面はススの付着等により黒味があった色調を呈す。2種の調整痕が認められるが、同一作業内におけるものであろう。1つは1次調整の際に鉛直方向に施された稜であり、もう1つはそれと正確に直行している削痕である。これらは、器具を移動する折、断続的に静止した際に付される前者と、その移動の際の後者の複合であろうと思われる。1回の移動単位は5～10mmであり、また鉛直方向の器具の器壁に当たる長さは10～12mmを単位としている。

口縁端部の調整は周と同一方向で丁寧に磨かれ、器具移動時の稜・削痕も認められる。

小片のため径の復元は不可能である。また、その傾きはやや内湾する。鏝の部分にまでは

至っていないが、恐らく木戸編年のⅢ－b～cであろう。

以上、鹿田遺跡の3点の石鍋片をみてきたが、これらはいずれも木戸編年のⅢ－b～cに属するものである。そして、少なくとも石鍋として機能した後、何らかの目的のために転用されていたことも認めることができる。しかし、これらの石鍋が「鍋」として鹿田遺跡において機能していたかどうか^(註12)。転用されたその対象物は何であるのか、という2つの疑問は、検出例の増加を待つより他に判断を下す術がない。

百間川原尾島遺跡の石鍋片^(註13)は全て包含層中より検出されている。破片が比較的大型であり、石鍋の径の復元が可能であり、その細部の検討も充分に行える好資料である。

口縁部片はほとんどが鏝を有するもので、木戸編年Ⅲ－b～c類である。口縁端部はいずれも平坦面を有し、その幅が石鍋上半の器壁の厚さに対応している。

鏝部はその比高の高いものから低いものまでまちまちであるが、概して器壁の厚さと同じ、もしくはその3分の2程度の高さをもつ。しかしその断面形は先細りになる三角形に近いものから、同幅でせり出す台形・方形になるものまでバラエティに富んでいる。これは型式差というよりもむしろ、もっと小さな単位の差異であろうかと思われる。

外面調整は全ての破片において、調整器具を鉛直方向にあて、左から右へ断続的に移動させていることが窺われる。鏝上辺も同一方向の調整痕が認められ、その切り合いから鏝部は外面調整後に整形されている。

内面は丁寧に磨かれているが、整形調整は不明である。いずれの破片にもやや左に振った鉛直方向に走る無数の削痕が認められ、一種の使用痕を想定させる。

破片の折断面には少なからず転用加工がなされている。小型破片はその形状を長方形に意識し転用加工を行っている様であるが、何の使用に供されたかは推察の及ぶ範囲ではない。

底部片は1点のみの出土で、60°の方向に立ち上がる。内面には直線的な削痕が多く認められ、外面は丁寧に磨かれており、調整は口辺部片ほど詳しく観察出来なかった。

石鍋片に残された調整痕について詳細に観察してきたが、概して3種の調整を確認できる。

まずは、内外面ともに鉛直方向、ないしはやや右に振った鉛直方向に走る稜である。一部にはそれに丁度直行する様に削痕の走る場合がある。これは、生産址において粗作りされた石鍋が、仕上げ工場（これは消費地である可能性もあり得るが）において最終調整を行なった痕跡とみることができよう。その行為は鉄製器具を壁面に鉛直方向にあて、断続的に削り取ったものであり、若干右に振るのは、その作業者の利き手の影響であろう。

次に、内面にのみ残るやや左に振った鉛直方向に走る削痕が挙げられる。使用痕と考えてい

るが、その行為は何らかの食物をヘラ等の器具によってこそぎ上げるものであろう。また、やや左に振るのは、右利きの人間が手前にこそぎ上げる行為を想定すれば充分つじつまが合う。そして欠損面に施されている研磨である。転用加工であると考えられるが、その対象物は不明である。筆者の実見した石鍋片のうち、ほとんどが転用加工を受けており、その部位もおおかた折断面に限られている。前述通り当時においては石鍋が高価なものであった、ということもあるがむしろ、滑石という材質が軟質のために加工がし易く、保温性が高いなどの有用性等から多く転用加工が行われたのであろうと考える。

以上3種の調整痕跡は、消費地遺跡でなければ観察出来ないものである。ここにはまず今後の課題の第1が挙げられよう。即ち、生産地中心の石鍋研究から少なくともある程度独立して消費地中心の石鍋研究が成されなくてはならない。

また、鹿田遺跡・百間川原尾島遺跡出土の石鍋片は、いずれも木戸編年Ⅲ-b～c類に対応することを述べた。一方、草戸千軒町遺跡出土の石鍋片の中にも、Ⅰ・Ⅱ型式のものは見られない^(註14)。この空白部分を埋めてゆく作業が必要となろうか。

転用加工が施されるという事実から、その対象物の割り出しも行わねばなるまい。

いずれにしても、今後は石鍋片の出土例の増加を待ち、その出土状況を明確に把える必要があろう。そして、分類・編年作業を充実させてゆくことで、空白に近い中世庶民社会の具体相を明らかにしてゆくことができると思う。

(保田 義治)

註

- 1 樋口隆康「いしなべ」『図解考古学辞典』1959
野村幸希「石鍋」『日本考古学小辞典』1983, 他
- 2 最近になって山口県においても石鍋製作址が発見されたとの情報を得た。これは山口県宇部市下請川南遺跡で、滑石岩盤の九州と一連の丘陵が続いており、石鍋未製品が多く出土しているという。また他にも数箇所と同様な製作址が見つっている。
- 3 岡山県教育委員会『百間川原尾島遺跡2』1984, の中に岡山県内の石鍋出土遺跡及び点数を集成している。
- 4 森田勉「滑石製容器」『仏教芸術148号』1983, に紹介されている。他にも弘長元(1261)年仁和寺舊藏の譲り状記載の分が、下川達彌「滑石製石鍋考」『長崎県立美術博物館研究紀要2』1974 に紹介されている。
- 5 藤井忠「石鍋」『東京人類学雑誌9』1986
- 6 喜田貞吉「石鍋」『民族と歴史4-6』1920
- 7 八重津輝勝「肥前國雪ノ浦遺跡調査報告」『考古学雑誌14-14』1923, 他
- 8 鏡山猛「庄園村落の遺構」『史淵81』1960
同上「環溝住居址論攷」『史淵67・68』1956
- 9 下川達彌「滑石製石鍋考」『長崎県立美術博物館研究紀要2』1974
- 10 木戸雅寿「草戸千軒町遺跡出土の石鍋」『草戸千軒No122』1982

考 察

- 11 ここでいう1次整形痕とは、喜田・下川両氏のいう「粗造り」の痕跡とは直接一致しない。2次整形痕も同様で、筆者はむしろ、石鍋として利用する際の整形加工を1次、転用際の整形加工（転用加工）を2次として把えており、使用痕なる表現はその両者をも含む使用痕跡として把えている。
- 12 転用加工がある以上、その遺跡において鍋として利用されなかった可能性も考えうる。即ち、別目的のために破片として搬入されたものである。それも、いずれの破片も小破片であり、量的にも少ないため、より積極的に認められる。
- 13 岡山県教育委員会『百間川原尾島遺跡2』1984
尚、細部調整の詳細な観察は筆者の実見による。
- 14 木戸雅寿「草戸千軒町遺跡出土の石鍋」『草戸千軒No122』1982

7 鹿田遺跡出土の木製品

鹿田遺跡の木製品はほぼ全てが遺跡内の井戸から出土している。例外として弥生時代包含層の鋤先（Ⅰ地点）・中世溝14（Ⅱ地点）の加工材があるのみである。これは、井戸内の土質と深く関係し、木製品の保存に適していたためであろう。弥生～古墳時代初頭の井戸22基のうち12基、古代から中世にかけては15基のうち13基で木製品が出土している。

木製品の総点数は約90点で種類は32種におよんでいる。

以下では、意図的と考えられる加工の施されたものを木製品として取上げ、用途の明確な木製品・推定可能な木製品に関しては器種ごとに分類し、その他の用途不明の木製品に関しては形態によって分類し、その特徴から名称を冠して簡単なまとめとする。

(1) 弥生時代から古墳時代初頭の木製品（図版82・84）

鹿田遺跡出土の弥生時代から古墳時代初頭の木製品は、17種類35点である。これらの出土地点および内分けについては以下の表19に示す。

鋤先 Ⅰ地点・井戸8・14層 W9（図150）

Ⅰ地点・包含層

2点出土している。いずれも片刃の破片である。井戸8のW9は幅5.5cm厚さ1.5cm、包含層の鋤先は幅6.8cm厚2.8cmでW9よりひとまわり大きい。しかし、W9は硬質のアラカシを素材とするが、他方はマツ材を用いており、大ぶりではあるが耐用度では劣っている。

田舟 Ⅱ地点・井戸1・20層下位から21層 W10（図319）

表20 弥生時代～古墳時代初頭の木製品

() は破片数

地点	遺構	鋤先	田舟	襦袢状	浮子	きぬた	短甲状	簪状	柄状	有頭	有溝	有孔	棒状	円形	組材	加工木	井戸枠	杭
Ⅰ	井戸-1													1				1
	〃-2				2												1	
Ⅱ	井戸-1		1					2			1	1			1(5)	1		
	〃-2																	2
Ⅰ	井戸-7												1		1(3)	1		
	〃-8	1							1									
	〃-12					1												1
	〃-13												1		1(8)	1		1
	〃-14															3		
	〃-15							1		1					2	1		
	〃-16												1					
	〃-17			1									1					
	包含層	1																
計		2	1	1	2	1	1	2	1	1	1	1	4	1	5(8)	6	1	5

考 察

半割した丸太の断面から剝貫く。手斧状の工具を使用したと考えられるが工具痕は認められない。現存長は約83cm、幅20cmで、長幅共に約2分の1程度残存していると考えられる。樹種はノグルミで軽くかつ剝物に加工し易い点で田舟に適した材を選択している。

襷状木製品 I 地点・井戸17・8層中位 W21 (図224)

完成品である。アラカシ材を用い、保存状態は極めて良好で、表面の加工痕が顕著に観察できる。

柄の部分とそれに続く鋭い縁辺をもつやや扁平な部分から成る形状から襷としての機能が推定される。

浮子 I 地点・井戸2・井戸枠内7層 W4・5 (図57)

2点出土している。W4は小型の柱状で上下端から穿孔しているが貫通していない。胴回りに浅い溝が廻っており、胴回りに紐を巻きつけ使用したと考えられる。

W5は半截した後火を受けたため炭化している。一部に残る元の表面から、表面は平滑に仕上げられていたことがわかる。中央の孔の片側の側縁が凹んでおり孔からこの部分に紐をくくりつけた痕跡であろうと考えられる。

きぬた I 地点・井戸12・12層 W11 (図161)

井戸12・12層で集中した土器と共に出土している。柄から柄の付け根にかけては、保存が良好で丁寧に削っているが、槌部は使用に伴って表面は磨耗し傷みが激しい。丸太を4分割した材を用いているため芯は一方にずれており、柄は芯を持たない。通常木材は芯から外方への打撃で折損し易く、このきぬたの槌部もその方向の打撃で折損している。破損面の腐食は激しく、この部分で折損後廃棄されたと考えられる。ウバメガシ材である。

短甲状木製品 I 地点・井戸15・4層 W19-1・2・3 (図215)

W19-1・2・3は表面に黒漆を塗り、線刻を施してあり同一個体の破片である。

1は、肩から腕ぐりにかけての部位に相当すると想定され、肩から腕にかけてのくりは体面から見ると外方に張り気味で、側面から見ると浅いことから、後身の右肩に当たると考えられる。縦横の断面は緩やかなカーブを描き、体面から側面にかけての横断面は直角に近く屈曲する。表面には、外形の輪郭に沿って2本1単位の沈線が5重に巡り、その中心に同心円状の文様が入る。対角線を描くように右上から左下方向に帯が入り、その帯を境界として沈線は側面へと流れていく。上端から約4.0cmの部分に径0.8cmの小孔が穿たれている。小孔内には黒漆が流れ込み、製作時に意図的に穿たれたと考えられる。紐通しの孔であろうか。ホウノキもしくはトチノキを用い剝貫いているが、工具痕は認められず入念に磨いた後、黒漆を塗る。漆は表面のみにとどまらず端面から裏面の周囲5～8mmまでおよぶ。

2・3は部位は不明である。3は沈線と同時に刀子で傷をつけたような線刻が認められる。

また、直線を描く沈線の上に小孔がある。漆の残存は極めて良好である。

短甲状木製品では、静岡県伊場遺跡の環濠出土の弥生時代後期前半の例が知られている。伊場遺跡の例では胸当と背当がそろって出土しており、背当の側縁に綴紐の小孔が並んでいることから、胸当との綴合せの状態が解るが、当遺跡のW19では肩から腕ぐりまでの破片であり胸当との関係は不明である。また厚さの点では、伊場遺跡の胸当は1.8cm、背当は羽根状部分を含めてそれ以上の厚さを持つが、W19は最も厚いW19-1の側面で1.6cm、体面では0.8cmとかなり薄く、短甲としての実用の面では疑問が残る。

簪（かんざし）状木製品 II 地点・井戸1・20層下位 W1・2（図319）

いずれも径6～8mmの竹類を用いている。表面には黒漆が塗られており、上端と下端は節にあたる部分で切断されている。上端は小さな頭部を作り出すが、他には表面には加工を加えていない。一見して繊細な作りであり、装身具の一種ではないかと考えられる。

以下では、用途不明の木製品について記述する。

柄状木製品 I 地点・井戸8・15層 W10（図150）

I 地点井戸8から鋤先と共に出土している。断面長方形の柄の両端は狭長な孔を持つ羽子板型の部分へ続き対称形をなすと考えられる。図上で上端になる方が少し薄く、下端は途中で折損している。上端部の端部の切断は雑で、中途まで切込みを入れ折り取ったような状態で、その後削り整えていない。孔から端部にかけて凹んでおり、孔の方へ深く傾斜し孔の際では押圧により材が潰れている。この凹みに何かを装着していたために圧力が加わったと考えられる。

棒状木製品 I 地点・井戸7・12層 W8（図144）

井戸7のはほぼ中位にあたる位置で、井戸壁面につきささった状態で出土した。保存は良好で表面の加工痕は明瞭に観察できる。基端面は丸く削り、他は細かく面を取る。もともと井戸に付随する施設なのか、埋没の過程で井壁にくい込んだものかは不明である。

円形木製品 I 地点・井戸1・カゴ状遺構内 W1（図19）

径約5cmの自然木の輪切り形のもの的一端に突起の痕跡が残る。一部樹皮を削り取っている。井戸1のカゴ状遺構内から出土しており、繊維状の物質が付着している。広葉樹の丸材を用いている。

組合部材 I 地点・井戸7・12層 W6・7（図144）

I 地点・井戸13・12層上面 W12（図163）

I 地点・井戸15・4層 W16・17（図214）

II 地点・井戸1 20層～21層 W3～7（図319）

組合部材はそれぞれ柄もしくは柄穴に相当する部位を持ち、他の部材と組合わさっていたと推定される木製品である。I 地点のW6・7、井戸13のW12・13、II 地点のW3～7は同一個

体と考えられ、当遺跡出土の組合せの木製品は5点である。いずれも断片的に残存しており、全体の形態および用途の推定は困難である。これらの中で、井戸13のW12は破損品であるが、部材が組合わさったままで出土した例である。

その他の用途不明品は、有頭木製品、有溝木製品、有孔板状木製品、棒状木製品、加工木であるが、それぞれ1点ずつ異り、その特徴に関しては観察表で記載しているのでここでは省略する。

井戸枠 I 地点・井戸2 W3 (図57)

半割したクロマツもしくはコウヤマキを捲り貫いた組合せの井戸枠である。同様の井戸枠でも古代の井戸のものに比べると小型で薄い。井戸内に設置する際には、組合せの接合部に両側からあて木をしており、井戸底に棒材が井戸枠に接して残存していた。

杭 I 地点・井戸1・50層 W2 (図19)

井戸1のカゴ状遺構より下位で出土している。自然木の枝をはらい下端を1段細くし、先端は斜に削っている。細くなった部分だけが地中に刺さるよう意図した作りである。

弥生時代から古墳時代初頭の木製品17種のうち、用途が明確もしくは推定可能である木製品は、表19の鋤先から簀状木製品、井戸枠、杭の9種類16点であり、半数を超える木製品が用途不明である。

また、表19を見ても解るように、各器種ともに、1～2点の出土であることが多く、ある器種が多数まとまって出土したり、また、各井戸間で共通して出土するといった傾向は、まったく認められない。木製品の場合、腐食し易く、遺存することが困難であることを考慮に入れても、かなり統一性を欠く出土状況である。

(2) 古代から中世の木製品 (図版83・84)

鹿田遺跡で古代から中世に含まれる木製品は14種類54点である。それらの出土地点および内分けについては表20の通りである。

木筒 II 地点・井戸4・井戸枠内2層 W12・13 (図353)

2片出土しているが、材から判断すると、同一個体の木筒であると考えられる。ヒノキの薄板を用いている。断片であるため文字の判読は不可能である。

斎串 I 地点・井戸20・井戸枠内最下層・W32～34 (図260)

II 地点・井戸4・井戸枠内2層 W15～17 (図353)

可能性のあるものも含めて6点、全て8世紀後半から9世紀にかけての井戸から出土している。側縁に切込みの入るものと入らないものとに分けられる。II 地点・井戸4のW15はヒノキ

またはネズミサシ、それ以外は全てヒノキを用いている。極めて薄く裂くように薄板を取り整形する。表面には墨書等は認められない。

- 横櫛** I 地点・井戸20・井戸枠内最下層 W22・23 (図259)
 I 地点・井戸27・2層 W49 (図278)
 II 地点・井戸4・井戸枠内2層 W14 (図353)

4点出土している。いずれもツゲ材の生地仕立てで、漆等は塗っていない。櫛歯の根元がそろそろようにならかじめ細い沈線を引き、そののち両側から鋸で歯を挽き出す。4点のうち、8世紀～9世紀のI地点井戸20のW22・23と、II地点井戸4のW14は、棟部の上面から櫛歯の付根までの長さ、櫛目の細かさ、材質が非常によく似ている。

- 扇子** I 地点・井戸24・5層 W45 (図273)

骨が2枚残る。出土した当初は要孔に要がはめ込まれた状態で遺存していたが、その後、要は失われている。ヒノキの板目材を用いて整形するが、2枚共にまったく同形同大である。長さが約45cmと大型の扇子である。

- 曲物容器** I 地点・井戸20・井戸枠内最下層 W24 (図260)
 I 地点・井戸25・12層 W47 (図276)
 I 地点・井戸29・17層 W52 (図282)

完形か、ほぼ完形で出土した曲物容器は3点である。

W24は外面にタガを廻らせ、内面には黒漆を塗っている。釘穴の数が側板で17ヶ所、底板で19ヶ所と異り、また、タガ、側板、底板で穴の位置が整合しないため、何回か補修のために釘を打ち直したと考えられる。

表21 古代中世の木製品

() は破片数 曲物側板は個体数不明のため有無で示した

地点	遺構	木簡	斎串	横櫛	扇子	曲物			箸	すりぎ	刀子状	尖棒状	浮子	加工木	井戸枠		杭	部材
						容器	底板	側板							枱板	枱組		
I	井戸-20		3	2		1	6	有			1	6			1			1
II	井戸-4	2(1)	3	1								1			1			
I	井戸-21						2		1							1		
	ク-22							有				1						
	ク-23						1		1			1		2				
	ク-24				1			有					1	1				
	ク-25					1												
	ク-26						1	有						1				
	ク-27			1														
	ク-28						1					1						1
	ク-29					1												
	ク-30						1											1
II	井戸-2							有					1					
	溝-14													1				
	計	2(1)	6	4	1	3	12		1	1	1	10	2	5	2	1	2	1

W47は底板を持たない。図では出土状態で表現しているが、曲物容器として使用されていたと仮定すると、側板の合わせ目が他の2点と逆であること、下端に釘穴の痕跡がないことから上下反対であると考えられる。しかし底径が34cmと大型で、かつ底板がまったく残存していないことから、井戸25の湧水溜りとして井戸底部に設置されていた可能性が大きい。ただし、この場合、W47が現位置を動いていなければ、井戸25の底部、井壁の認識には問題が残る。

W52は側板が2枚で構成されている。また底板には多くの場合ヒノキを用いるが、ここではより木目の密なコウヤマキが用いられている。コウヤマキの柁目材の純柁の面を内側にしており、容器としてかなり耐水性を意識した作りとなっている。

いずれも側板はヒノキ、綴皮は桜皮を用いている。

曲物底板 I 地点・井戸20・井戸枠内最下層 W25～30 (図260)

I 地点・井戸21・井戸枠内最下層 W40・41 (図268)

I 地点・井戸23・最下層 W43 (図272)

I 地点・井戸26・8層 W48 (図277)

I 地点・井戸28・7 b・c層 W50 (図279)

I 地点・井戸30・8層 W53 (図290)

底板は12点である。うち樹種の鑑定を得た10点(井戸21を除く)と完形容器の底板2点で用いられた樹種は、ヒノキ…7, コウヤマキ…2, ヒノキまたはコウヤマキ…1, スギ…2と、ヒノキが最も多く用いられている。3種の中で最も木目が密で浸水性の低いのはコウヤマキ、次いでヒノキ、スギの順となる。曲物容器では防水の効果もあって内面に漆を塗る場合がある。井戸20出土のスギを用いたW27・30には共に黒漆が塗られている。漆塗りの底板は、W25・27・30・41・48・53である。特にW48では表裏両面に漆を塗り側板との接着面にも接着のため漆を塗っており、防水性をかなり意識している。

底板径は、最小の井戸30W53で7.6cm, 最大の井戸20W29で38.4cmとなる。大きさで分類すると、10cm以下…1点, 14cm～18cm…5点, 18cm～22cm…7点, 30cm以上…2点となり、15cm前後と20cm前後に集中している。

簪 I 地点・井戸23・最下層 W44 (図272)

1本のみ出土している。ヒノキ材を細く削り、中ほどでややふくらみを持たせ、先端は斜めに尖がらせる。

すりこぎ I 地点・井戸21・井戸枠内最下層 W42 (図268)

心持材を、面を取るように丁寧に削り、整形する。基部に抉りを入れ紐かけのようにしている。先端は丸く磨耗している。折損面の傷みが激しく、折損後、廃棄したことをうかがわせる。年輪方向に保存の良好な端面がなく樹種の判定は困難である。広葉樹とすればヤブツバキ、針

葉樹ならばネズミサシであろう。

刀子状木製品 I 地点・井戸20・井戸枠内最下層 W31 (図260)

刃部，柄の状態は刀子そのものである。全体的に背部が反り，刃部は明確な鑄を持ち鋭利な刃先を作り出している。柄は片手で握るのに都合よい長さであり，角は丁寧な面を取り握り易く仕上げている。木取りは鑄のある面に板目，刃先の方に柾目が出ている。柾目の方が加えられる力に対して強く，刀子に加わる力の方向を考えあわせるならば，理にかなった木取りをしている。W31の場合，刀子形と言うよりは，実用品としての木製の刀子である可能性が大きい。

尖棒状木製品 I 地点・井戸20・井戸枠内最下層 W35～38 (図260)

I 地点・井戸28・7 b・c 層 W51 (図279)

II 地点・井戸4・井戸枠内2層 W18 (図353)

6点出土している。太さ1.5cm前後の枝の先端を尖らせた棒状の木製品である。II 地点のW18のように先端部のみに加工を施すものと，I 地点のW36～38・51のように先端から基部に至るまで入念な加工を施すものがある。何らかの加工のための道具と考えられる。

浮子 I 地点・井戸24 5層 W46 (図273)

II 地点・井戸5 W20 (図355)

表面を面取りして，筒状にしたもの（I 地点W46）と偏平な楕円形のもの（II 地点W20）の2点出土している。

井戸枠 I 地点・井戸20 W39 (図261)

I 地点・井戸21 (図264)

II 地点・井戸4 W11 (図352)

丸太材刳貫きの組合せの井戸枠が2基，枠組みの井戸枠が1基である。

刳貫きの井戸枠はいずれも8世紀後半から9世紀に属するI 地点の井戸20，II 地点の井戸4に設けられていた。

I 地点井戸20のW39は側縁とそれぞれの中心線上に方形の孔を持つ。側縁上の孔は組合わせた際対応しており，結果的には4ヶ所の孔となる。孔は井戸内から外へ緩く傾斜しており井戸枠を設置する際に井壁に固定する材を打ち込むための孔ではないかと考えられる。このような孔はII 地点井戸4のW11でも見られる。W39はスギ材，W11はコウヤマキを用いる。

枠組みの井戸枠は11世紀末のI 地点井戸21に設けられていた。4本の支柱にほぞ穴を設け横木をわたしている (図264)。

尚，II 地点井戸4出土の杭W19は井戸に付随する杭である。

古代，中世に至ると，弥生時代とは異り，木製品の用途は容易に判断できるものが多くなる。

考 察

器種は、木簡をはじめ、祭祀具の斎串、装身具の櫛・扇子、食膳具の曲物・箸・すりこぎ、加工具の刀子状木製品、尖棒状木製品、漁撈具の浮子、そして井戸枠、杭などである。器種別に見ると、曲物が最も多く、かつ普遍的に出土している。

これらの木製品が井戸内から出土した理由としては、意図的に投入した場合と、誤って落とした場合があり、前者では、井戸に伴う祭祀行為や井戸廃絶後にゴミ穴として再利用した場合が想定される。

古代の井戸（Ⅰ地点・井戸20、Ⅱ地点・井戸4）では斎串が出土しており、井戸に伴う祭祀行為の存在を示している。特にこの2基では、斎串の他に、横櫛が共通して出土しており、この時期の井戸に伴う祭祀のあり方の一端を示していると考えられる。また井戸20では曲物が多数出土しているのに対して、井戸4では全くなく、また井戸枠も同じ組合せの井戸枠ながら一方はスギで他方はコウヤマキと材質が異り、同時期に併存した井戸間に性格の違いがあった可能性も指摘できる。

（大久保 雅子）

参考文献

- 伊場遺跡—遺物編Ⅰ— 伊場遺跡発掘調査報告書第3冊 浜松市教育委員会 1978
伊場遺跡—出土品の解説目録— 浜松市立博物館 1979
草戸千軒町遺跡—第32次発掘調査概報— 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1983
平城宮発掘調査報告Ⅵ 奈良国立文化財研究所 1974
平城宮発掘調査報告Ⅶ 奈良国立文化財研究所 1976
百間川原尾島遺跡2 岡山県教育委員会 1984
木器集成図録—近畿古代篇— 奈良国立文化財研究所 1985
大和唐古弥生式遺跡の研究 京都帝国大学文学部考古学研究報告第16冊 1943